篠原東遺跡群Ⅰ

（A,B,E,G,K,L,M地区）

―福岡県糸島市　前原東土地区画整理事業に係る発掘調査報告書―

糸島市文化財調査報告書

第 15 集

2017

糸島市教育委員会

前原東土地区画整理事業地と篠原東遺跡群の調査区全景（南から）

巻頭図版 2

篠原東遺跡群の上空から可也山方面を望む（南東から）

Ｂ－１地区　調査風景（北東から）

Ｅ地区　調査風景（北から）

Ｅ地区　馬骨出土状況（西から）

巻頭図版 4

Ｋ－１・２地区　調査風景（西から、左：Ｋ－１地区、右：Ｋ－２地区）

Ｋ－２地区　１号甕棺墓　出土状況

Ｋ－２地区　２号甕棺墓　出土状況

序

ここに篠原東遺跡群発掘調査報告書の１冊目を刊行します。

本書には糸島市篠原・浦志地区（現、伊都の杜）で実施されている前原東土地区画整理事業に伴い調査された遺跡の記録を掲載しています。

本市がある糸島半島は、弥生時代より大陸・朝鮮半島と国内各地とを結ぶ交流の窓口としての役割を担っていました。中国の歴史書『魏志倭人伝』に記された「伊都国」の比定地としても知られ、市内各地に当時をしのばせる遺跡や出土品が豊富に残っています。

この地にあって、篠原東遺跡群は調査の結果、弥生時代～近現代までの複合遺跡であり、約2300年間にわたって断続的ではありますが人々の営みがあったことがわかりました。

本書が、当該遺跡の内容を将来にわたって伝えていく資料としてだけでなく、周辺地域はもとより北部九州全体の歴史を紐解く上での鍵となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にあたってご理解とご協力を頂きました前原東土地区画整理組合の皆様と周辺住民の皆様、科学分析をしていただきました先生方、そして、暑さや寒さをいとわず調査に参加された発掘調査作業員の皆様に心から感謝を申し上げます。

平成 29 年 3 月 31 日

糸島市教育委員会
教育長　家宇治 正幸

例　言

１．本書は糸島市の篠原・浦志地区にて、前原東土地区画整理事業に伴い実施した文化財調査の報告書の第１冊目である。
２．本書に使用した縮尺1/20の遺構実測図と1/200のデジタルによる製図は、株式会社埋蔵文化財サポートシステムまたは株式会社大高開発に委託し、調査区を合成した遺跡の全体図については埋蔵文化財サポートシステムに委託した。このほかの縮尺の遺構実測図は主に、江野道和、江﨑靖隆、藤奈保美、黒柳政信、鈴木美奈都、端野晋平、中尾祐太、瓜生建、鵤健司、植田紘正、加藤誠也、和田由梨枝、牧山綾華、川崎藍が行った。
３．現場における写真および出土遺物の撮影は江野、江﨑が行った。
４．現場における空中写真撮影と合成は有限会社空中写真企画に委託した。
５．本書に掲載した全体図等の座標は世界測地系（測地成果2000、2011）を用いている。方位に関しては磁北で示している。
６．遺物の復元・実測・製図は主に、三嶋弘美、田中阿早緑、藤野さゆり、蔵田和美、内山久世、稲冨良子、山崎嵩雄、秋田雄也、江野、江﨑が行った。
７．本書の挿図中の遺物番号は写真図版の番号と統一している。なお、写真図版は主なものを選択して掲載した。
８．本書の執筆は調査担当者で分担した。本文目次に執筆者の氏名を記している。また、第Ⅲ章の科学分析については、谷畑美帆氏（明治大学・黒耀石研究センター）、米田 穣氏・大森貴之氏（東京大学総合研究博物館）、屋山洋氏（福岡市教育委員会）から玉稿をいただいた。
９．本書の編集は江﨑の協力を得て江野が行った。

本文目次

Ⅰ．はじめに …… 1
1．調査に至る経過（江野） …… 1
2．調査の組織（江野） …… 1
3．調査の工程（江野・江﨑） …… 2
4．調査の概要（江野） …… 2

Ⅱ．調査の記録 …… 4
1．位置と環境（江野）…… 4
2．Ａ地区の調査（江﨑）…… 6
3．Ｂ地区の調査（江野）…… 12
4．Ｅ地区の調査（江﨑）…… 22
5．Ｇ地区の調査（江野）…… 93
6．Ｋ地区の調査（江野）…… 97
7．Ｌ地区の調査（江野）…… 104
8．Ｍ地区の調査（江野） …… 111
9．小結（江野・江﨑） …… 114

Ⅲ．科学分析 …… 116
1．篠原東遺跡群Ｅ地区７号井戸出土ウマについて（屋山）…… 116
2．篠原東遺跡群出土人骨について（谷畑） …… 121
3．篠原東遺跡群出土人骨における炭素・窒素安定同位体分析（米田・大森） …… 126

糸島市と篠原東遺跡群の位置

挿図目次

第１図　篠原東遺跡群（１/3,000）…… 3
第２図　篠原東遺跡群と周辺の遺跡（１/50,000）… 5
第３図　A地区の位置…… 6
第４図　A地区の主な遺構実測図（１/500）…… 6
第５図　A地区　１～３号旧河川土層断面実測図
（１/60）…… 8
第６図　A地区　１号旧河川出土遺物実測図①
（１／３）…… 9
第７図　A地区　１号旧河川出土遺物実測図②
（●は１／１、１／３）…… 10
第８図　A地区　２・３号旧河川出土遺物実測図
（１／３）…… 11
第９図　B地区の位置 …… 13
第10図　B地区の主な遺構実測図（１/600）…… 13
第11図　B－１地区　No.1トレンチ
北壁東西土層断面実測図（１/50）…… 14
第12図　B－１地区　No.2トレンチ
北壁東西土層断面実測図（１/50）…… 14
第13図　B－１地区　調査区東壁南北土層断面
実測図（１/100）…… 15
第14図　B－１地区　出土遺物実測図①
（１／２、●は１／３）…… 16
第15図　B－１地区　出土遺物実測図②（１／３）… 17
第16図　B－２地区　１号周溝状遺構平断面実測図
（１/40）…… 18
第17図　B－２地区　２号周溝状遺構平断面実測図
（１/40）…… 18
第18図　B－２地区　出土遺物実測図①
（●は１／２、１／３）…… 19
第19図　B－２地区　出土遺物実測図②（１／２）… 20
第20図　B－２地区　出土遺物実測図③
（●は１／２、１／３）…… 21
第21図　E地区の位置 …… 22
第22図　E地区の主な遺構実測図（１/400）…… 22
第23図　E地区　１号住居跡平断面実測図（１/40）… 23
第24図　E地区　屋内土坑平断面実測図（１/20）… 24
第25図　E地区　屋内土坑出土遺物実測図（１／３）… 24
第26図　E地区　１号掘立柱建物平断面実測図
（１/60）…… 25
第27図　E地区　掘立柱建物出土遺物実測図
（１／３）…… 25
第28図　E地区　２号掘立柱建物平断面実測図
（１/60）…… 27
第29図　E地区　３号掘立柱建物平断面実測図
（１/60）…… 28
第30図　E地区　４号掘立柱建物平断面実測図
（１/60）…… 29
第31図　E地区　５号掘立柱建物平断面実測図
（１/60）…… 30
第32図　E地区　６号掘立柱建物平断面実測図
（１/60）…… 31
第33図　E地区　１号井戸平断面実測図（１/60）… 32
第34図　E地区　１号井戸出土遺物実測図
（１／３）…… 33
第35図　E地区　２号井戸平断面実測図（１/30）… 34
第36図　E地区　３・４号井戸平断面実測図
（１/60）…… 35
第37図　E地区　５・６号井戸平断面実測図
（１/30）…… 36
第38図　E地区　７号井戸平断面実測図（１/30）… 37
第39図　E地区　７号井戸出土遺物実測図
（１／３）…… 38
第40図　E地区　９号井戸平断面実測図（１/40）… 39
第41図　E地区　８･10号井戸平断面実測図
（１/40）…… 39
第42図　E地区　８･10･14･15号井戸出土遺物実測図
（１／３）…… 40
第43図　E地区　11号井戸平断面実測図（１/30）… 42
第44図　E地区　12号井戸平断面実測図（１/30）… 42
第45図　E地区　13号井戸平断面実測図（１/30）… 43
第46図　E地区　14号井戸平断面実測図（１/30）… 43
第47図　E地区　１号土坑墓出土遺物実測図
（１／３）…… 44
第48図　E地区　15号井戸平断面実測図（１/30）… 44
第49図　E地区　１号土坑墓平断面実測図
（１/20）…… 45
第50図　E地区　１号土坑出土遺物実測図
（１／３）…… 45
第51図　E地区　１号土坑平断面実測図（１/40）… 46
第52図　E地区　１・４・５・６・７・８号土坑
出土遺物実測図（●は１／１、１／３）…… 47
第53図　E地区　２号土坑平断面実測図（１/20）… 48
第54図　E地区　４号土坑平断面実測図（１/40）… 49
第55図　E地区　４号土坑出土遺物実測図（１／３）… 49
第56図　E地区　５号土坑平断面実測図（１/40）… 50
第57図　E地区　６号土坑平断面実測図（１/20）… 50
第58図　E地区　５・６号土坑出土遺物実測図
（１／３）…… 51
第59図　E地区　７号土坑平断面実測図（１/40）… 52
第60図　E地区　７号土坑出土遺物実測図①
（１／３）…… 53
第61図　E地区　７号土坑出土遺物実測図②
（１／３）…… 54
第62図　E地区　７号土坑出土遺物実測図③
（１／３）…… 55
第63図　E地区　８号土坑平断面実測図（１/20）… 57
第64図　E地区　９･10号土坑平断面実測図
（１/40）…… 58
第65図　E地区　８・９号土坑出土遺物実測図
（１／３）…… 59
第66図　E地区　１～５・７～９号溝出土遺物実測図
（１／３）…… 62
第67図　E地区　３・８号溝出土遺物実測図
（１／１）…… 63
第68図　E地区　小谷部土器群平断面実測図
（１/20）…… 64
第69図　E地区　小谷部土器群出土遺物実測図①
（１／３）…… 66
第70図　E地区　小谷部土器群出土遺物実測図②
（１／３）…… 67

第71図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図①
（●は１/１、１/３）…… 68
第72図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図②
（１/３）…… 69
第73図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図③
（●は１/２、１/３）…… 71
第74図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図④
（１/３）…… 72
第75図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図⑤
（１/３）…… 73
第76図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図⑥
（１/３）…… 76
第77図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図⑦
（１/３）…… 77
第78図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図⑧
（１/３、●は１/４）…… 78
第79図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図⑨
（１/３）…… 79
第80図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図⑩
（●は１/２、１/３）…… 80
第81図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図⑪
（１/１）…… 81
第82図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図⑫
（１/１、●は１/３）…… 82
第83図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図⑬
（１/３）…… 83
第84図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図⑭
（１/３）…… 84
第85図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図⑮
（１/３）…… 86
第86図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図⑯
（●は１/１、１/３）…… 87
第87図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図⑰
（１/３）…… 88
第88図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図⑱
（１/３）…… 89
第89図　E地区　ピット出土遺物実測図①
（●は１/２、１/３）…… 91
第90図　E地区　ピット出土遺物実測図②
（１/１、●は１/３）…… 92
第91図　G地区の位置 …… 93
第92図　G地区　小谷部土層断面実測図（１/40）… 93
第93図　G地区の主な遺構実測図（１/500）…… 94
第94図　G地区　１号井戸平断面実測図（１/40）… 95
第95図　G地区　出土遺物実測図①
（●は１/２、１/３）…… 95
第96図　G地区　出土遺物実測図②（１/３）　…… 96
第97図　K－１地区　遺物出土状況実測図
（１/20）…… 97
第98図　K－１地区　出土遺物実測図（１/３）　… 97
第99図　K地区の位置 …… 98
第100図　K地区の主な遺構実測図（１/600）…… 98
第101図　K－２地区　１号甕棺墓平断面実測図
（１/20）および１号甕棺実測図（１/８）… 99
第102図　K－２地区　２号甕棺墓平断面実測図
（１/20）および２号甕棺実測図（１/８）…100
第103図　K－２地区　３号甕棺墓平断面実測図
（１/20）および３号甕棺実測図（１/８）…101
第104図　K－２地区　４号土坑墓平断面実測図
（１/20）……102
第105図　K－２地区　５号土坑墓平断面実測図
（１/20）……102
第106図　K－２地区　出土遺物実測図
（●は１/２、１/３）……103
第107図　L地区の位置……104
第108図　L地区の主な遺構実測図（１/500）……104
第109図　L地区　１号土坑平断面実測図（１/20）…105
第110図　L地区　１号土坑出土遺物実測図
（１/３）……105
第111図　L地区　１号井戸中層遺物および礫出土
状況実測図（左＝１/20）、完掘状況実測図
（右＝１/40）……106
第112図　L地区　１号井戸上層出土遺物実測図
（１/３）……106
第113図　L地区　１号井戸中～下層出土遺物実測図
①（１/３）……107
第114図　L地区　１号井戸中～下層出土遺物実測図
②（１/３）……108
第115図　L地区　１号井戸中～下層出土遺物実測図
③（１/３、●は１/４）……109
第116図　L地区　１号井戸出土遺物実測図
（１/３）……110
第117図　M地区の位置……111
第118図　M地区　１号土坑出土遺物実測図
（１/３）……111
第119図　M地区　１号土坑平断面実測図（１/20）…111
第120図　M地区の主な遺構実測図（１/800）……112
第121図　M地区　出土遺物実測図（１/３）……113
第122図　E地区　７号井戸馬骨出土状況実測図
（１/10）……118
第123図　E地区　７号井戸平面実測図（１/30）…119
第124図　K－２地区近世甕棺から出土した人骨におけるコラーゲンの炭素・窒素同位体比と、食料資源の炭素・窒素同位体比から推定される範囲の比較……128

（本文内図版）

119－１　E地区　７号井戸馬骨出土状況
（西から）……119
129－１　K－２地区出土　１号人骨　頭蓋骨
（左上：側面観、左下：上面観、右：全面観）…129
129－２　K－２地区出土　１号人骨　下顎骨
（左：真上から撮影、右：左側面から撮影）…129
130－１　K－２地区出土　１号人骨　上腕骨・橈骨・尺骨（左上）……130
130－２　K－２地区出土　１号人骨　大腿骨・脛骨・腓骨（右上）……130
130－３　K－２地区出土　１号人骨　左脛骨における骨膜炎（左）……130
130－４　K－２地区出土　１号人骨　蹲踞面（左：距骨・踵骨上面観、右：距骨上面観・踵骨下面観）……130

付図目次

第１図　篠原東遺跡群　A地区遺構配置図（１/200）
第２図　篠原東遺跡群　B地区遺構配置図（１/200）
第３図　篠原東遺跡群　E･L地区上層遺構配置図（１/200）
第４図　篠原東遺跡群　E地区下層遺構配置図（１/200）
第５図　篠原東遺跡群　G地区遺構配置図（１/200）
第６図　篠原東遺跡群　K地区遺構配置図（１/200）
第７図　篠原東遺跡群　M地区遺構配置図（１/300）

図版目次

巻頭図版１　前原東土地区画整理事業地と篠原東遺跡群の調査区全景（南から）
巻頭図版２　篠原東遺跡群の上空から可也山方面を望む（南東から）　Ｂ－１地区　調査風景（北東から）
巻頭図版３　E地区　調査風景（北から）　E地区　馬骨出土状況（西から）
巻頭図版４　Ｋ－１・２地区　調査風景（西から、左：Ｋ－１地区、右：Ｋ－２地区）
Ｋ－２地区　１号甕棺墓　出土状況　Ｋ－２地区　２号甕棺墓　出土状況

図版１－１　A地区　全景（北から）
図版１－２　A地区　１号旧河川土層断面状況（東から）
図版１－３　A地区　１号旧河川土層断面状況（南から）
図版１－４　A地区　２号旧河川土層断面状況（南から）
図版１－５　A地区　３号旧河川土層断面状況（東から）
図版２－１　A地区　１号旧河川流木･杭出土状況（南から）
図版２－２　A地区　１号旧河川流木･杭出土状況（南から）
図版２－３　A地区　出土遺物①
図版３－１　A地区　出土遺物②
図版４－１　Ｂ－１地区　全景（北から）
図版４－２　Ｂ－１地区　調査区北端土層（南から）
図版４－３　Ｂ－１地区　No.2トレンチ北壁東西土層（南から）
図版４－４　Ｂ－２地区　調査前全景（北から）
図版４－５　Ｂ－２地区　全景（北から）
図版４－６　Ｂ－２地区　１号周溝状遺構（北から）
図版５－１　Ｂ－１・２地区　出土遺物
図版６－１　E地区　全景（北から）
図版６－２　E地区　小谷部包含層土層断面状況（南から）
図版６－３　E地区　小谷部包含層土層断面状況（南から）
図版６－４　E地区　１号住居完掘状況（北から）
図版６－５　E地区　１号住居屋内土坑（北から）
図版７－１　E地区　１号土坑墓完掘状況（東から）
図版７－２　E地区　２号掘立柱建物完掘状況（北から）
図版７－３　E地区　３号掘立柱建物完掘状況（北から）
図版７－４　E地区　１号井戸完掘状況（南から）
図版７－５　E地区　３号井戸完掘状況（東から）
図版７－６　E地区　４号井戸土器出土状況（東から）
図版７－７　E地区　４号井戸完掘状況（西から）
図版７－８　E地区　５号井戸完掘状況（東から）
図版８－１　E地区　７号井戸馬骨出土状況（西から）
図版８－２　E地区　７号井戸完掘状況（西から）
図版８－３　E地区　８号井戸木器出土状況（東から）
図版８－４　E地区　８号井戸完掘状況（東から）
図版８－５　E地区　８号井戸完掘状況（東から）
図版８－６　E地区　11号井戸完掘状況（東から）
図版８－７　E地区　12号井戸完掘状況（西から）
図版８－８　E地区　13号井戸完掘状況（東から）
図版９－１　E地区　14号井戸完掘状況（東から）
図版９－２　E地区　15号井戸完掘状況（西から）
図版９－３　E地区　小谷部土器群出土状況（東から）
図版９－４　E地区　１号土坑完掘状況（東から）
図版９－５　E地区　４号土坑完掘状況（東から）
図版９－６　E地区　７号土坑完掘状況（東から）
図版９－７　E地区　８号土坑完掘状況（南から）
図版９－８　E地区　９･10号土坑完掘状況（東から）
図版10－１　E地区　出土遺物①
図版11－１　E地区　出土遺物②
図版12－１　E地区　出土遺物③
図版13－１　G地区　全景（南西から）
図版13－２　G地区　小谷部（南西から）
図版13－３　G地区　小谷部（北西から）
図版13－４　G地区　１号井戸完掘状況（南から）

図版13－５　G地区　瓦出土状況(南から)
図版14－１　G地区　出土遺物
図版15－１　K－１・２地区　全景(南東から)
図版15－２　K－１地区　全景(北西から)、
遺物出土状況(北から)
図版15－３　K－２地区　南側全景(西から)
図版15－４　K－２地区　甕棺墓出土状況(南から)
図版15－５　K－２地区　調査区南端土層断面状況
(北から)
図版15－６　K－３地区　全景(東から)
図版16－１　K－１・２地区　出土遺物
図版17－１　L地区　全景(東から)
図版17－２　L地区　１号井戸遺物出土状況
(東から)
図版17－３　L地区　１号井戸完掘状況(東から)
図版17－４　L地区　１号土坑遺物出土状況
(南から)
図版17－５　L地区　１号溝完掘状況(南東から)
図版18－１　L地区　出土遺物①
図版19－１　L地区　出土遺物②
図版20－１　M地区　全景(北から)
図版20－２　M地区　丘陵落ち込み部(南から)
図版20－３　M地区　調査区南端(北から)
図版20－４　M地区　１号土坑遺物出土状況
(東から)
図版20－５　M地区　１号井戸完掘状況(西から)
図版20－６　M地区　出土遺物

表目次

表１　篠原東遺跡群発掘調査工程表…… 2
表２　E地区出土動物遺存体…… 120
表３　ゼラチン回収率と元素分析の結果…… 127

Ⅰ．はじめに

１．調査に至る経過

篠原東遺跡群の発掘調査は前原東土地区画整理事業に伴い実施されたものである。

糸島市は福岡市の西隣にあり、都心部への通勤・通学者のベッドタウンとして発展してきた。近年は、九州大学伊都キャンパスの移転に伴い、学生向けの賃貸住宅が目立つようになってきている。また、利便性の高いJR筑肥線沿いの開発も加速してきている。この流れの中、JR筑前前原駅とJR波多江駅の中間に位置する篠原・浦志地区では大規模な土地区画整理事業と新駅の設置が計画されることとなったのである。

篠原東遺跡群の調査原因である前原東土地区画整理事業は開発面積20.2ha、平成24年１月から事業を開始し、平成31年３月までの７年間にわたって造成工事を行う計画である。平成27年６月には行政区の名称が「伊都の杜」に決定し、平成27年３月から入居が開始、平成28年９月には伊都の杜自治会が設立された。平成28年８月末時点で、77戸235人が居住しており、最終的には約1000戸、人口３千人の街となる予定である。

この大規模開発に伴って、平成23年11月には、前原東土地区画整理組合から文化財保護法第93条２項に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出が提出された。これを受けて、糸島市教育委員会では平成23年11月～平成24年１月と同年８月に試掘調査を実施した。試掘調査は、重機を使用して合計48か所のトレンチを掘削し、結果、住居跡や土坑、ピット、溝などの遺構の存在を確認した。また、1970年代に当地と周辺地域で行われた圃場整備によって改変を受ける前の旧地形も検出した。

この試掘調査の結果を踏まえ、糸島市教育委員会では掘削され埋没した南西部の段丘と北東部の微高地上に遺構が残されている可能性が高いと判断し、調査計画を立案した。

２．調査の組織

今回の発掘調査および報告書作成に係る組織は以下の通りである。

調査主体者　糸島市教育委員会

総括　教 育 長　家宇治正幸　（前任）菊池俊秀

　　教育部長　泊　早苗　　（前任）井土敏幸

　　文化課長　角　浩行　　（前任）洞　龍二郎　池田龍司

　　文化課長補佐兼文化図書館係長　古川秀幸　（前任）山﨑しのぶ　後藤茂美

　　文化課文化財係長　　林　覚　（前任）角　浩行

庶務　　同　文化図書館係　主事　西木　望　（前任）犬丸智之

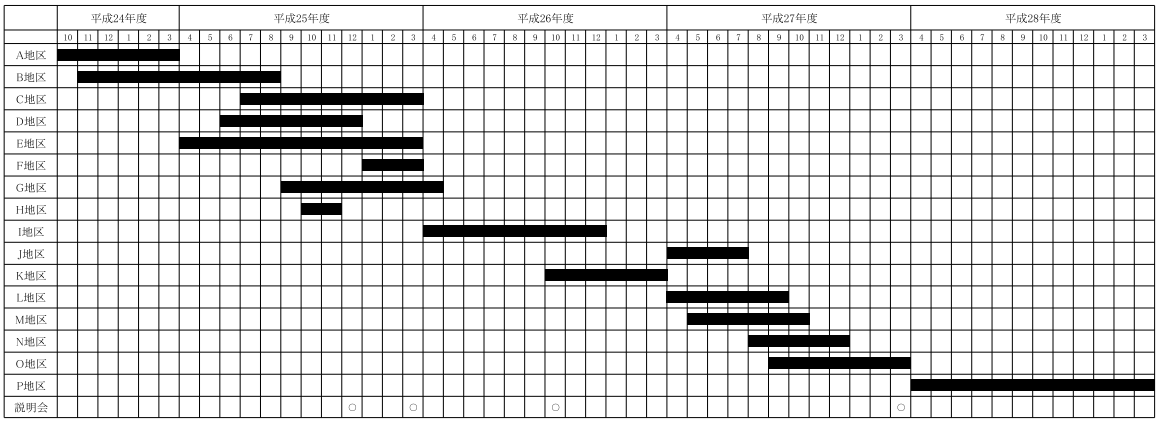
調査　　同　文化財係　主任主査　江﨑靖隆　　江野道和（編集）

なお、平成27年度に組織改編にかかる名称変更があった。現、文化図書館係および文化財係はそれぞれ文化振興係、発掘調査係であった。

３．調査の工程

篠原東遺跡群の発掘調査にあたっては、土地区画整理事業の進捗状況に合わせて実施した。平成24年度10月にＡ地区から開始し、平成29年３月にＰ地区で終了した。また、発掘調査の成果を公開する現地説明会を合計４回開催している。それぞれの調査区の工程と現地説明会の開催月については以下の表のとおりである。

表１　篠原東遺跡群発掘調査工程表



４．調査の概要

前述のとおり、本遺跡群の発掘調査は、遺構が残る南西側段丘上（以下、段丘）と北側の微高地上（以下、微高地）を中心に行った。調査区と地形との関係は、Ｅ～Ｈ･Ｊ～Ｎ地区が段丘上、Ｂ－２・Ｃ・Ｄ・Ｉ・Ｏ・Ｐ地区が微高地上になる（第１図）。Ａ地区は旧河川を含む氾濫原、Ｂ－１地区は中央を縦断するように圃場整備によって付け替えられる前の浦志川の流路が存在する。

段丘は圃場整備によって大きな改変を受けており、特に尾根上は重機によって大きく削平されたと考えられ、全体的に遺構の遺存はよくない。Ｋ・Ｍ地区が段丘の東西斜面部、Ｇ地区が北側の先端部、他の地区が尾根上となる。尾根上は単純な高まりではなく、浅い谷（以下、小谷）が一筋走っている。小谷はＥ地区からＦ・Ｊの各地区を通り、Ｇ地区の北西部で、段丘西側の谷底低地に抜けている。この小谷は中世末ごろには埋没したと考えられ、埋土には弥生時代～中世までの遺物が包含されている。

北側の微高地は東側に浦志本川、南側が低湿地となっている。微高地上は段丘と同様、圃場整備によって大きく削平を受けており、全体的に残りはよくない。確認できた主な遺構としては、Ｉ地区の南側では平安時代の掘立柱建物、Ｃ・Ｄ・Ｉ・Ｏ地区では15世紀後半～16世紀前半の戦国期の居館跡が検出されている。

本報告書では、このうち、段丘上の主要部と旧河川部の調査について主に取り上げる。

第１図　篠原東遺跡群　(1/3,000)

Ⅱ．調査の記録

１．位置と環境

（１）地理的環境

篠原東遺跡群の位置する糸島地域の南側には佐賀県との県境となる背振山地が横たわっている。この背振山地から北方に広がる糸島平野に目を向けると、山地から派生した台地や段丘が樹枝状に伸びていることがわかる。当該遺跡群はこの段丘が枝分かれし、伸びきった先端部と低地とが接した場所にある。

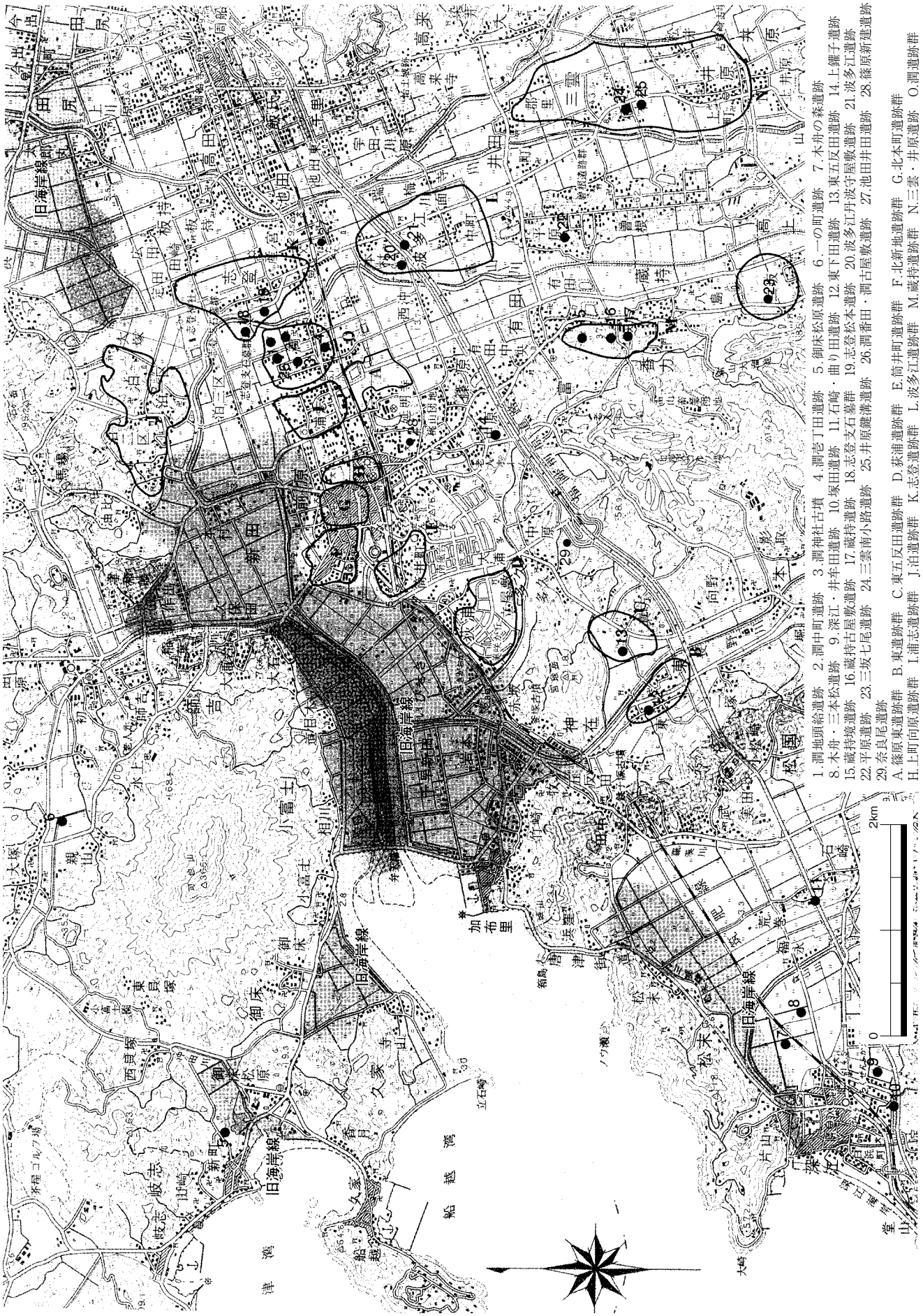
前述したが、遺跡群の周囲の地形は1970年代に行われた圃場整備により大きく改変を受けている。したがって、今回の調査前には緩やかに傾斜する耕地が一面に広がっており、元の地形はほとんど残されていなかった。しかし、調査の結果、旧地形は圃場整備後の地形と大きく異なり、非常に複雑で起伏に富んでいたことがわかった。

遺跡群の西側には、福岡県立糸島高等学校が載る段丘が横たわっているが、遺跡群内南西側の段丘との間は狭長な谷底低地となっている。そして段丘の東側には圃場整備によって、流路が人工的に変えられた旧浦志本川が流れており、段丘と旧河川との周囲には氾濫原と扇状地が広がる。また、調査区北側のJR沿線近くには旧河川の西側に残された微高地が埋没している。本遺跡群の遺構は段丘上と微高地上に残っている。

（２）歴史的環境

篠原東遺跡群の周囲には背振山地から派生した段丘や微高地の先端部に立地する遺跡が多くあり、それらが旧海岸線や糸島低地帯に沿って連なるように位置する。主なものを挙げると志登・潤・浦志・上町向原・北新地・筒井町・荻浦などの各遺跡群があり、低地帯を挟んで泊がある（第２図)。このうち、潤遺跡群では近年小学校の新設や県道の拡幅などの開発が相次ぎ、大規模な調査が行われ、他の遺跡群と比べ様相が明らかとなっている。調査された遺跡としては、地頭給をはじめ番田・古屋敷・丸田などがあるが、これらはいずれも篠原東遺跡群と同様、微高地上に立地しており、弥生から中世にかけての遺構や遺物がみつかっている。なかでも、弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけては碧玉、水晶を主な素材とした大規模な玉作工房群が営まれており、海に近く、交易に便利な立地を生かして素材の搬入と製品の搬出を行っていたものと考えられる。このような玉作の素材である碧玉の破片は泊遺跡群や浦志遺跡群でも出土しており、特に後者では楽浪土器や小銅鐸も発見されている。潤・浦志・泊をはじめとする沿岸地域の集落群が列島各地や朝鮮半島との交流の拠点であったことがわかる。

篠原東遺跡群は浦志遺跡群の南隣にあり、わずかに内陸部にみえるが、かつては同一の微高地上に展開する集落であった可能性があり、関係性が深いといえる。



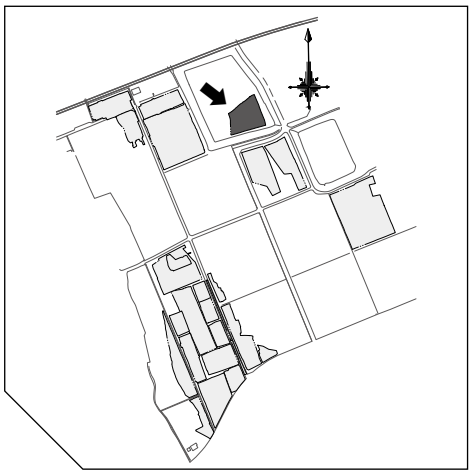
第２図　篠原東遺跡群と周辺の遺跡（１／50,000）

２．Ａ地区の調査

（１）調査概要（第４図、図版１）

本地点は前原東土地区画整理事業対象地の北側に位置し、ＪＲ筑肥線の線路沿い「柱田溜池」内の調査である。試掘調査は、溜池内の水を排出した後行われた。その結果、調査区の西側で黒色泥層の直下から黄褐色粘質土の遺構面を確認し、その縁辺に近世の河川を確認した。そのため、本調査を行う旨の通知を行うと共に、水を必要としない農閑期に本調査を実施することで前原東土地区画整理組合と合意した。

主な遺構としては、近世に属する河川２条と中世に属する河川１条を検出した。現在、「柱田溜池」の周囲を浦志本川が流れるが、その流れとは異なる近世の浦志本川を調査したものである。



第３図　Ａ地区の位置

第４図　Ａ地区の主な遺構実測図（１／500）

（２）遺構と遺物

①旧河川

１号旧河川（第５図、図版１・２）

本調査では、西側に丘陵地があり、その縁辺に沿うように旧河川を確認できた。１号旧河川は南から北へと流れ、途中から流路を西へと方向を変えている。土層観察では、基本的には洪水砂層で埋まっており、中層で粘土と洪水砂が混じる斜交層理となっている。下層では杭跡が見られた。江戸期の河川である。

出土遺物（第６・７図、図版２・３）

１は磁器椀で、内面に重ね焼きの跡が残る。口径12.0㎝、器高4.9㎝、高台径4.2㎝を測る。２は陶器椀で、内面に胎土目が残る。３は磁器皿で、内面に草花文を有する。口径12.9㎝、器高2.9㎝、高台径7.1㎝を測る。４は磁器瓶の底部片。５は陶器皿で、藁灰釉を掛ける。内面に胎土目を残す。６は磁器椀で、外面に枝葉を描き、内面に圏線と草文を描く。７は猪口で、外面に松、「重堀色宝松風」、高台裏には「山又」と書かれている。８は磁器小椀で、内面に梅？を描いている。９は磁器小椀で、底部付近の釉薬が剥がれている。10は角筒状の磁器椀で外面に柳を描く。11は玉縁をもつ白磁片で、流れ込みであろう。12は陶器椀で、藁灰釉が美しく古唐津であろう。13は陶器の皿で、内面に「太」の字が書かれている。14は灯明皿。15は水注。16は紅皿。口径4.3㎝、器高1.5㎝、底径1.3㎝を測る。17は簪。簪は青銅製で、「寛永通宝」が通してある。18も「寛永通宝」。19は陶器で、甕の底部片。20は鉄砲の玉。21は丸瓦で、側面を面取りする。22～25は弥生土器の口縁部と底部片。26は甑の把手。27は黒曜石で調整剥離を施す剥片である。

２号旧河川（第５図、図版1）

２号旧河川は、南東側から北西側に向かって延びており、１号旧河川が左へカーブするところで結合している。土層観察では、基本的には洪水砂層で埋まっており、下層で粘土と洪水砂が混じる斜交層理となっている。12世紀代の旧河川と考えられる。

出土遺物（第８図、図版３）

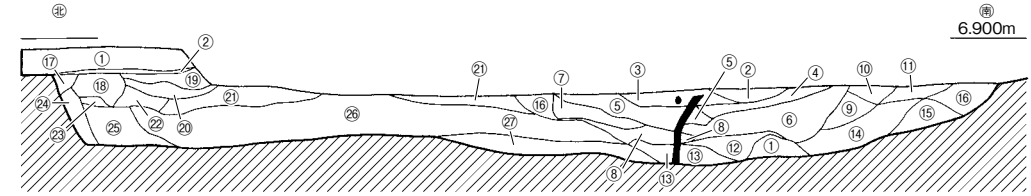
１は鉢で、内外面指ナデを施す。２は土師皿で、底部の切り離しは糸切りである。口径10.4㎝、器高1.8㎝、底径6.6㎝を測る。３は土師皿で、底部の切り離しはヘラ切りの後に板状圧痕を施す。口径9.4㎝、器高1.3㎝、底径7.6㎝を測る。

３号旧河川（第５図、図版１）

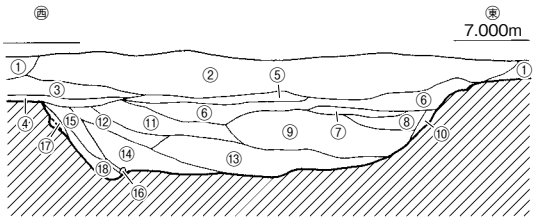
３号旧河川は、東側から西側に向かって延びており、１号旧河川が左へカーブするところで結合している。土層観察では、上層が水平堆積の洪水砂層で埋まっており、中層は粘土と洪水砂が混じる斜交層理、下層は砂礫層が中心となっている。

出土遺物（第８図）

４は鍋で、外面はナデ、内面は横方向のハケメで調整している。５も鍋か。内外面にわずかにハケメが残る。６は甕の口縁部片で、口縁端部を細くする。



1号旧河川南北上層断面図

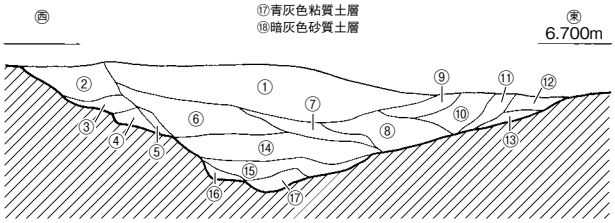


1号旧河川東西土層断面図

現代
①茶褐色粘質土層（ヘドロ）
②黄褐色砂層

江戸期
③暗灰色粘質土層
④暗茶褐色粘質土層
⑤明灰色砂質土層
⑥黄茶色砂礫層
⑦茶褐色砂層
⑧明青灰色粘質土層
⑨明灰色砂質土層
⑩黄褐色砂礫層（②層と同じ）
⑪茶褐色粘質土層
⑫青灰色礫層
⑬明灰色粘質土層
⑭灰色砂質土層
⑮黄茶色礫層
⑯茶灰色砂質土層
⑰青灰色粘質土層
⑱灰色粘土層
⑲明灰色砂層
⑳茶褐色砂礫層
㉑明灰色砂質土層
㉒黒灰色粘質土層
㉓黒灰色砂質土層
㉔青緑色粘土層
㉕黒灰色砂層
㉖黄茶色砂礫層（甑の把手あり）
㉗暗黄茶色礫層

①茶褐色粘質土層（溜池内ヘドロ）非常に柔らかい
②暗茶褐色粘質土層（非常に柔らかい）
③明茶色粘質土層
④明灰色粘質土層（鉄分が多く含まれる）
⑤灰色粘質土層（④層と同質）
⑥明灰色砂質土層
⑦青灰色粘質土層（鉄分が多く含まれる）
⑧灰色砂礫層
⑨暗茶色砂礫層（川砂、小石が多く含まれる）
⑩茶色砂層（⑨層よりも細かな川砂）
⑪明灰色砂質土層（粘土～砂の互層）
⑫灰色砂質土層（粘土と砂の互層）
⑬黒茶色砂層
⑭暗灰色砂質土層
⑮暗黒灰色砂質土層
⑯黄灰色砂層
⑰青灰色粘質土層
⑱暗灰色砂質土層



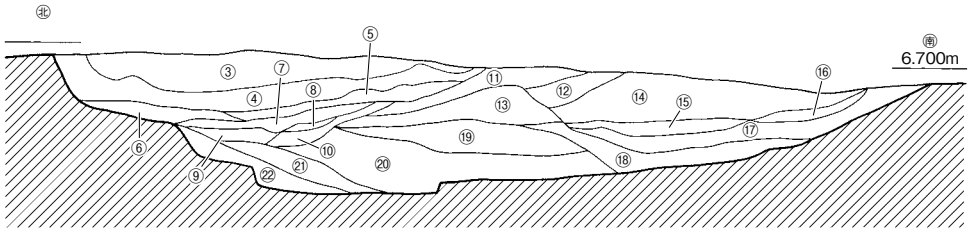
2号旧河川土層断面図

上層
①茶褐色砂礫層
②青灰色粘土層（鉄分を多く含む）
③青灰色礫層
④明灰色砂質土層
⑤灰色粘土層

下層
⑥明灰色砂質土層（砂と粘土の互層）
⑦暗灰色粘土層（腐植層）
⑧明青色砂礫層（川砂のような礫）
⑨明灰色砂層
⑩暗灰色砂質土層
⑪青緑色粘土層
⑫青灰色礫層（③層と同じ）
⑬青灰色砂質土層

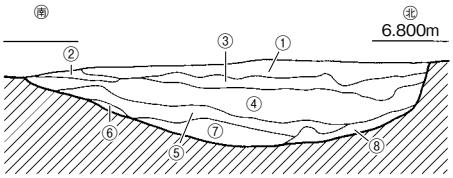
下層
⑭白褐色砂層
⑮明灰色砂層
⑯暗灰色粘土層
⑰暗黒色粘土層

⑥⑦⑭～⑰層は、斜交層理



3号旧河川南北土層断面図

③暗青灰色粘質土層
④暗灰色砂質土層
⑤暗青灰色粘質土層
⑥白灰色粘質土層
⑦茶灰色砂層
⑧暗灰色粘土層
⑨青灰色粘土層
⑩灰色砂層
⑪白灰色礫層
⑫黄茶色礫層
⑬明黄茶色砂礫層
⑭茶灰色礫層
⑮灰色砂層
⑯暗灰色粘土層
⑰灰色砂質土層
⑱茶灰色砂礫層
⑲白灰色砂礫層
⑳茶灰色礫層
㉑暗青灰色粘土層
㉒暗灰色砂礫層



3号旧河川南北土層断面図

上層
①明青灰色粘質土層（明青灰色の地山を多く含む）
②暗灰色粘質土層
③暗灰色砂質土層（青灰色の地山ブロックを多く含む）

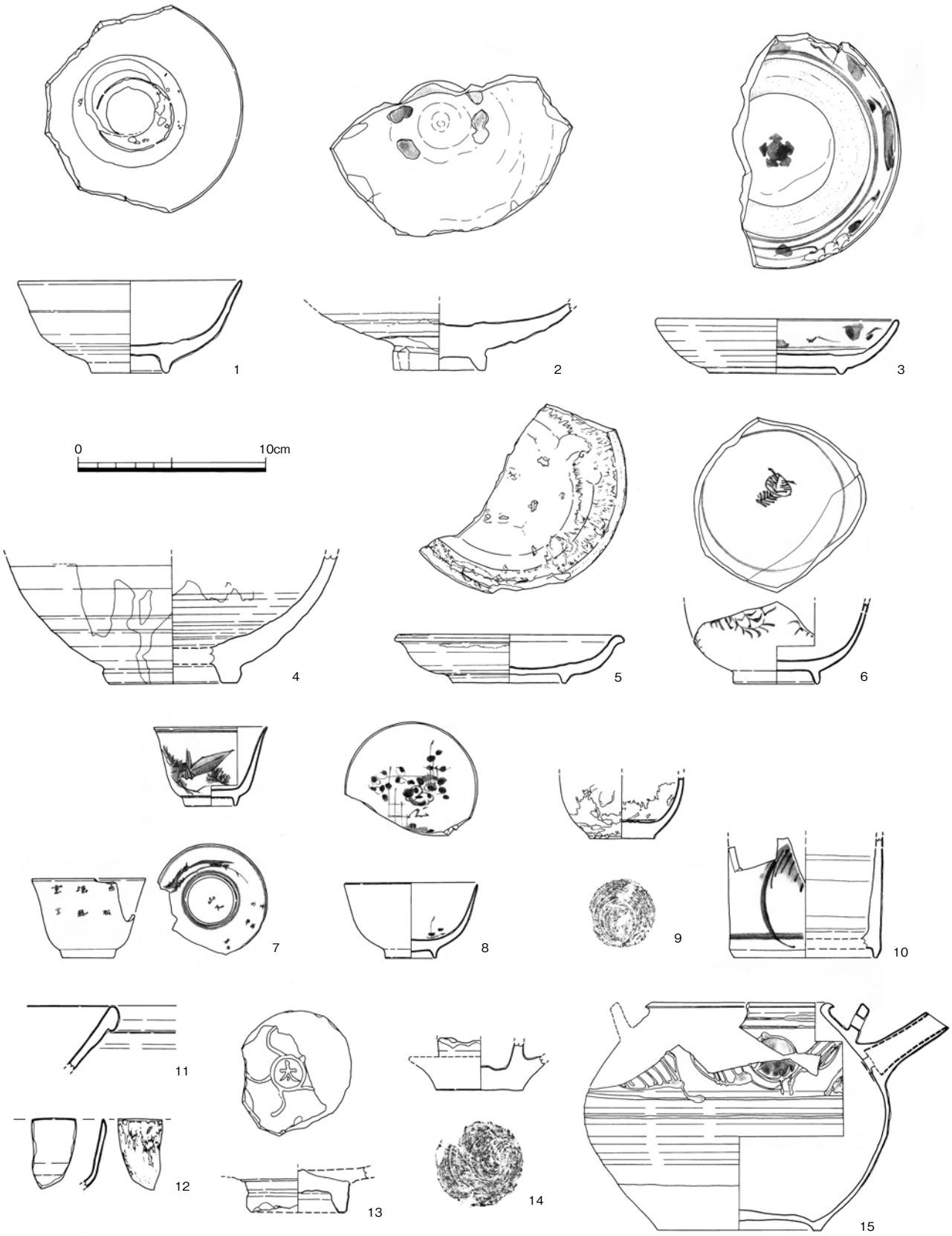
中層
④暗灰色砂質土層（砂と砂質土の互層）

上層
⑤暗灰色粘質土層
⑥白灰色砂礫層
⑦灰色砂礫層
⑧青灰色粘土層

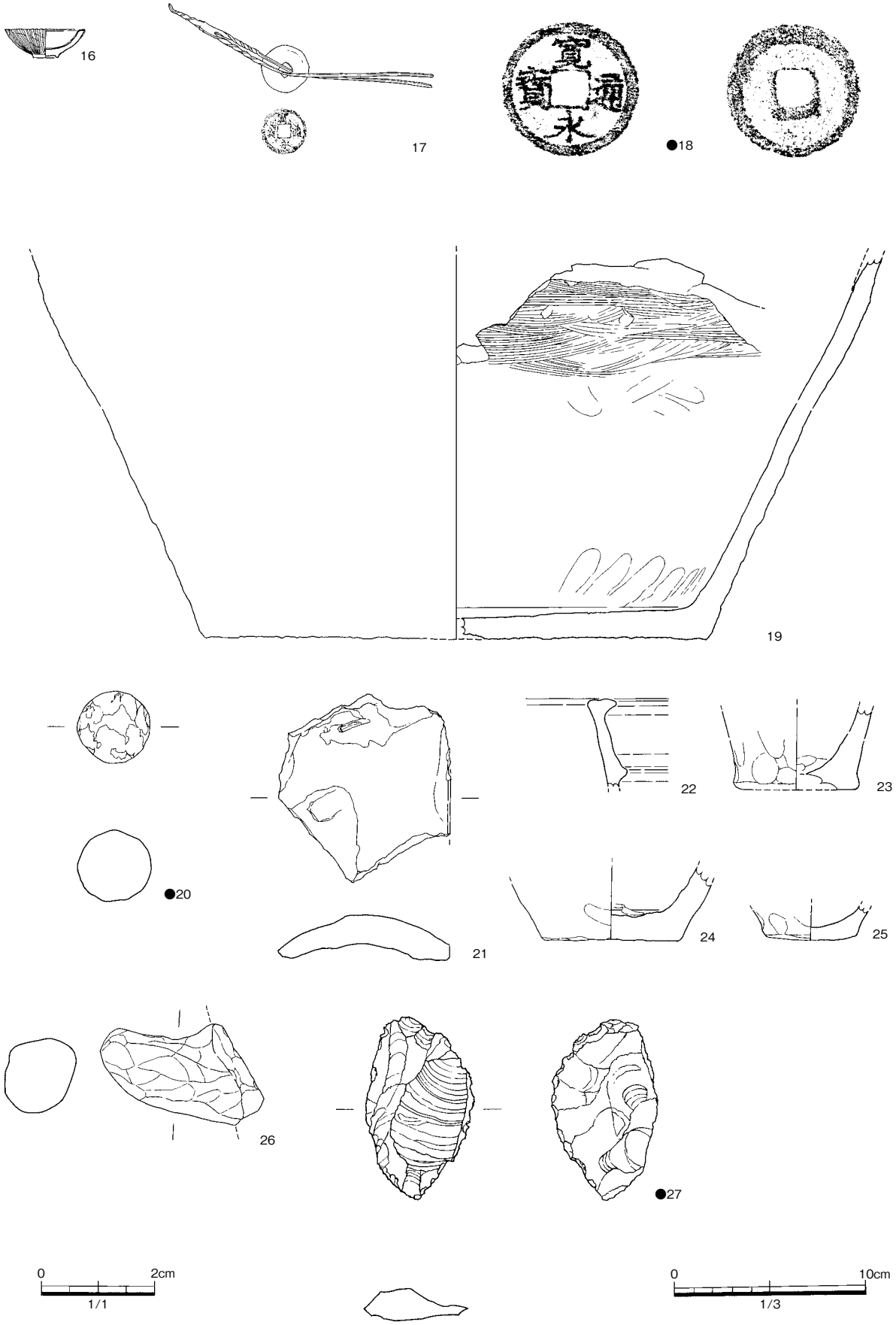
上・中層は、水平的な堆積で
中層は斜交層理
下層は砂礫層が中心

0　2m

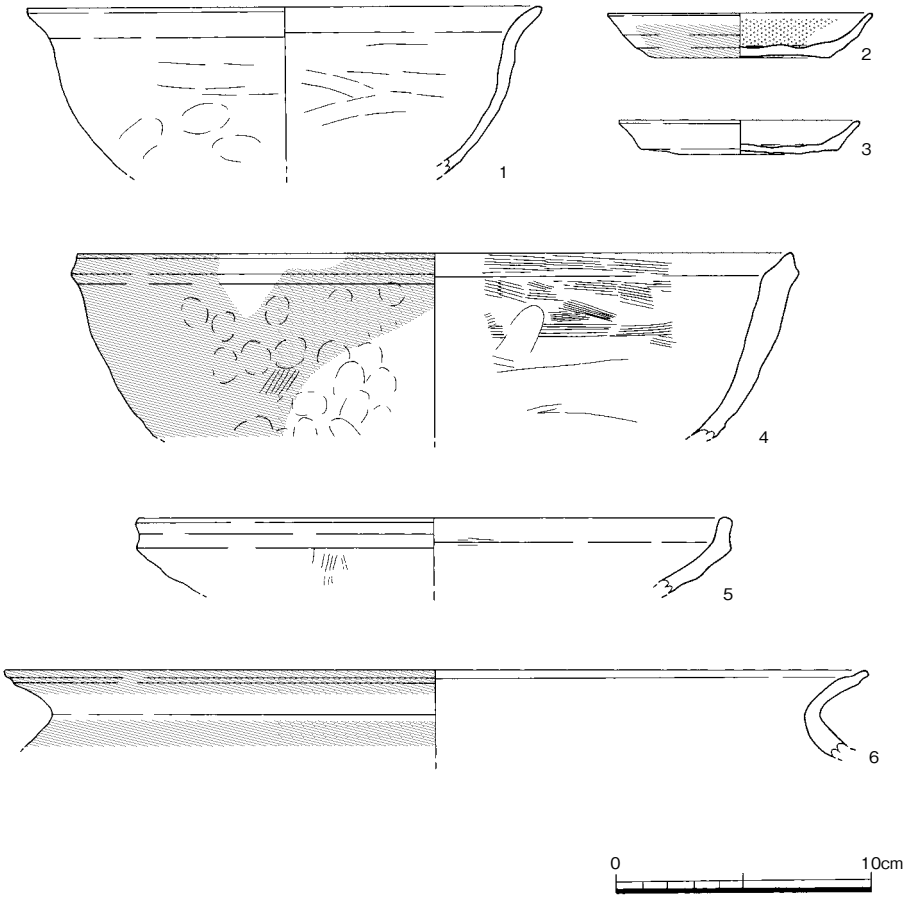
第５図　Ａ地区　１～３号旧河川土層断面実測図（１／60）



第６図　Ａ地区　１号旧河川出土遺物実測図①（１／３）



第７図　Ａ地区　１号旧河川出土遺物実測図②（●は１／１、１／３）



第８図　A地区　２・３号旧河川出土遺物実測図（１／３）

３．Ｂ地区の調査

（１）調査概要（第10図）

本調査区は前原東土地区画整理事業地の北側に位置し、造成で埋め立てられた旧柱田溜池の南側にある。調査前、本地区は水田となっており、稲作が行われていた。したがって、調査は稲刈りが終了した平成24年11月に開始し、平成25年８月まで行った。この調査の実施にあたっては、調査後に行われる造成工事計画と歩調を合わせる必要性から、年度によって調査区を２つにわけることとした。ついては、東側の平成24年度分をＢ－１地区、西側の平成25年度調査分をＢ－２地区とした。

（２）遺構と遺物

①Ｂ－１地区（図版４、巻頭図版２）

本地区は標高７ｍ前後で、南から北に向かって緩やかに下る傾斜がある。調査区内を縦断するように旧河川である浦志本川の流路が検出された。基本となる地山は灰色の粗砂または砂礫層で構成されているが、調査区東側中央の一部には黄褐色の粘質土が観察できた。なお、旧河川以外の明確な遺構は検出されなかった。

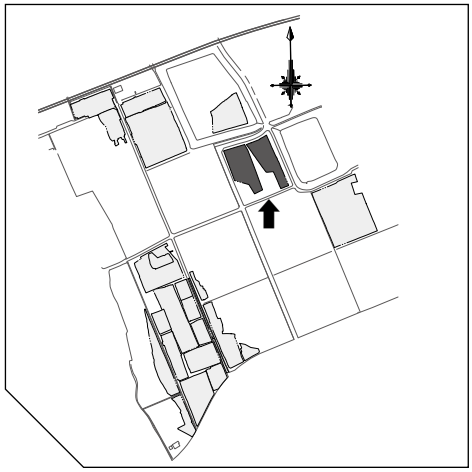
浦志本川旧河道（１号旧河川）

浦志本川の旧河道は調査区南東角から北端に向かって流れており、道を挟んで北側のＡ地区内の１号旧河川へと続く。流路は途中で向きを変え、北西から北へと屈曲する。本調査区内で検出された河道の長さは約85ｍで、幅は南端付近で約５ｍ、北側の屈曲部分が最も幅広くなっており11mある。全体的に下流へ行くにつれて広がっていく傾向にある。川岸に近い部分には杭や矢板等が打ち込まれ、これに横木などを渡し護岸を行った状況が確認できた。

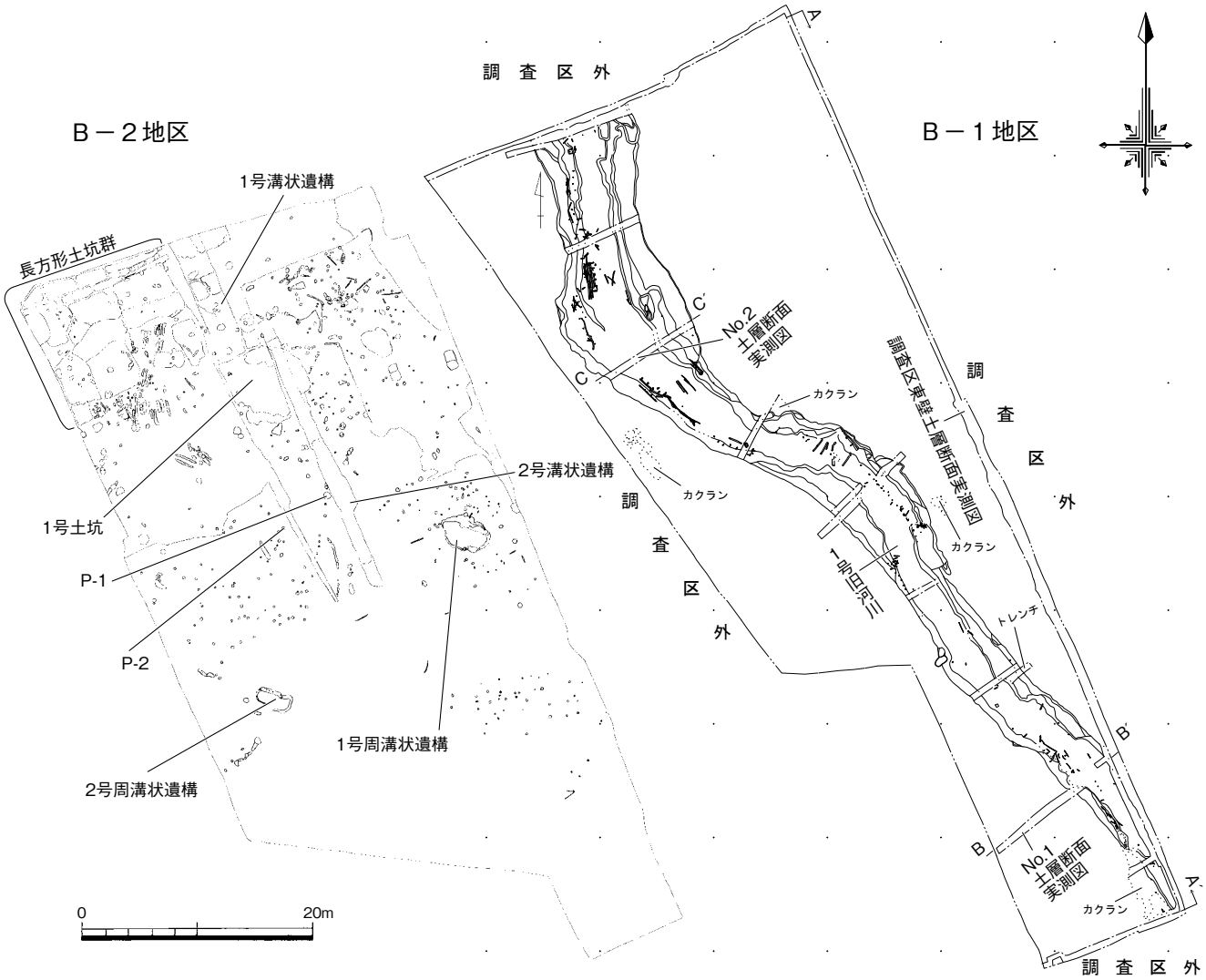
出土遺物（第14・15図、図版５）

旧河川と周辺からは弥生時代～現代までの遺物が出土している。まず、旧河川出土品を紹介する。１は戦時中の統制陶磁器である。外面には高台から口縁部に向かって呉須で螺旋文様が描かれ、高台内には統制番号を示す「有32」の銘がある。２、３は目薬の小瓶である。いずれも半透明の青色で、ガラス内に気泡が含まれているため、吹きガラス技法で成形されたと考えられる。２には「特効全治　活眼水　めぐすり」「肥前田代　松隈松齢堂製」という文字が入り、瓶の内側にはコルク栓の破片が落ち込んでいる。３には「麗眼水」「肥前神埼」という文字と、側面に目盛が入っている。この瓶に入った目薬は明治末～大正期にかけて流通していたようである。４は化粧水の瓶である。無色透明な吹きガラス製で、ガラス内に気泡が入る。体部外面には「ホーカー液」「堀越」、底部には「10」の文字が入る。大正期のものと考えられる。６～10は下駄で、６は小さいため子供用と考えられ、７は表裏の一部に赤色の塗料が残る。８は溝に歯の破片が差し込まれた状態で残り、９は鼻緒が切れた状態で残る。10は縦に半裁された状態である。11は桶などの曲げ物の蓋と考えられ、木栓１個が詰められた状態であり、釘が４本撃ち込まれた状態で残る。

河川周辺の包含層からの出土品としては、５の弥生時代の柱状片刃石斧がある。裏面は剥離したのちに砥石として再利用されたと考えられ、擦痕が残る。



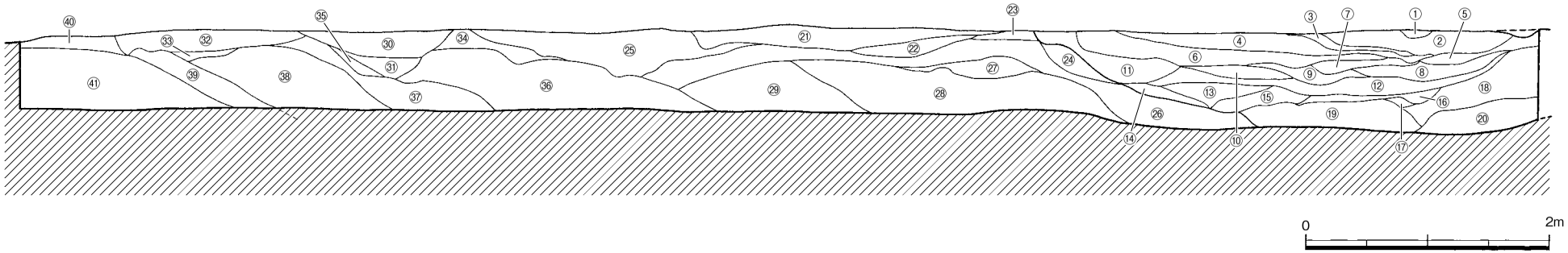
第９図　B地区の位置



第10図　B地区の主な遺構実測図（1／600）

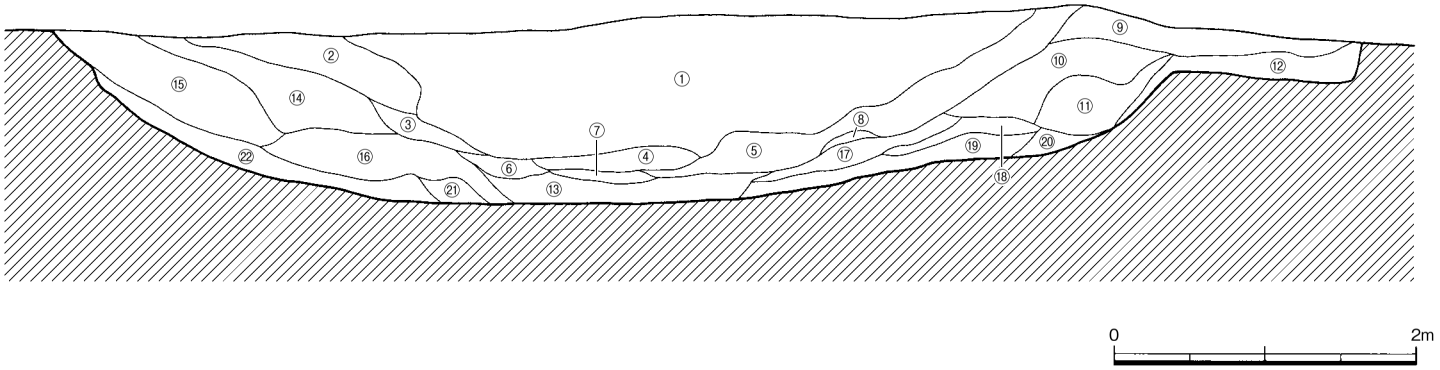
①黒灰色粘質土（腐植土層）
②青灰色粘質土（シルト混じり）
③灰色砂に腐植土混入
④暗灰褐色粘質土（粘性が強い。植物遺体を含む）
⑤暗灰褐色粘質土に灰色砂混入
⑥暗灰褐色粘質土（④よりも暗）
⑦灰色砂
⑧灰褐色粗砂
⑨灰褐色粗砂（⑧よりもやや明）
⑩灰色砂
⑪青灰色砂
⑫暗灰色砂に腐植土混入
⑬灰色砂礫
⑭灰色砂
⑮灰色粘質土（粘性強い）
⑯暗灰色砂に腐植土と礫混入
⑰暗灰色砂
⑱灰褐色砂
⑲灰色または茶褐色礫
⑳灰褐色砂に粗砂混入
㉑青灰色砂
㉒青灰色砂に小礫が少量混入
㉓灰色砂礫
㉔灰色砂礫
㉕暗灰色砂（シルト混じり）
㉖灰色砂礫と青灰色砂が互層状に堆積
㉗暗灰色粘質土
㉘灰色または茶褐色礫
㉙暗灰色砂
㉚灰色礫
㉛灰色砂
㉜灰色砂
㉝灰色砂礫
㉞灰色砂礫
㉟灰色砂（㉛よりもやや明）
㊱茶褐色礫
㊲暗灰褐色粘質土
㊳茶褐色礫
㊴茶褐色粘質土（部分的に黒褐色に変色。均質で固くしまる）
㊵灰色礫
㊶茶褐色礫

※全体的に西から東へ向かって地山層が堆積した状況が確認できた。
旧河川部については、このトレンチの東側が調査区の境界に接しているため、立ち上がり部を確認できていない。



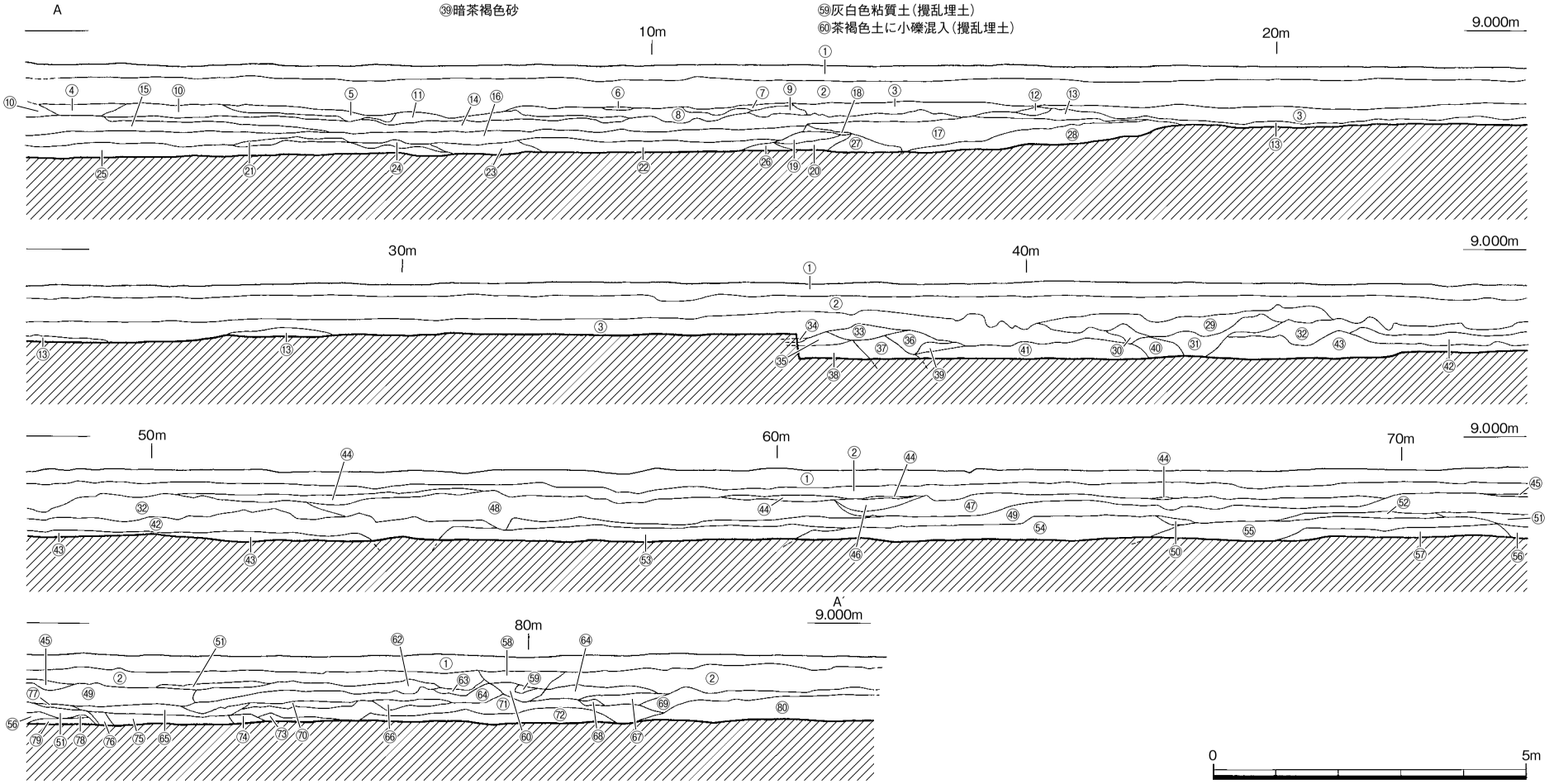
第11図　B－1地区　No.1トレンチ　北壁東西土層断面実測図（1／50）

①暗青灰色粘質土に黄茶褐色粘質土と小礫が混入（造成土）
②茶褐色粘質土に植物遺体混入（⑤と同一層）
③暗茶色粘質土と暗茶色砂が互層状に堆積
④黄茶色砂礫
⑤茶褐色粘質土
⑥暗茶色砂
⑦暗灰色粗砂
⑧暗茶色砂
⑨黄茶色粘質土
⑩暗青灰色粘質土
⑪青灰色粘質土と黄茶色粘質土が縞状に堆積
⑫灰色粘質土に礫混入
⑬灰色砂礫
⑭暗青灰色粘質土に礫混入
⑮灰色粘質土と黄茶色粘質土が縞状に堆積し礫混入
⑯灰色粘質土と灰色砂が互層状に堆積
⑰明黄茶色粗砂
⑱灰色粘質土
⑲暗茶色砂と暗茶色粘質土が互層状に堆積
⑳青灰色粘質土
㉑黄茶色砂礫
㉒灰色粘質土



第12図　B－1地区　No.2トレンチ　北壁東西土層断面実測図（1／50）

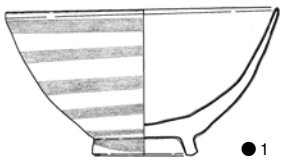
①暗灰色粘質土（水田耕作土）
②茶褐色粘質土（水田床土）
③黄褐色粘質土　部分的に暗茶褐色粘質土と灰白色粘質土がブロック状に混入
④茶褐色粘質土と小礫の混合土
⑤灰色粘質土に茶褐色粘質土混入
⑥茶褐色粘質土に灰白色粘質土がブロック状に混入
⑦茶褐色粘質土に灰色粗砂混入
⑧茶褐色粘質土と小礫の混合土
⑨茶褐色粘質土と灰色粘質土の混合土
⑩灰色粘質土（圃場整備前の旧水田耕作土か）
⑪灰色粘質土に灰白色粘質土と明黄褐色粘質土がブロック状に混入
⑫黄褐色粘質土と灰色粘質土の混合土
⑬灰色粘質土に黄褐色粘質土混入
⑭灰色粘質土（⑩よりも粘性が低く、シルトを含む）
⑮灰色粘質土（⑩に土質が近いが、やや明るい）
⑯灰色粘質土と灰色砂質土の混合層、茶褐色の鉄分を多く含む
⑰灰色礫
⑱明褐色砂
⑲灰色礫
⑳黄褐色砂と灰色砂が互層状に堆積
㉑灰色粘質土と灰色砂質土の混合土（⑯よりも砂多い）
㉒灰色砂礫
㉓暗灰色粘質土に同色シルト混入（腐植土層）
㉔灰色砂礫
㉕灰色砂礫（㉔より礫小さい）
㉖灰色粗砂
㉗灰色粗砂
㉘黄褐色粘質土（固く締まる）
㉙明灰色粘質土に同色砂混入
㉚黄褐色粘質土に同色粗砂混入
㉛明灰色粘質土に同色砂混入（㉙よりも砂多い）
㉜黄褐色粗砂
㉝暗茶褐色砂
㉞暗茶褐色砂
㉟黄褐色粗砂
㊱暗茶褐色砂と黄茶褐色粗砂の混合土
㊲黄茶褐色粗砂（㉟よりやや暗）
㊳黄褐色粘質土（固く締まる）
㊴暗茶褐色砂
㊵暗茶褐色粗砂
㊶暗茶褐色砂礫
㊷暗灰色粘質土
㊸灰色砂
㊹茶褐色粘質土に灰色粘質土混入
㊺茶褐色粘質土に灰色粘質土混入
㊻暗黒灰色粘質土
㊼粗砂に灰色粘質土がブロック状に混入
㊽暗黒灰色粘質土と灰色粘質土、同色粗砂の混合土（客土層）
㊾灰色シルトに同色粗砂混入
㊿灰色粗砂
(51)青灰色土に茶褐色土と小礫混入
(52)茶褐色粘質土に灰色粘質土と小礫混入
(53)灰色砂
(54)灰色砂に同色粗砂が少量混入
(55)茶褐色砂礫
(56)茶褐色シルト
(57)青灰色砂に茶褐色砂混入
(58)茶褐色礫（攪乱埋土）
(59)灰白色粘質土（攪乱埋土）
(60)茶褐色土に小礫混入（攪乱埋土）
(61)茶褐色粘質土に灰褐色粘質土混入
(62)青灰色粘質土と黄茶褐色粘質土の混合土（固く締まる）
(63)茶褐色礫
(64)暗茶褐色粘質土に青灰色シルト混入
(65)青灰色砂質土に茶褐色砂混入（(75)より茶褐色砂の割合が高い）
(66)暗灰褐色粘質土に青灰色粘質土と黒褐色粘質土がブロック状に混入
(67)暗茶褐色土
(68)黒褐色粘質土（腐植土）
(69)青灰色粘質土
(70)暗茶褐色粘質土
(71)青灰色粘質土に暗茶褐色粘質土と黒褐色粘質土がブロック状に混入
(72)茶褐色砂に青灰色粘質土がブロック状に混入
(73)茶褐色砂
(74)暗灰色粘質土と茶褐色砂の混合
(75)青灰色砂質土に茶褐色砂混入
(76)灰色砂質土
(77)青灰色土に茶褐色土と小礫混入（(51)より礫の割合低い）
(78)灰色砂質土
(79)黒褐色砂質土（腐植土）
(80)暗灰色粘質土



第13図　B－1地区　調査区東壁南北土層断面実測図（1／100）

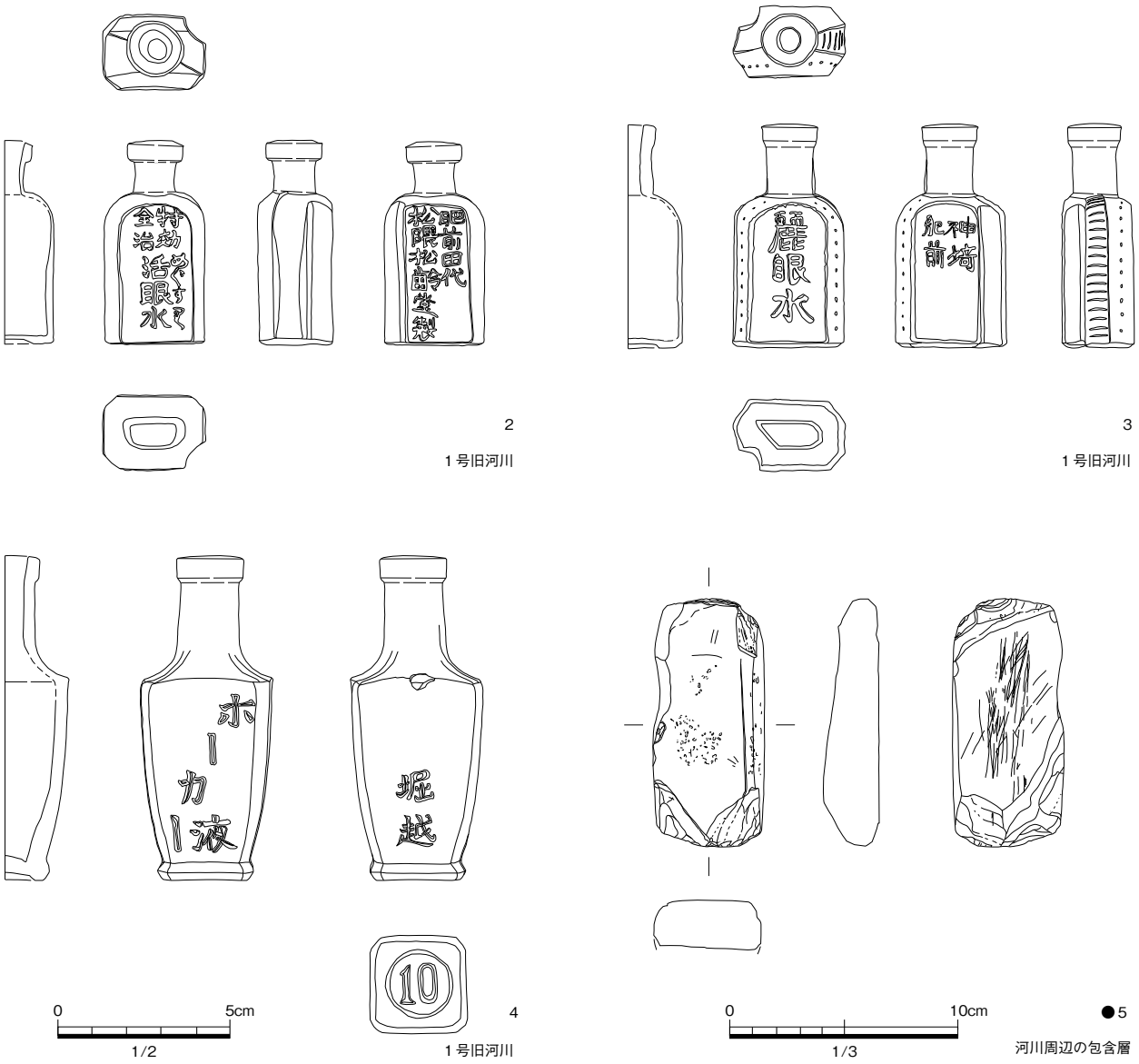
②Ｂ－２地区（図版４）

本調査区は標高約７～８ｍで、北西側が人為的に一段下がっているほかは、北から南へ向かって緩やかに下る地形となっている。北西側の一段下がった場所には1.8～16㎡程度の長方形の浅い窪みが多くあり（以下、長方形土坑群）、これは圃場整備前の耕地に関係する区画の可能性が考えられたが、現状の断面観察では断定できなかった。また、南北方向に２本の溝状遺構（１・２号）があるが、この埋土には旧耕作土や造成土が混入しており、これも圃場整備時に掘られたものと考えられる。遺構としては周溝状遺構とピット等が確認できたが、ピットについては掘立柱建物になるものは見いだせなかった。



●1

1号旧河川



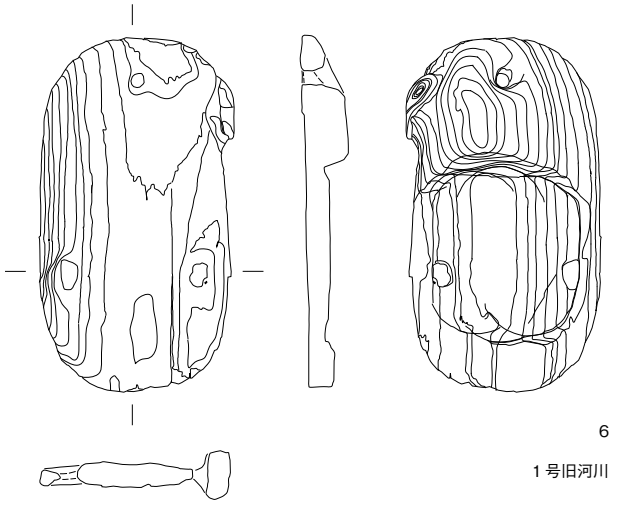
2
1号旧河川

3
1号旧河川

4
1号旧河川

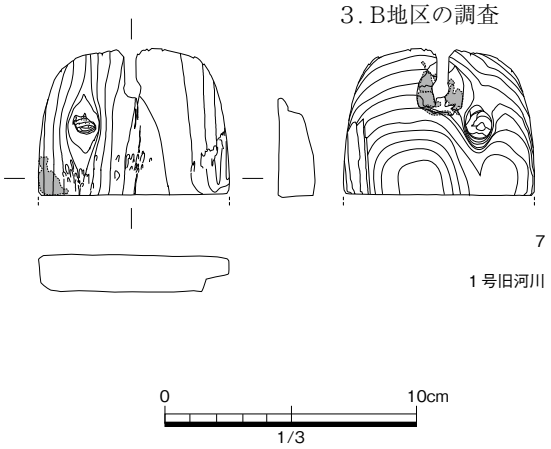
●5
河川周辺の包含層

第14図　Ｂ－１地区　出土遺物実測図①（１／２、●は１／３）



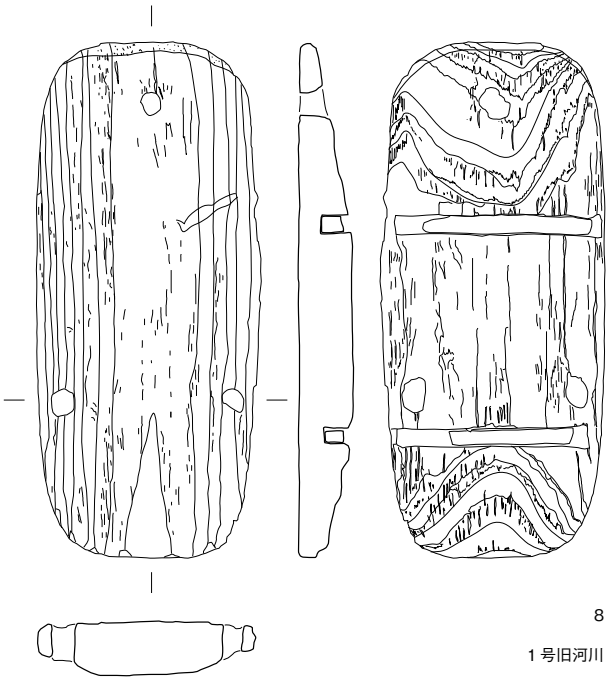
6

1号旧河川



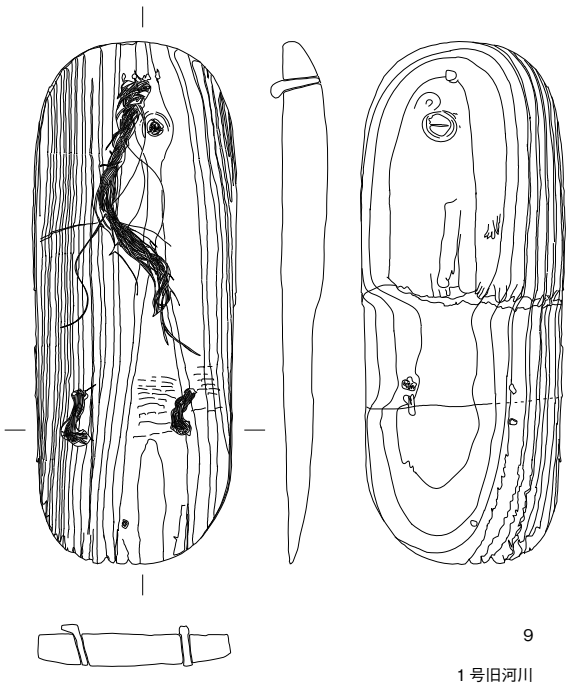
7

1号旧河川



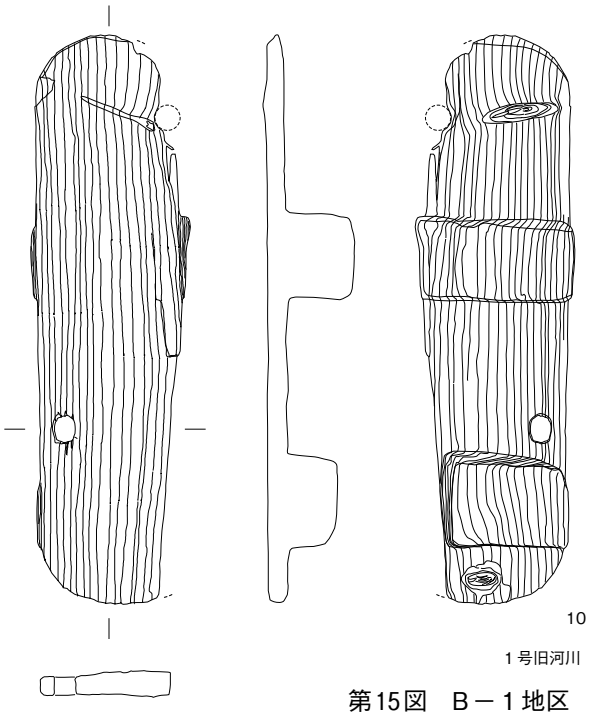
8

1号旧河川



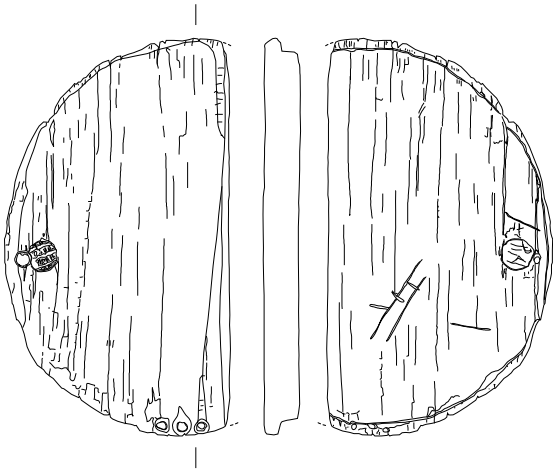
9

1号旧河川



10

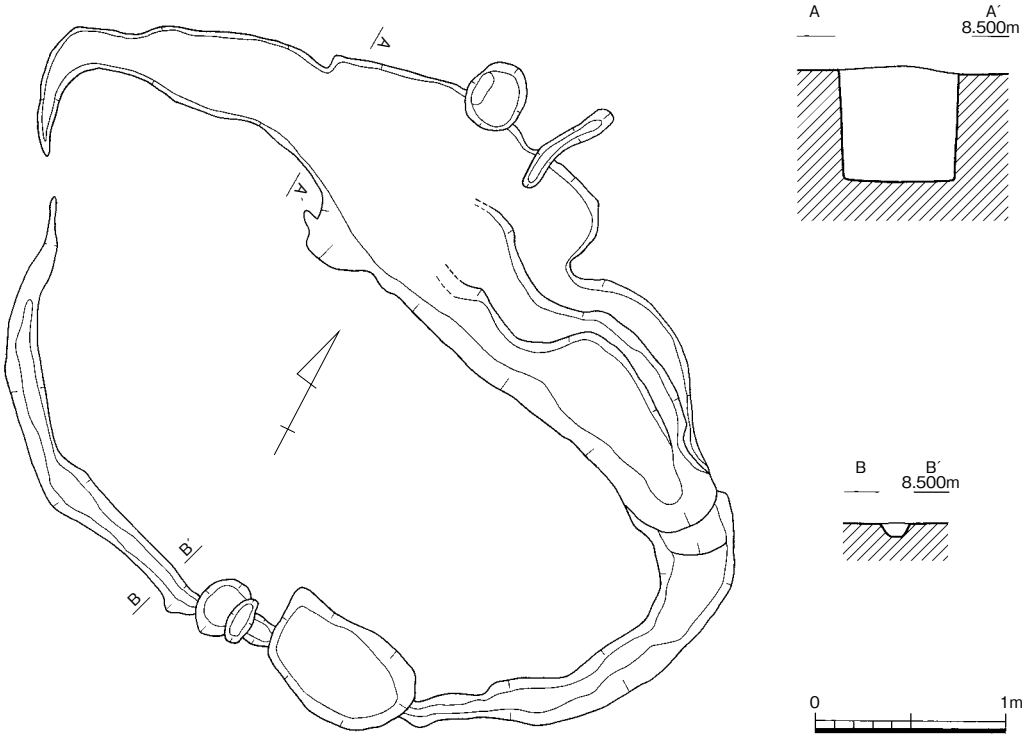
1号旧河川



11

1号旧河川

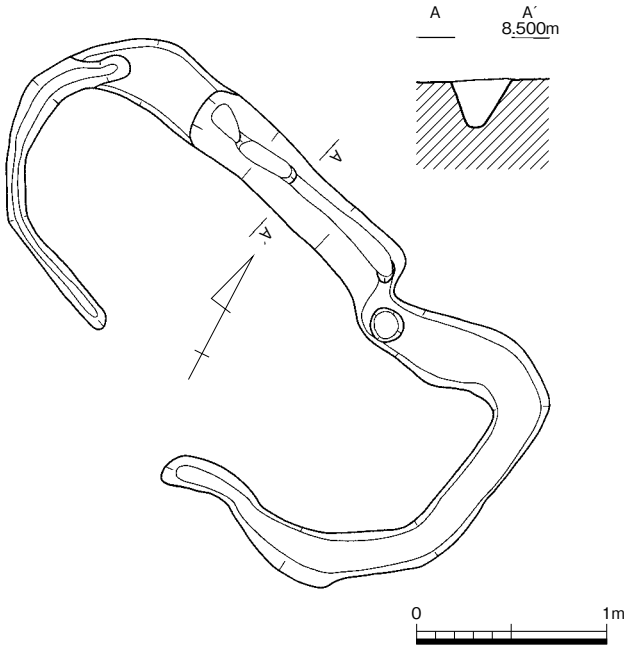
第15図　B－1地区　出土遺物実測図②（1／3）



第16図　Ｂ－２地区　１号周溝状遺構平断面実測図（１／40）

周溝状遺構（第16・17図、図版４）

周溝状遺構は調査区の東側中央部と南西側で合計２基が検出された。いずれも不整楕円形に溝を巡らせる特徴があるが、現状で溝の内側には遺構が存在しておらずまた、出土遺物もなかったため、遺構の性格と時期については確定ができなかった。

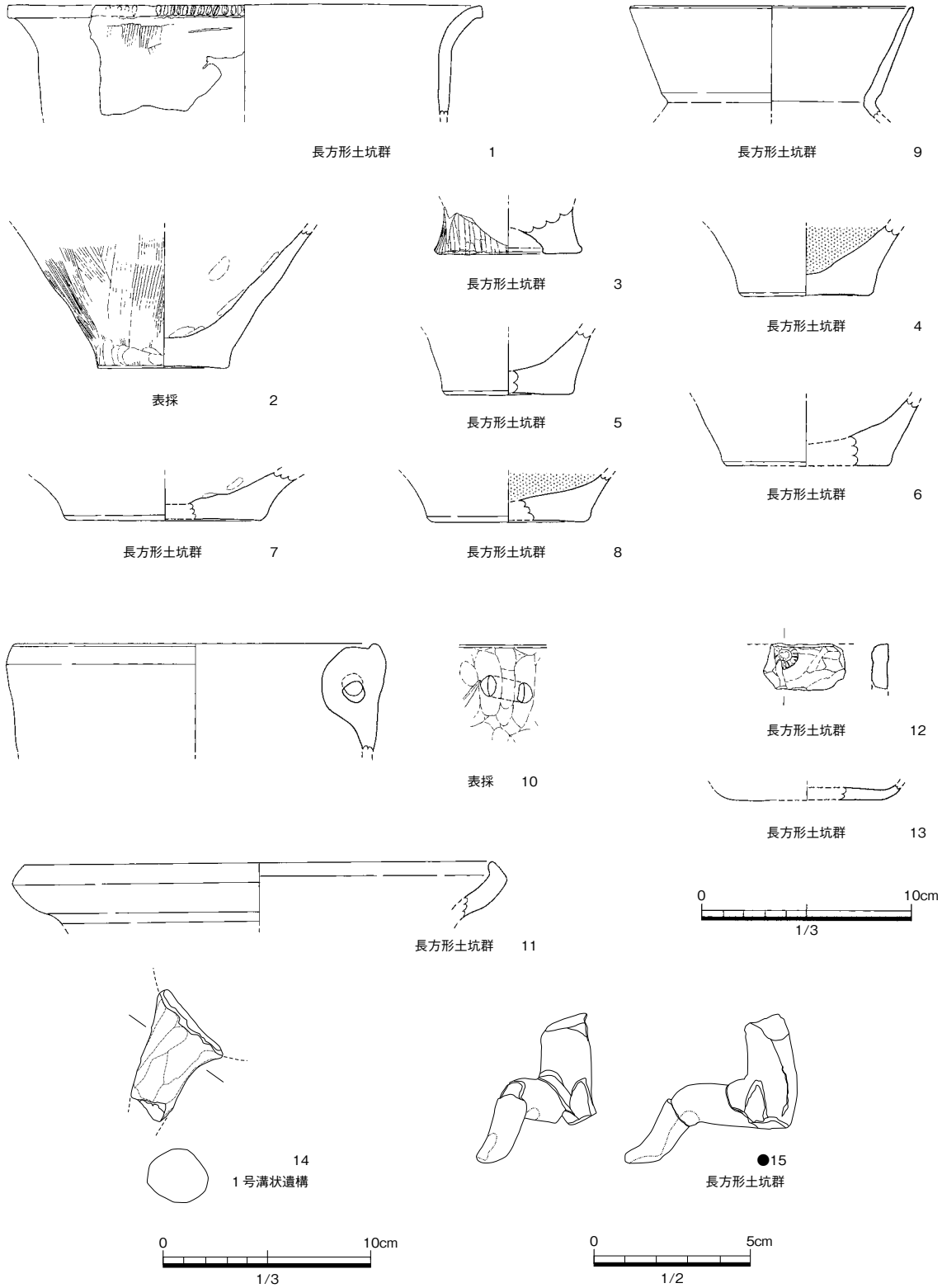


第17図　Ｂ－２地区　２号周溝状遺構平断面実測図（１／40）

出土遺物（第18～20図、図版５）

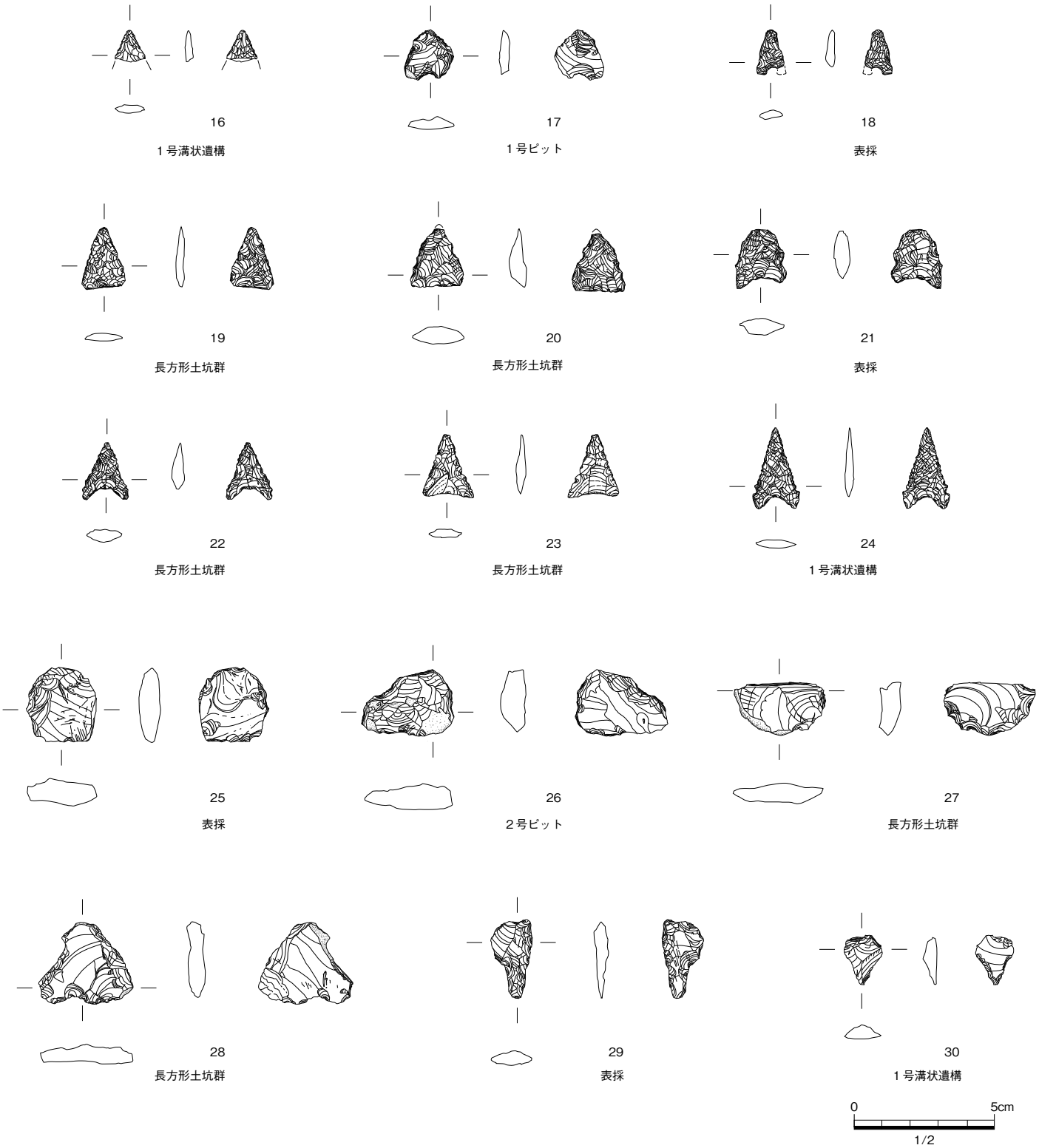
本調査区の出土遺物は弥生時代～近現代まである。このうち、主なものを取り上げる。まず、土器、土製品としては、１～８が弥生土器の破片で、前期末～中期後半までの幅があり、９は古墳時代前期前半頃の小型丸底壺の口縁部と考えられる。10は土師質の鍋の内耳、11・14は瓦質鍋の口縁部と脚部である。12は火舎の口縁部、13は土師皿の底部である。15は土製人

形の下半身から脚部で、足は一本折れている。つづいて、石器、石製品としては、16～24が石鏃、25～28が削器、29・30が石錐、31～36が石斧、37が柱状片刃石斧、38が石包丁である。39は線刻によって斜格子文などの幾何学文様が施された石製品で、片面が剥落し、体部も途中で折れている。時期は不明である。石材は16～22・24～30が黒曜石、23がサヌカイト、31・33・35・

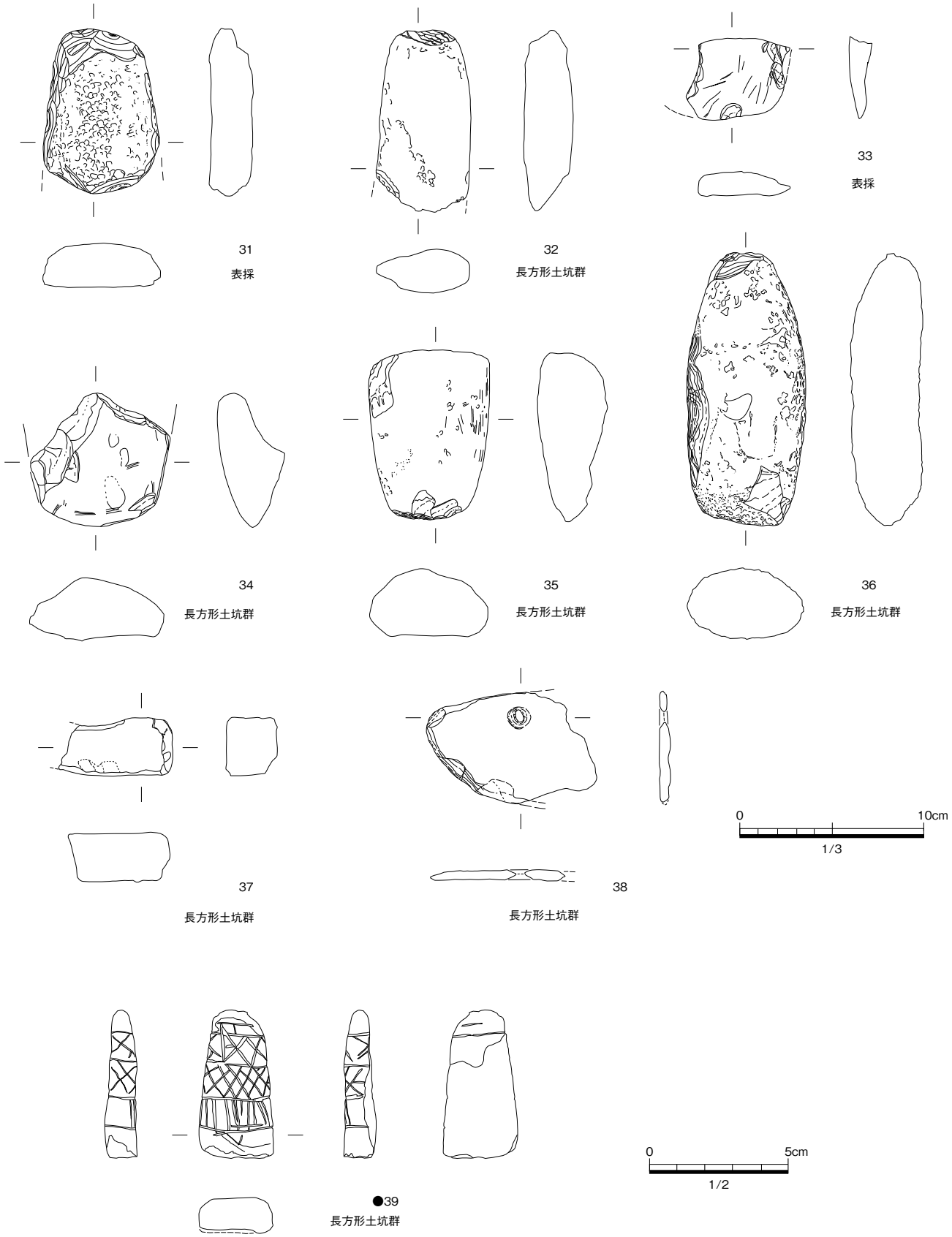


第18図　B－2地区　出土遺物実測図①（●は1／2、1／3）

37・38が頁岩、32が蛇紋岩、34・36が玄武岩、39が片岩系である。出土遺構は２・10・18・21・25・29・31・33が表採、14・16・24・30が１号溝状遺構、17が１号ピット、26が２号ピット、他は長方形土坑群である。



第19図　Ｂ－２地区　出土遺物実測図②（１／２）



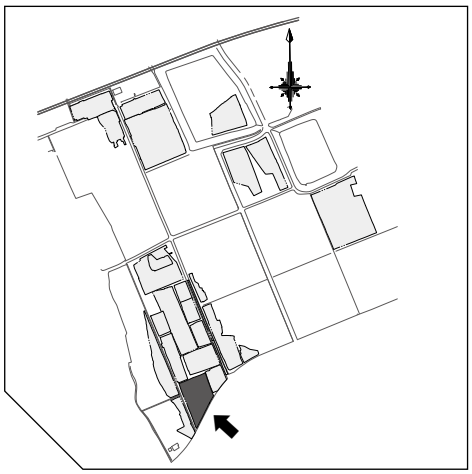
第20図　B－２地区　出土遺物実測図③（●は１／２、１／３）

４．Ｅ地区の調査

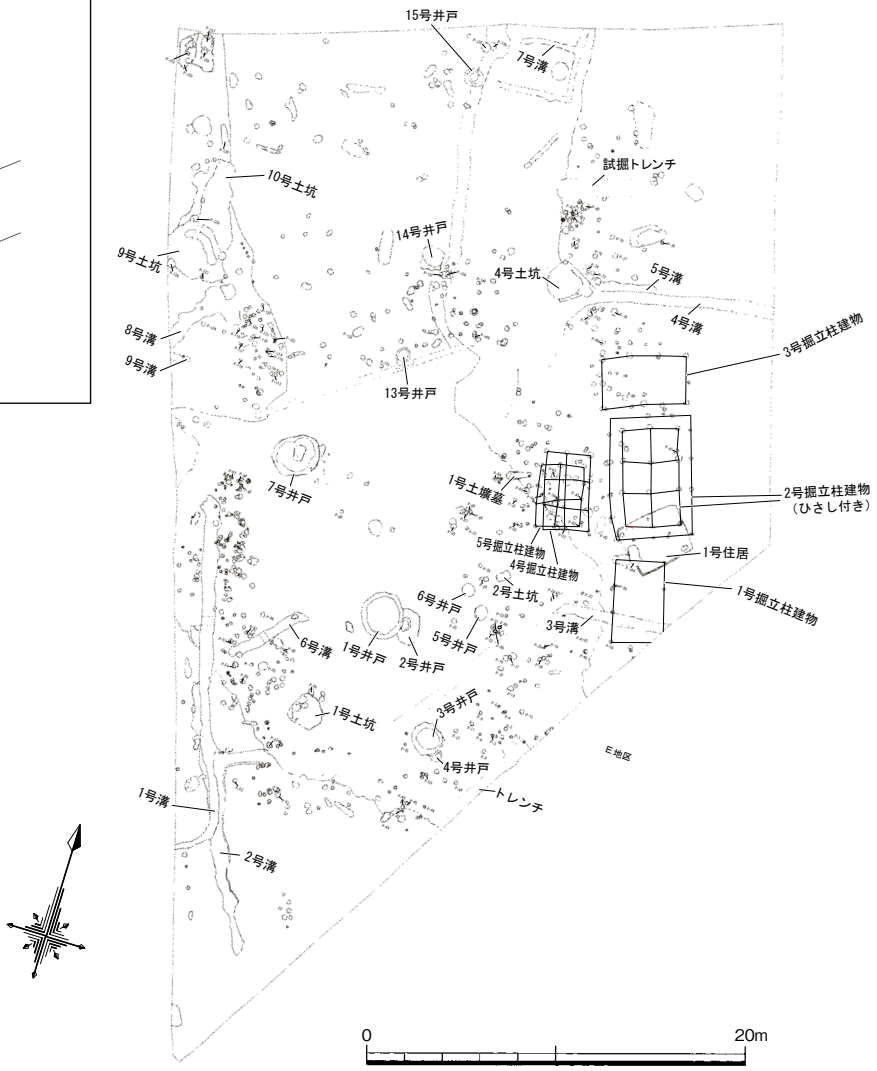
（１）調査概要（第22図、図版６、巻頭図版３）

本地点は前原東土地区画整理対象地の最も南側にあたり、糸島市社会福祉施設「あごら」に向かう市道沿いとなる。元々は水田であり、圃場整備も行われている地域である。試掘調査の結果では、東側に低丘陵、西側は谷部で、西側谷部には圃場整備の際に真砂土を使用して１ｍ以上の盛土を形成していた。低丘陵には住居や掘立柱建物、谷部には中世の包含層が確認できたため、本調査を行う旨の通知を行うとともに、農閑期に本調査を実施することで前原東土地区画整理組合と合意した。

本調査は重機による掘削を行い、耕作土と真砂土を別々に保管しつつ圃場整備前の水田直下に広がる黄褐色粘質土の検出を目指した。主な遺構としては、東側丘陵上に古墳時代の竪穴式住居、中世の掘立柱建物群、西側低地には中世の井戸、古墳時代の井戸、土坑、溝などを検出した。



第21図　Ｅ地区の位置



第22図　Ｅ地区の主な遺構実測図（１／400）

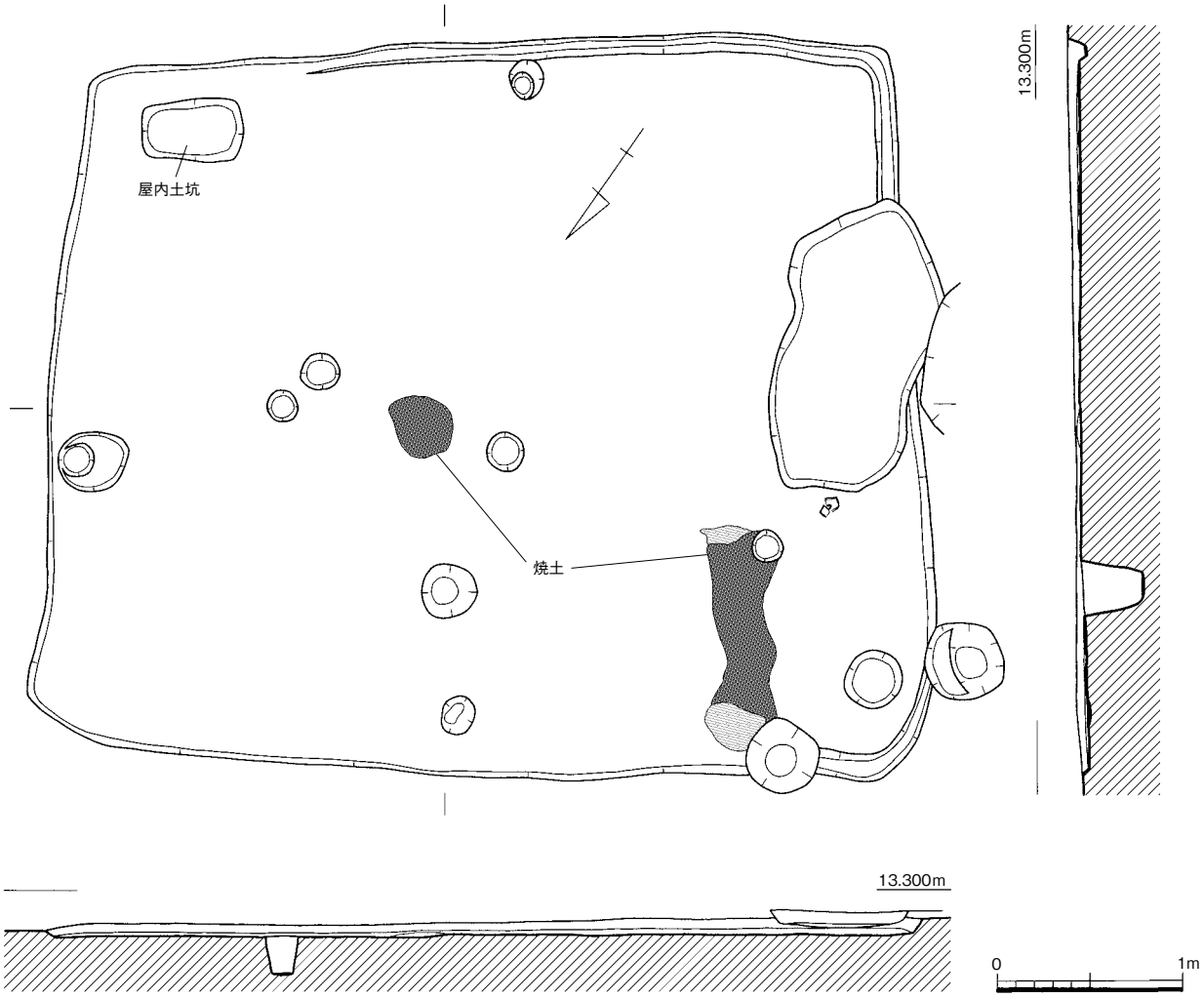
（２）遺構と遺物

①竪穴式住居

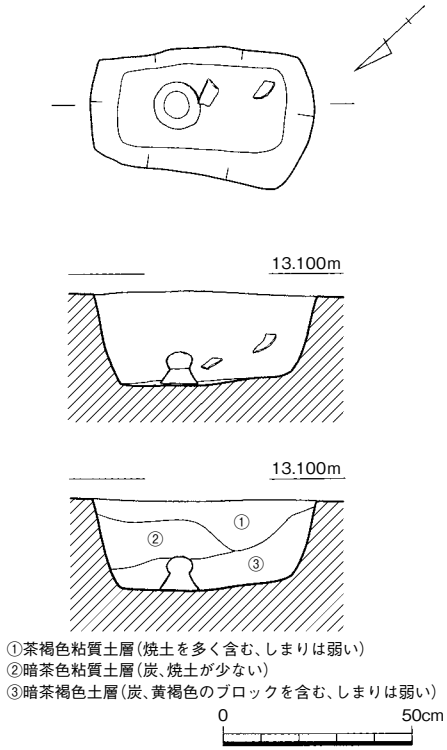
１号住居跡（第23・24図、図版６）

調査区南東側の台地上で検出した竪穴式住居で、後世の削平により深さ５㎝程度の残存であった。平面形は歪んだ長方形を呈し、南北軸で4.0ｍ、東西軸で4.7ｍを測る。この住居に伴う主な柱穴は見つけることができなかったが､南西から南にかけてと北西壁で排水溝を検出した。また、住居内部では、中央で焼土痕跡、北西側で焼土と炭の痕跡を確認したが、炉のような掘削痕跡やカマドのような構築物は存在しなかった。

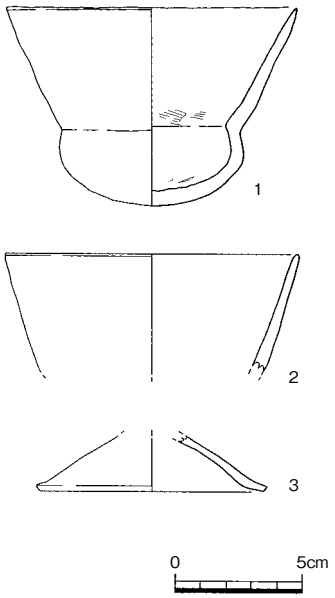
一方、住居の南東隅には屋内土坑があり、小形丸底壺を含む土器が出土した。坑内は上層で焼土が多く含まれ、下層では、炭のほかに黄褐色の地山ブロックが含まれており、意図的に埋め戻したものと考えられる。



第23図　E地区　１号住居跡平断面実測図（１／40）



第24図　E地区　屋内土坑平断面実測図（1／20）



第25図　E地区　屋内土坑出土遺物
実測図（1／3）

出土遺物（第25図、図版10）

1は小形丸底壺の完形である。小さな胴部に逆ハの字状に口縁部が長く延びる。外面は調整不明瞭であるが、口縁内面に横方向のハケメが残る。口径11.7cm、器高7.8cmを測る。2は小形丸底壺の口縁部片で、内外共に調整不明瞭である。口径11.4cm、器高4.7cmを測る。3は高杯の脚裾部片で、短脚化しているもの。脚部径9.0cmを測る。

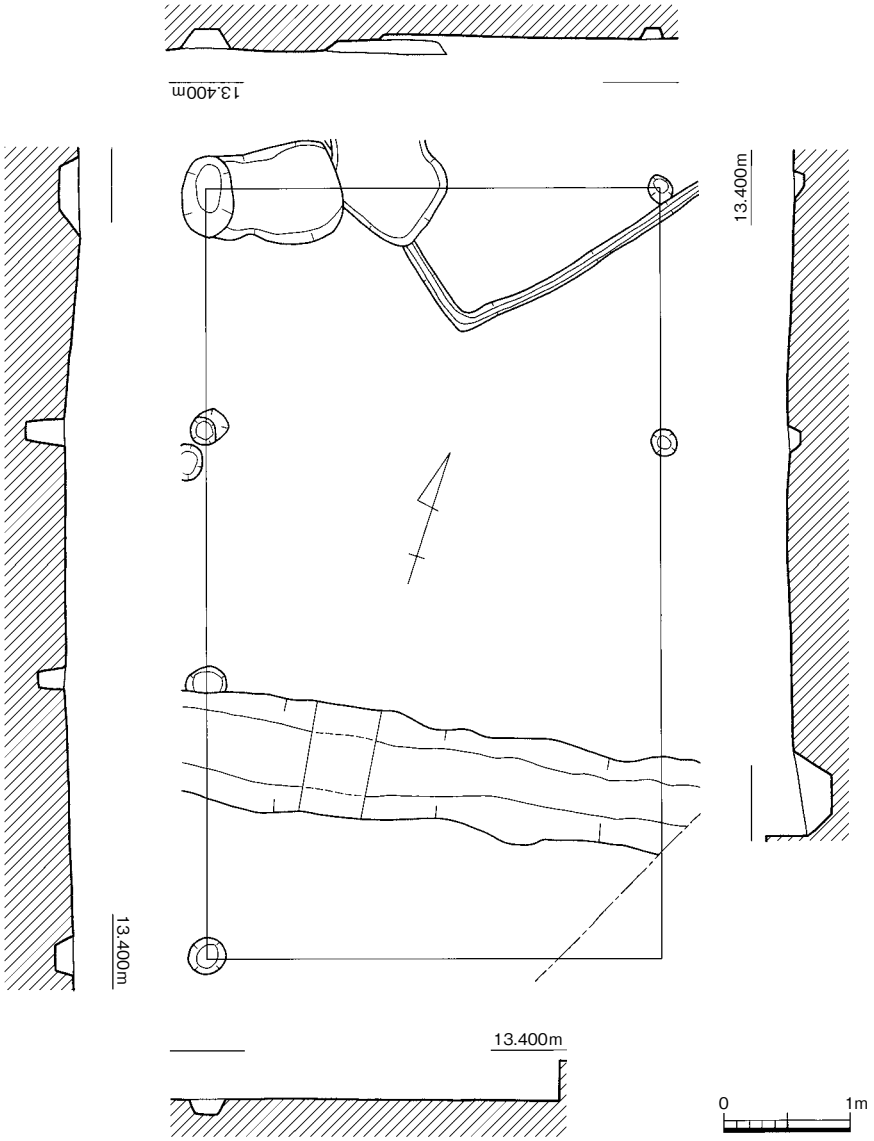
②掘立柱建物

1号掘立柱建物（第26図）

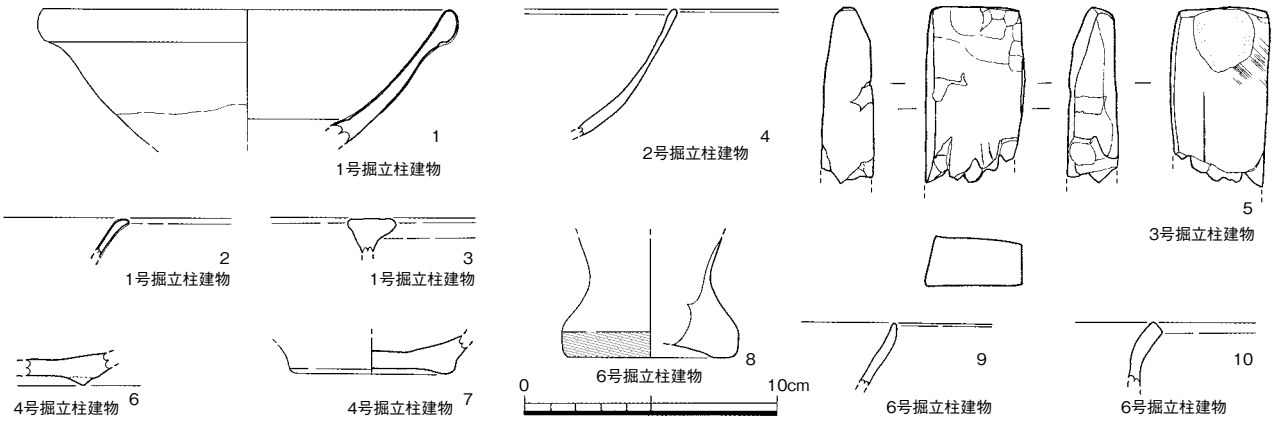
調査区南側で検出した掘立柱建物で、一部調査区外まで延びているほか、排水用溝に切られている。1×3間で、桁行き6.1m、梁行き3.6m、主軸方位N－17°－Wである。埋土は灰褐色土を主体としており、P－2、P－6からは白磁が出土している。

出土遺物（第27図、図版12）

1は玉縁をもつ白磁片で、高台を欠損している。内面胴下半に沈線があり、外面の高台近くは無釉である。2は白磁皿の口縁部片である。3は外にわずかに発達する甕の口縁部片で、混入したものであろう。



第26図　E地区　1号掘立柱建物平断面実測図（1／60）



第27図　E地区　掘立柱建物出土遺物実測図（1／3）

２号掘立柱建物（第28図、図版７）

調査区東側で検出した庇付き総柱建物で、この群の中心的な建物である。２×３間で、桁行き7.4ｍ、梁行き4.1ｍを測る。きれいな長方形ではなく、中央をはしる柱穴が側柱よりも若干南側にずれている。東西の側柱には、小さめの庇柱が対応するが、南側と北側は必ずしも対応していない。

出土遺物（第27図）

４は瓦器椀で底部を欠損する。焼きがやや甘く内外面は灰白色である。器高で5.0㎝を測る。

３号掘立柱建物（第29図、図版７）

２号掘立柱建物の北側に位置する１×３間の掘立柱建物である。２号掘立柱建物が南北を主軸としているのに対して、３号掘立柱建物は東西を主軸としている。１×３間で、桁行き6.2ｍ、梁行き3.7ｍを測る。

出土遺物（第27図）

５は砥石片で、平面形は長方形を呈し、全面を丁寧に整えている。先端部分がやや凹む。

４号掘立柱建物（第30図）

２号掘立柱建物・３号掘立柱建物の西側に位置する２×３間の総柱建物である。５号掘立柱建物と切り合い関係にあるが、柱穴の切り合いおよび出土遺物が４号掘立柱建物でしか出土していないため、時期差が判別できない。桁行き4.5ｍ、梁行き3.3ｍを測る。

出土遺物（第27図）

６は土師器椀の底部片で、全体にナデを施す。７は黒色土器で、底部のみの出土である。

５号掘立柱建物（第31図）

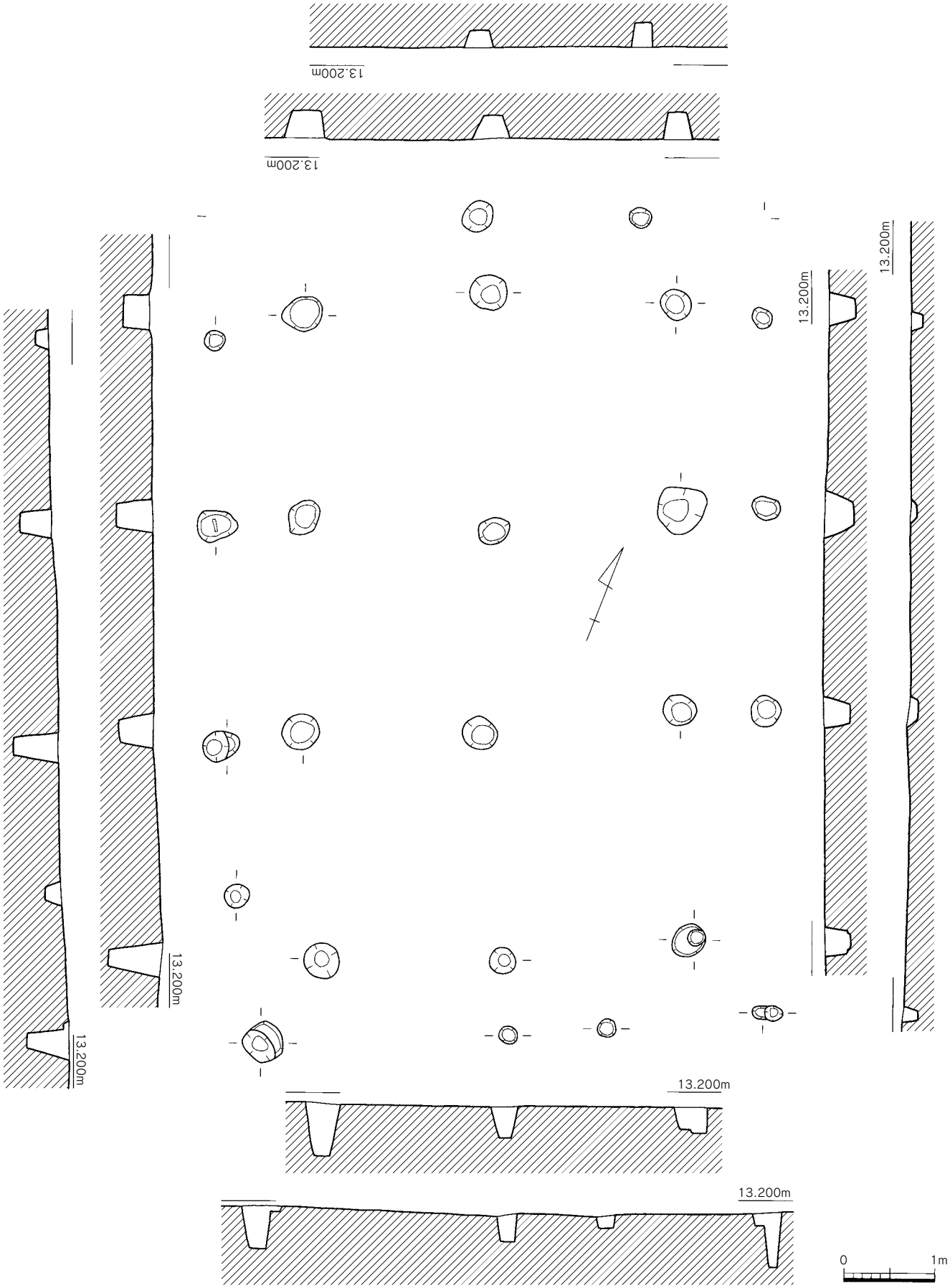
４号掘立柱建物と切り合い関係にある総柱建物であるが、南西隅の柱穴を確認することができなかった。桁行き5.7ｍ、梁行き3.3ｍを測り、出土遺物は無い。

６号掘立柱建物（第32図）

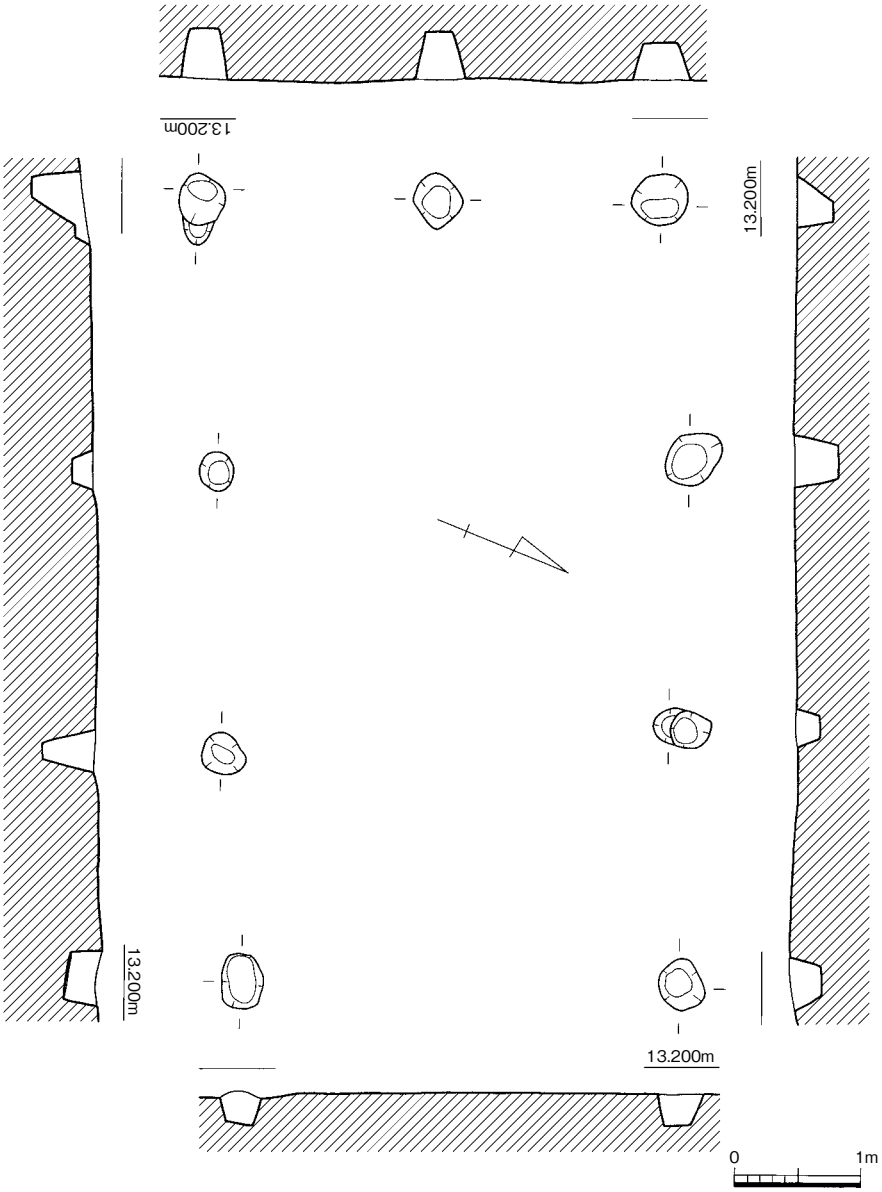
調査区東側に位置する１×１間の掘立柱建物で、柱穴の掘り方が歪な隅丸方形を呈する。桁行き3.1ｍ、梁行き1.9ｍを測り、出土遺物から弥生時代前期末～中期初頭と考えられる。

出土遺物（第27図）

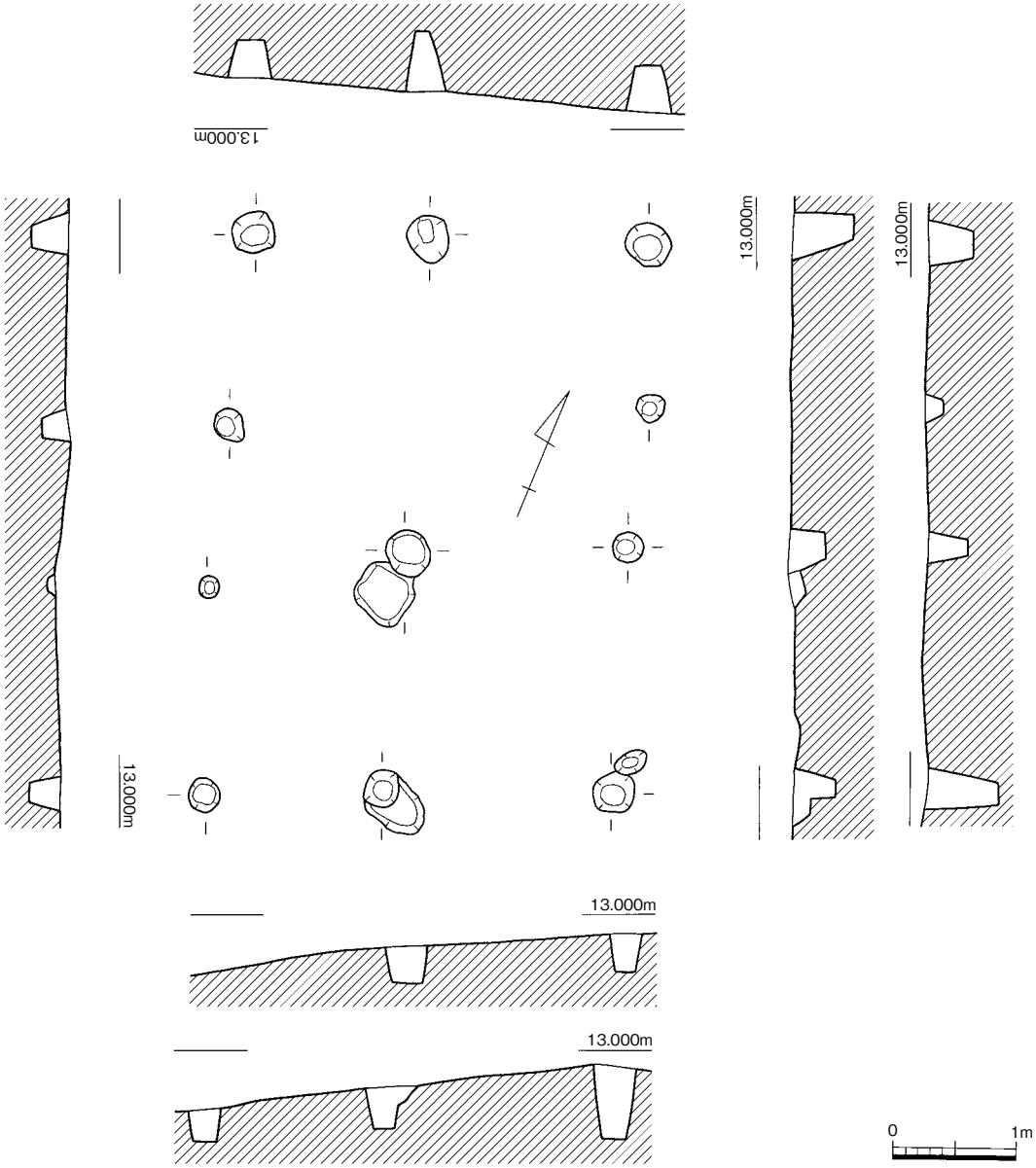
８は甕の底部片で、上げ底状になっているのが特徴的である底部外面にはススが残る。９は、鉢形土器の口縁部片で、わずかに内傾する。10は甕の口縁部片で、わずかに外傾する。残存で器高2.5cmである。



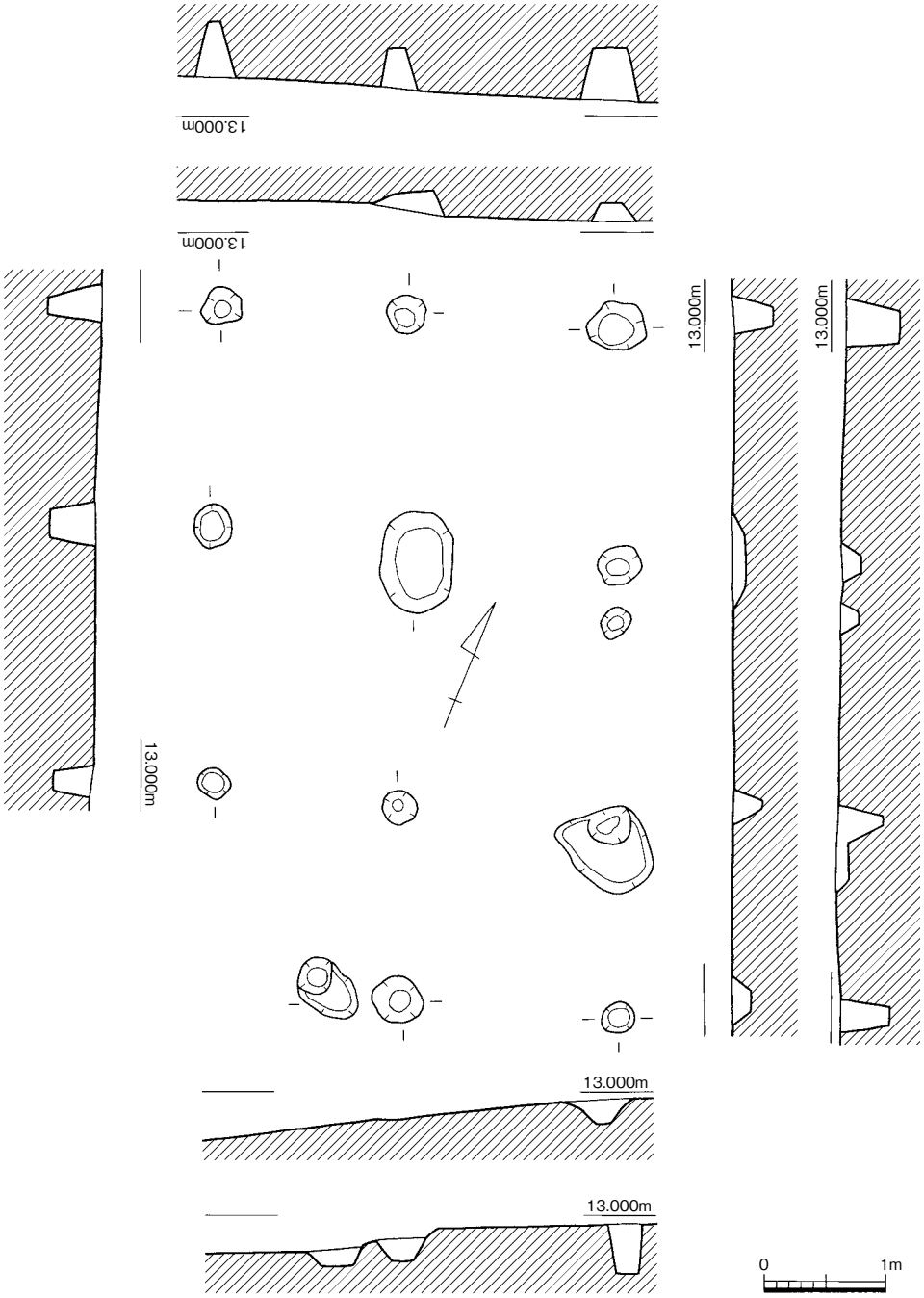
第28図　E地区　２号掘立柱建物平断面実測図（１／60）



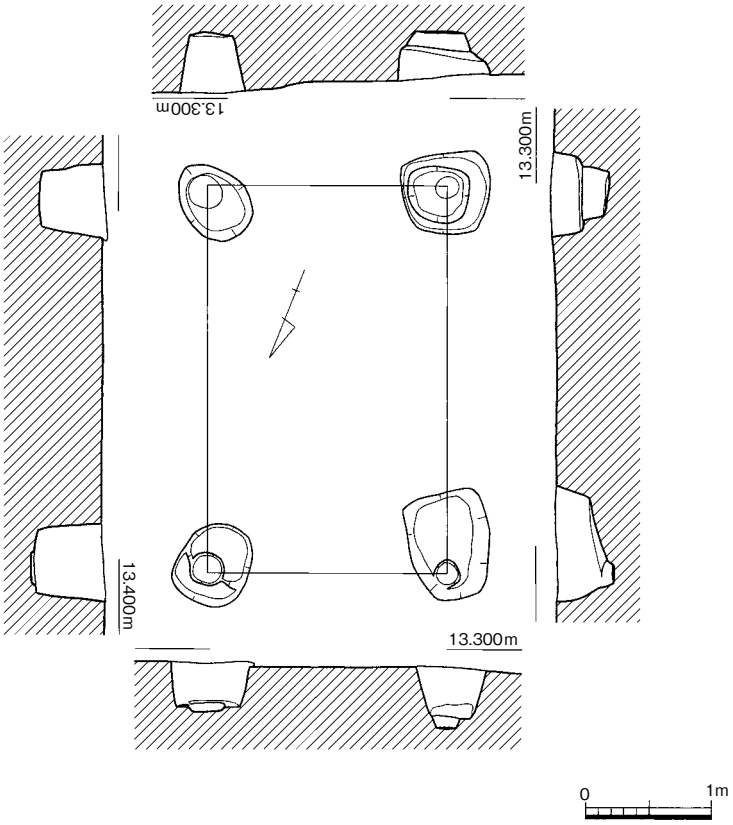
第29図　E地区　３号掘立柱建物平断面実測図（１／60）



第30図　E地区　４号掘立柱建物平断面実測図（１／60）



第31図　E地区　５号掘立柱建物平断面実測図（１／60）



第32図　E地区　６号掘立柱建物平断面実測図（１／60）

③井戸

今回の調査では、井戸が総数で15基検出されたが、井戸の底が湧水層（青灰色粘質土層）に達していること、谷部の最も低いところに意図して造られていることなどから断面形状が井戸と疑わしいものも井戸に含めた。

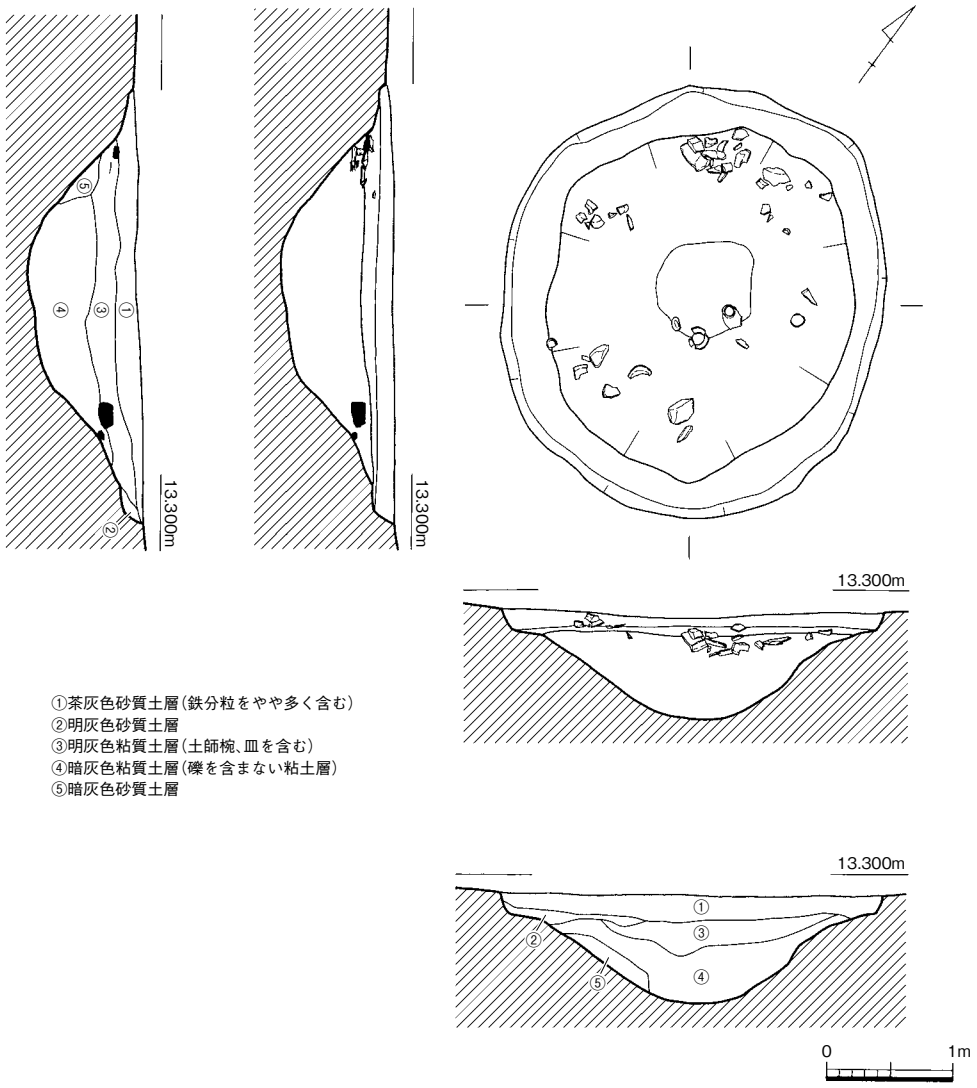
１号井戸（第33図、図版７）

調査区中央で検出された井戸で、古墳時代の黒色粘質土層を切り込んで検出された。埋土は、主に灰褐色粘質土層である。平面形は歪な楕円形で、東西3.1ｍ、南北3.4ｍ、深さ0.8mを測る。遺物の多くが上層から出土しており、土師器杯が中心である。12世紀後半～13世紀前半である。

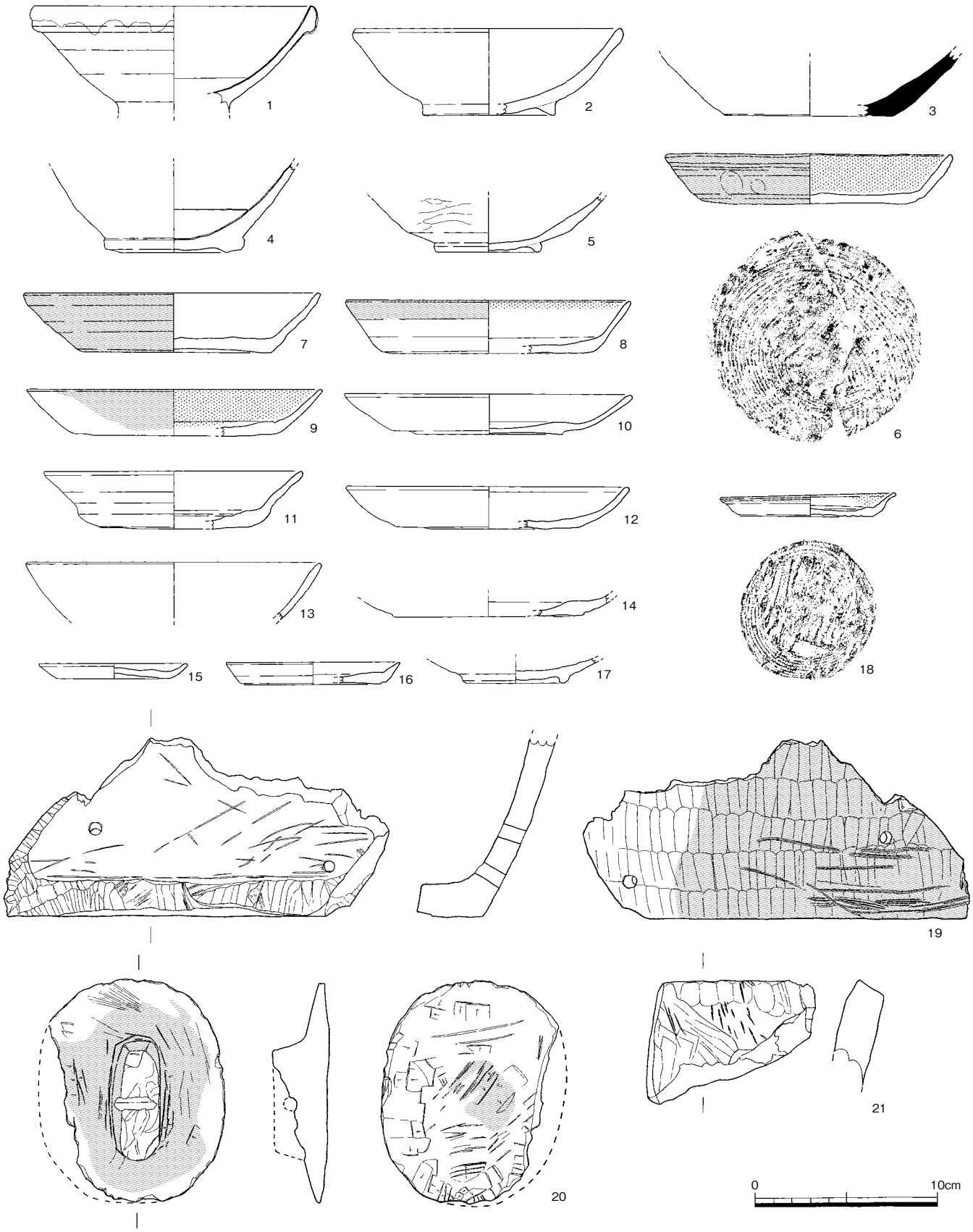
出土遺物（第34図、図版10）

１は高台を欠損する白磁椀で、玉縁をもつ。内面から口縁外面まで釉薬をかける。口径15.2cm、器高5.8cmを測る。２は土師器椀で、全体が風化しているため調整不明瞭。口径14.4cm、器高4.7cmを測る。３は須恵器の甕で、底部付近の破片である。器面調整は内面ナデ、外面は回転ナデ調整である。底部径は9.0cmを測る。４は青磁片で、内外面共に文様がない。高台の削り込みは浅く、その断面は歪な台形状となる。高台径7.4cmを測る。５は瓦器椀で口縁部を欠損する。胴部

外面は横方向のミガキであるが、内面のミガキは確認できなかった。高台径5.8cmを測る。６は土師器の杯で、内外面ともに回転ナデ調整のあと指ナデ、底部は糸切りである。内面にコゲが付着。口径15.6cm、器高2.7cmを測る。７の土師器杯は、強い回転ナデの跡が明瞭に残る。口径16.0cm、器高3.3cmを測る。８も土師器の杯で、1/3程度の残存である。丁寧な回転ナデで成形し、内外面にススとコゲが残る。口径15.4cm、器高2.9cmを測る。９の土師器杯は外面にスス、内面にコゲが残る。1/2程度の残存である。口径16.0cm、器高2.5cmを測る。10の土師器杯は、杯部と底部の境を強くナデて、しっかりとした底部を成形する。口径15.6cm、器高2.2cmを測る。11は土師器の杯で、外面に回転ナデの痕跡が強く残る。12は土師器の杯で、やや扁平化している。口径15.4cm、器高2.3cmを測る。13は土師器の椀で、口縁部のみ残存する。14も土師椀で、口縁部と底部が欠損する。15は土師皿で、回転ナデによって成形し、底部は糸切りである。底部が盛り上がりやや歪みのある土師皿である。16も土師皿で、底部は糸切り。17は高台付土師器椀で、口縁部を欠損する。



第33図　E地区　１号井戸平断面実測図（１／60）



第34図　E地区　1号井戸出土遺物実測図（1／3）

18は土師皿で、糸切りである。口径9.5㎝、器高1.3㎝を測る。19は石鍋の転用品で、胴下位～底部にかけて残存する。径８㎜程度の穿孔が２ヶ所あり、内から外への穿孔である。欠損部分には明瞭なケズリ痕跡があることから明らかな転用品である。外面はススが付着する。20も石鍋の転用品であろう。石鍋の把手を利用して、馬簾状の形態である。把手部分は穿孔が施されている。21は石鍋の口縁部分で、内面に粗いケズリが明瞭に残る。

２号井戸（第35図）

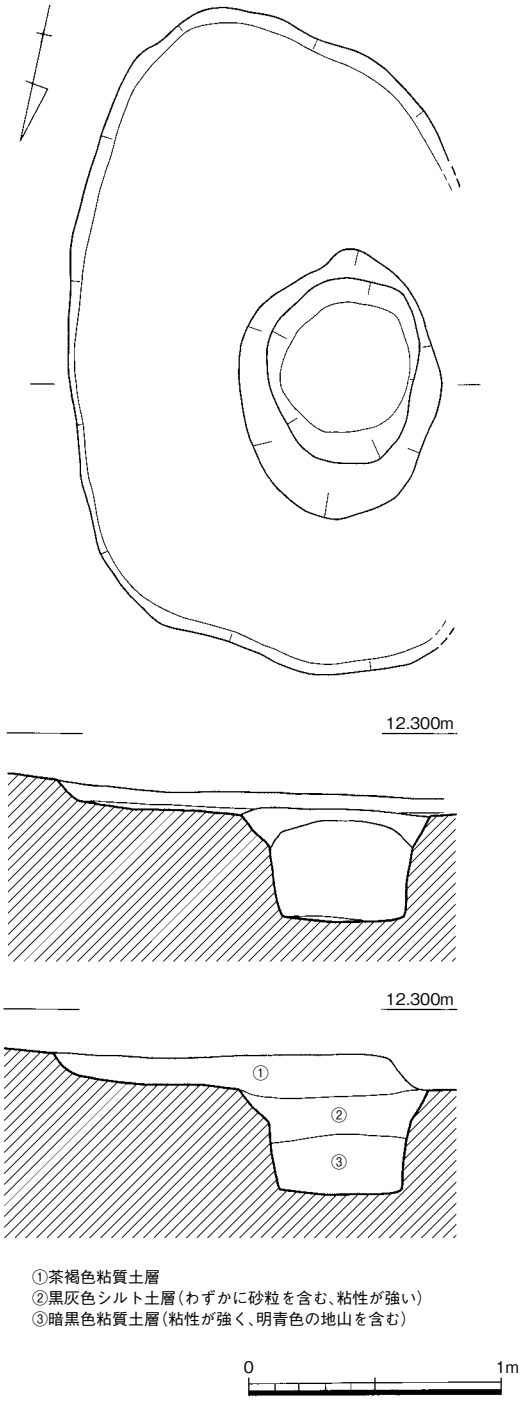
調査区中央で、１号井戸に切られる形で検出された井戸である。楕円形を呈する大きな掘り方は浅く、茶褐色粘質土層である。井戸本体は歪な楕円形で東西1.5ｍ、南北2.5ｍ、深さ0.5ｍを測る。土層は水平堆積で、２層に分かれる。掘り込みは湧水層である薄青色粘質土層を切り込んでおり、井戸と認識した。出土遺物はない。

３号井戸（第36図、図版７）

調査区南側に位置する井戸で、４号井戸を切る形で検出された。平面形は歪な楕円形を呈しており、東西2.5ｍ、南北2.2ｍ、深さ1.2ｍを測る。土層は水平堆積で、下位に行くほど暗くなる。やはり湧水層である青色粘質土層を切り込んでいる。出土遺物はない。

４号井戸（第36図、図版７）

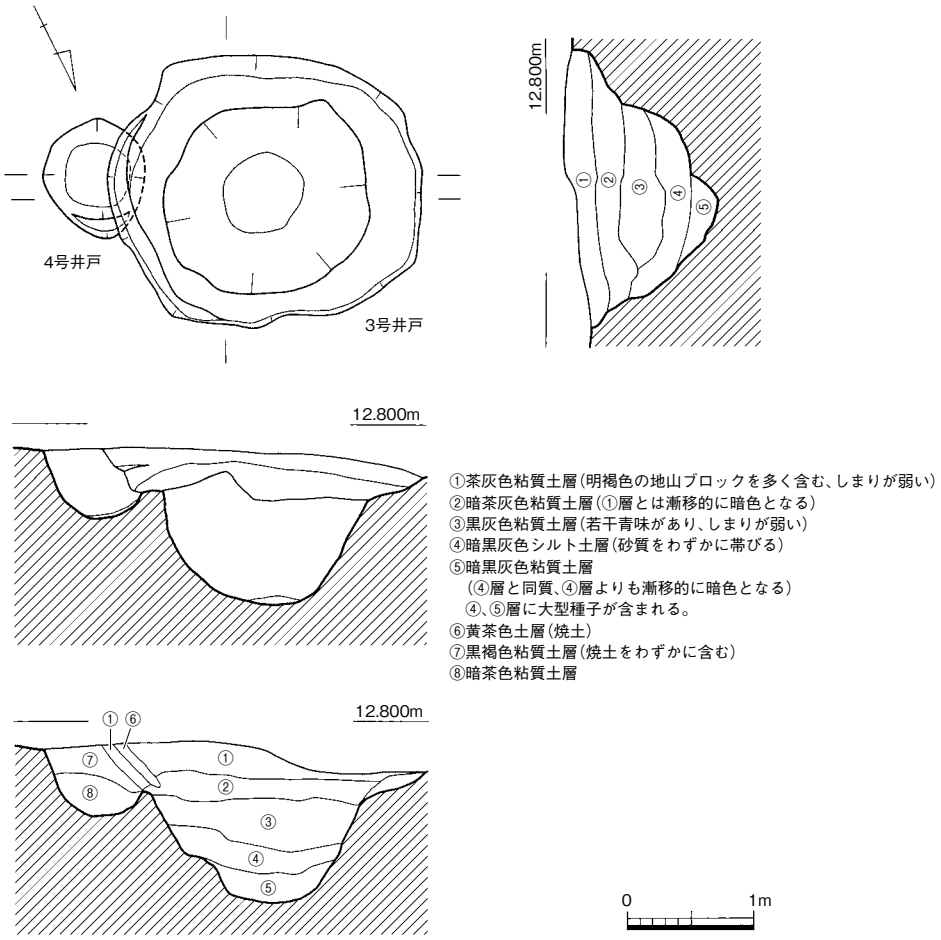
調査区南側で検出された３号井戸に切られる形で確認された遺構である。深さが湧水層に達しておらず、掘り方も小さいことから、井戸とは断定できない。東西0.8ｍ、南北0.9ｍ、深さ0.5ｍを測る。



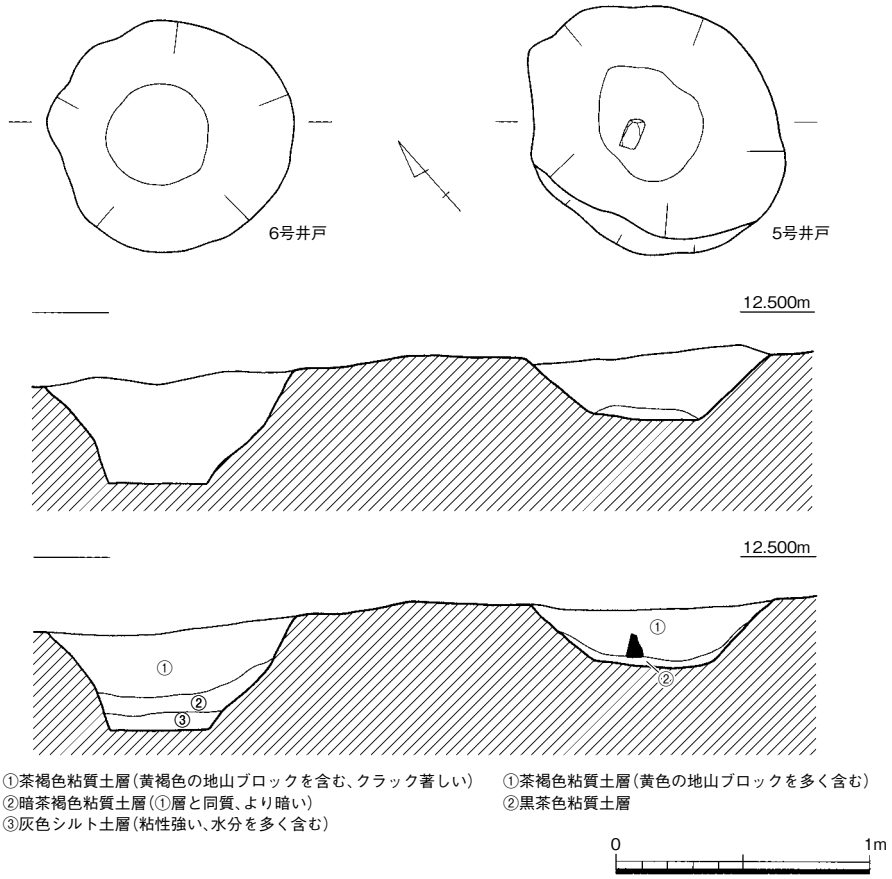
第35図　Ｅ地区　２号井戸平断面実測図（１／30）

５号井戸（第37図、図版７）

調査区中央で検出された井戸で、６号井戸に隣接する形で検出された。比較的深さが浅く、湧水層まで達していない。平面形は歪な円形で、南西側が２段の掘り込みとなっている。井戸の底付近では表面の焼けた石がある。東西0.9ｍ、南北1.1ｍ、深さ0.3ｍを測り、出土遺物はない。



第36図　E地区　３・４号井戸平断面実測図（１／60）



第37図　E地区　５・６号井戸平断面実測図（１／30）

６号井戸（第37図）

５号井戸に隣接して存在する井戸で、５号井戸より深く、土層は東側から埋没している。井戸自体は湧水層に達しており、現状でも地下水が湧き出ている。東西0.9ｍ、南北0.9ｍ、深さ0.4ｍを測り、出土遺物はない。

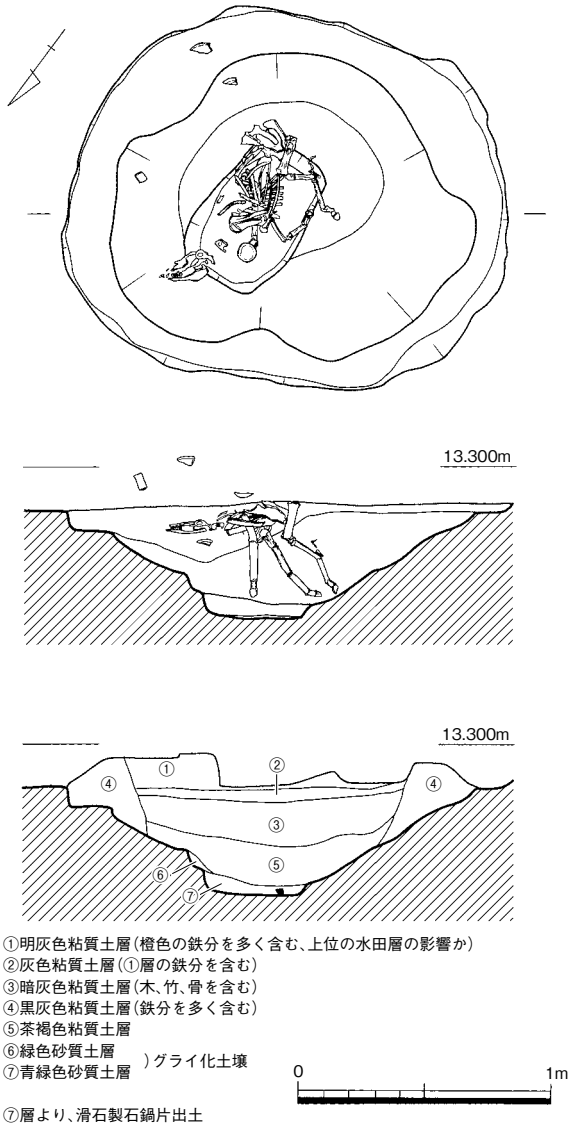
７号井戸（第38図、図版８、巻頭図版３）

調査区中央やや西よりに存在する井戸で、１号井戸と井戸の形状が酷似することから、１号井戸と近い時期のものであろう。平面形は歪な楕円形を呈しており、２段の掘り込みを形成する。東西1.7ｍ、南北1.5ｍ、深さ0.4ｍを測る。井戸の中からは馬骨が検出された。馬骨は、頭骨を北に向け、右前足は肩甲骨から上位で折れ曲がっているのに対して、左前足と後ろ足が井戸の底部付近まで延びている。頭骨や肋骨の遺存が良い割には、頸椎が１点しか出土していない点に違和感を覚える。また、馬骨の上層には人の頭骨の一部が出土しているが、馬骨との関係は不明と言わざるを得ない。

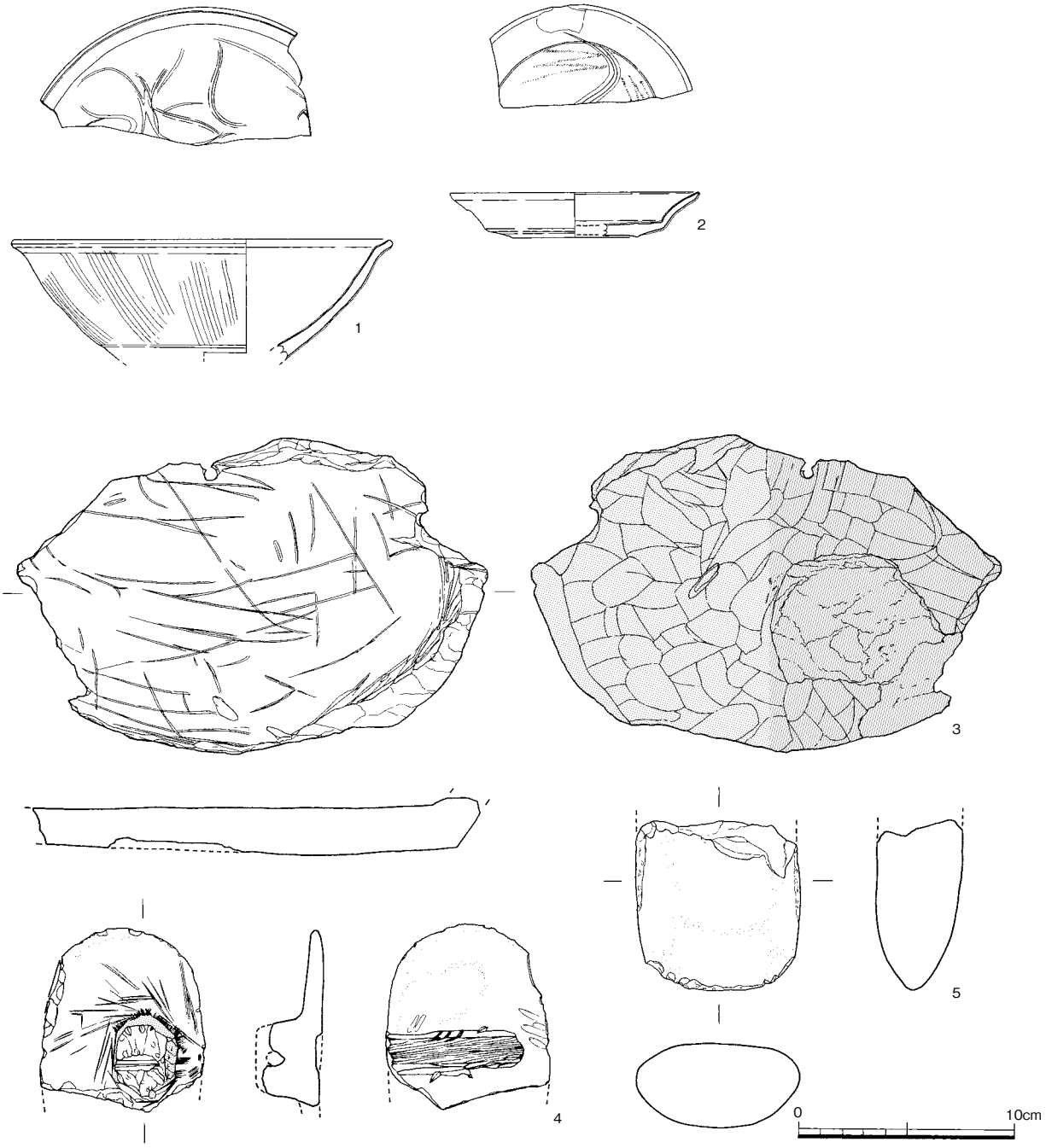
出土遺物（第39図、図版10）

１・２・４は上層より、３・５は下層からの出土である。

１は同安窯青磁の椀片で、体部外面に幅広の粗い櫛目文を縦に施し、内面に花文を施す。口縁部が外反し、高台部を欠損する。口径17.3cm、器高で5.6cmを測る。２は同安窯青磁の皿で1/2程度欠損する。内面はヘラによる花文とジグザグ状の櫛点描文を有する。口径11.5cm、器高で2.1cmを測る。１・２共に12世紀中頃～後半と考えられる。３は石鍋の転用品で、石鍋の底部部分を転用している。穿孔は２箇所で確認される。内面の明瞭なケズリ痕と外面のススは、石鍋製作時および使用時のものであろう。長さ13.0cm、幅22.0cm、厚さ2.4cm、重さ1012.7gを測る。４も石鍋の転用品である。平面を楕円状に成形しており、石鍋の把手部分を持ち手に変えている。持ち手部分には穿孔が１ヶ所あるが、上部が欠損している。外面にススが残る。長さ8.5cm、幅7.5cm、厚さ1.0cm、重さ141.9gを測る。５は磨製石斧。上部を欠損し、刃部のみが残る。刃部には使用痕跡が認められる。長さ7.8cm、幅7.6cm、厚さ3.9cm、重さ363.5gを測る。



第38図　E地区　７号井戸平断面実測図（1／30）



第39図　E地区　7号井戸出土遺物実測図（1／3）

８号井戸（第41図、図版８）

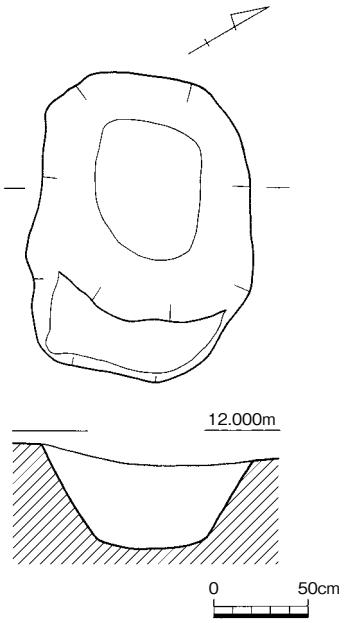
調査区中央にある小谷部の東側で検出された井戸で、平面形は歪な隅丸方形となっている。掘り方は２段掘りとなっており、深さは湧水層まで達している。井戸内からは、流木、板状木製品が出土している。東西1.6ｍ、南北1.7ｍ、深さ1.0ｍを測る。

出土遺物（第42図、図版12）

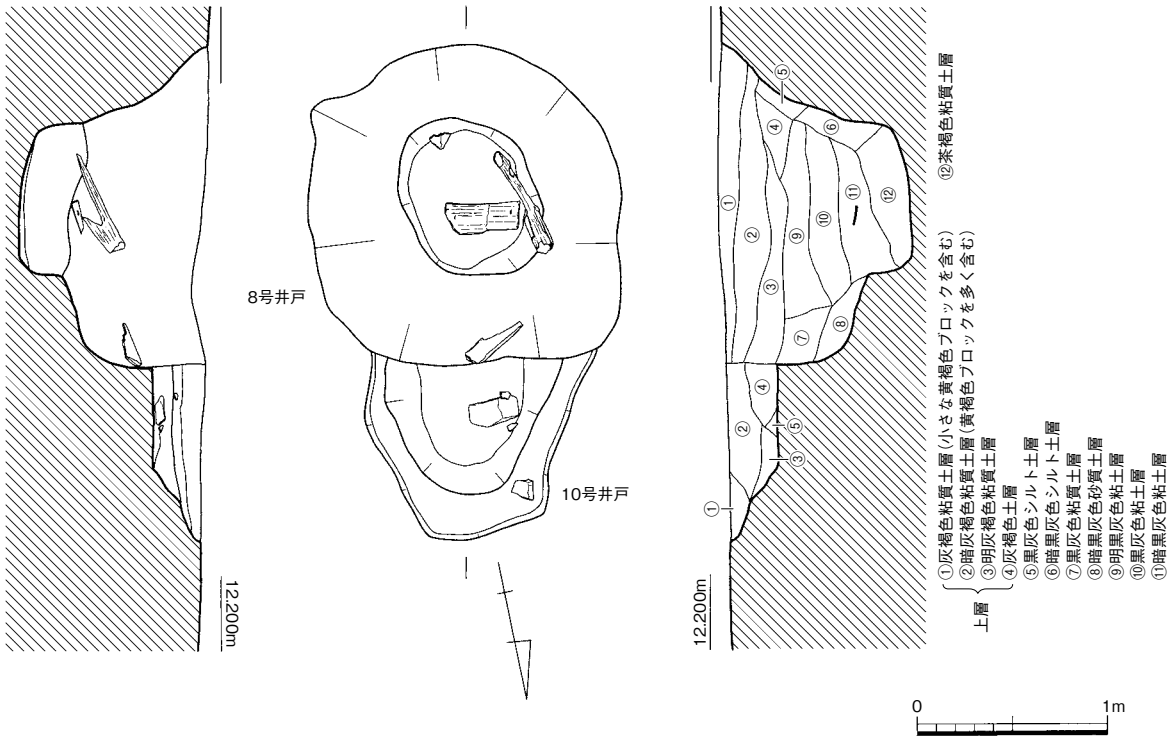
２は木製の板状製品で、長さ35.6㎝、幅21.2㎝、厚さ0.4~1.0㎝を測る。２枚の板材を上下２ヶ所で樹皮を使って綴じ合わせている。上位には２ヶ所の穿孔がある。

９号井戸（第40図）

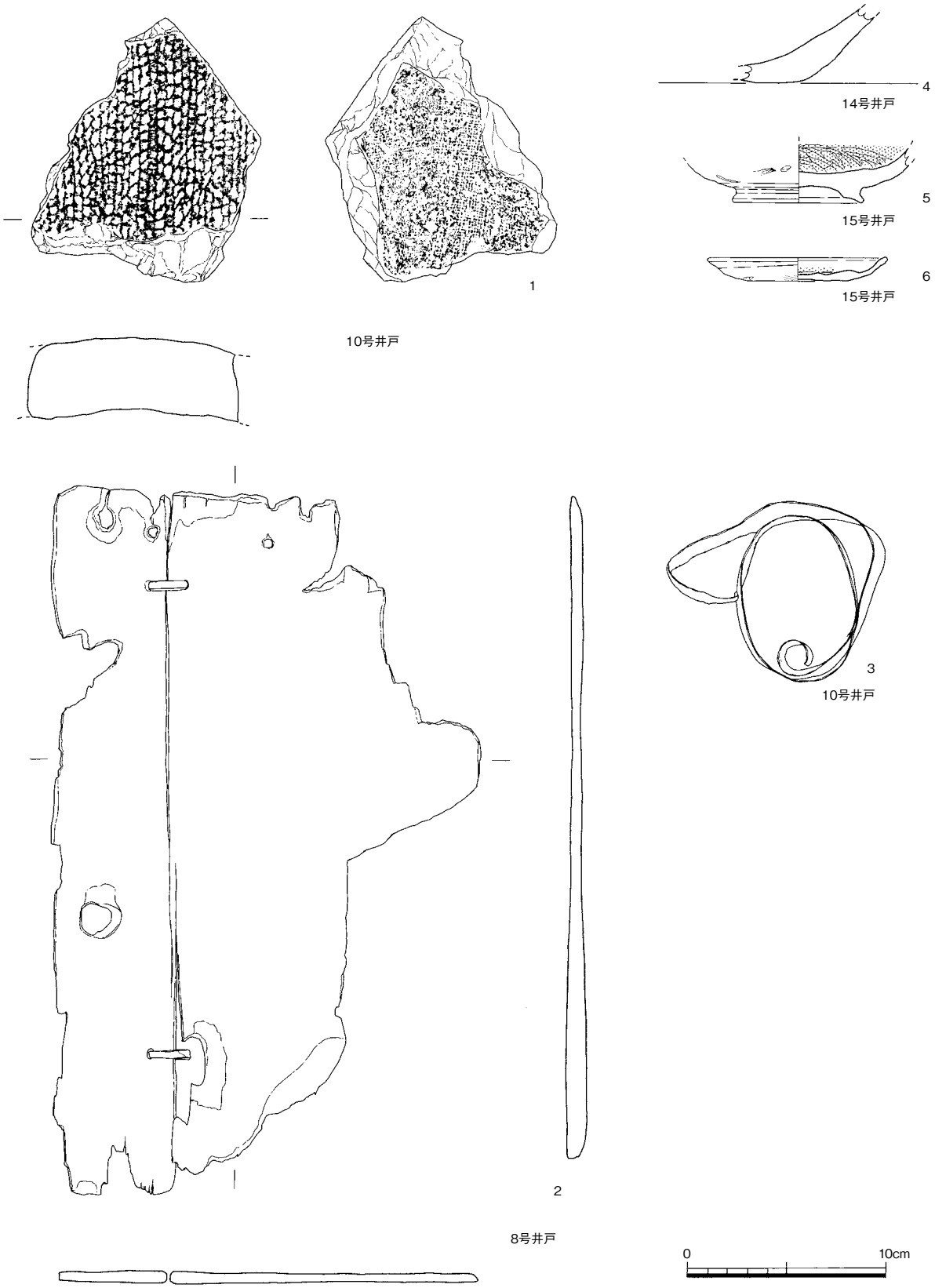
調査区西側にあり、５・７号土坑を切る形で検出された井戸である。東側に１段のテラスを設け、床面は湧水層に達している。切り合い関係から古墳時代前期後半より新しく、中世包含層を切り込んでいるため、中世以降のものと考えられる。東西1.6m、南北1.1m、深さ0.4mを測る。出土遺物はない。



第40図　E地区　９号井戸平断面実測図（1／40）



第41図　E地区　８・10号井戸平断面実測図（1／40）



第42図　E地区　8・10・14・15号井戸出土遺物実測図（1／3）

10号井戸（第41図）

８号井戸と切り合い関係にあり、８号井戸に切られる井戸である。深さが浅く、湧水層まで達していないので、井戸と断定できないが、平面状の切り合い関係は明瞭であった。掘り方は、１段のテラスを形成して、底に至るまでゆるやかな傾斜である。井戸内からは怡土城の瓦が出土していることから、８世紀中頃と考えられる。東西1.1ｍ、南北0.9ｍ、深さ0.3ｍを測る。

出土遺物（第42図、図版10・12）

１は怡土城の瓦で、一枚作りにより成形された平瓦である。凹面は布目痕、凸面は縄目タタキが明瞭である。３は桜の皮で、何か棒状のものにまきついていたものと思われる。

11号井戸（第43図、図版８）

調査区中央に位置する井戸で、小谷部の最底部で検出した。平面形は歪な円形を呈し、中段にテラスを持つ。土層は水平堆積で、下位に行くほど暗色が強まる傾向にある。深さは湧水層（青灰色粘質土層）まで達しており、現在でも激しく湧水している。東西1.1ｍ、南北1.1ｍ、深さ0.6ｍを測る。

12号井戸（第44図、図版８）

調査区南西側で検出された井戸で、小谷部の東西傾斜部分に位置する。平面形は歪な円形で２段掘りをしている。土層は基本的には水平堆積であるが、東側からの流土で埋没している。これは東から西に向けて下る傾斜上に立地しているためと考えられる。東西0.9ｍ、南北0.9ｍ、深さ0.5ｍを測る。

13号井戸（第45図、図版８）

調査区北西側で検出された井戸である。平面形は歪な楕円形を呈し、南側に１段のテラスを設ける。他の井戸と比べて比較的浅く感じられるが、井戸の底で湧水層に達している。東西1.0ｍ、南北1.3ｍ、深さ0.3ｍを測る。

14号井戸（第46図、図版９）

調査区北西側に位置する井戸であるが、深さが約30㎝と浅く、湧水層にも達していないため、井戸とは断定しがたい。平面形は、南側に長方形状の１段のテラスがあり、それに繋がる形で歪な楕円形の土坑がある。土層は西側からの堆積で埋没しており、これも谷部の傾斜に沿ったものである。東西1.5ｍ、南北1.8ｍ、深さ0.3ｍを測る。井戸内からは、甕の底部片が出土している。

出土遺物（第42図）

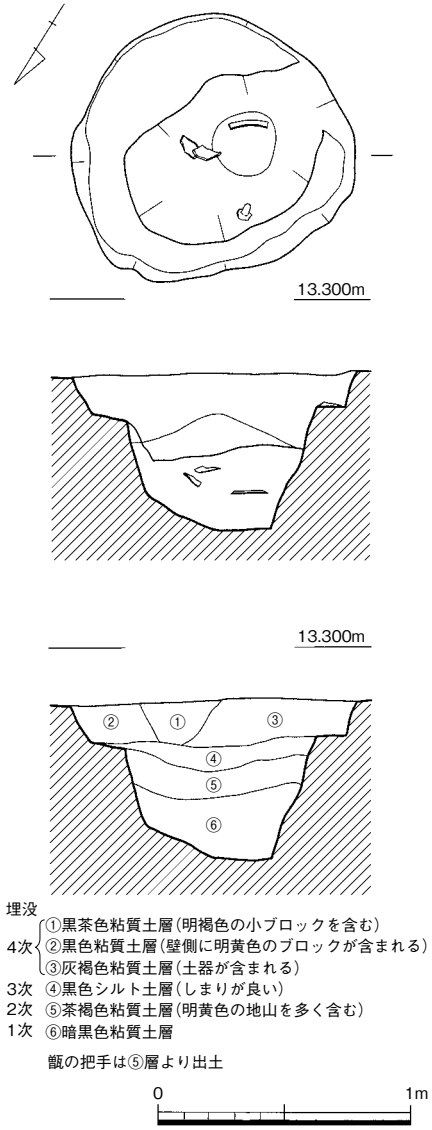
４は甕の底部片である。内外面は調整不明瞭であるが、平底であり、弥生時代中期のものか。

15号井戸（第48図、図版９）

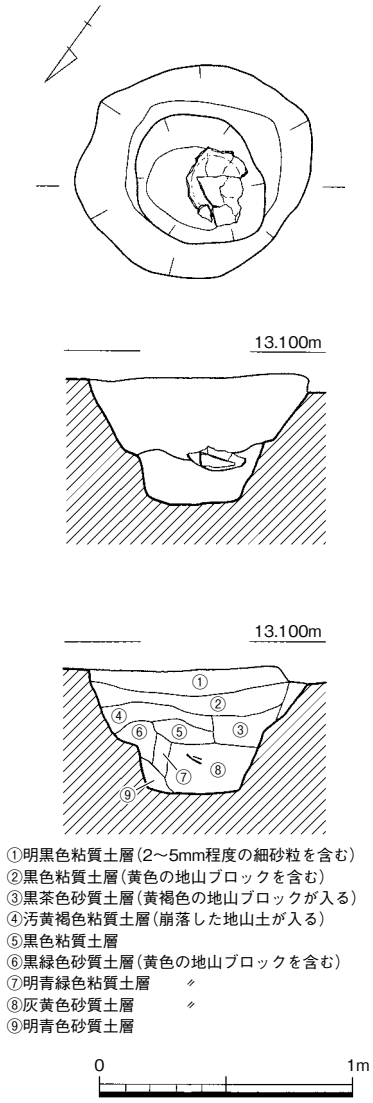
調査区北西側に位置する井戸である。平面形は歪な円形で、断面が急傾斜な掘り込みから下位で緩やかな傾斜へと変わり、井戸底は平坦である。深さは湧水層まで達しており、今もなお湧水が激しい。土層は東西両側からの埋没であり、下位に行くほど暗色が強くなる。東西1.4ｍ、南北1.3ｍ、深さ0.9ｍを測り、井戸内からは土師椀、土師皿が出土している。

出土遺物（第42図）

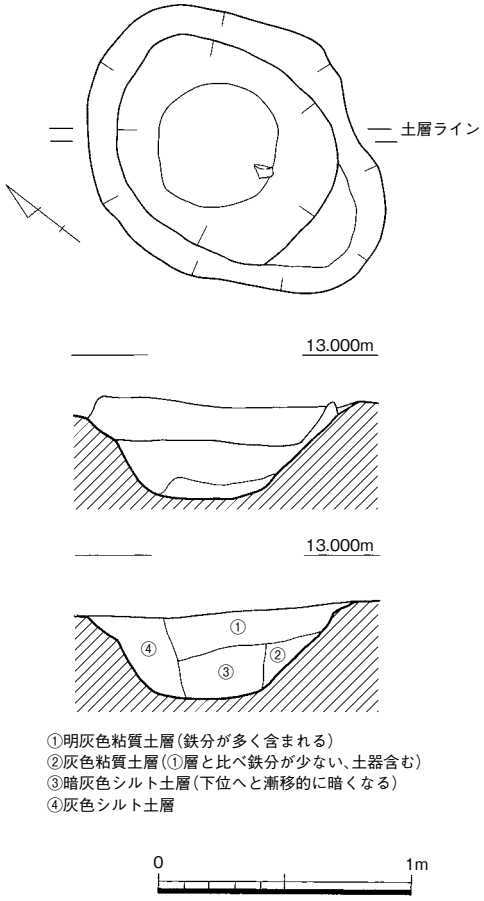
５は内面に黒色磨研を施す高台付椀で、口縁部～体部の一部を欠損する。高台径6.3㎝、器高2.8㎝を測る。６は土師皿で、体部は回転ナデ調整、切り離しは糸切りである。口径9.0㎝、器高1.2㎝を測る。



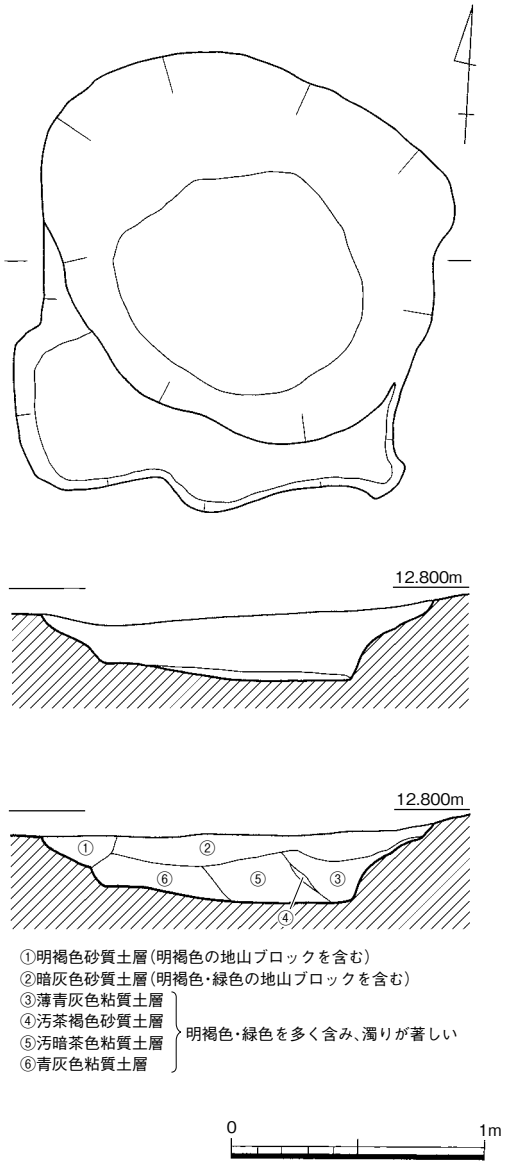
第43図　E地区　11号井戸平断面実測図（1／30）



第44図　E地区　12号井戸平断面実測図（1／30）



第45図　E地区　13号井戸平断面実測図（1／30）



第46図　E地区　14号井戸平断面実測図（1／30）

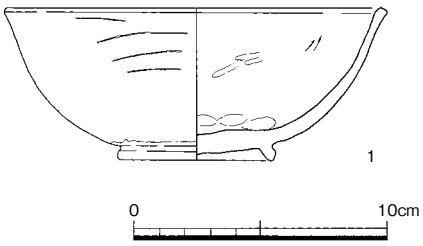
④土坑墓

１号土坑墓（第49図、図版７）

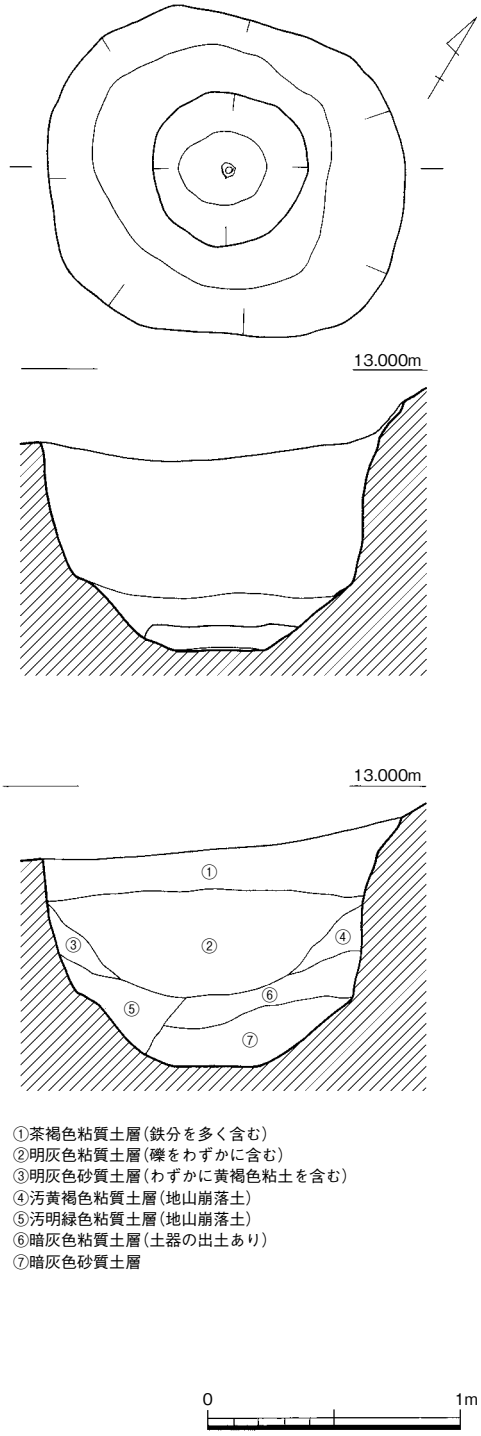
調査区東側に位置する土坑墓で、黒色粘質土層（中世包含層）を切り込んで造成されていた。土坑墓の埋土も黒色であったため、掘り方のラインが明瞭ではなく、黒色粘質土層とで、土坑墓の存在が明らかとなった。掘り方は１次墓坑の東側を掘り飛ばしてしまったが、長さ（残存）1.8ｍ、幅0.6mを測る。２次墓坑は、長さ1.6ｍ、幅0.4ｍを測り、歪な隅丸長方形である。瓦器椀は土坑墓の東側で高台を上に出土している。底は東側が高く、西に向かって低くなっている。

出土遺物（第47図、図版10）

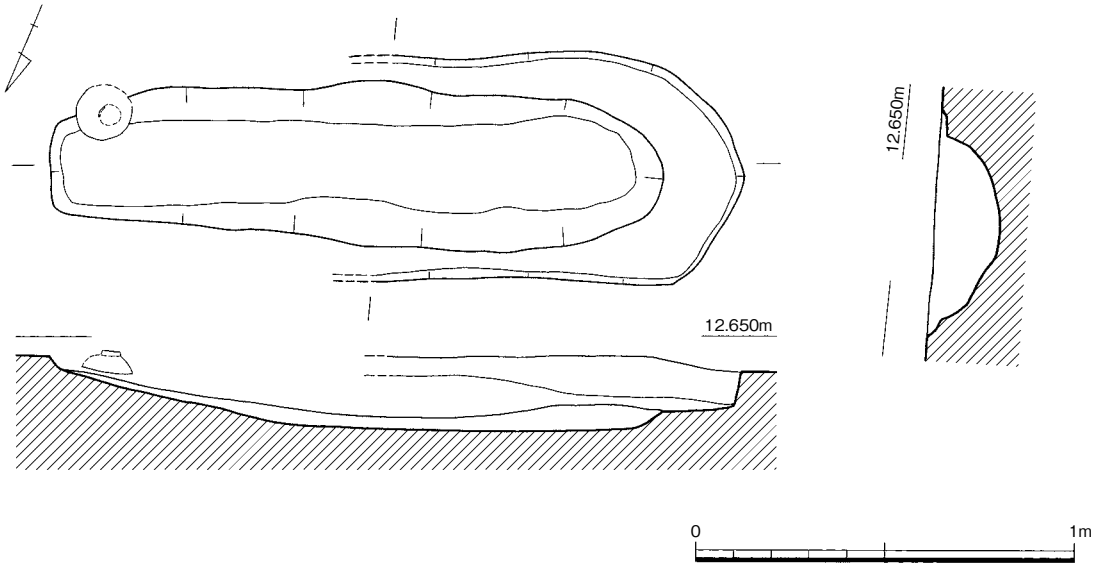
１は瓦器椀の完形品である。内面のミガキ調整は不明瞭で、わずかにしか観察できないが､内面底部は指オサエが明瞭である。体部外面及び高台部分は接続痕がある。口径15.0㎝、器高5.9㎝、高台径6.2㎝を測る。



第47図　Ｅ地区　１号土坑墓出土遺物実測図（1／３）



第48図　Ｅ地区　15号井戸平断面実測図（1／30）

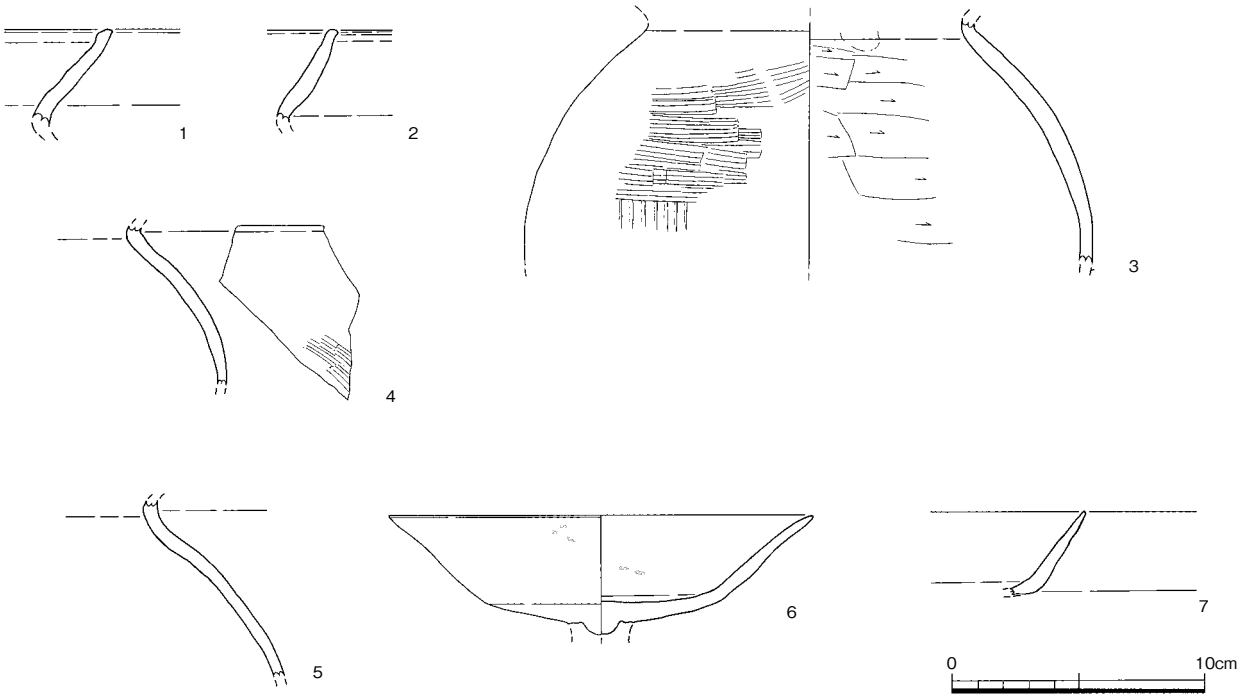


第49図　E地区　1号土坑墓平断面実測図（1／20）

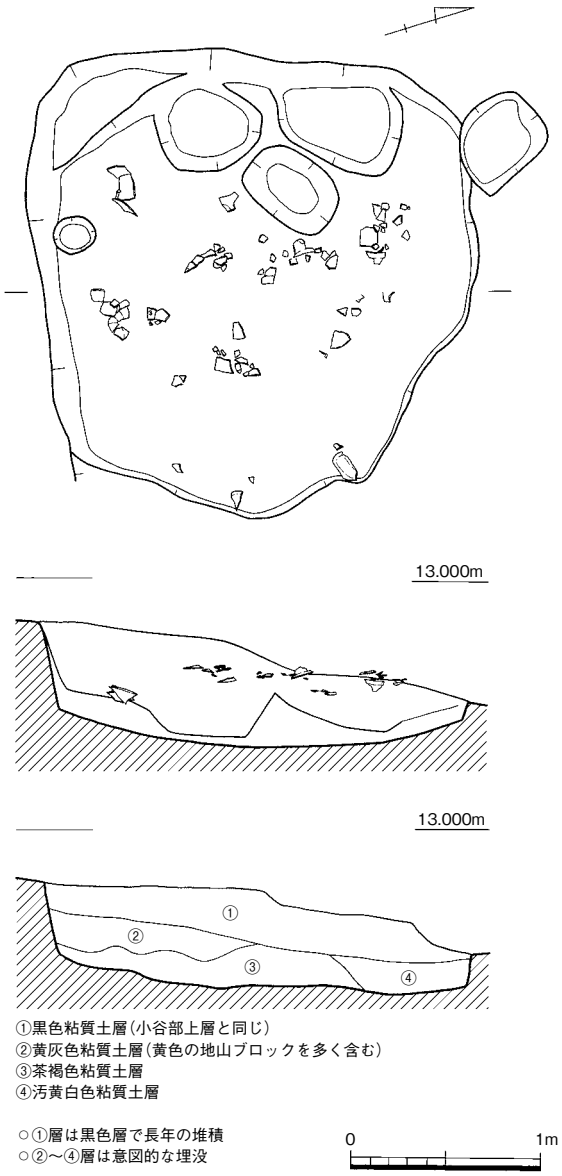
⑤土坑

1号土坑（第51図、図版9）

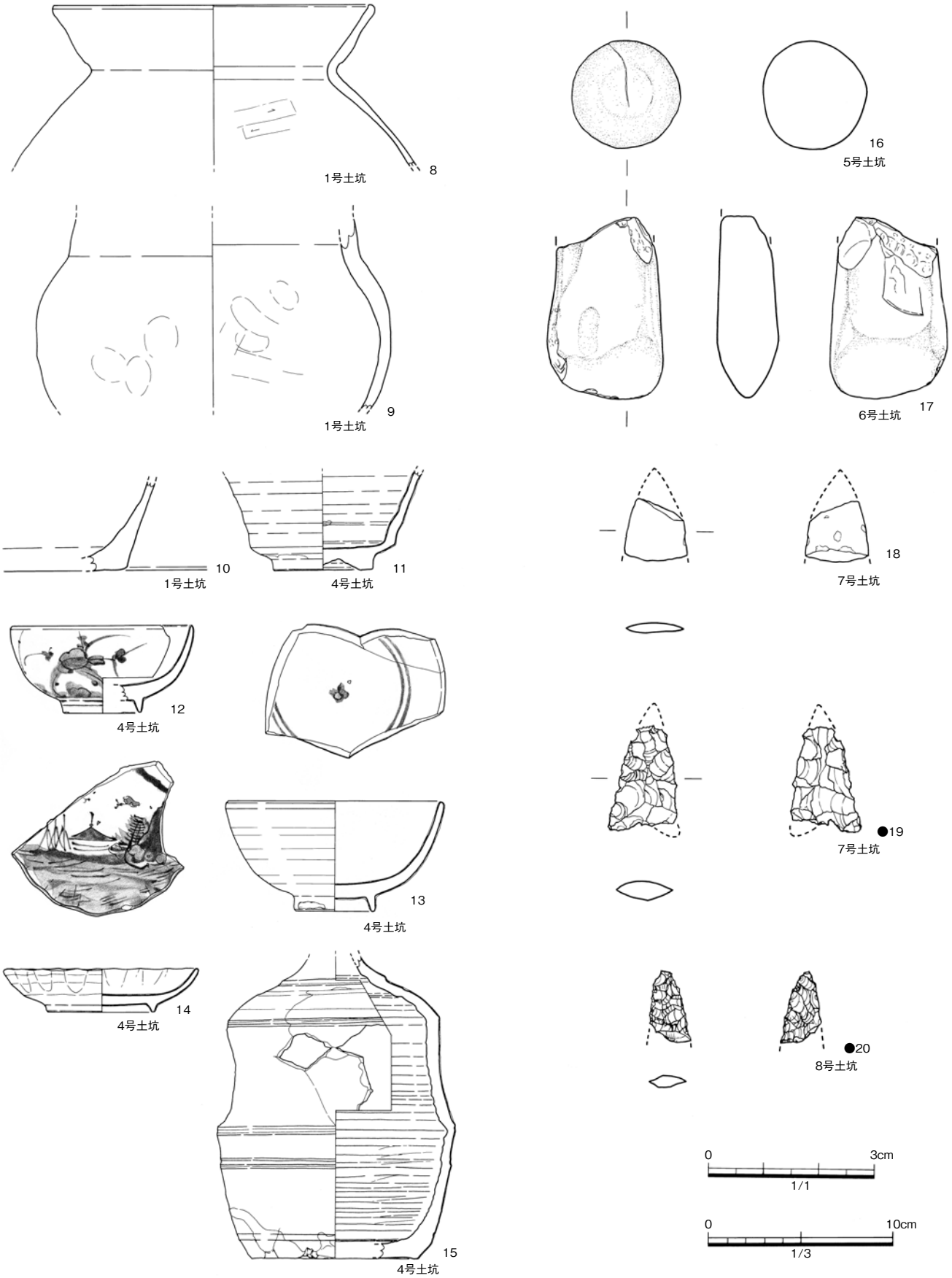
調査区南西側に位置する土坑で、中央を走る谷部の傾斜部分を掘削している。平面形は歪な隅丸方形で、北西隅に1段のテラスを設ける。床面は凸凹しており、粘土採掘坑であろうか。東西2.5ｍ、南北2.4ｍ、深さ0.5ｍを測り、土坑内からは甕、高杯が出土し、古墳前期後半に属する。



第50図　E地区　1号土坑出土遺物実測図（1／3）



第51図　E地区　1号土坑平断面実測図（1／40）



第52図　E地区　1・4・5・6・7・8号土坑出土遺物実測図（●は1／1、1／3）

出土遺物（第50・52図、図版10）

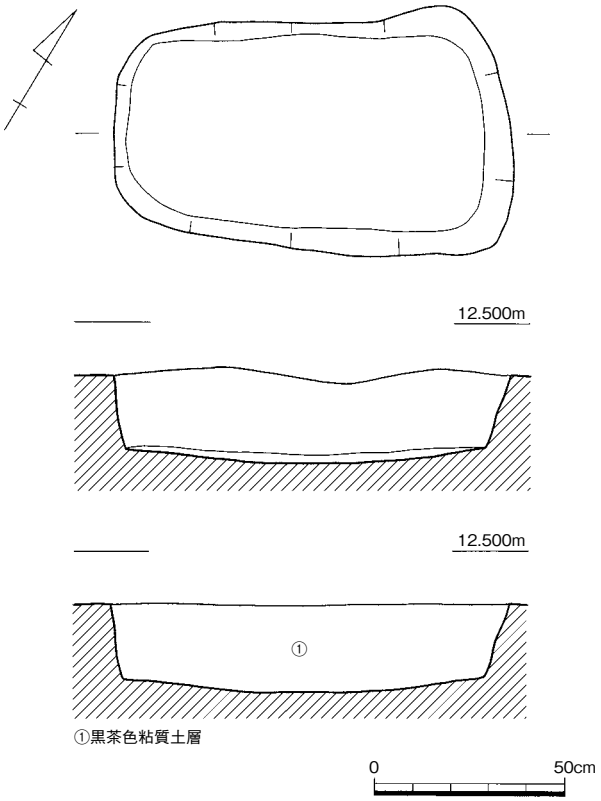
１は甕の口縁部片で、口縁端部を内方につまみ出す。２も甕の口縁部片で口縁端部を外方につまみ出す。３は甕の胴上部片である。外面肩部に横方向のハケメ､内面は横方向のケズリを行う。４は甕の胴上部片である。内面はかなり風化していて、ケズリ調整が観察できない。５も同じく口縁を欠損する甕の胴上部片である。６は高杯で、脚部を欠損し、丹が内外面にわずかに残る。柳田編年Ⅲａ期である。７も高杯の杯部片で内外面ナデ調整を施す。８は甕で、口縁端部を内方につまみ出す。全体に風化が著しく調整不明瞭であるが、内面のヘラケズリをわずかに確認できる。９は壺で口縁部と底部を欠損する。10は甕の底部片で平底である。

２号土坑（第53図）

調査区東側で検出した土坑で、５，６号井戸の北側に位置する。平面形は隅丸長方形で東西1.1ｍ、南北0.6ｍ、深さ0.2ｍを測る。遺物の出土はない。

４号土坑（第54図、図版９）

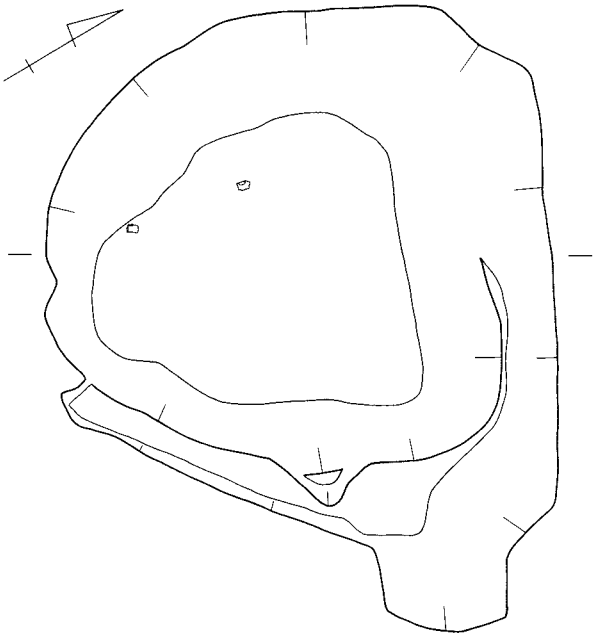
調査区の北側に位置し、４号溝に接続する。平面形は東側が広がり、東側から南東側に向けて１段のテラスを設ける。土層は北側からの流土によって埋没している。４号土坑も４号溝と同じく江戸時代に入るもので、１度この土坑で温めた水を水田に採水していたものと考えられる。東西3.0m、南北2.8m、深さ0.5mを測る。

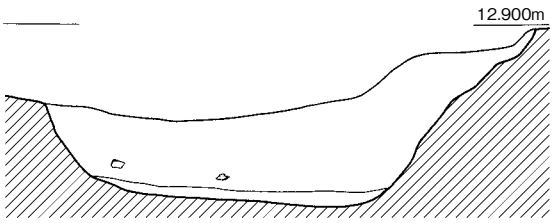


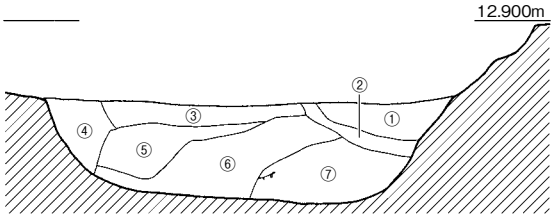
第53図　Ｅ地区　２号土坑平断面実測図（1／20）

出土遺物（第52・55図）

11は磁器椀で口縁部を欠損する。12は磁器椀で底部を欠損する。外面に草花文を描く。13は磁器椀で、内面に２条の円圏と花文を描く。14は口縁が波状を呈する磁器皿で、内面に海や建物を描く。15は陶器瓶で、口縁部と底部を欠損する。外面は藁灰釉を掛ける。21は磁器椀で、高台部分を欠損する。外面は梅を描いたものか。口径10.0cm、器高3.7cmを測る。22は波状の口縁をもつ磁器椀で口縁端部を外方に曲げている。口径12.0cm、器高4.0cmを測る。23は口縁と底部を欠損する磁器椀で、蛇の目釉剥ぎを行う。高台径5.0cmを測る。





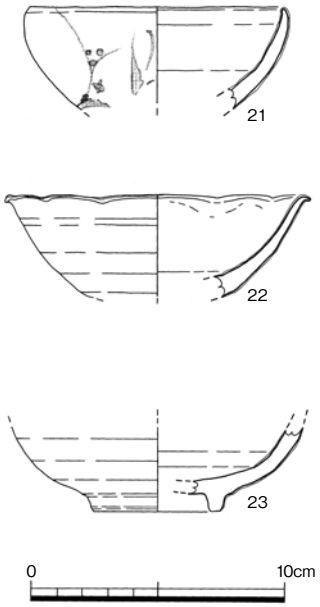


①茶灰色粘質土層（鉄分を多く含み、しまりが弱い）
②明灰色粘質土層（鉄分の沈着が著しい）
③茶灰色粘土層（礫が含まれ、しまりが弱い）
④灰色粘質土層（炭をやや多く含む、木坑を含む）
⑤暗灰色粘質土層（炭や鉄分をやや多く含む）
⑥暗灰色粘土層（鉄分が少なく、磁器が含まれる）
⑦暗灰色粘土層（⑥層と同じであるが、より鉄分の含有が少ない）

○⑥、⑦層に江戸期の磁器を含む。最下層に砂の堆積なく水の流れなし
○湧水層までの掘削なし、土坑か？

0　1m

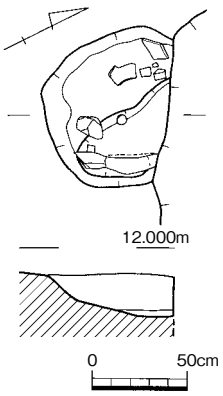
第54図　E地区　4号土坑平断面実測図（1／40）



第55図　E地区　4号土坑出土遺物実測図（1／3）

５号土坑（第56図）

９号井戸と切り合い関係にあり、９号井戸を切る形で検出された土坑である。平面形は歪な円形で、東側に１段のテラスを形成し、２段掘りとなっている。東西0.8ｍ、南北0.7ｍ、深さ0.2ｍを測る。出土遺物から古墳時代前期後半と考えられる。



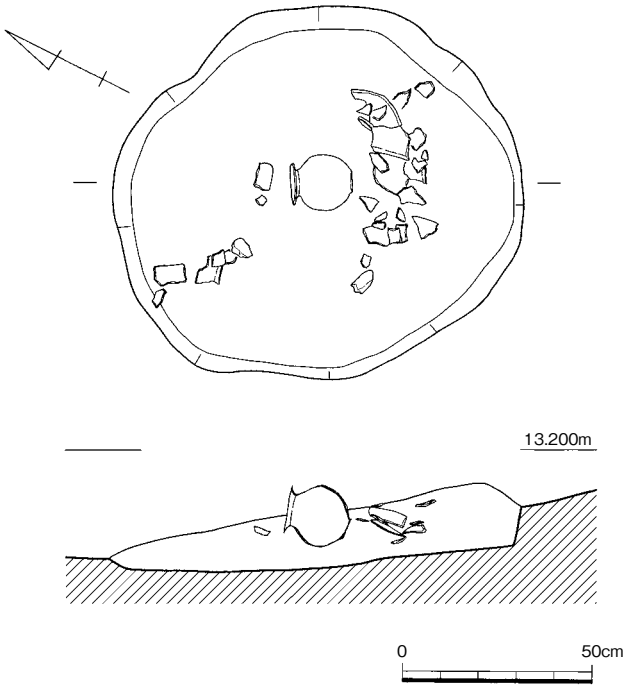
第56図　Ｅ地区　５号土坑平断面実測図（1／40）

出土遺物（第52・58図）

１は二重口縁壺の頸部片で、口縁部と胴部を欠損する。口縁部はあまり開かず垂直的に立ち上がり、口縁下の突帯も緩い作りである。内面頸部下位には、横方向のケズリが明瞭に残る。２は小形鉢で底部が失われている。口縁は如意状に延び、丸底であろう。外面体部下位にはミガキ、外面胴部にはススが残る。口径13.0㎝、器高5.4㎝を測る。３は小形甕で口縁部～頸部が残存する。口径16.0㎝、器高5.4㎝を測る。第52図の16は敲石。

６号土坑（第57図）

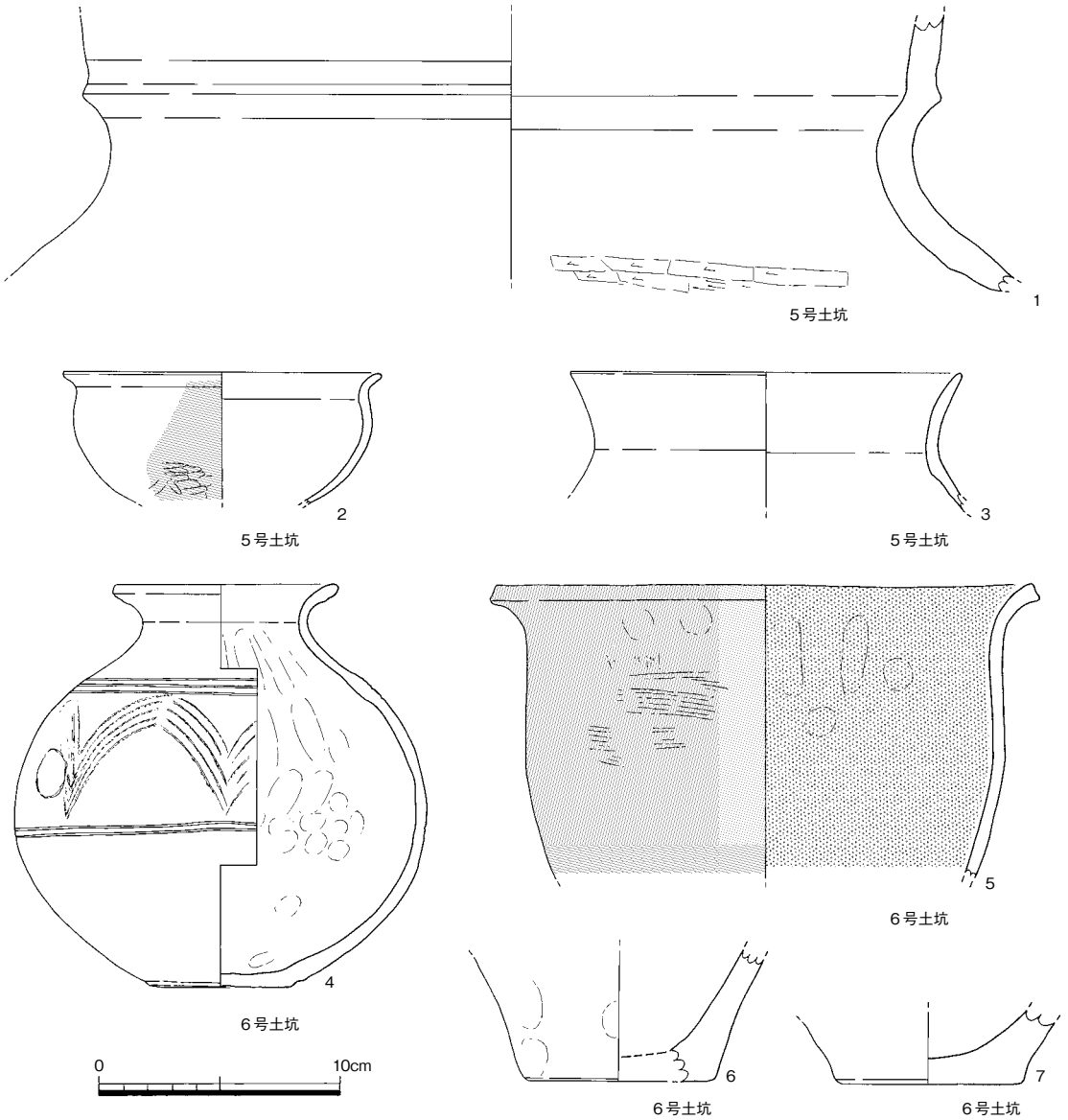
調査区南東側の谷部の斜面に作られた土坑である。土坑内からは、土器が出土しており、完形の壺が口縁を北に向けて検出され、その南側からは甕の口縁部片が出土している。平面形は円形を呈し、東西2.1ｍ、南北2.0ｍ、深さ0.3ｍを測る。出土遺物から弥生時代前期後半と考えられる。



第57図　Ｅ地区　６号土坑平断面実測図（1／20）

出土遺物（第52・58図、図版10）

４は完形の壺で、球状の胴部に平底が伴う。肩部には重弧文を配し、頸部に３条の沈線、胴中位に２条の沈線を施す。外面は風化で調整が不明瞭であるが、内面は指ナデの跡が明瞭に残る。口径9.2㎝、器高16.4㎝、底径5.7㎝を測る。５は如意形口縁をもつ甕で、口縁端部の刻み目がない。胴部は上位でやや膨らみをもつ。外面胴部はハケメ調整、内面は指ナデである。外面にはスス、内面にはコゲが全体的に残る。口径22.7㎝、器高9.6㎝を測る。６は甕の底部片で、平底である。内面には黒斑が残る。７も底部片であるが、壺の底部である。第52図の17は磨製石斧で、上部を欠損する。使用頻度が高く、刃部が磨耗している。



第58図　E地区　5・6号土坑出土遺物実測図（1／3）

７号土坑（第59図、図版９）

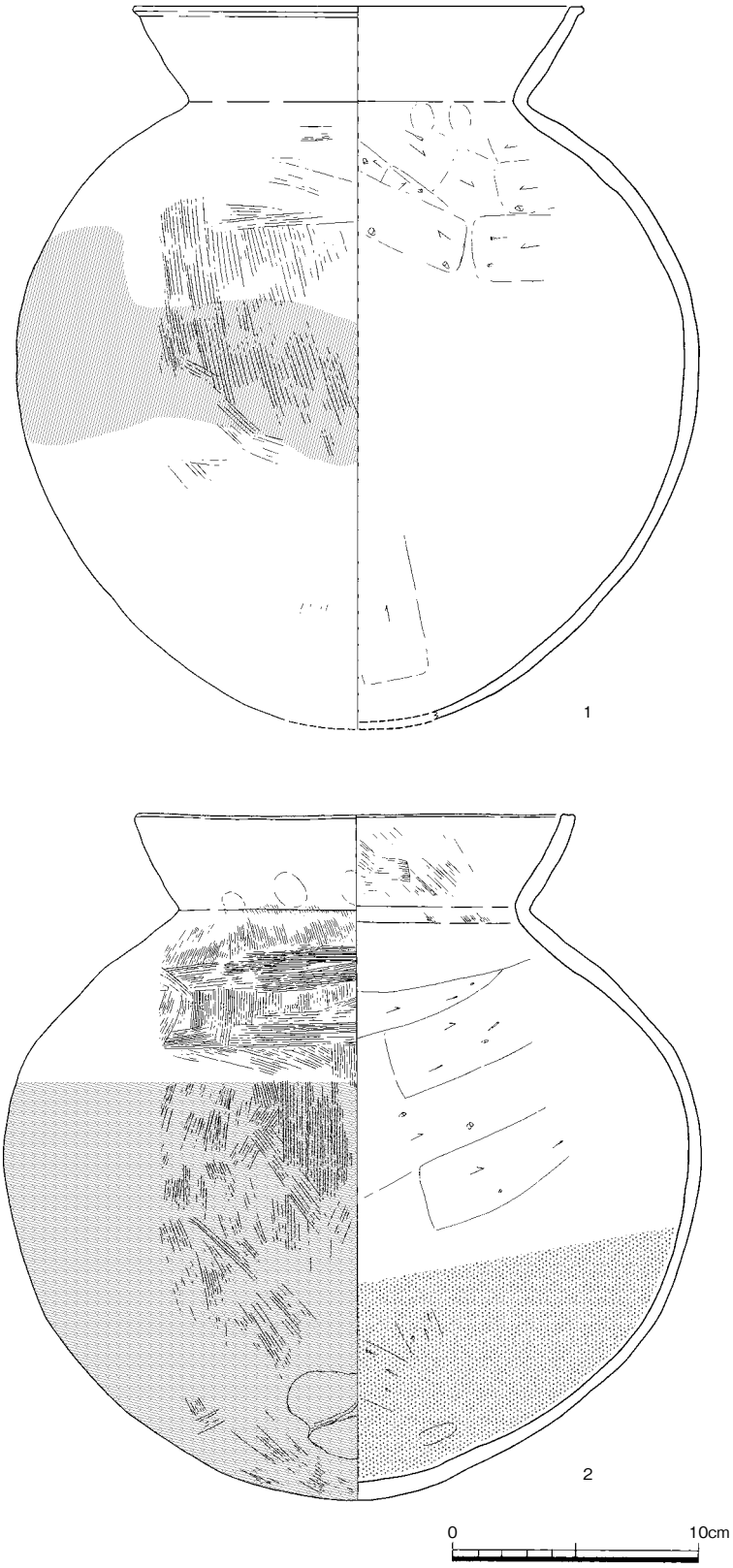
調査区西側の小谷部の傾斜部分に作られた土坑で、南に１段のテラスを設け、歪な横長の長方形を呈する。１号土坑と同様に床面が凸凹で、粘土採掘坑と考えられ、周辺の地山は黄褐色粘質土～青色粘質土で、これを採取したものであろうか。土器は散乱した状況であったが、甕や瓦質土器などが出土している。東西3.3ｍ、南北9.0ｍ、深さ1.0ｍを測り、出土遺物から古墳時代前期後半と考えられる。

出土遺物（第52・60～62図、図版10・11）

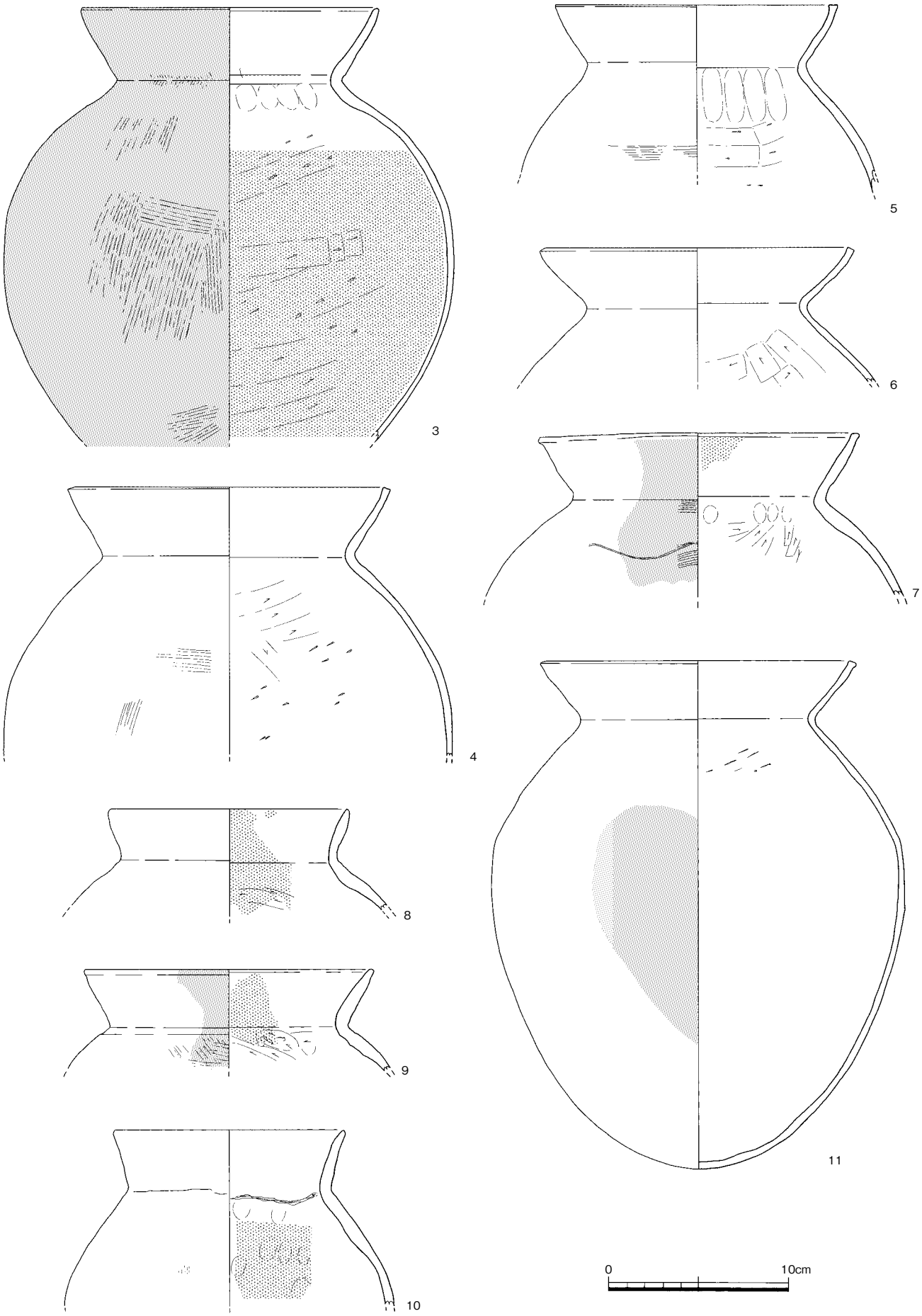
１は甕で、底部を欠損する。つまみ出す口縁から肩が張り丸底であろう底部に至る。外面調整は、肩部に横方向のハケメ、胴部に縦方向のハケメを施す。内面胴部上位は横方向のケズリが残

第59図　E地区　7号土坑平断面実測図（1／40）

る。口径18.2cm、器高29.0cmを測る。２も甕である。口縁端部は軽く凹ませ、球状の胴部から丸底へと至る。底部付近には破裂痕があり、煮炊きに使用されたものか。外面調整は、肩部に縦方向のハケメの上から横方向のハケメ、胴部に縦方向のハケメを施す。内面胴部は横方向のケズリが残る。口径17.7cm、器高27.9cmを測る。３は甕で、底部を欠損する。口縁端部に丸みを帯び、若干内湾する口縁から若干肩が張り、胴下位に至る。外面調整は、肩部に横方向のハケメ、胴部に縦方向のハケメを施す。内面胴部は横方向のケズリが残る。外面にはスス、内面胴部にはコゲが残る。口径16.4cm、器高24.0cmを測る。４は胴下位を欠損する甕で、外面の調整が不明瞭であるが、肩部の横方向のハケメが確認できる。胴部内面は横方向のケズリであるが、外面同様不明瞭である。口径18.0cm、器高14.9cmを測る。５は口縁端部を凹ませる甕で、外面肩部の横方向のハケメがわずかに残る。内面は頸部の指オサエの下に横方向のケズリを残す。口径15.6cm、器高10.5cmを測る。６は甕で胴部以下を欠損する。外面は風化で調整不明瞭で、胴部内面はケズリ。口径17.4cm、器高7.6cmを測る。７

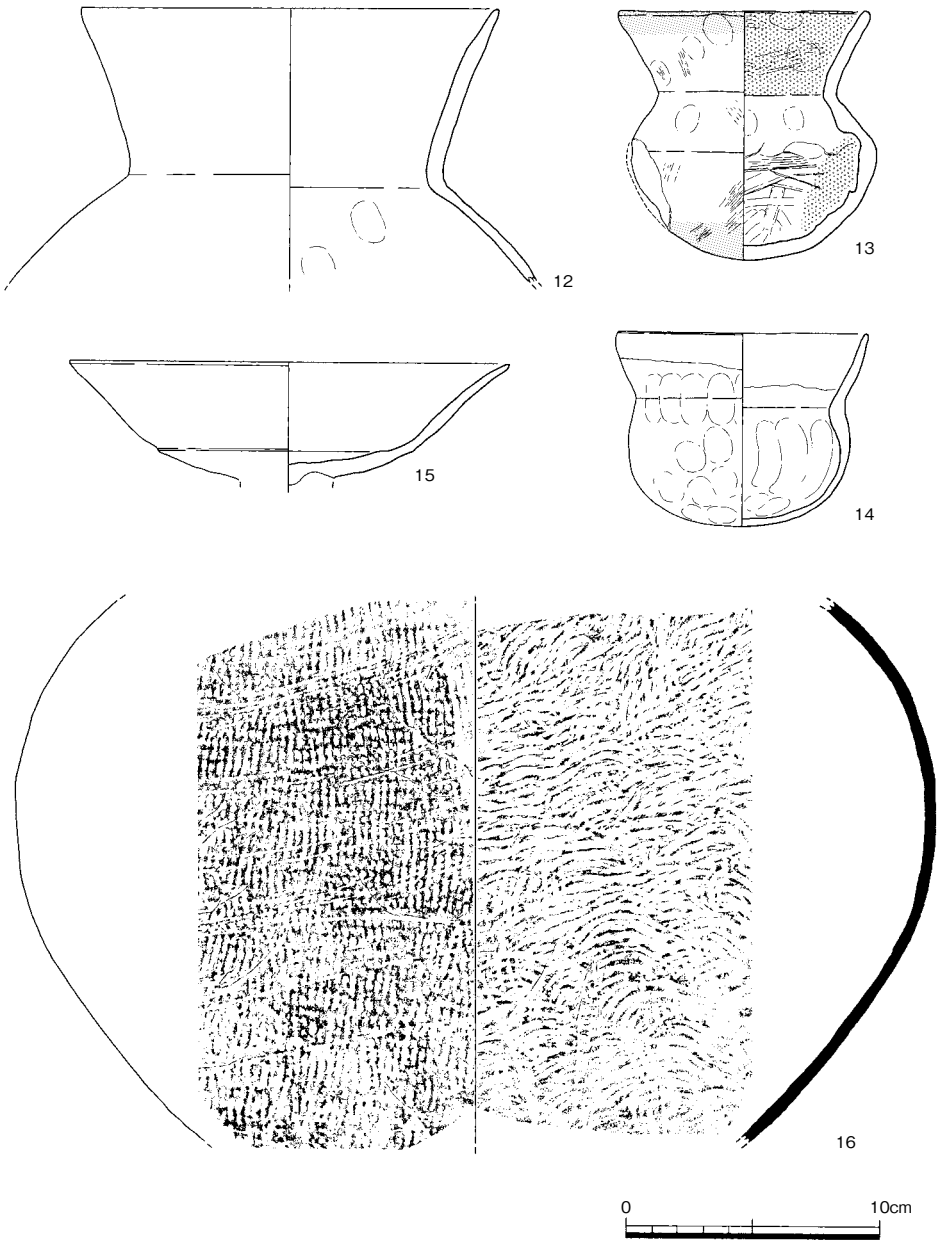


第60図　E地区　７号土坑出土遺物実測図①（1／3）



第61図　E地区　7号土坑出土遺物実測図②（1／3）

は外面肩部に如意状の沈線を１条巡らす甕である。内面の削りは幅狭なヘラで細かくケズリを行う。外面にスス、内面にコゲが残る。口径18.0cm、器高10.0cmを測る。８の甕は口縁から胴上位まで残存する。口縁は垂直気味に立ち上がる。内面にコゲが残る。口径13.0cm、器高5.6cmを測る。９の甕も胴上位以下を欠損する。胴部外面はハケメ調整が残る。外面にスス、内面にコゲが残る。口径15.9cm、器高5.5cmを測る。10は口縁部から胴中位まで残存する甕で、垂直気味に立ち上がる口縁からなで肩となる。頸部の内外面に粘土の繋ぎ目が明瞭に残る。内面にコゲが残る。口径12.6cm、器高9.8cmを測る。11の甕は、口縁端部を若干つまみ出し、胴中位よりやや上に胴部最



第62図　E地区　７号土坑出土遺物実測図③（1／3）

大径がくる。底部は丸底で、外面にススが残る。口径17.4cm、器高28.3cmを測る。12は長頸壺で、口縁から胴上位まで残存する。外面の調整はナデ、頸部内面は強い指頭圧痕が残る。口径16.4cm、器高10.6cmを測る。13は小形丸底壺で、胴部外面に破裂痕がある。内外面ともにハケメの後ナデ調整を行う。外面にスス、内面にコゲが残る。口径9.8cm、器高9.8cmを測る。14も小形丸底壺で、指ナデによって全体を成形している。胴部はあまり張らずに丸底に至り、口径9.8cm、器高7.6cmを測る。15は高杯。16は須恵器で大形甕である。色調は白灰色で、胴部最大径が胴上位にある。外面は格子目のタタキの後、３条の沈線を巡らし、内面は青海波文が残る。胴部最大径36.0cm、器高21.5cmを測る。第52図の18は石剣の切先部分で、先端部を欠損している。第52図の19は打製石鏃で、平面形は二等辺三角形で、抉りが浅い。

８号土坑（第63図、図版９）

７号土坑と同じく、調査区西側に位置する谷部の傾斜部分に作られた土坑で、東西1.9ｍ、南北4.0ｍ、深さ0.4ｍを測る。西側に１段のテラスを設け、南北がさらに下げ掘られている。土器は下層ほど少なく、上層に集中している。出土遺物から古墳前期後半と考えられる。

出土遺物（第52・65図、図版11）

１は甕で口縁端部を軽く凹ませている。口径18.1cm、器高21.2cmを測り、胴上位に破裂痕がある。胴部外面はハケメがわずかに残り、内面はケズリである。外面口径部および胴部に黒斑、頸部にススが残る。２は直口縁壺で肩が張り、底部は丸底である。胴部外面は粗いハケメが残り、底部付近はナデである。胴部内面は強いケズリによって調整されている。内面にコゲが残る。口径11.2cm、器高16.5cmを測る。３は小形丸底壺で、斜めに開く口縁からやや肩の張る胴部を経て丸底に至る。内外面共に指ナデの跡が明瞭に残る。内面にコゲが残る。口径14.8cm、器高13.3cmを測る。４も小形丸底壺。外面調整は風化が著しく不明瞭であるが、内面は横方向のケズリを行う。外面にスス、内面にコゲが残る。口径10.7cm、器高15.7cmを測る。５は底部を欠損しているが小形丸底壺であろう。垂直気味の口縁になで肩の胴部がつく。口径13.0cm、器高8.9cmを測る。６は手づくねの器台で、指ナデで成形している。口径4.5cm、器高6.8cmを測る。７は甕の底部片で平底である。底径7.4cmを測る。第52図の20は打製石鏃で、平面形が二等辺三角形。

９号土坑（第64図、図版９）

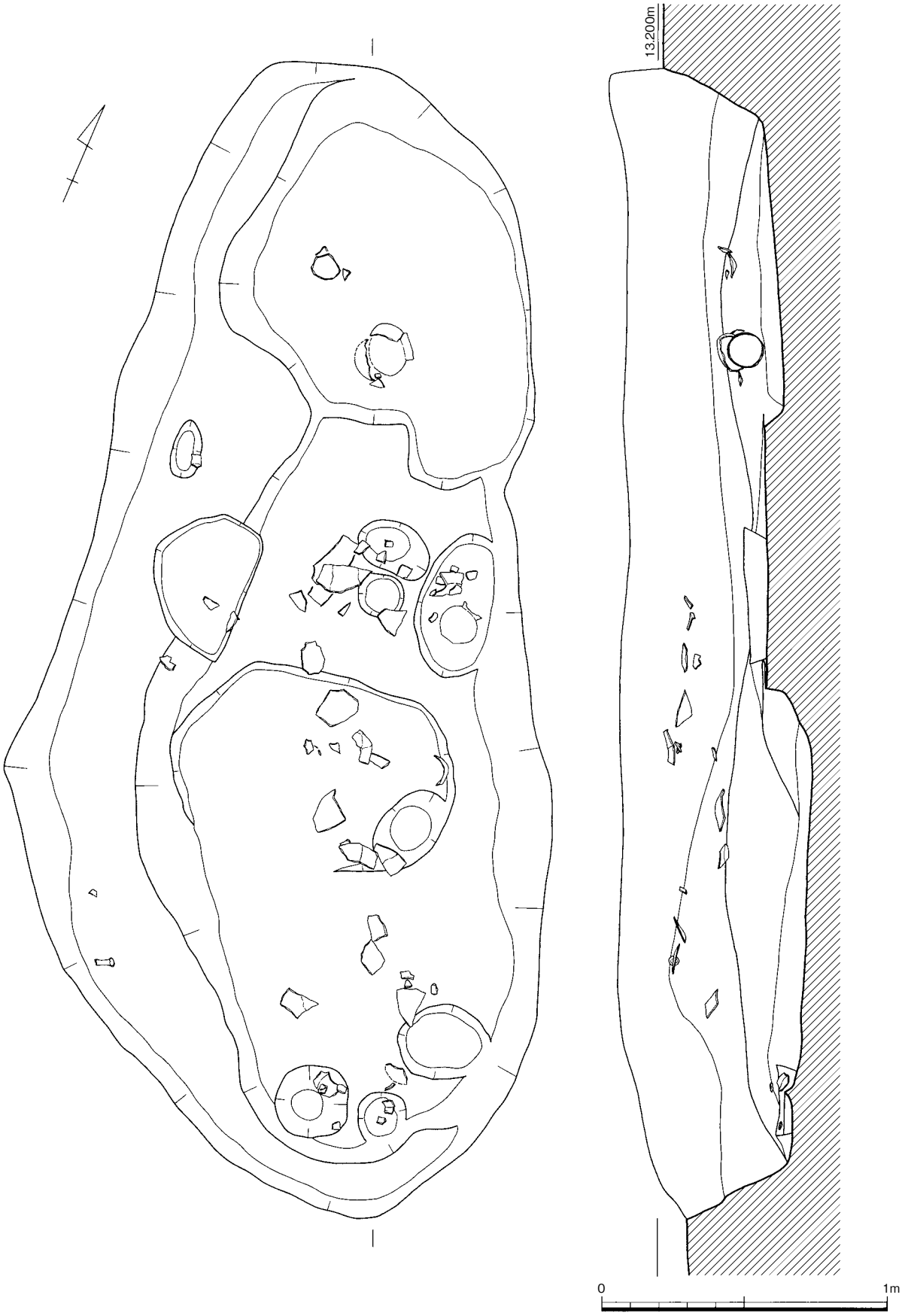
10号土坑と切り合い関係にあり、10号土坑を切るもので、調査区北西側に位置する。平面形は歪な楕円形で、土坑内では北側の土坑ラインに沿って、溝状遺構がある。東西4.5ｍ、南北4.3ｍ、深さ0.3ｍを測り、土坑内から甕の口縁部片や底部片が出土している。弥生時代前期末～中期初頭と考えられる。

出土遺物（第65図）

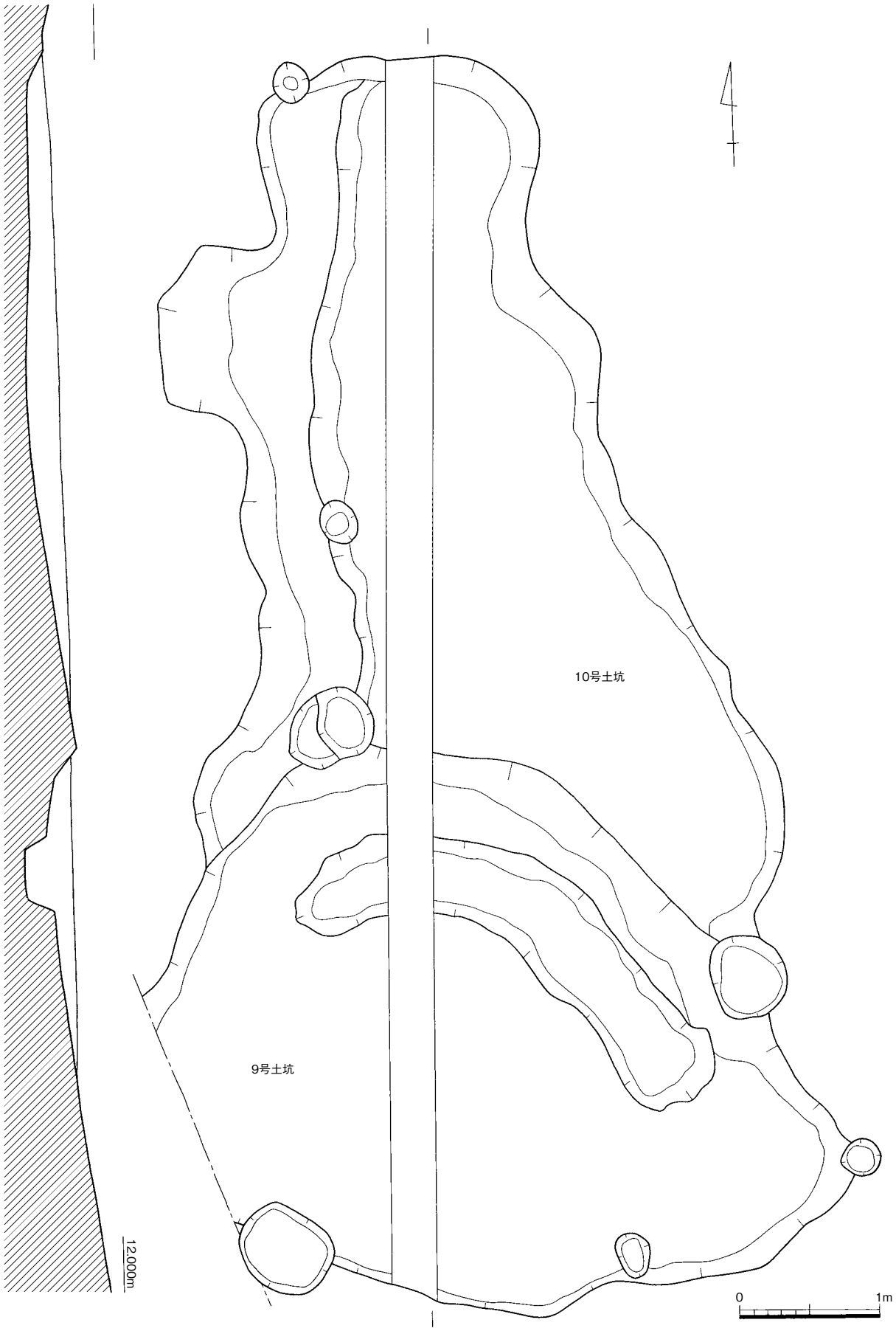
８は甕の底部片で、全体をナデで調整している。底部は平底で底径9.0cmを測る。９は甕の口縁部片で、口縁端部に刻み目はない。10は甕の底部片で、上げ底状の底部である。

10号土坑（第64図、図版９）

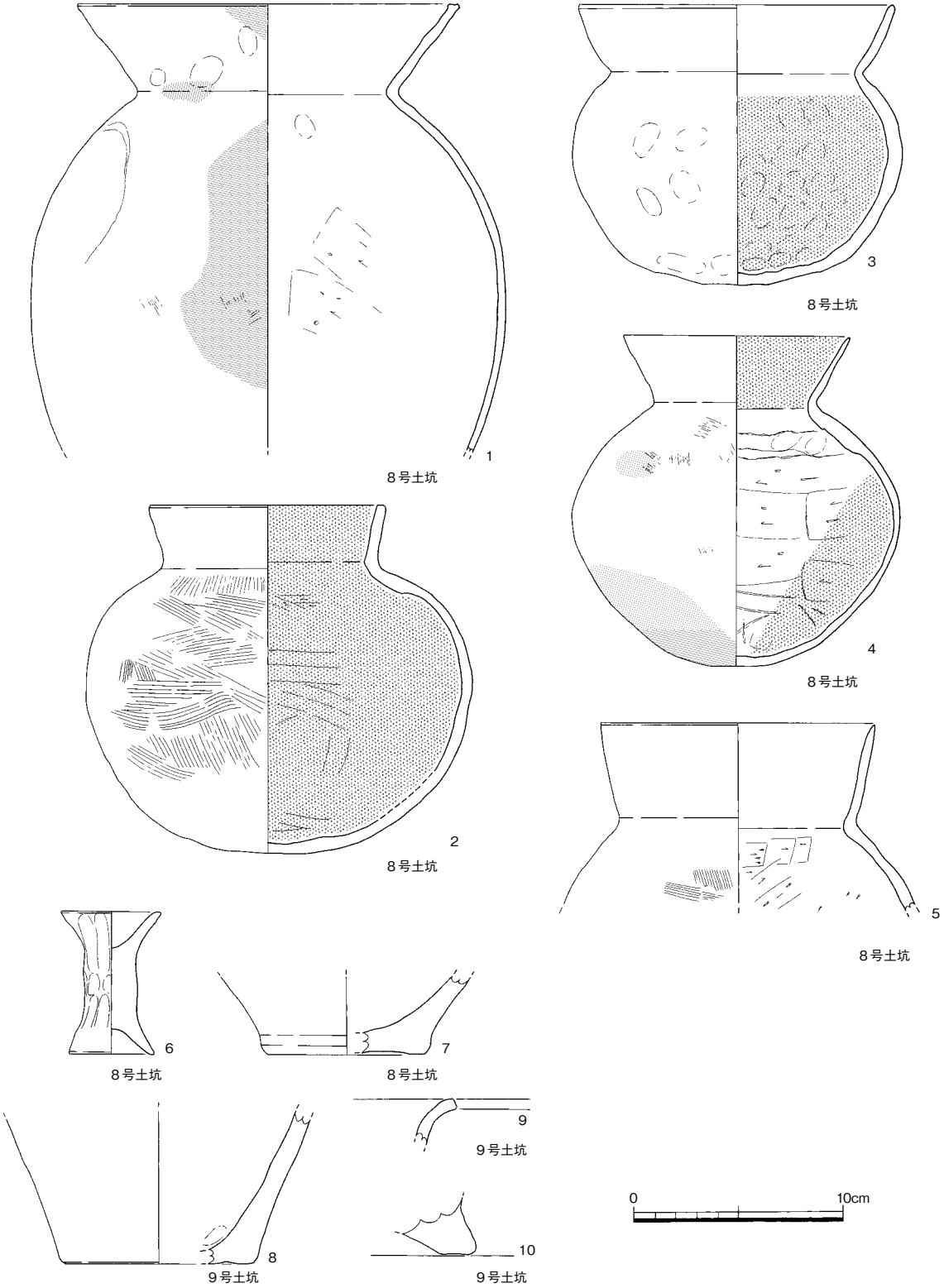
調査区北西側に位置し、９号土坑に切られる土坑である。平面形は歪な長方形で、西側に１段のテラスを設ける。東西3.5ｍ、南北5.0ｍ、深さ0.2ｍを測り、出土遺物はない。



第63図　E地区　８号土坑平断面実測図（1／20）



第64図　E地区　9・10号土坑平断面実測図（1／40）



第65図　E地区　8・9号土坑出土遺物実測図（1／3）

⑥溝

１号溝

調査区西側を南北に走る水路で、南西付近で西側へと曲がっている。土層観察から１号溝は２号溝の掘り直しである。水田に水を供給していた水路であろう。溝からは磁器椀が出土しており、明治期と考えられる。

出土遺物（第66図）

１は高台付磁器椀で、外面体部には草文を配する。口径9.6㎝、器高4.8㎝、高台径3.3㎝を測る。２も高台付磁器椀。外面体部は樹木を描いたものか。口径7.3㎝、器高5.0㎝、高台径3.8㎝を測る。３は博多七輪の火皿で、７孔確認できる。

２号溝

調査区西側を南北に走る水路で、水田区画に合わせて調査区南西付近で南と東に分かれる。幅1.2ｍ、深さ0.1ｍを測り、１号溝よりも大きく掘削されている。出土遺物は少なく甕が１点出土するのみである。

出土遺物（第66図）

４は大甕の口縁部片で、口縁に突帯を貼付する。口径30.0㎝、器高3.8㎝を測る。

３号溝

調査区南東側で検出された水路で、調査区南側で東へと曲がり、１号掘立柱建物の柱穴を一部破壊している。溝内には土管があり、比較的現代に近いものであろう。

出土遺物（第66・67図）

５は陶器椀で、外面底部は無釉である。器高2.4㎝、高台径2.2㎝を測る。23は頂部と脚裾部を欠損する石鏃で、平面形が三角形で抉りが深い。

４号溝

調査区東側で検出された水路で、４号土坑に接続する。溝は直線的に谷部にある水田へと向かっており、４号土坑で温めた水を水田に使用していたものと考えられる。幅0.8ｍを測る。出土遺物から江戸期の水路であろう。

出土遺物（第66図）

６は玉縁をもつ白磁椀で高台部分を欠損する。口径14.0㎝、器高3.2㎝を測る。７は白磁椀で高台部分が欠損している。８は白磁の高台部分で、蛇の目釉剥ぎを行っている。高台径4.6㎝を測る。９は陶器鉢で、残りが悪い。10は磁器椀で、内面に円圏を施す。11は磁器の瓶で、高台付近が残存する。回転ナデによる成形で、内面は無釉である。高台径8.2㎝を測る。12は磁器の皿で、内面に草文を施す。

５号溝

調査区東側で４号溝に切られる溝で、土師皿が出土していることから南側に立地する掘立柱建物群と同じ時期で、区画的な意味合いを持つ溝であろう。

出土遺物（第66図）

13は土師皿で、口縁と底部の一部が失われている。底部は糸切りで、器高1.0㎝を測る。

６号溝

調査区西側に位置し、丘陵斜面に直行する形で検出された溝である。幅0.8ｍ、深さ0.2ｍを測

り、谷部付近で溝が終わる。出土遺物は無いが、埋土は茶褐色粘質土であるため、弥生時代から古墳時代にかけてつくられたと思われる。

７号溝

調査区北東端で検出された溝で、南北の流れから西側へと曲がる。出土遺物より江戸期以降と考えられる。

出土遺物（第66図）

14は甕の底部片で、平底である。弥生時代のものであるが、流れ込んだものであろう。15は陶器の鉢で、口縁内面に突帯を２条貼付する。口径25.0㎝、器高5.7㎝を測る。

８号溝

調査区北西側で検出された溝で、９号土坑の南側に位置する。溝は谷部付近で大きく広がり、そこから土器が集中して出土しており、流れてきたものであろう。弥生時代前期末～中期初頭と考えられる。

出土遺物（第66・67図）

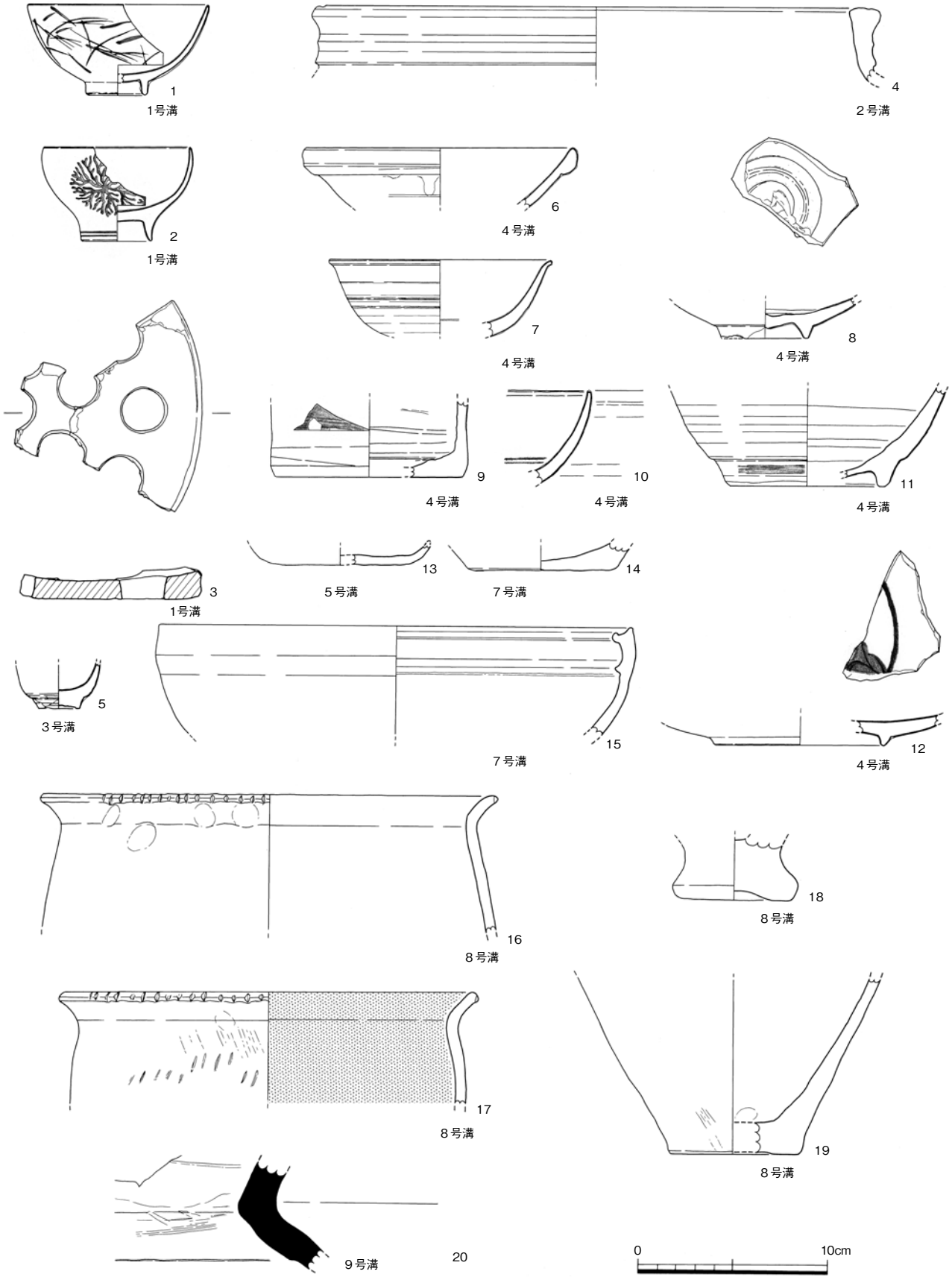
16は甕で、口縁端部に刻み目を施す。頸部外面に指ナデ痕があるほかは、風化により調整不明瞭である。口径24.0㎝、器高7.3㎝を測る。17も甕で、口縁端部に刻み目を施す。胴部外面はハケメの後にナデ消しを行い、内面にコゲが残る。口径22.1㎝、器高5.9㎝を測る。18は甕の底部片で、上げ底状である。19は平底の甕の底部で、全体的に風化が著しく調整不明瞭である。21は使用原核で、大きな剥離面を残す。22は縦長剥片である。

９号溝

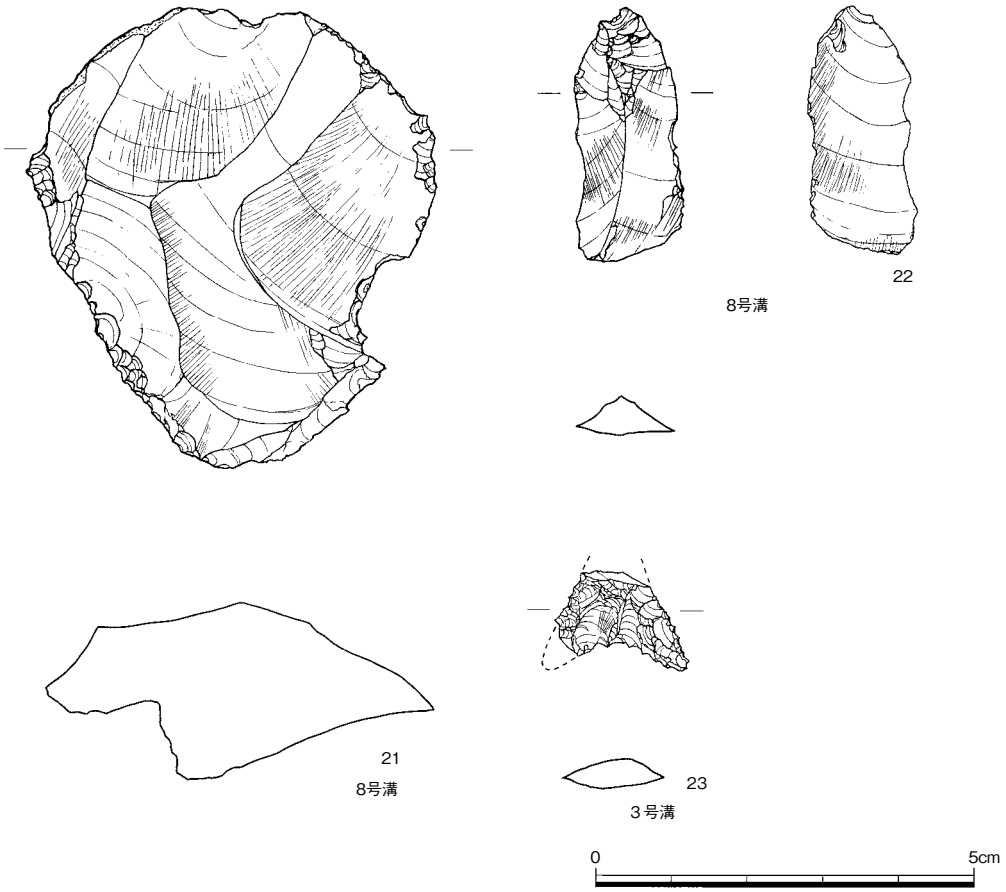
調査区北西側で検出された溝で、８号溝の南側に位置する。調査区の都合上、一部の検出に留まっている。溝内からは須恵器の大甕片が出土している。

出土遺物（第66図）

20は須恵器の大甕片で、頸部のみの残存。内面の回転ナデの痕跡が明瞭で、外面には自然釉が付着する。



第66図　E地区　1～5・7～9号溝出土遺物実測図（1／3）



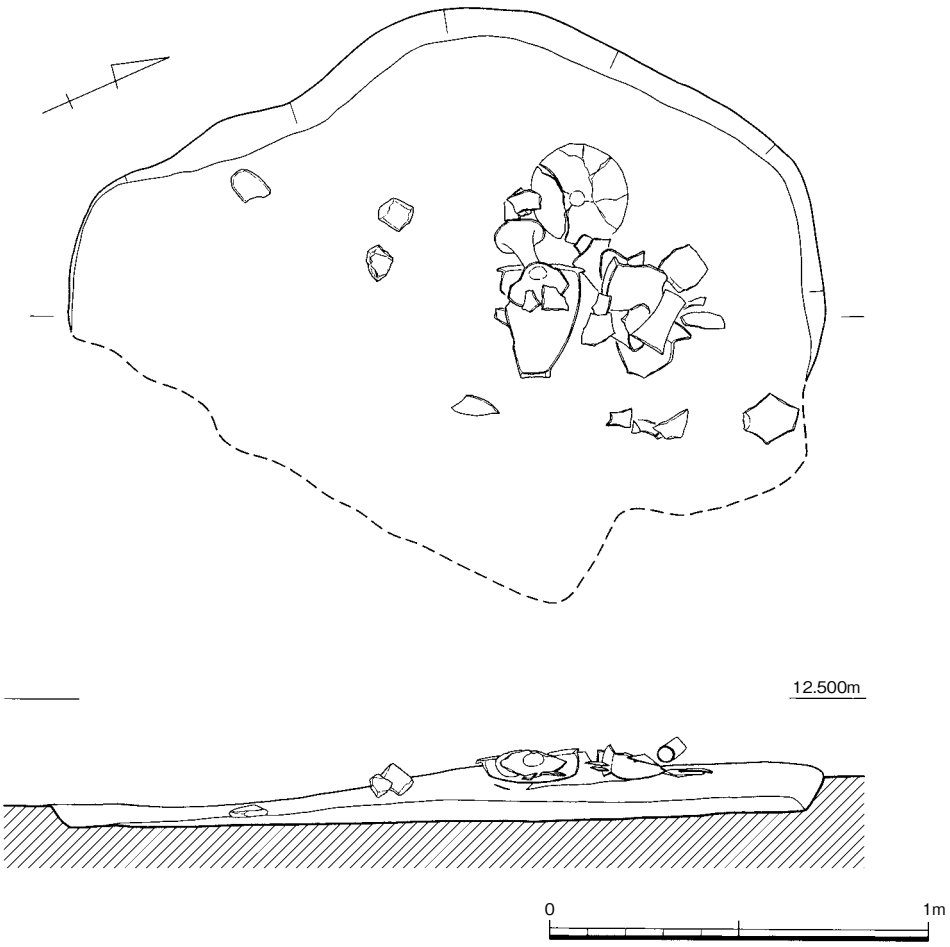
第67図　E地区　３・８号溝出土遺物実測図（1／1）

⑦小谷部（図版６）

調査区中央を南北に走る小谷部で、東西幅0.9ｍ、深さ0.1ｍを測る。小谷部の埋土は、土層観察から大きく３層に分かれる。上層である黒褐色粘質土は中世の遺物を含む包含層で、龍泉窯青磁や同安窯青磁などが確認できるが、江戸期の水路はこの面を切り込んで形成されている。中層は古墳時代の遺物を含んでおり、前述した中世に属する井戸の多くがこの面を切り込んで形成されており、馬骨が出土した７号井戸も同様である。下層の黄灰色粘質土は弥生時代の遺物を含む包含層で、古墳時代の井戸や土坑は、この面を切り込んで形成されている。小谷部の底は、青灰色粘質土の面であり、小谷部の南西側では弥生時代中期後半の土器群や弥生時代前期末～中期初頭の土坑などが確認できる。

土器群（第68図、図版９）

弥生時代中期後半の土器群は、歪な形の土坑から出土しており、小谷部の東側斜面に形成されており、東側の遺構ラインは不明瞭であった。土坑内からは高杯、甕、蓋などが出土した。



第68図　Ｅ地区　小谷部土器群平断面実測図（1／20）

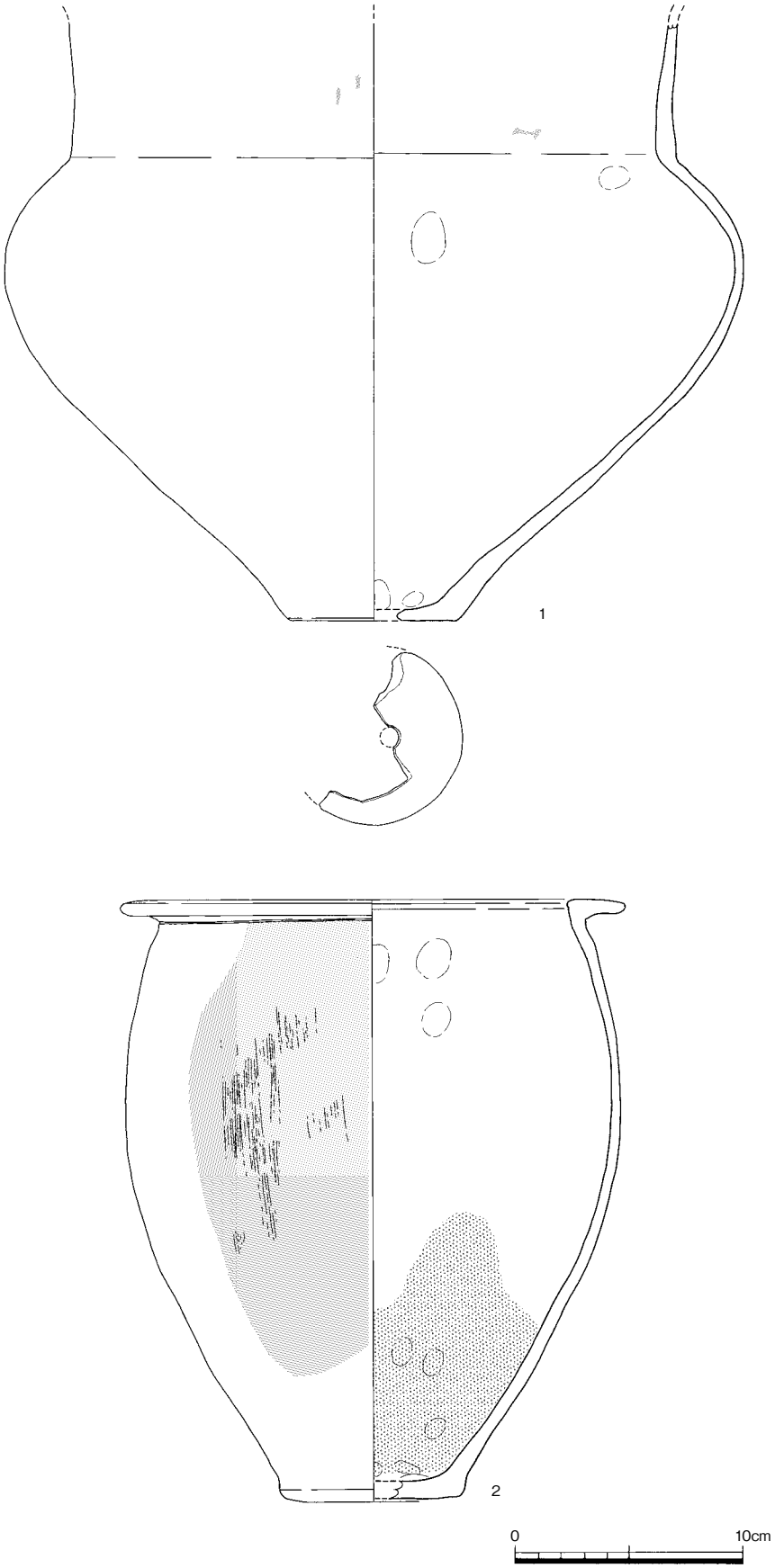
出土遺物（土器群）（第69・70図、図版11・12）

小谷部で検出した土器群である。１は広口壺で口縁部を欠損する。垂直に延びる頸部と肩が張る胴部、平底の底部である。底部穿孔は両側から行われており、丁寧な穿孔である。底面に黒斑、頸部内外面に丹の痕跡がわずかに残る。２は鋤先口縁の持つ甕で、外面に縦方向のハケメが残る。外面にスス、内面にコゲが残る。口径22.0cm、器高26.4cm、底径8.1cmを測る。３の甕は、鋤先口縁が若干内傾する。胴の半分以下は失われており、口径26.3cm、器高12.7cmを測る。外面にスス、内面にコゲが残る。４も甕で、口縁～胴上部まで残存する。胴部外面に粗い縦方向のハケメが残る。口径25.3cm、器高7.4cmを測る。５は素口縁の高杯。杯部内面はミガキを施し、底のほうでは破裂痕の様な器壁の剥離が見られる。杯部内外面に円の痕跡が残る。口径15.5cm、器高19.3cm、脚裾径12.9cmを測る。６は器台で、強い指ナデと内面はシボリによって成形している。内面にコゲが残る。口径7.4cm、器高14.5cm、底径9.5cmを測る。７も器台であるが、６よりも作りが丁寧である。外面は縦方向のハケメ、内面は板ナデを行っている。内外面にスス、コゲがわずかに残る。８は蓋で完形である。外面にはススおよび二次焼成痕があり、祭祀において火を受けたものか。器高9.2cm、脚裾径24.4cmを測る。

出土遺物（小谷部包含層）（第71～88図、図版12）

１～31までは中世を主体とする遺物包含層より出土したものである。１は同安窯青磁椀で、内面にヘラ状工具による簡略化した花文と点描文を有する。高台部分は欠損しており、口径16.4cm、器高6.0cmを測る。色調は黄緑色である。２は同安窯青磁皿で、内面に花文と点描文を有する。色調は黄緑色で、口径11.1cm、器高2.3cm、底径5.1cmを測る。３も同安窯青磁皿で、内面に花文と点描文を有する。底部は無釉で、口径10.2cm、器高1.9cm、底径4.8cmを測る。１～３は12世紀中頃～後半。４は龍泉窯青磁椀の口縁部片で、外面に蓮弁文に縦の櫛目が入り、内面は草花文を有する。５は龍泉窯青磁椀の口縁部片であるが、内面に蓮弁文を有する珍しいタイプである。４・５は12世紀中頃～後半。６は龍泉窯青磁小椀。内面に白堆線による区分けを行っている。12世紀中頃～後半。７は白磁椀で口縁端部に輪花をもつ。８は白磁小椀で、内面は蛇の目釉剥ぎを行う。口径9.6cm、器高2.5cm、高台径3.9cmを測る。９は龍泉窯青磁杯で、口縁部が外反する。10は玉縁口縁をもつ白磁椀。11世紀後半～12世紀前半か。11は白磁椀で、高台部分には施釉しない。12は土師器の高台付杯で体部は大きく開く。13は土師椀で口縁部と底部を欠損している。14は土師椀で、体部はハケメが残る。口径11.9cm、器高3.9cm、底径6.6cmを測る。15は土師椀で平底の底部と大きく開く体部が特徴的である。口径11.9cm、器高3.9cm、底径6.9cmを測る。16は土師椀。口径15.0cm、器高5.2cm、底径8.3cmを測る。17は土師器の杯。口径10.8cm、器高3.1cm、底径6.0cmを測る。18は土師器の杯で、底部を欠損する。口径12.4cm、器高2.4cm、底径7.5cmを測る。19は土師器の杯で、全体を回転ナデによって仕上げている。20は土師器の杯で、底部が失われている。外面にスス、内面口縁にコゲが残る。21、22も土師器の杯で底部の一部を失っている。23は白磁皿で、底部に施釉しない。口径10.2cm、器高2.2cm、底径5.3cmを測る。24は土師皿で、底部の切り離しは不明瞭。口径9.8cm、器高1.0cm、底径7.6cmを測る。25も土師皿で底部の切り離しはヘラ切りである。口径8.3cm、器高1.4cm、底径5.9cmを測る。

26は白磁皿で、底部に施釉しない。27は「崇寧重寶」で、製作年代は12世紀である。28は瓦器椀で、内面のミガキは確認できない。口縁部がやや外傾する。口径15.0cm、器高5.5cm、底径5.3cmを測る。

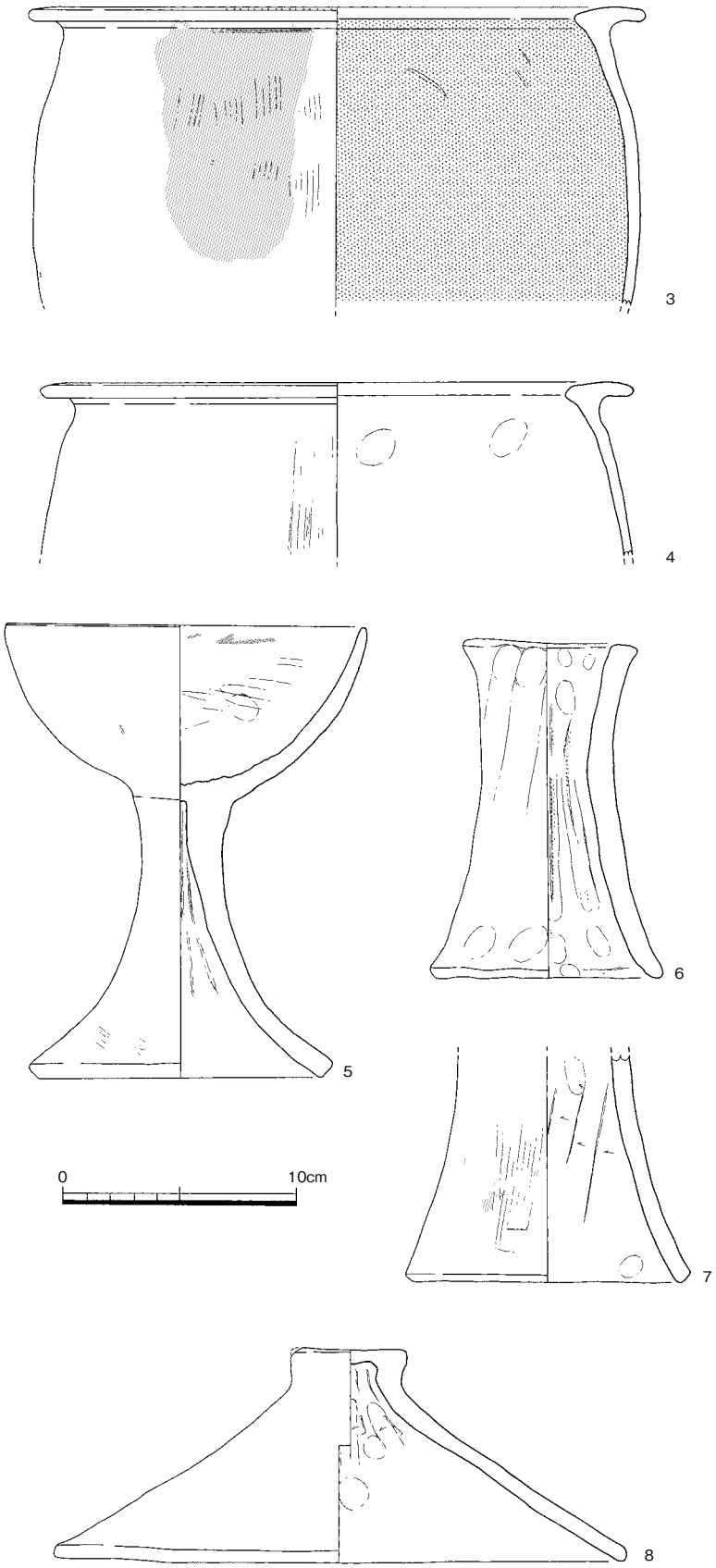


第69図　E地区　小谷部土器群出土遺物実測図①（1／3）

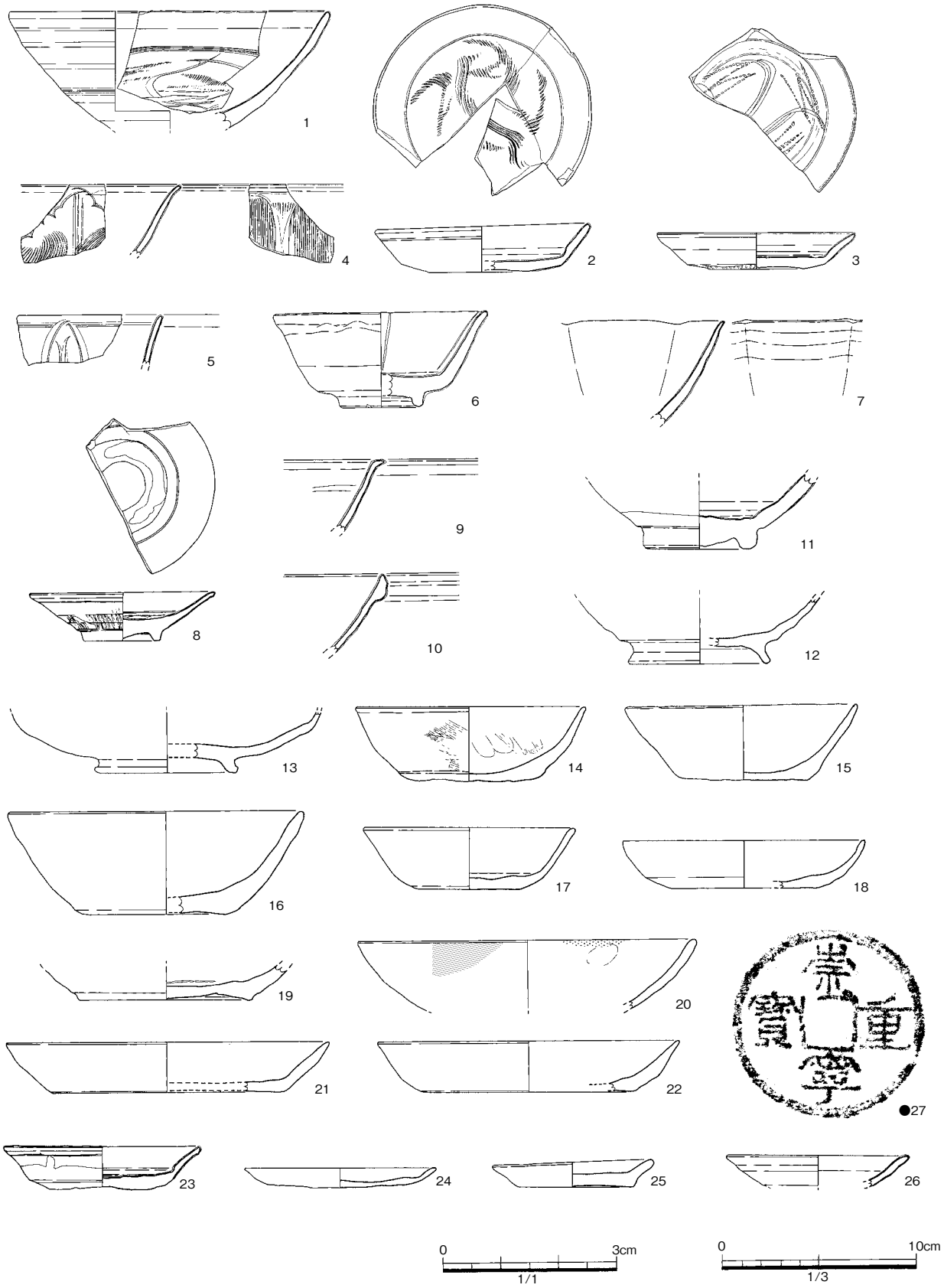
29は高台付土師椀。高台裏にスス、内面にコゲが残る。30は同安窯青磁椀の口縁部片で、外面に櫛目文、内面に花文を有する。31は高台付椀で内面を黒色磨研している。

32～58までは古墳時代を主体とする包含層から出土した遺物である。32は小形丸底壺で、口縁部を欠損する。外面底部付近は粗いハケメおよびススが残る。33は甕の口縁部片で、口径17.8cm、器高4.5cmを測る。34は壺か。口縁端部を上方につまみ上げ、口縁部を肥厚させている。口径17.4cm、器高4.3cmを測る。35は複合口縁壺で、口縁部から頸部にかけて残存する。口縁は外方に開き、頸部が窄まる。外面にススが残る。36は小形甕で、内面は斜方向のケズリを行う。37は布留式の甕で、外面は横方向のハケメ、二条の沈線を持つ。内面は横方向のヘラケズリを行う。

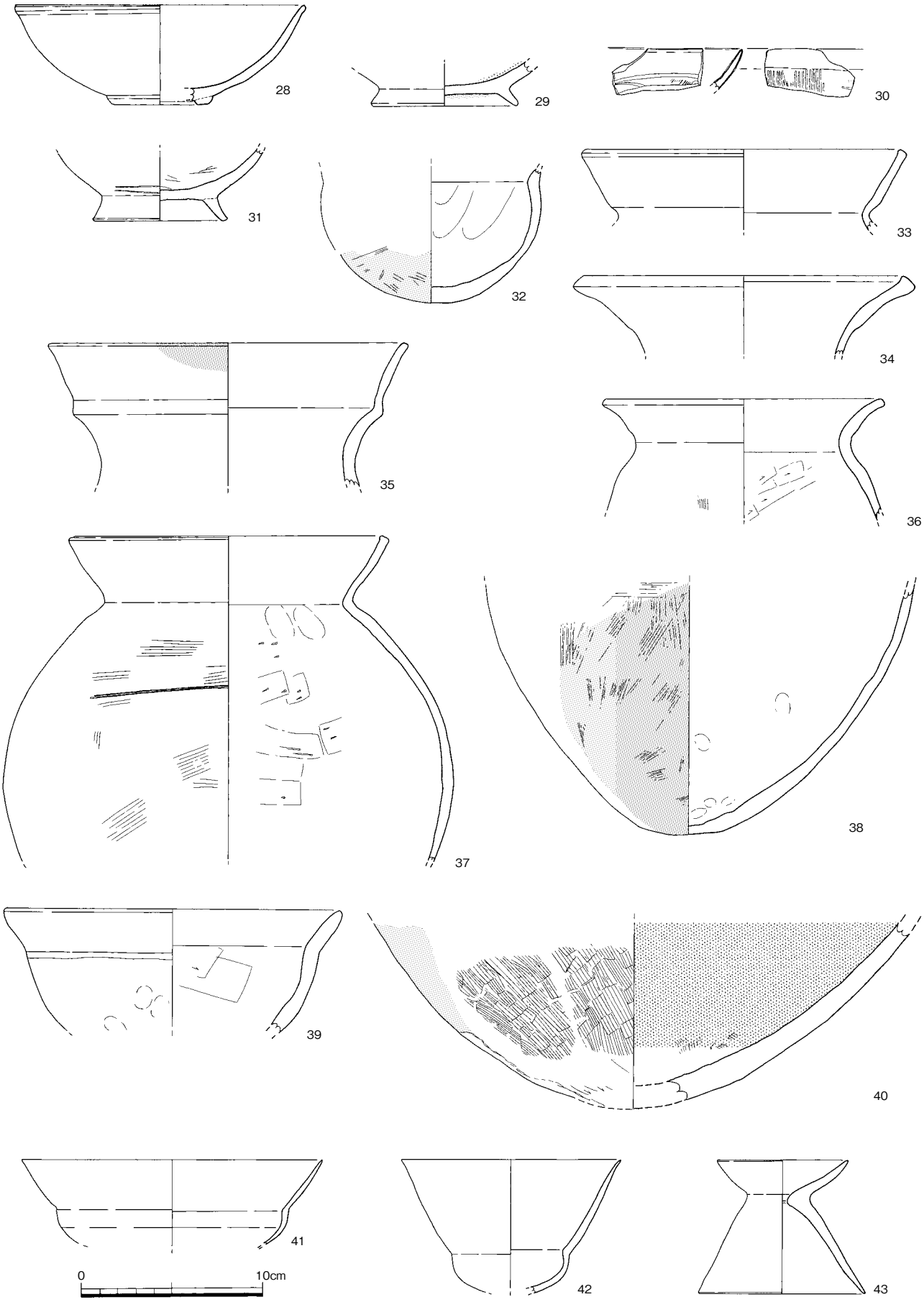
38は胴中位から底部まで残存する甕で、底部は丸底である。外面は縦・斜方向のハケメ、内面は指オサエが明瞭に残る。外面にススが残る。39は鉢である。口縁の屈曲が弱く、口縁部と体部との境には１条の沈線を巡らす。口径18.5cm、



第70図　E地区　小谷部土器群出土遺物実測図②（1／3）

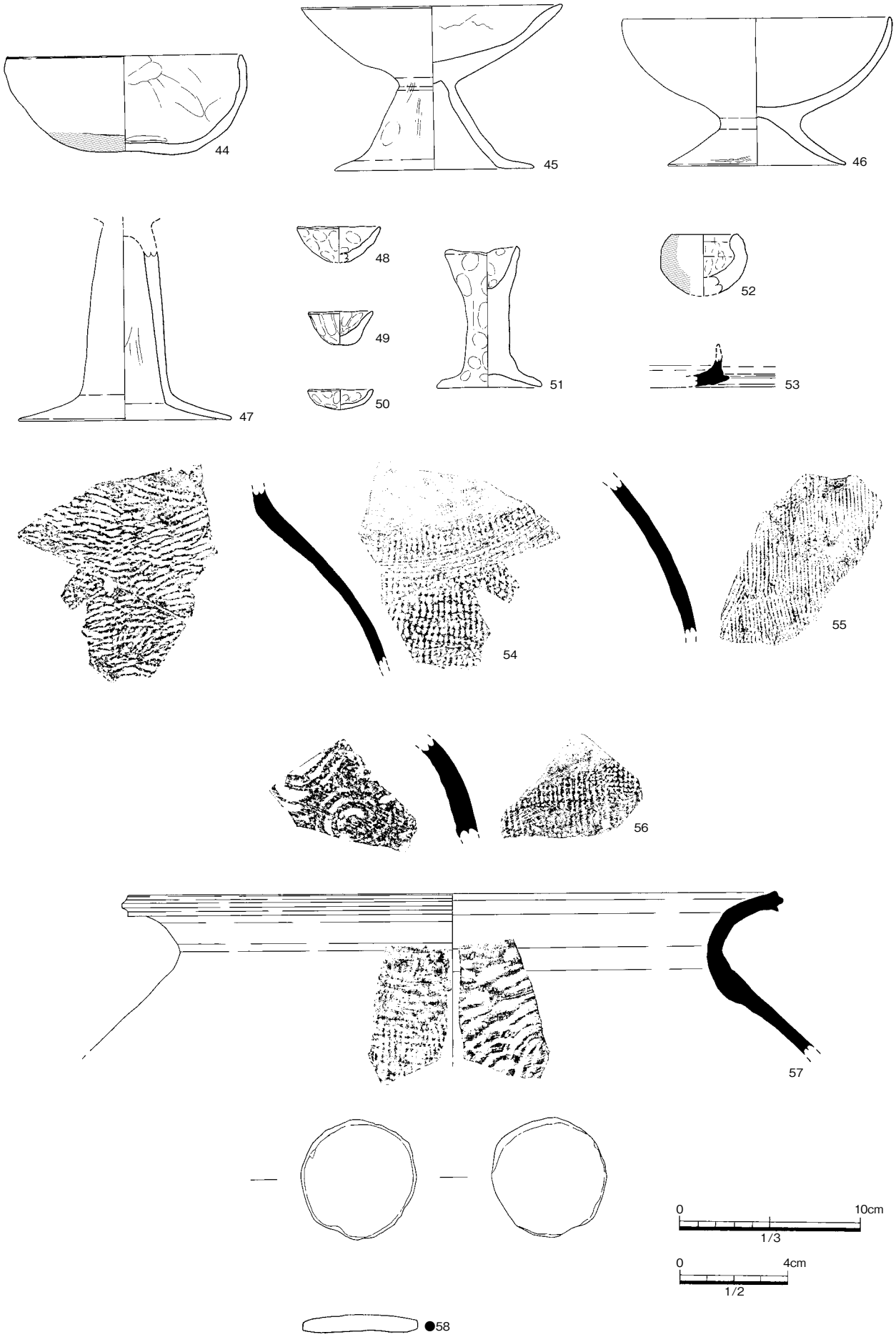


第71図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図①（●は１／１、１／３）

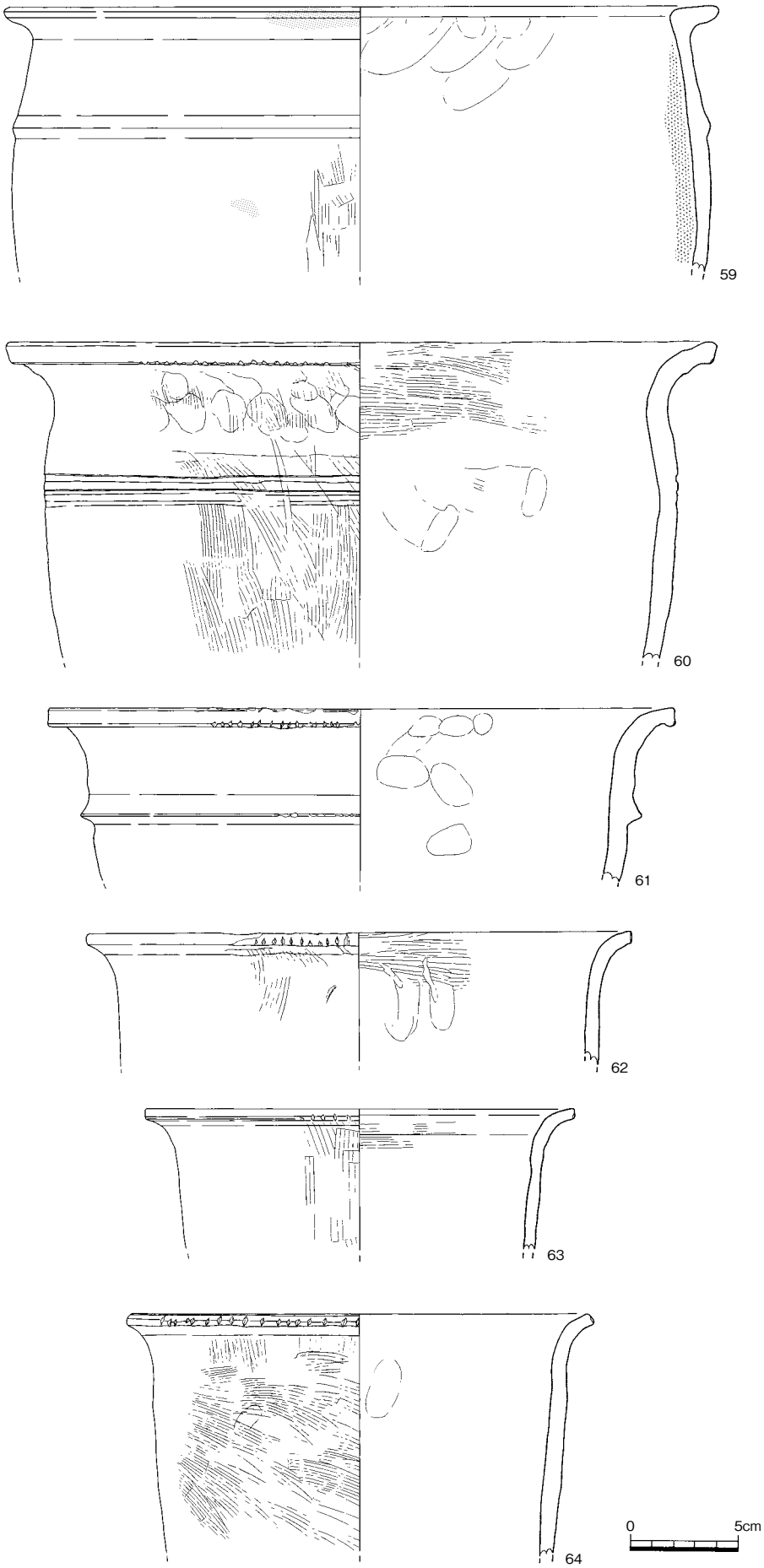


第72図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図②（1／3）

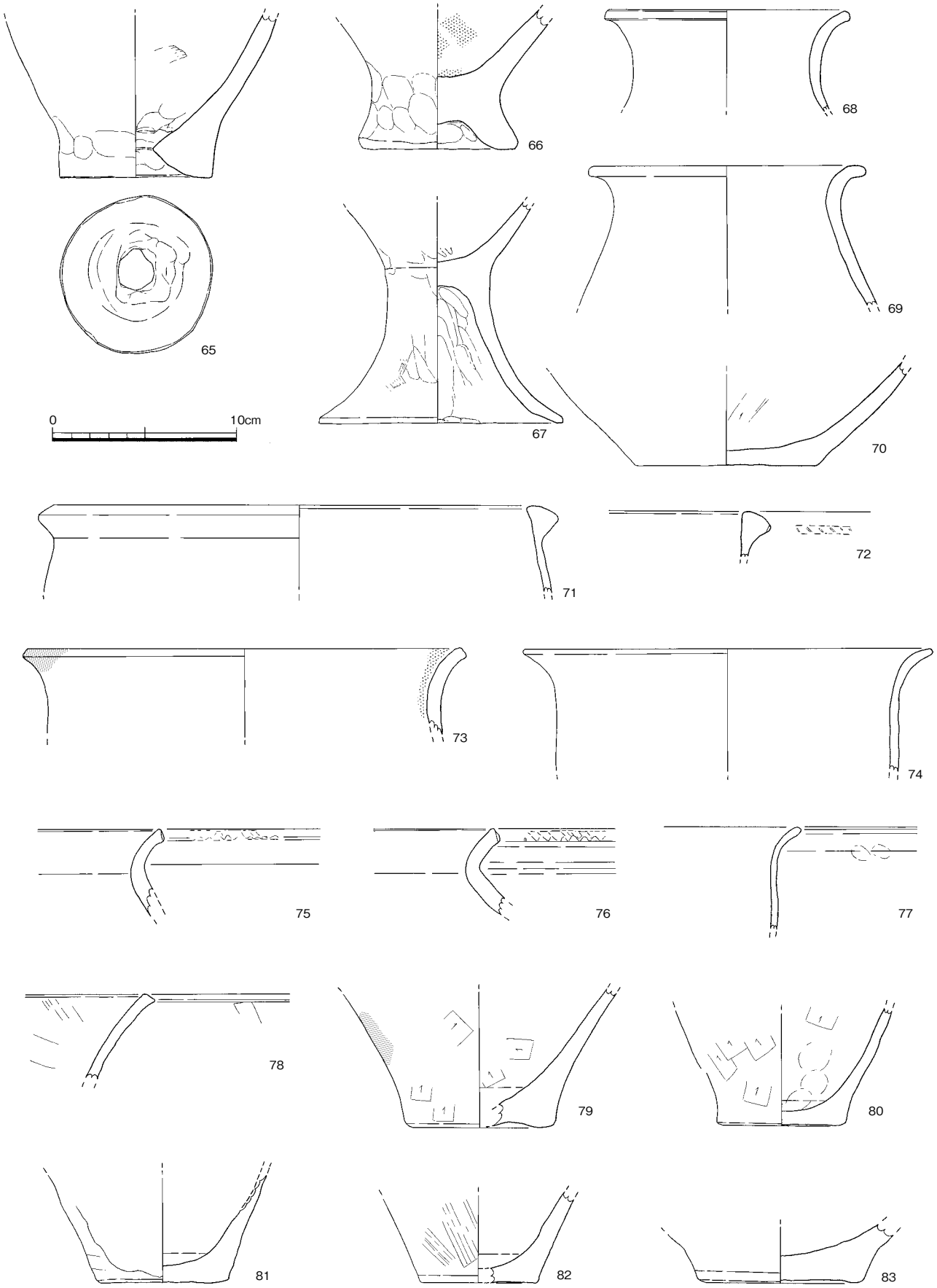
器高6.7cmを測る。40は中形甕の胴下位部分で底部を欠損する。外面は粗いハケメを施し、底部付近はそれをナデ消している。外面にスス、内面にコゲが残る。41は小形丸底壺で、口縁部が大きく開き、体部は浅い。全体をナデ調整しており、口径16.4cm、器高4.7cmを測る。42は口縁部分が伸びて、体部が小さくなる小形丸底壺で、底部を欠損する。口径12.0cm、器高7.3cmを測る。43は器台で、全体をナデ調整している。古墳時代前期後半に属する。44は鉢で、口縁部がやや内傾する。外面底部付近はヘラケズリを行う。外面にススが残る。口径13.0cm、器高5.3cmを測る。45は高杯である。口縁部を肥厚させるが、杯部との境は無くなっている。脚部は短脚化しており、口径14.4cm、器高9.0cm、脚裾径11.0cmを測る。46は素口縁の高杯で、鉢形の杯部に短脚化した脚がつく。口径14.8cm、器高8.1cm、脚裾径9.2cmを測る。47は高杯の脚部。すでに短脚化したもので、全体的に風化が著しく調整不明瞭である。48～52は手づくね土器。48～50は鉢、51は器台、52は鉢を模したもの。48は外面に黒斑、49は外面底部に黒斑が残る。52は外面にススが残る。53は須恵器で杯身の受け部片である。54は須恵器の甕で、外面は格子目タタキの後３条沈線を施し、内面は青海波文を残す。還元焼成が甘いためか瓦質である。55は須恵器の甕で、外面は縦方向のタタキ、内面はナデである。56は須恵器の甕。外面は格子目タタキ、内面は青海波文を残す。57は須恵器の甕で、口縁部から胴上位まで残存する。外面は格子目タタキ、内面は青海波文を残す。58は紡錘車であるが、穿孔を伴わない。径4.4cmを測る。59は逆Ｌ字形の口縁をもつ甕で、口縁が若干内傾する。外面は縦方向のハケメ、内面はナデ調整である。外面にスス、内面にコゲが残る。口径66.6cm、器高12.3cmを測る。60は如意形口縁をもつ甕で、胴上位に３条の沈線を有する。外面は縦方向の粗いハケメ、内面は頸部に横方向のハケメを施す。61は口縁が外方に開く甕で、口縁端部および突帯に刻み目を施す。62は甕で、外方に開く口縁部の端部に刻み目を施す。口径25.6cm、器高6.7cmを測る。63は口縁端部下端に刻み目を施す甕で、口縁部が外方へと開く。外面は粗いハケメ、内面は頸部に横方向のハケメを施す。口径20.0cm、器高6.6cmを測る。64は甕で、口縁端部下端に刻み目を施す。外面胴部は斜方向のハケメ、頸部付近は縦方向のハケメである。口径21.8cm、器高11.0cmを測る。65は甕の底部片で、底部の中心に両側穿孔を行う。66は甕の底部で、上げ底状を呈する。内面にコゲが残る。67は高杯の脚部。内外面にナデ調整を行う。68は壺の口縁部片で、風化により調整が不明瞭である。69は壺で、口縁部～頸部にかけて残存する。口径15.0cm、器高7.5cmを測る。70は壺の底部で平底を呈する。底径9.8cmを測る。71の甕は口縁部外面に粘土貼付けを行い、断面三角形を呈する。72も甕の口縁部片で、口縁部外面に粘土貼付けを行い、断面三角形を呈する。口縁端部に刻み目を施す。73は甕の口縁部片。全体に風化が著しく調整不明瞭である。外面にスス、内面にコゲが残る。74は口縁が外方に開く甕。口径22.0cm、器高6.6cmを測る。75・76は甕の口縁部片で、口縁端部の下端に刻み目を施す。77は口縁が外方に開く甕で、外面頸部の指オサエがわずかに残る。78は甕の口縁部片で、内外面共に工具によるナデを施す。79は甕の底部片でやや上げ底状を呈する。外面にススが残る。80は甕の底部片で、板状工具によるナデを施す。81は甕の底部片で平底である。82は甕の底部片で、外面は斜方向のハケメである。83は甕の底部片でやや上げ底状である。底径8.9cmを測る。84は甕の底部片で、上げ底状を呈する。底部付近は指ナデで成形する。85は甕の底部片で、上げ底状を呈する。底部付近は指ナデで成形する。86は甕の底部片で、上げ底状を呈する。外面は板状工具によるナデである。87は甕の底部片で、上げ底状を呈する。88は高杯の口縁部片。89は



第73図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図③（●は１／２、１／３）



第74図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図④（1／3）



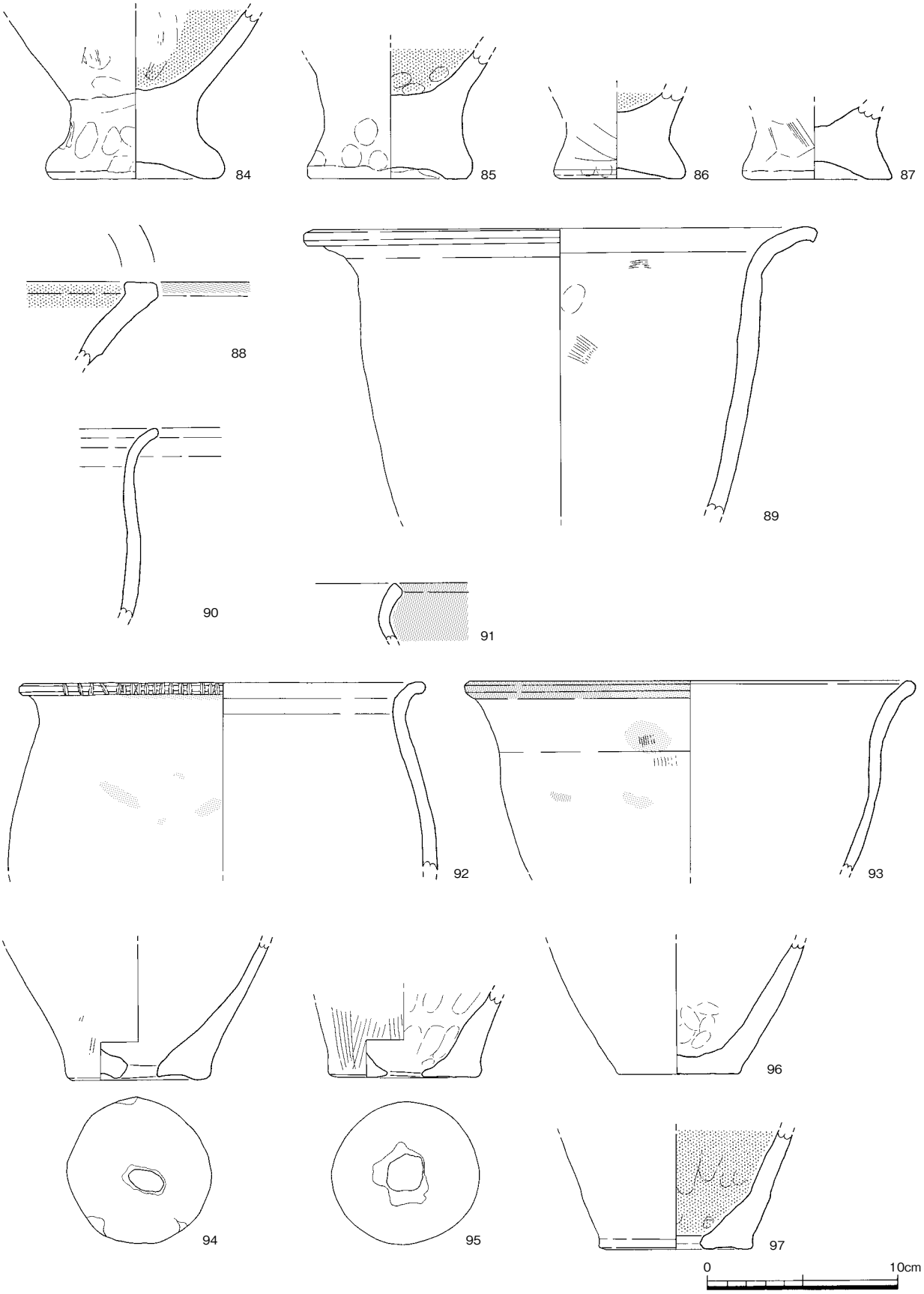
第75図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図⑤（1／3）

甕で、底部を欠損する。外に開く口縁から肩が張らない胴部に至る。全体に風化が著しく調整不明瞭であるが、内面にハケメが残る。口径28.0cm、器高15.2cmを測る。90は如意形の口縁をもつ甕で、全体に風化が著しく調整不明瞭である。91は甕の口縁部片で、横ナデで仕上げる。92は甕で、口縁部から胴上位まで残存する。口縁端部に刻み目を施す。口径21.0cm、器高9.8cmを測る。93も甕で、如意形口縁から肩が張らずに窄まる。口径23.2cm、器高10.0cmを測る。94は甕の底部片で底部穿孔を行う。底部は上げ底状で、全体的に風化が著しく調整不明瞭である。95は甕の底部片で底部穿孔を行う。外面は縦方向のハケメ、内面は指ナデである。96は甕の底部片で平底を呈する。97も底部穿孔する甕の底部で、内面の指頭痕が明瞭に残る。内面にコゲが残る。98も底部片でやや上げ底状を呈する。99もやや上げ底状の底部をもつ甕で、内外面ナデ調整を施す。100は甕の底部片で、上げ底状を呈する。101～103は上げ底状を呈する甕の底部片である。101は上げ底の裏にススが残る。103は外面の底部にスス、内面にコゲが付着。104は鋤先口縁をもつ壺で、口縁外面を粘土貼付して肥厚させる。風化が著しく調整不明瞭である。口径20.2cm、器高5.4cmを測る。105は壺の口縁部片。風化が著しく調整不明瞭である。106は直口壺の口縁部片。外面には破裂痕、内面に横方向のハケメが確認できる。107は壺で口縁部を欠損する。平底で、胴が張る形態。108・109は甕の底部で、上げ底状を呈する。109は底裏にスス、内面にコゲが残る。110は高杯で、口縁部と脚裾部を失っている。111は壺で鋤先口縁をもち、肩が張り平底の底部へと窄まる。外面は横方向のミガキがあるが、内面は器壁が剥離しており、調整不明瞭である。外面に丹塗り、底部にススが残る。口径22.4cm、器高24.0cm、底径7.1cmを測る。112は甕棺の口縁部片である。口縁部を粘土で肥厚させ、内外面横方向のハケメを施す。113はやや内傾する鋤先口縁をもつ甕で、口縁下に1条の突帯を巡らす。114は甕で胴下位を欠損する。内傾する口縁をもち、口縁下に1条の突帯を巡らす。外面にススが残る。115は甕で口縁が大きく外方に開くものである。口縁下には1条の突帯を巡らす。116も甕で口縁が大きく外方に開くものである。口縁下には1条の突帯を巡らし、刻み目を施す。外面にススが付着。117は甕。口縁は外方に開き、肩があまり張らないタイプ。118は壺。口縁外面を粘土で肥厚させる。口径21.7cm、器高5.6cmを測る。119は壺で、口縁外面を粘土で肥厚させる。全体的に風化が著しく調整不明瞭。外面に一部ススが残る。120・121は甕の底部片で平底を呈するもの。122～133は甕の底部片で上げ底状を呈するもの。底部付近はハケメを残すものもあるが、ナデで仕上げるものが多い。123は内面にコゲ、124～126は外面にスス、内面にコゲを残す。127・132は内面にコゲが付着している。134は壺で頸部から胴下位までの残存である。頸部と胴部の境目には1条の沈線を巡らす。外面にスス、内面にコゲを残す。135は壺の胴部片で、横向きの山形文に3条の沈線を巡らす。136は壺の底部で、若干上げ底気味である。外面にコゲを残す。137も壺の底部で、若干上げ底気味の底部を持つ。138・139も壺の底部片。140は小形の鉢か。如意形口縁もち、肩がわずかに張る。141は断面三角形の口縁をもつ甕で、胴以下を欠損する。口縁下に1条の突帯を巡らす。142は甕で、口縁端部に刻み目をもつ。143は口縁内面を粘土で肥厚させる甕で、内面にハケメの痕跡がわずかに残る。外面にススが残る。144～146は甕の底部。146は内面にコゲが付着。147～149は上げ底状を呈する甕の底部。148は内面にコゲを残す。150・151は阿高式土器で深鉢である。152～154は紡錘車で、153・154は風化で平面形が円形ではなくなっている。

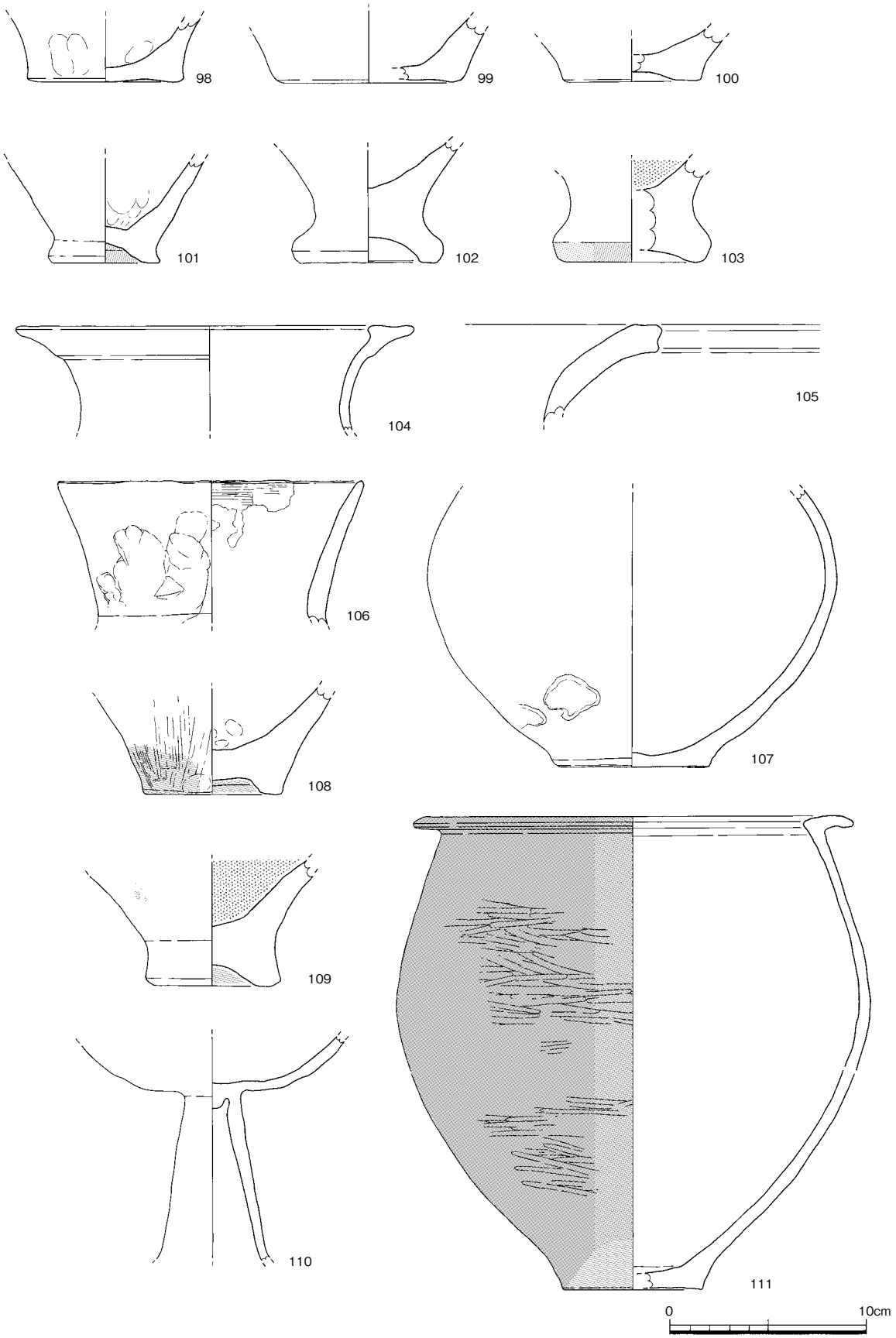
155からは石器である。155～175は石鏃である。155は平面形が二等辺三角形で、抉りが浅く

脚端が尖る。156は平面形が正三角形で、抉りが深く脚端が尖る。157は基部を欠損する石鏃で平面形が二等辺三角形で、抉りが深く、脚端部は平坦である。主要剥離面を残す。158は頂部を欠損する。平面形は正三角形で、抉りは浅い。159は平面形が歪な二等辺三角形を呈する。基部の抉りが深く、脚端部が尖る。160は脚端部を欠損する。平面形が正三角形で、抉りが浅い。161は頂部を欠損する石鏃で、裏面に主要剥離面を残す。162は平面形が二等辺三角形で、抉りが浅く、脚端部に丸みをもつ。163は頂部を欠損する。平面形は二等辺三角形で、抉りが浅く脚端部は尖る。164は脚端部を欠損する。抉りの深さは不明であるが、平面形は二等辺三角形である。165は平面形が二等辺三角形で、頂部と脚端部を欠損するものである。抉りは深い。166は主要剥離面を残し、刃部調整を行う石鏃。167は周縁が張らない石鏃で、抉りが浅い。168は周縁が張るもので、抉りが非常に浅く脚端部は尖る。169は歪な三角形を呈し、脚端部を欠損する。170は平面形が正三角形で、脚端部を欠損する。抉りは浅い。171は主要剥離面を残し、製作技法的に簡略化した石鏃である。脚端部は丸みを帯びる。172は平面形が正三角形で、やや周縁が張り、抉りが浅い。173は二等辺三角形を呈し、抉りがないタイプ。174は平面形が正三角形で、やや周縁が張り、抉りが浅い。175は平面形が二等辺三角形で、抉りがないタイプ。176～179は剥片。180は大形の石鏃で、サヌカイト製である。両縁に刃部を形成し、抉りをもたない。

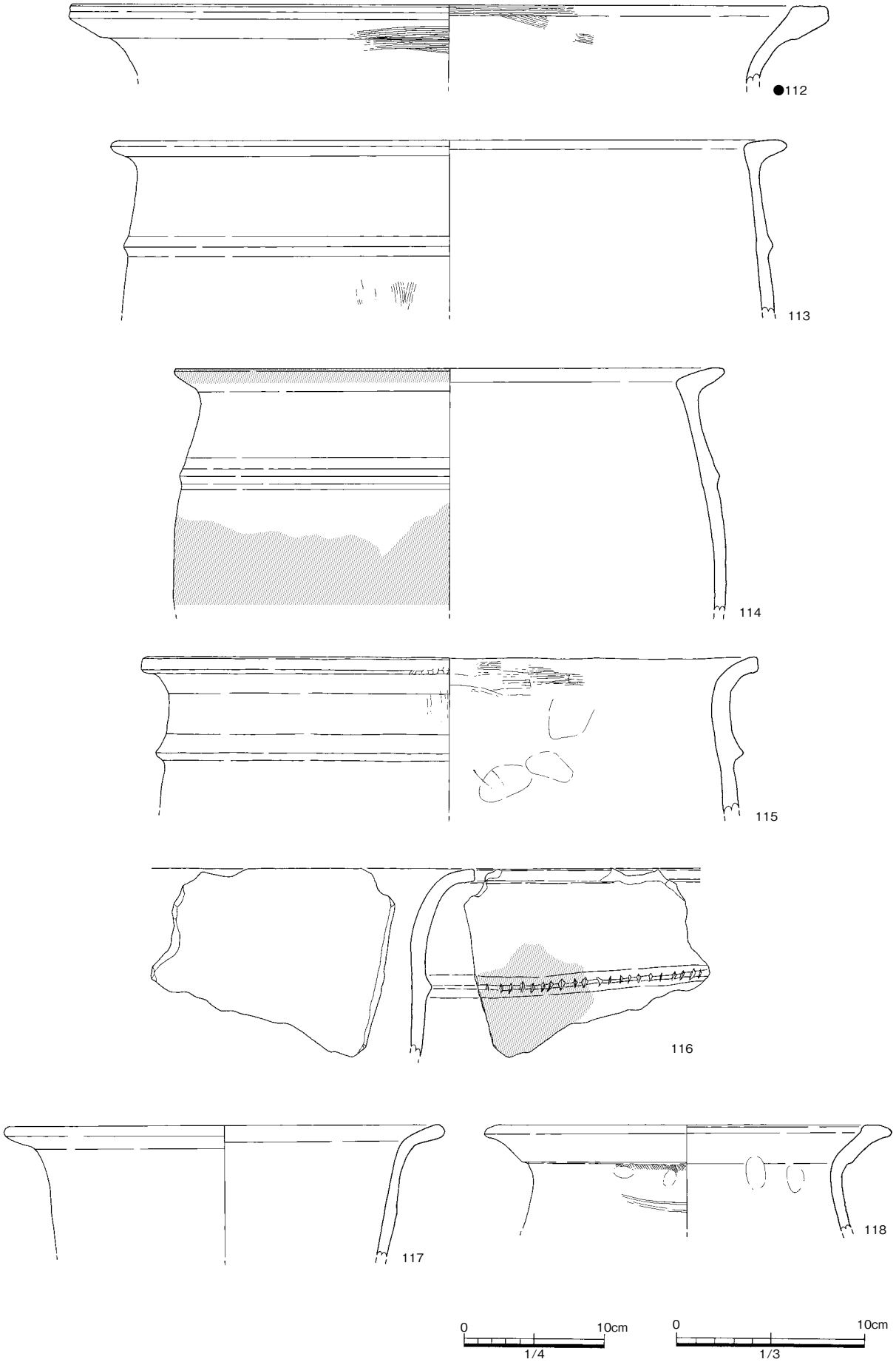
181～214は蛤刃石斧である。181は刃部を欠損する蛤刃石斧。182は全体に細かな剥離調整が確認できる蛤刃石斧で、刃部を欠損する。183は刃部を欠損する蛤刃石斧で、研磨前の剥離調整が確認できる。184は刃部および上端部を欠損する蛤刃石斧。刃部欠損時の衝撃が強かったため、両側共に体部中央付近まで剥離している。185は上端部が狭く細長い印象を受ける蛤刃石斧。やはり刃部が失われている。186は上部と刃部が欠損する蛤刃石斧。187も185と同様、細長い印象を受ける蛤刃石斧。研磨前の剥離調整が確認できる。188・189は長方形に形の整った蛤刃石斧で、刃部を欠損する。190は上部および刃部まで欠損した蛤刃石斧で、欠損が無ければ端正なつくりであったであろう。191は刃石斧の上部のみ残存する。細かな剥離調整がある。192は小形の蛤刃石斧で、上部のみ残存している。細かな研磨痕跡がある。193は刃部を欠損した蛤刃石斧で、上端がやや窄まる。194は上端部および刃部が欠損する蛤刃石斧。195は蛤刃石斧の上部のみ残存するもので、研磨前の剥離調整が確認できる。196は小形の蛤刃石斧で、上部のみ残存する。裏面の剥離調整が明瞭に残る。197も上部のみ残存する小形の蛤刃石斧。198は蛤刃石斧の上部のみの残存で、研磨前の剥離調整が残る。199は上部と刃部が欠損する蛤刃石斧。200も上部と刃部が欠損する蛤刃石斧で、研磨が丁寧に行われている。201は蛤刃石斧の上部のみ残存する。202も上部と刃部が欠損する蛤刃石斧で、細身の印象を受ける。203は蛤刃石斧の体部片で、小谷部の傾斜面から出土。204は刃部を欠損する蛤刃石斧。刃部が失われた衝撃で下部の剥離が著しい。205は上部および刃部まで欠損した蛤刃石斧で、丁寧に研磨している。206は刃部が生きているが、使用痕が著しい。上部は欠損する蛤刃石斧。207は刃部の使用痕が著しく、かなり磨り減っている蛤刃石斧。208は刃部のみの残存。刃部に使用痕がわずかに残る。209・210も刃部のみ残存し、上部を欠損する。刃部の使用痕跡が少なく、早い段階で欠損したものであろう。211は刃部のみ残存するが、刃部先端が丸みをもち、磨耗している。212は刃部のみ残存しており、211ほど磨耗は進行していない。初期段階での破損が考えられる。213は上部、下部共に破損している蛤刃石斧。214・215は断面中央から剥離してしまっている蛤刃石斧の一部である。



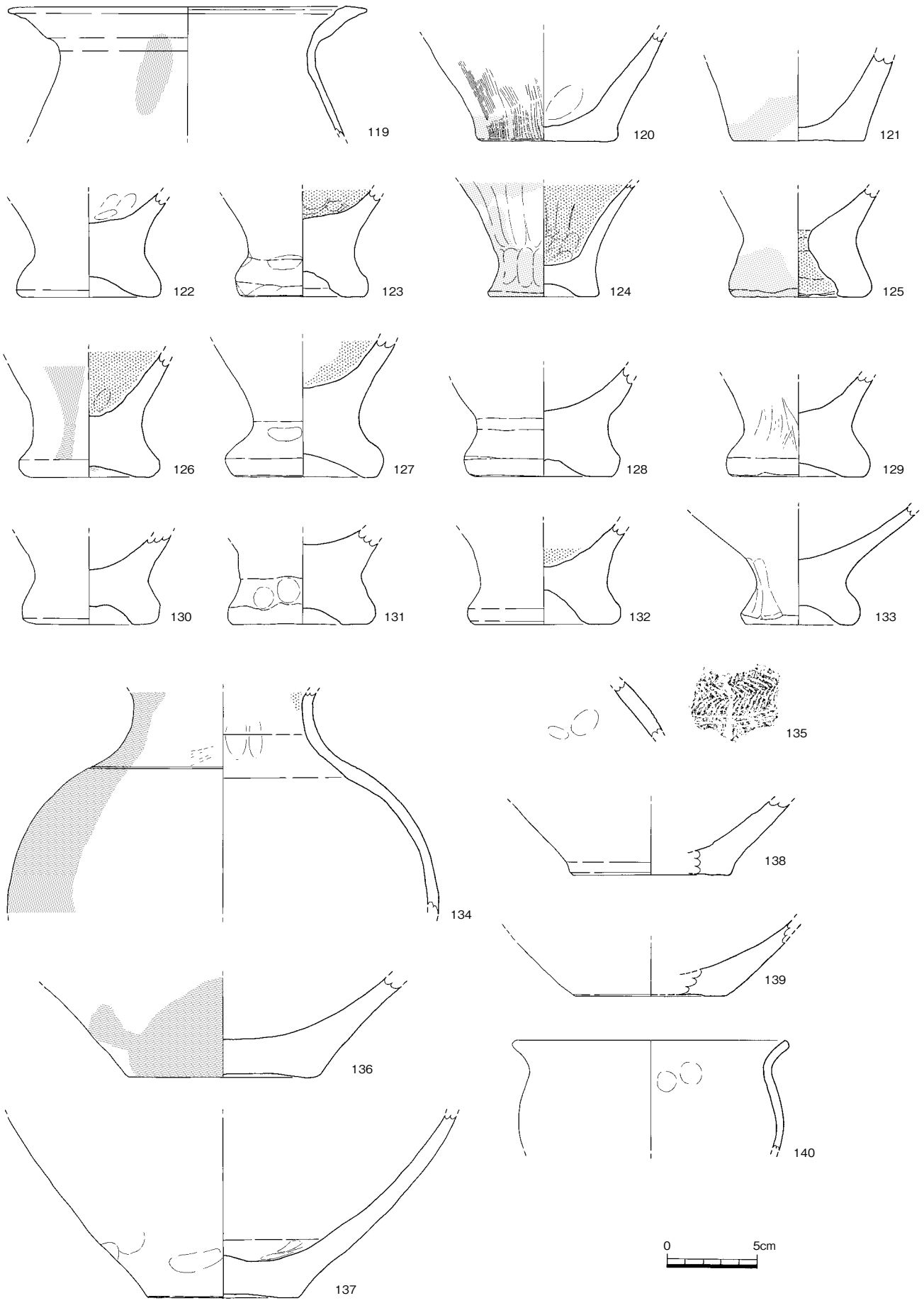
第76図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図⑥（1／3）



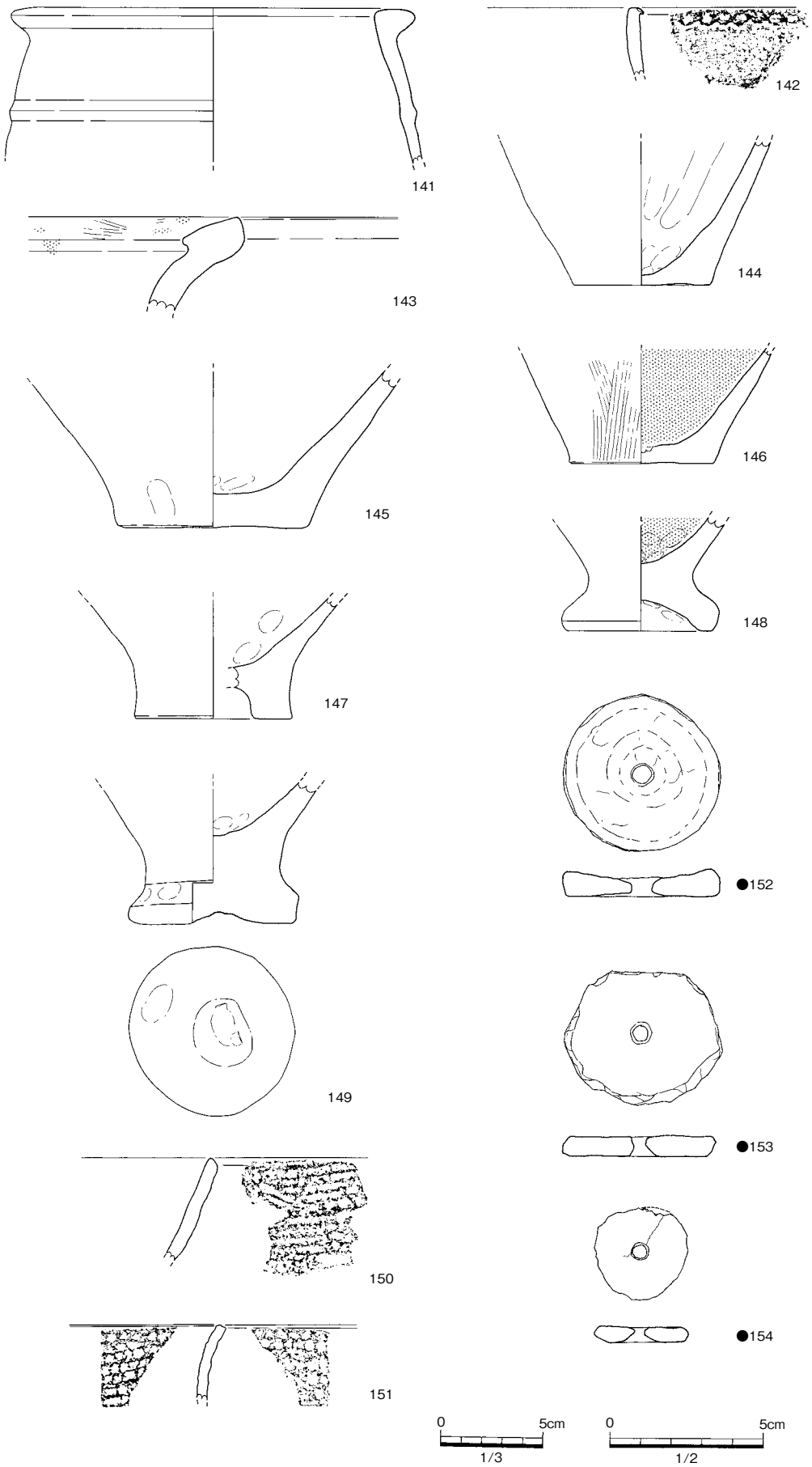
第77図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図⑦（1／3）



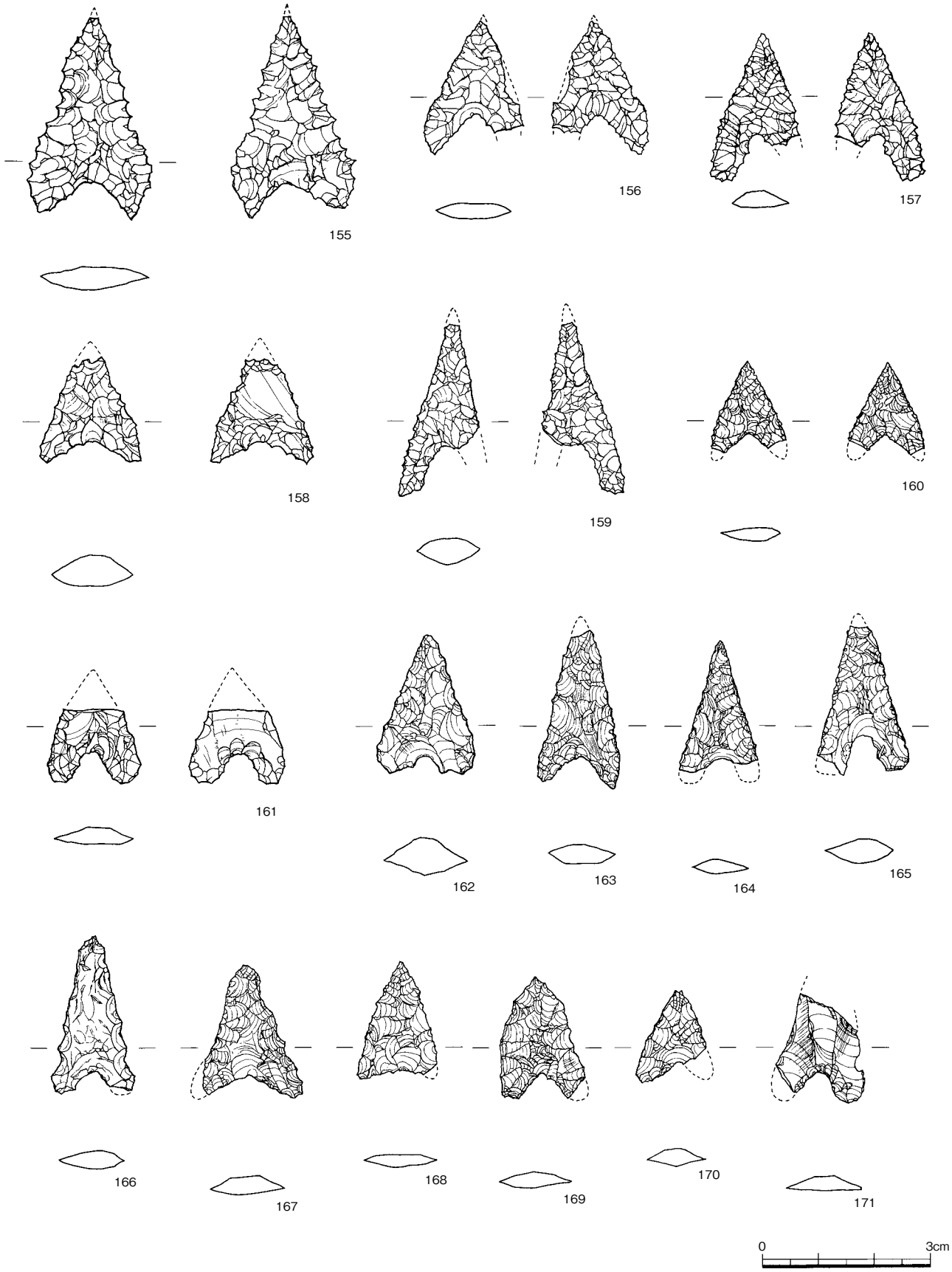
第78図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図⑧（1／3、●は1／4）



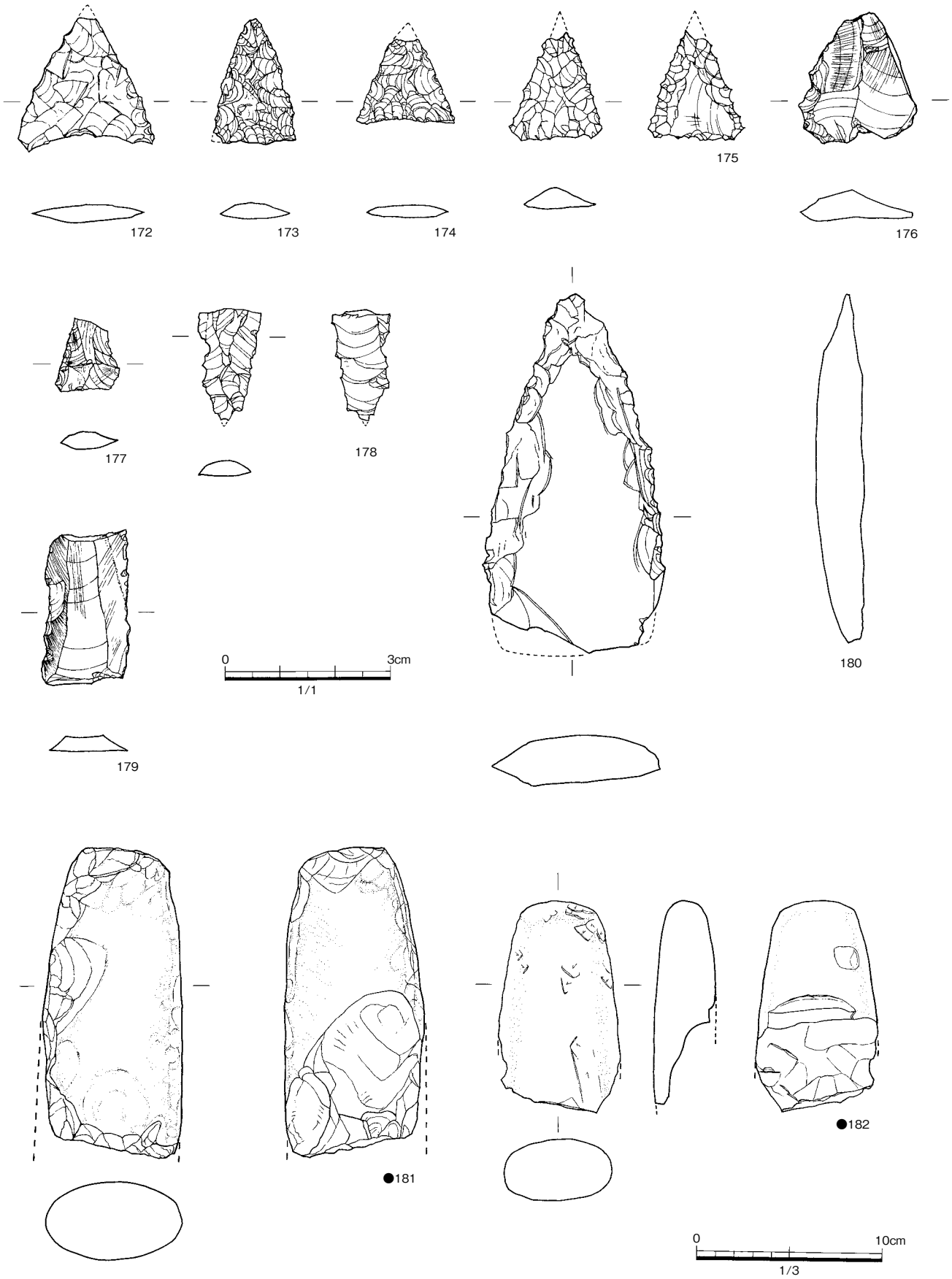
第79図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図⑨（1／3）



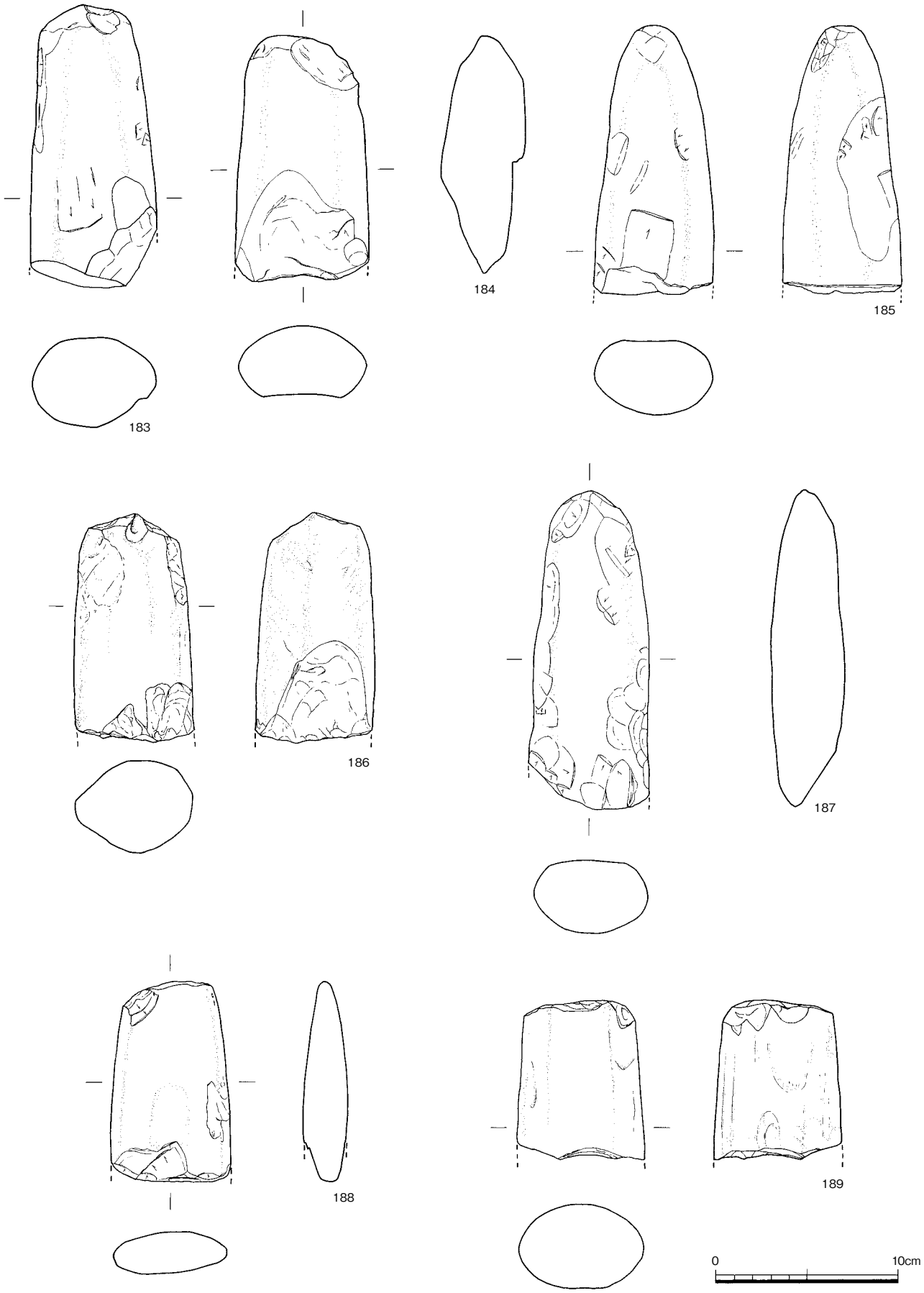
第80図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図⑩（●は1／2、1／3）



第81図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図⑪（1／1）



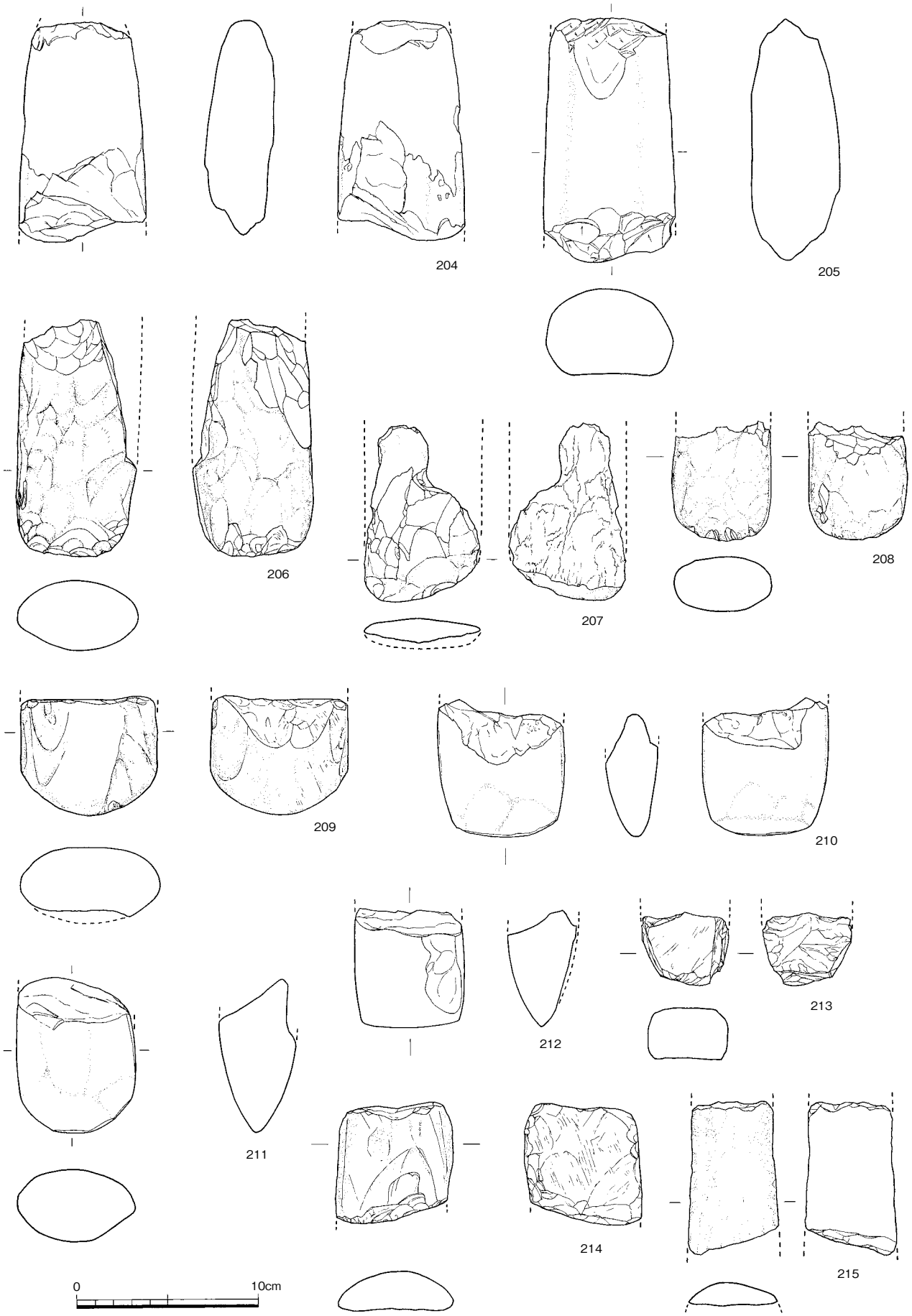
第82図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図⑫（1／1、●は1／3）



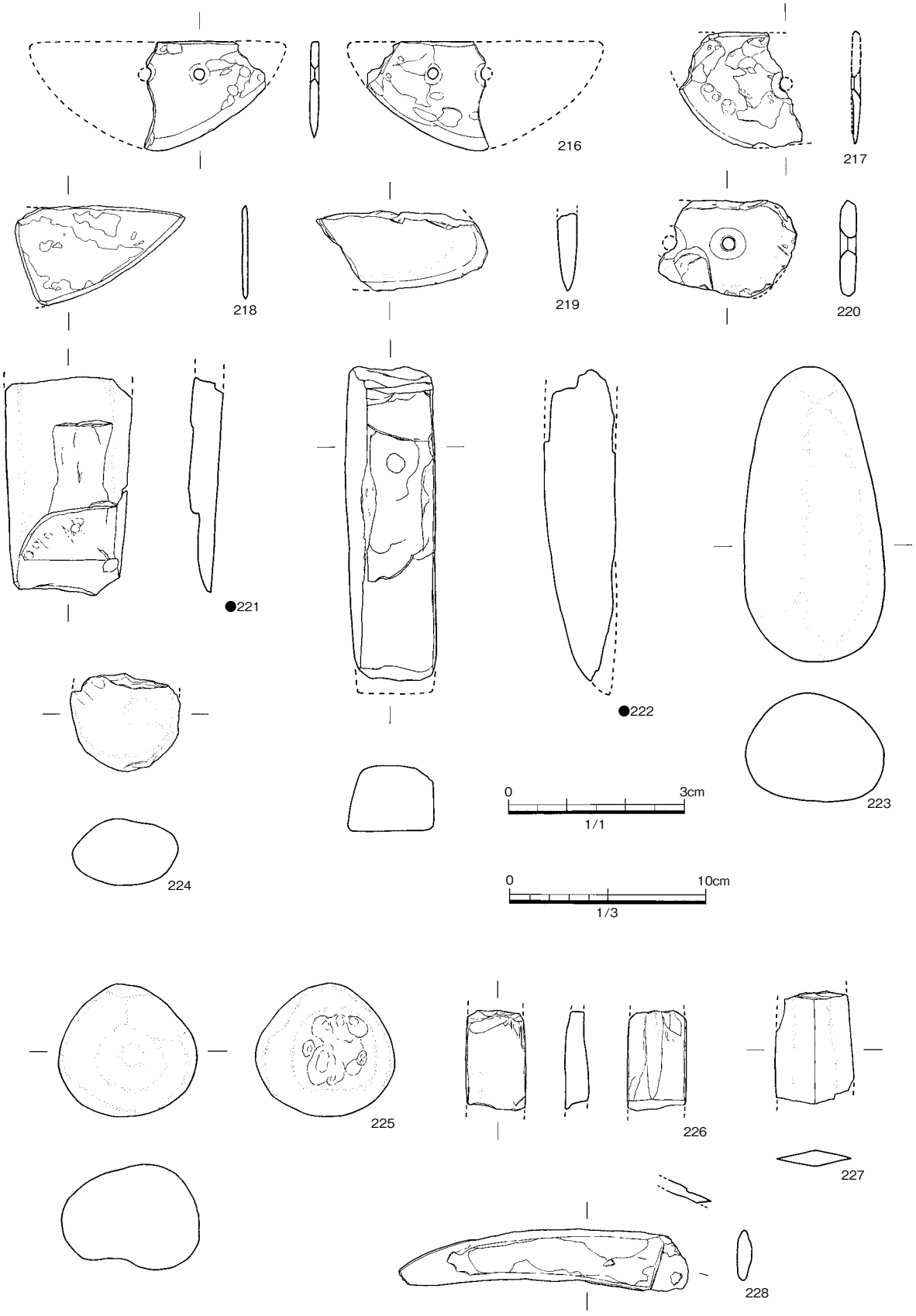
第83図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図⑬（1／3）

第84図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図⑭（1／3）

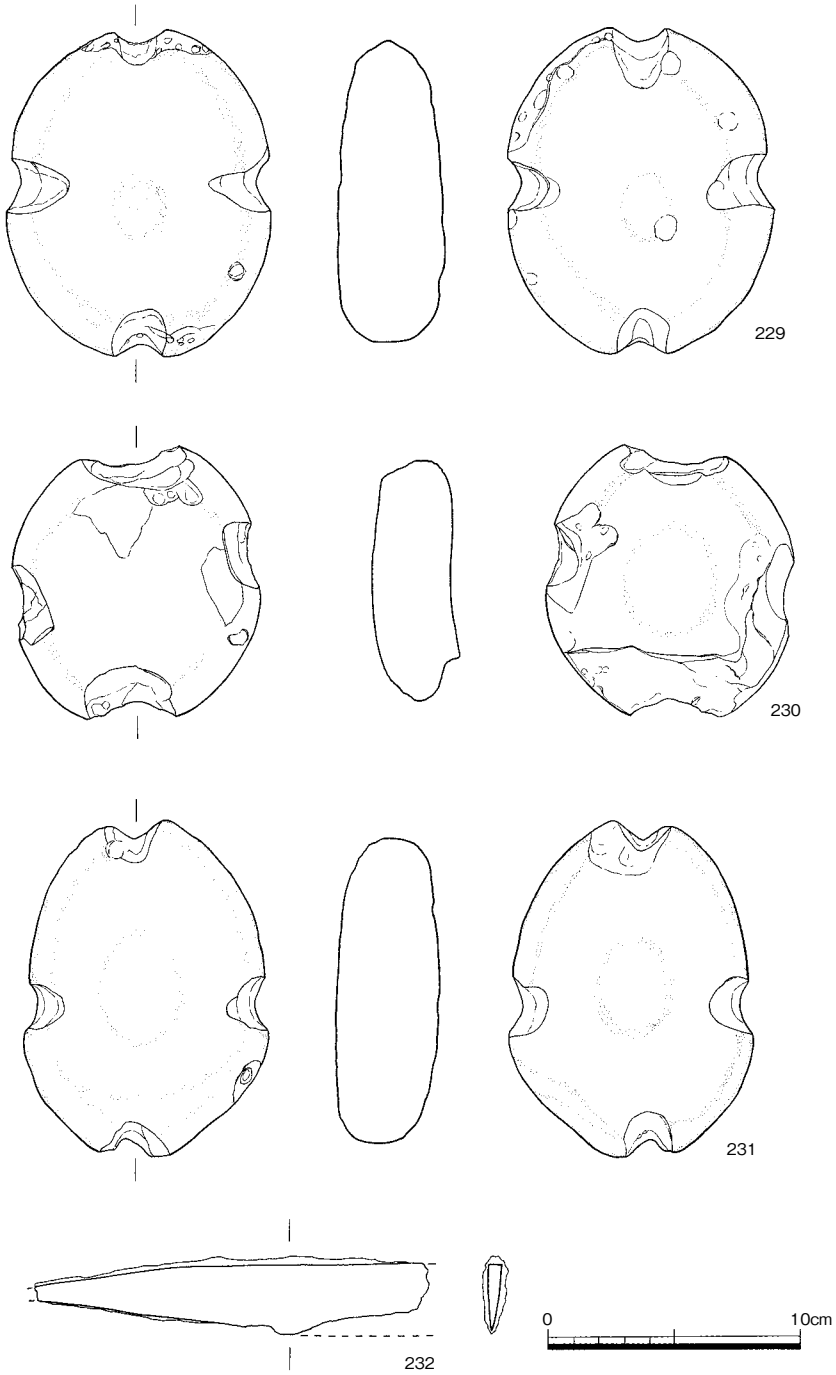
216～220は石包丁。216・217は穿孔部分のみ残存している。218も石包丁の一部であるが、穿孔が見当たらない。219はかなり使用された石包丁であるが、穿孔が見当たらない。220もかなり使用された石包丁で、刃部断面は丸みをもつ。221は扁平片刃石斧。刃部から上を欠損している。222は柱状片刃石斧で、刃部および上部が欠損しており、使用後に破損、破棄されたものである。223は磨り石で、上部に向かって窄まる。全体的に研磨を施す。224は磨り石の一部で、上部を欠損する。225は敲石で、表面に使用痕跡を残す。226は砥石。小形のものであるが、中央に筋が走る。227は石剣の一部で、中央に稜が走る。断面がきれいな台形を呈する。228は石鎌で、把手を取り付けるため基部を１段凹ませている。全体的に磨耗しており、刃部は丸みを帯びる。229～231は石錘。232は鉄製刀子で、刃部を失っている。233～242は中世包含層から出土した石鍋およびその転用品である。233は小形の石鍋で、細かな削りで成形している。底部を欠損する。234は滑石製石鍋で、口縁からやや下がった位置に把手を造り出す。底部を欠損する。外面把手にススが残る。235は石鍋の口縁部片で、外面はススが濃く付着、内面にはコゲが付着しており、使用頻度が高い。236は石鍋の口縁部片で、口縁からやや下がった位置に把手を造り出す。外面にススが付着する。237は石鍋の把手片で、外面にススが付着する。238も石鍋の把手部分で、内外面の細かな削りが残る。239は石鍋の底部片。240は石鍋の転用品で、両面穿孔により１つ穴を開けている。241は石鍋の把手部分を利用した転用品で、把手部分に径3.5㎜の孔をあけている。外面にススが付着している。242は小形の石鍋を転用したもの。口縁下に１つ穴をあけている。



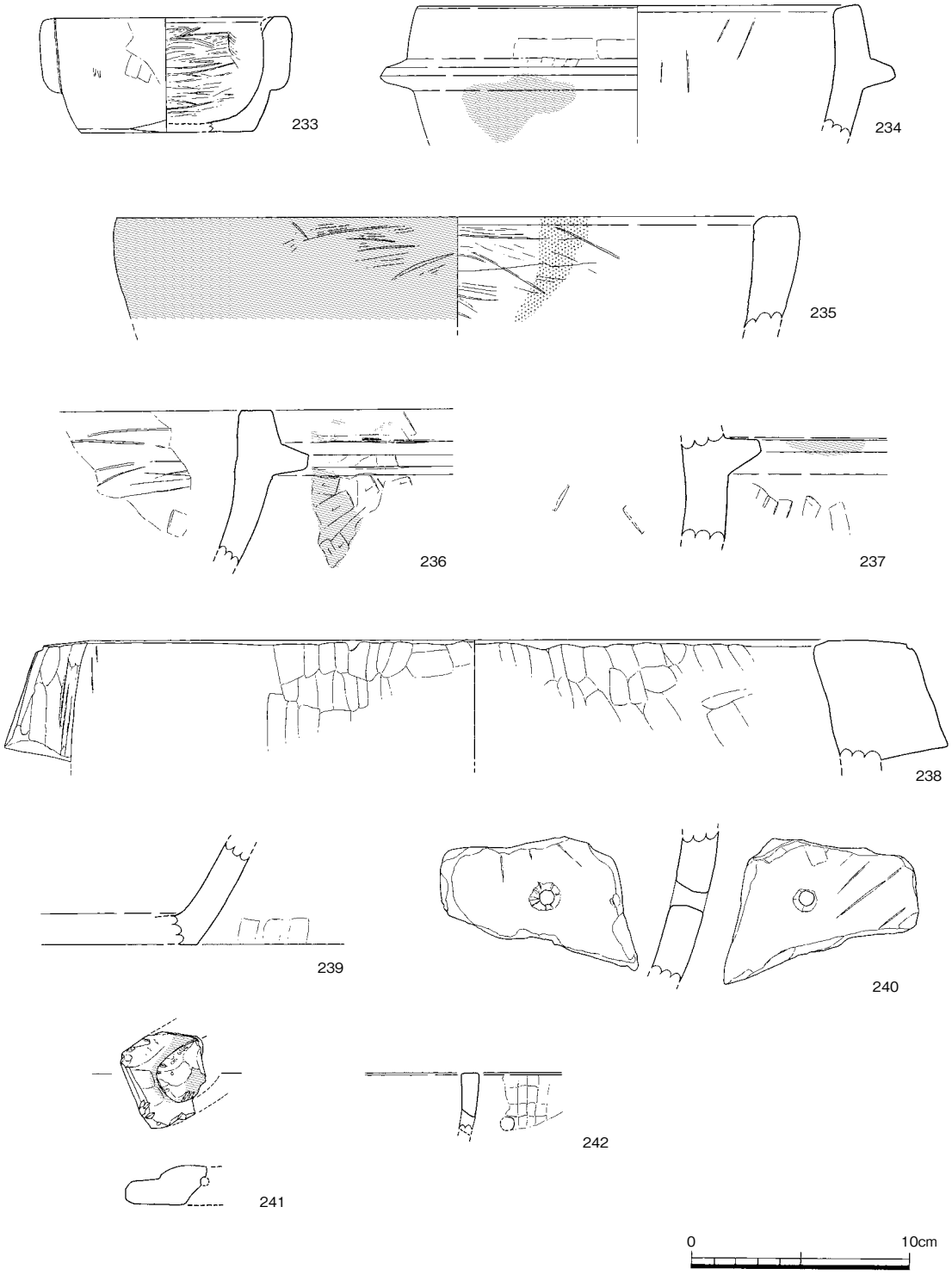
第85図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図⑮（1／3）



第86図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図⑯（●は1／1、1／3）



第87図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図⑰（1／3）



第88図　E地区　小谷部包含層出土遺物実測図⑱（1／3）

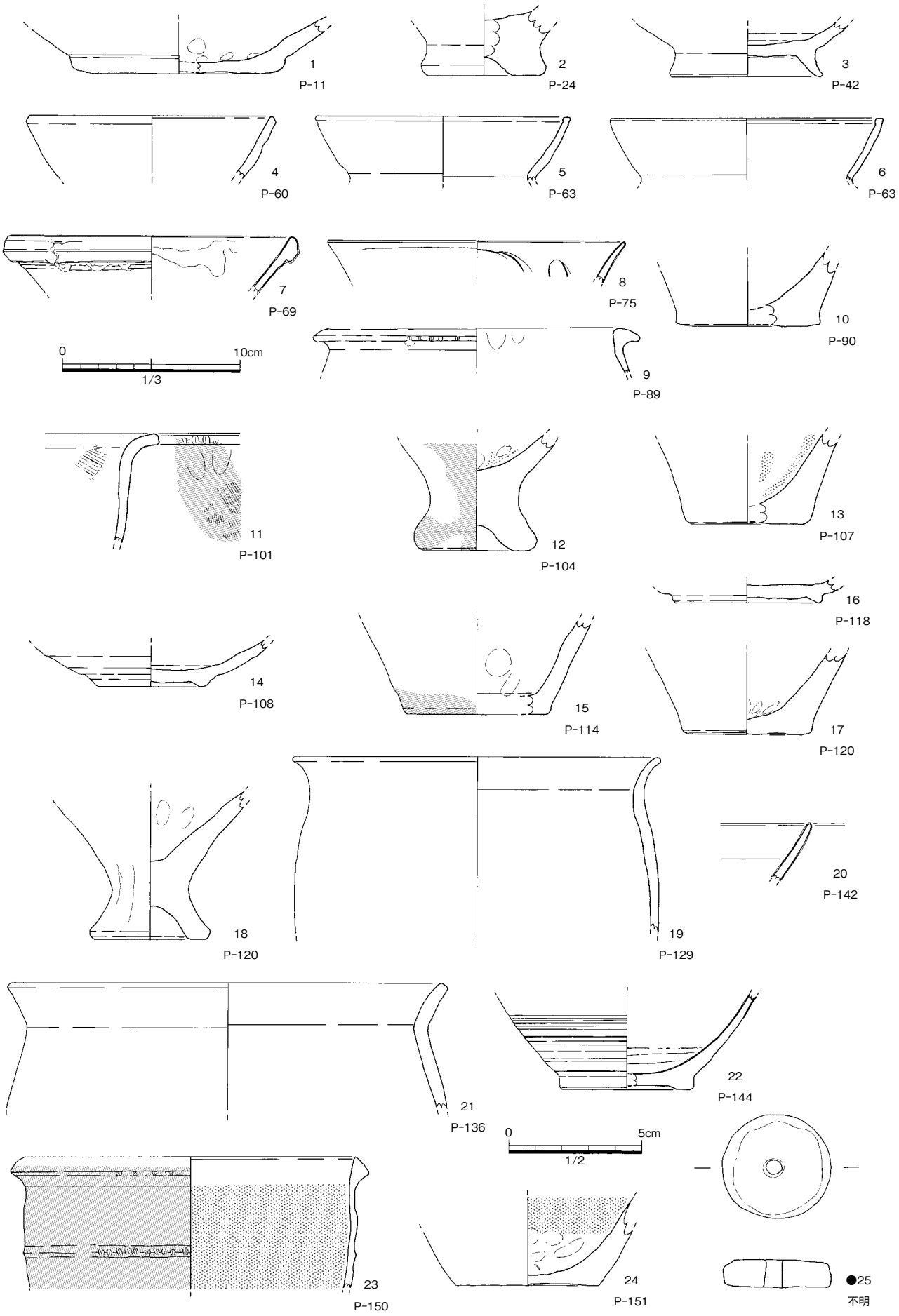
⑧ピット

柱穴として認識できなかったピット群であり、出土遺物のみ取り上げる。

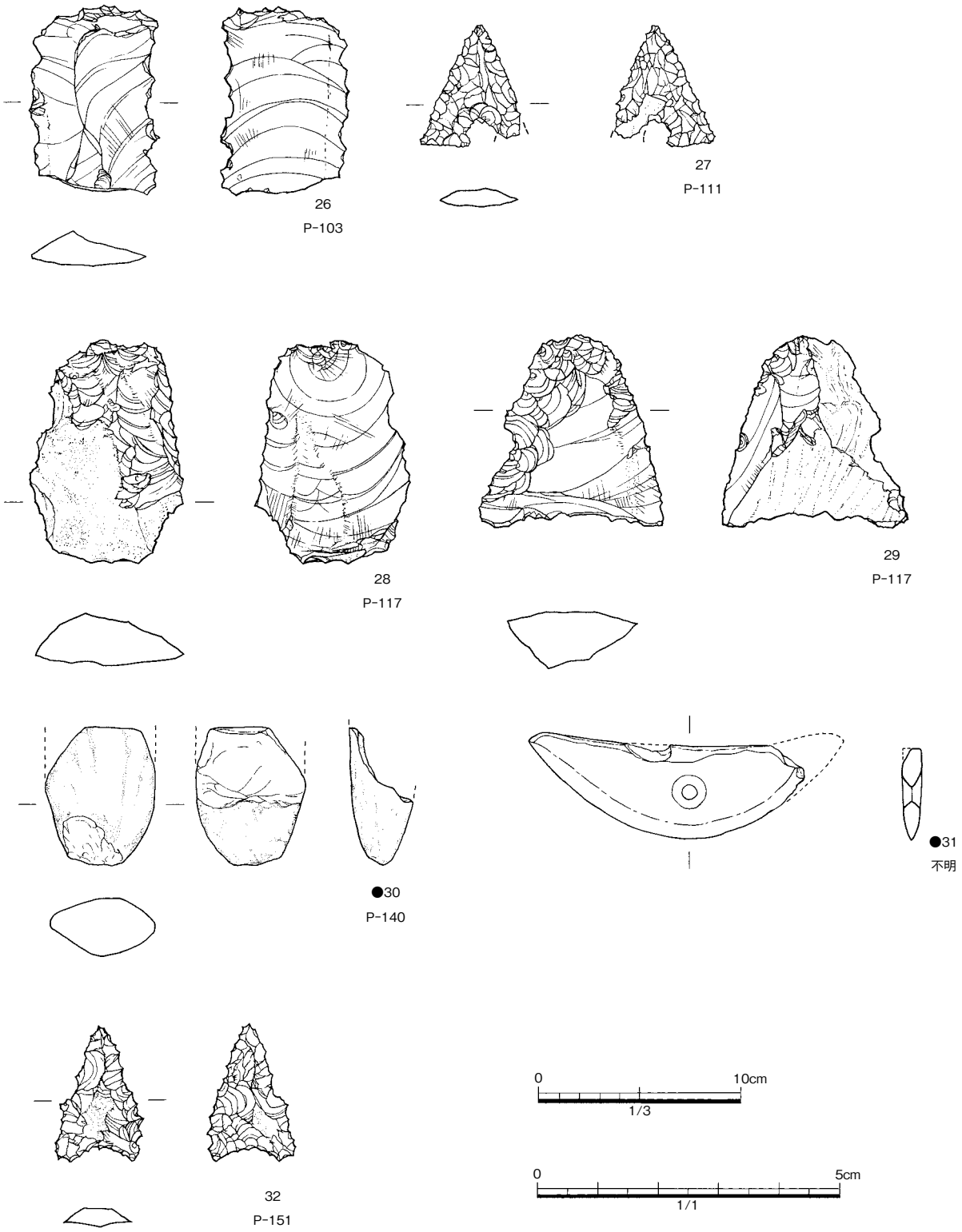
出土遺物（第89・90図）

１はＰ－11から出土した壺の底部片で、内面の指オサエが残る。２は甕の底部片でＰ－24から出土したもの。上げ底状を呈する。３は高台付杯で、Ｐ－42からの出土。４は土師椀で底部を欠損する。Ｐ－60からの出土。５はＰ－63から出土した甕の口縁部で、口縁端部を内側につまみ出す。６も甕の口縁部片で、Ｐ－63から出土したもの。７はＰ－69から出土した玉縁を持つ白磁椀。８はＰ－75から出土した龍泉窯青磁で、内面に花文を巡らす。９はＰ－89から出土した甕の口縁部片で､口縁端部に刻み目を施す。10は甕の底部片で平底である。Ｐ－90から出土。11は甕の口縁部片で、如意形状を呈する口縁の端部に刻み目を施す。Ｐ－101からの出土。12は甕の底部片で、上げ底状を呈する。Ｐ－104からの出土。13はＰ－107から出土した甕の底部片。14は高台付土師椀で、口縁部を欠損する。Ｐ－108からの出土。15はＰ－114から出土した甕の底部片である。16は高台付土師椀で、Ｐ－118からの出土。17はＰ－120から出土した甕の底部片で、平底である。18は上げ底状を呈する甕の底部片で、Ｐ－120から出土した。19はＰ－129から出土した甕で、如意形状の口縁をもつ。20は青磁椀で、内面に円圏を持つ。Ｐ－142からの出土である。21はＰ－136から出土した甕で、くの字口縁である。22はＰ－144から出土した陶器の瓶である。23は甕で、断面三角形の口縁およびその下位にある突帯に刻み目を施す。Ｐ－150からの出土。24はＰ－151から出土した甕の底部片である。25は出土遺構が不明な紡錘車で土製である。

26～32は石器である。26はＰ－103から出土した剥片。27は打製石鏃で､平面形が正三角形で、基頂部を欠損している。Ｐ－111からの出土。28はＰ－117から出土した剥片で、自然面を残す。29は左側面のみを調整剥離している剥片で、裏面には自然面が残る。Ｐ－117からの出土。30はＰ－140から出土した磨製石斧。31は石包丁で、中央に１つ穴を開ける。上面が若干湾曲する。出土遺構は不明。32は打製石鏃で、平面形が二等辺三角形で、抉りが浅いタイプ。Ｐ－151から出土したもの。



第89図　E地区　ピット出土遺物実測図①（●は1／2、1／3）

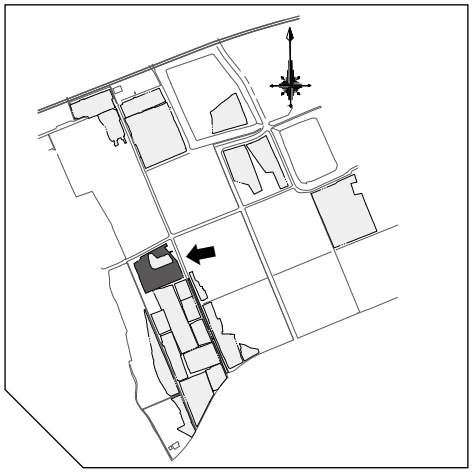


第90図　E地区　ピット出土遺物実測図②（1／1、●は1／3）

5．G地区の調査

（1）調査概要（第93図、図版13）

本調査区は前原東土地区画整理事業地の西側中央部に位置し、旧地形では段丘の先端部にあたる。調査前、本地区は水田として利用されており、平坦な地形であったが、表土剥ぎを行ったところ、東西の地形の落ち込み部と浅い小谷が確認できた。調査は段丘上を対象とし、平成25年９月～平成26年４月まで実施した。



第91図　G地区の位置

（2）遺構と遺物（第93図、図版13）

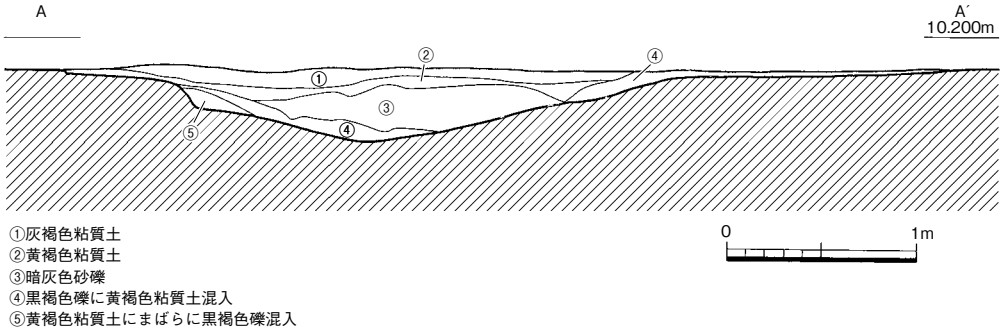
本地区は標高約９m前後で、主に北と東西の３方向に向かって勾配がついている。主な遺構としては、調査区の南中央から北西にかけて、小谷が横切っている。これは、段丘南端のE地区から続くもので、本遺跡群内で検出された総延長は直線距離で約250mある。このほか、井戸・ピット・土坑等が確認されているが、圃場整備によって削平を受けたためか、全体的に遺構の残りはよくない。

①小谷部（第92図、図版13）

小谷部はG地区の南端で屈曲し、北西へ向きを変える。現状で幅は約２～７m、深さは約0.4mであり、これは圃場整備によって削平を受けたため、細くかつ浅くなっているものと思われる。谷の埋土は上層が粘質土、下層になるとこれに砂礫が混じる傾向にあり、遺物は上層で弥生時代～中世のもの、下層で弥生時代のものが出土している。

出土遺物（第95・96図、図版13・14）

小谷部の出土品は１～14・19がある。まず、土器・土製品としては７～13が弥生土器の口縁部および底部で弥生時代前期末～中期前半のもの、14が小型の土師皿、２が投弾、19が軒丸瓦で、外縁がないため、正確な時期判断は難しいが、文様の形状から15～16世紀ごろと考えられる。



第92図　G地区　小谷部土層断面実測図（1／40）

つづいて、石器としては１が石鏃、３が石錘、４～６が石斧である。石材は１が黒曜石、３が花崗岩、４が蛇紋岩系、５・６が玄武岩である。遺物の出土層位は１・３～５・７・14・19が上層、そのほかは下層である。

これらの出土遺物から、Ｇ区における小谷は弥生時代から徐々に浅くなっていたものの中世後期までは存在しており、埋没時期は中世末以降になると考えられる。

②井戸

１号井戸（第94図、図版13）

本調査区では１基の井戸が検出されている。素掘りの井戸で、平面形態は円形であり、直径は約1.6ｍ、深さは約2.3ｍあった。埋土の観察を行った結果、人為的に埋め戻された可能性がある。また、井戸の壁面を成す地山をみると、上層と下層で土質が変わり、上層は黄褐色の粘質土であ

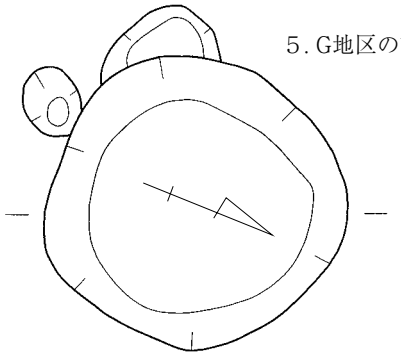
第93図　Ｇ地区の主な遺構実測図（1／500）

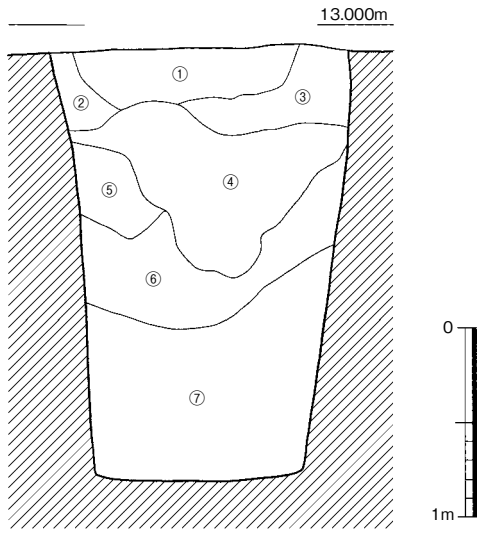
るが、下層は粗砂層や砂礫層で現在も湧水があった。このため、木器等の有機物も出土している。

出土遺物（第96図、図版14）

この井戸の出土品としては、15～18がある。15と17は火舎の破片で、それぞれ装飾として15には菱形、17には○に十のスタンプ文が施されている。16は土師皿で、底部は糸切りである。18は淡緑色の陶器碗で、灰を混ぜた銅緑釉を厚くかけたと推測される。高台は露胎となっており、胎土は暗灰茶褐色である。

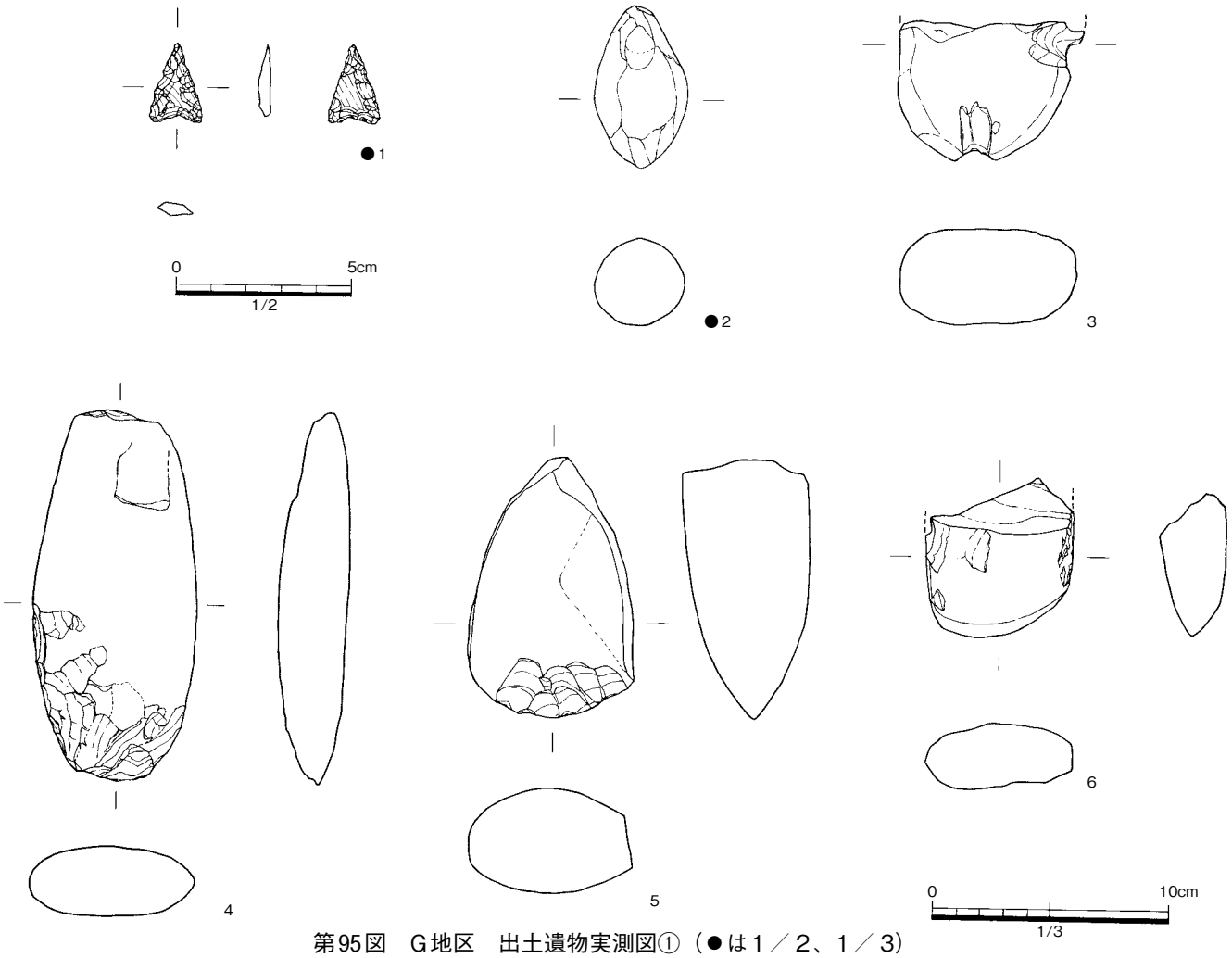
これらの出土遺物から、この井戸は16世紀ごろのものと考えらえる。



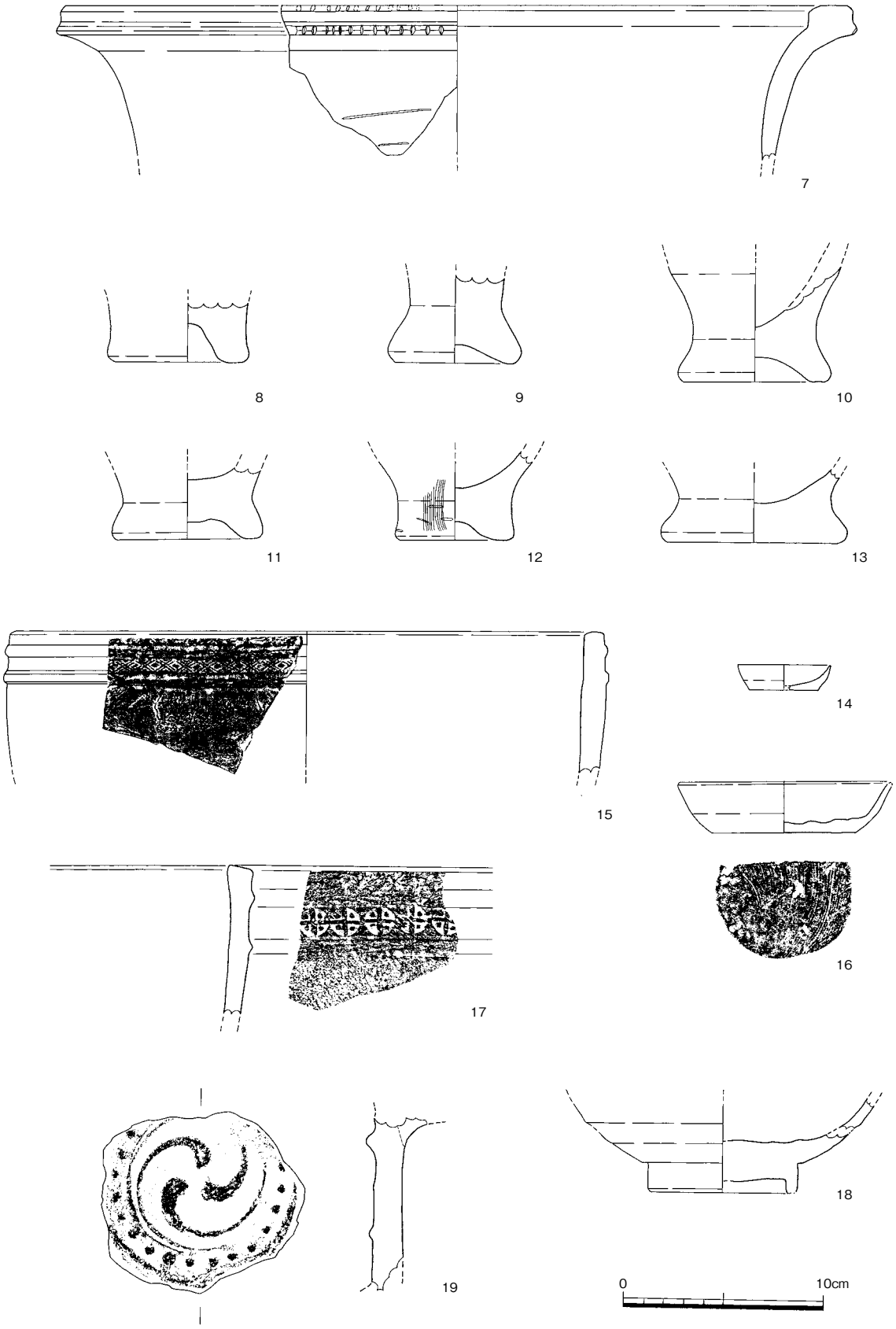


①暗灰茶褐色粘質土（10～20㎝大の礫混入）
②暗茶褐色粘質土
③暗茶褐色粘質土に黄褐色粘質土混入
④暗灰色粘質土
⑤黄褐色粘質土（地山の流れ込み）
⑥暗灰色粘質土と青灰色粗砂の混合層（木器出土）
⑦青灰色粗砂

第94図　G地区　1号井戸平断面実測図（1／40）



第95図　G地区　出土遺物実測図①（●は1／2、1／3）



第96図　G地区　出土遺物実測図②（1／3）

6．K地区の調査

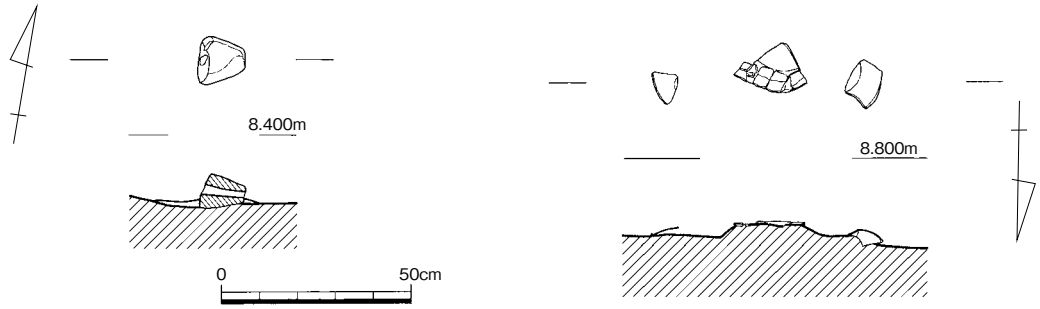
（1）調査概要（第100図、図版15）

本調査区は前原東土地区画整理事業地の南東側に位置し、旧地形では段丘の東側斜面部にあたる。調査前、本地区は大きくわけると３枚の水田からなっており、南北に直線距離で65m程度あるため、調査にあたっては３つの小地区にわけ、北からＫ－１地区、Ｋ－２地区、Ｋ－３地区とした。表土剥ぎ後の地山面はＫ－１地区が最も低く標高約８ｍでＫ－２地区が標高約11m、Ｋ－３地区が標高10mであり、Ｋ－１地区とＫ－２地区の間には３ｍ程度の大きな段差があり、また、Ｋ－２地区とＫ－３地区の間にも１ｍ程度の段差があった。調査は平成26年10月～平成27年３月までの約半年間にわたって実施した。

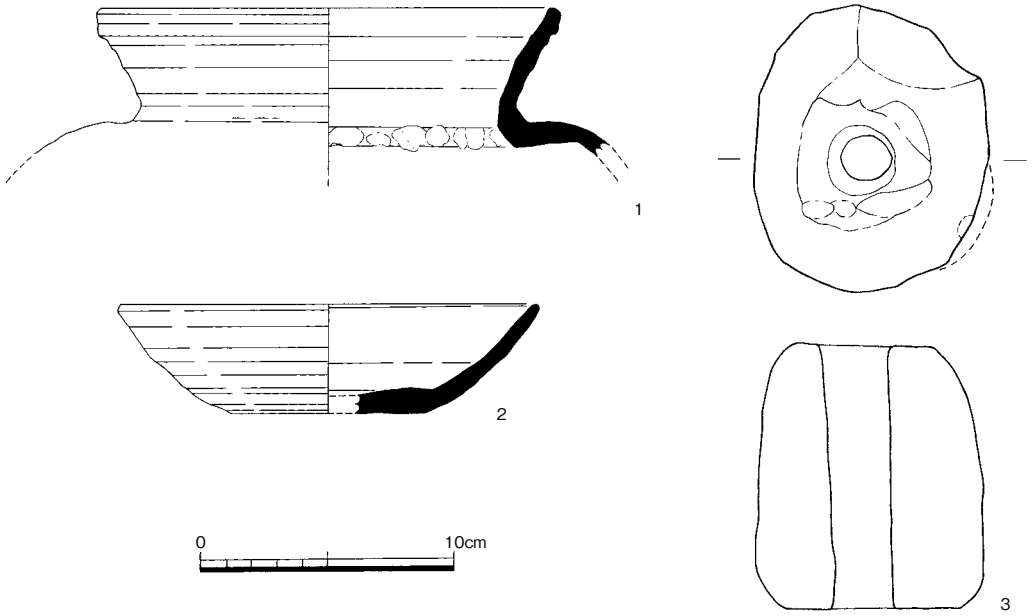
（2）遺構と遺物

①Ｋ－１地区（第97図、図版15、巻頭図版４）

本地区は段丘の北東斜面落ち込み部にあたり、谷部と接する。圃場整備によって大きく掘削を



第97図　Ｋ－１地区　遺物出土状況実測図（1／20）



第98図　Ｋ－１地区　出土遺物実測図（1／3）

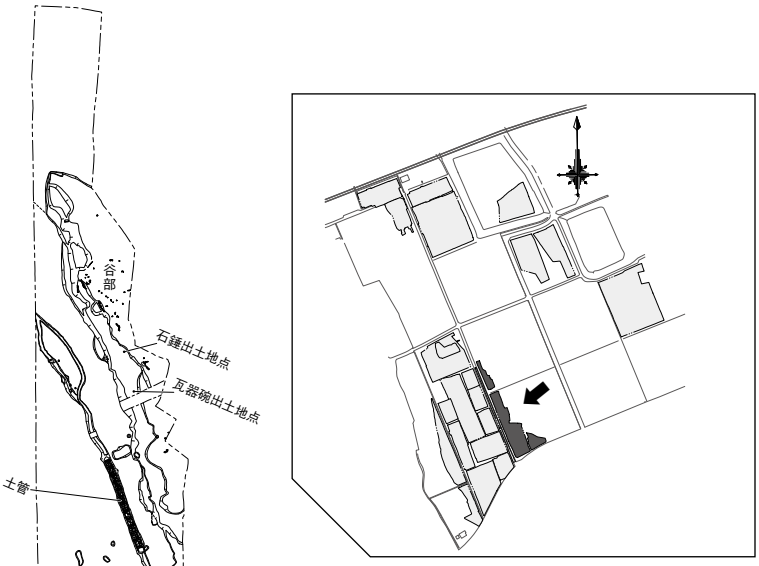
受けているようで、西側の農道の方面に削り取られた痕跡が認められる。したがって、削平を受けた段丘斜面上位には遺構はほとんど遺在せず、谷部に近い下位でかろうじて遺物の出土があった。また、調査区の南東部から北西にかけては近代以降の陶製の土管が埋設されていた。これは圃場整備前の水田に関係する施設の可能性があり、旧地形に沿った方向に設置されていることから、旧地割が地形に沿っていたことがわかる。そのほか、谷部では圃場整備前の護岸に使った杭が見つかっており、これも旧地形に沿っている。

出土遺物（第98図、図版16）

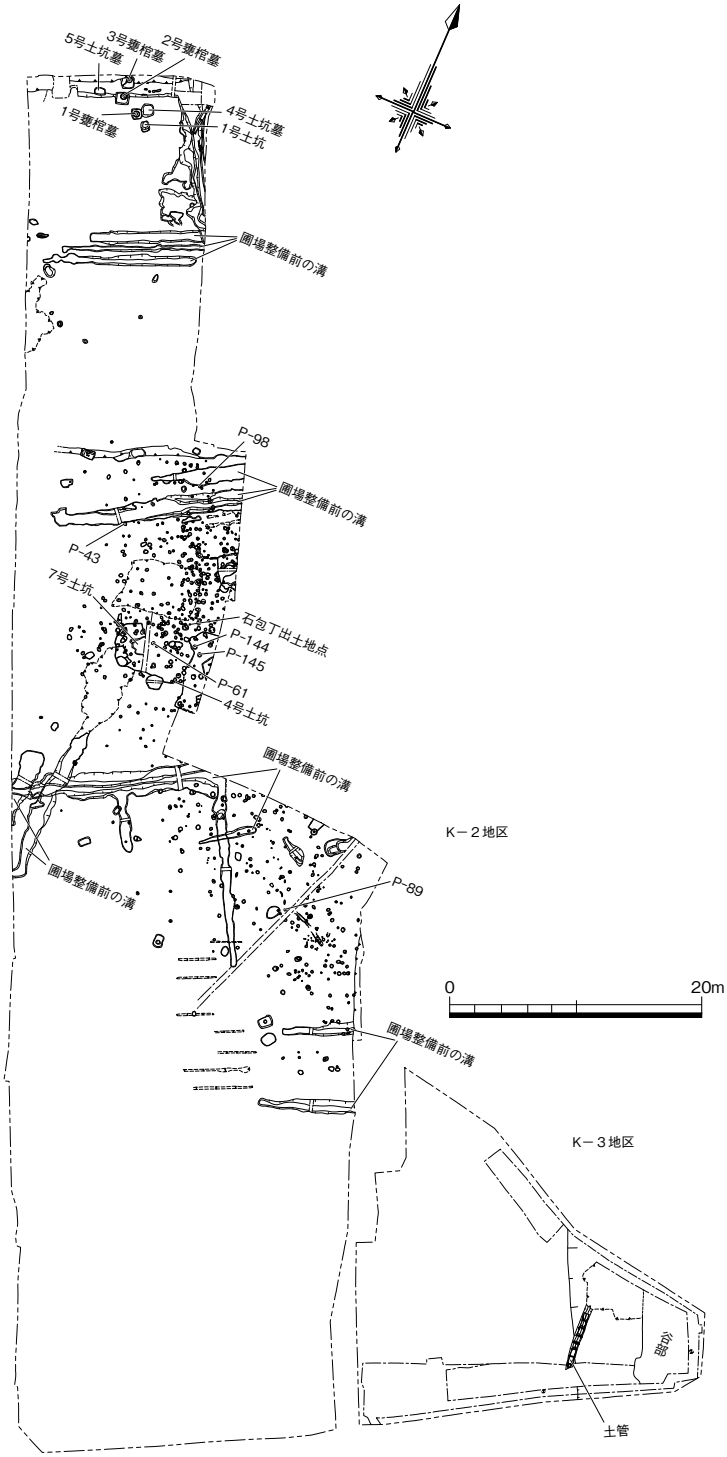
遺物は谷への落ち込み部で出土している。１は須恵器の甕の口縁部、２は須恵器の坏で、いずれも平安期に属すると考えられる。３は大型の石錘で、中央に両面から穿孔した穴が開く。表面が風化しているため石材の断定はできないが、ここでは蛇紋岩系としておきたい。

②Ｋ－２地区（図版15）

本地区はＫ－１地区と同様、圃場整備により大きく削平を受けており、最も深く削り取られている調査区南端では３ｍを超える造成時の掘削痕が観察できた（図版15－５）。このような状況であるため、遺構は斜面上位である西～南側には存在せず、斜面の下位である東側に偏在していた。100基を超えるピットが検出されたが、掘立柱建物として確認できたものはなかった。また、遺跡を東西に横断する浅い溝が数条検出



第99図　Ｋ地区の位置



第100図　Ｋ地区の主な遺構実測図（1/600）

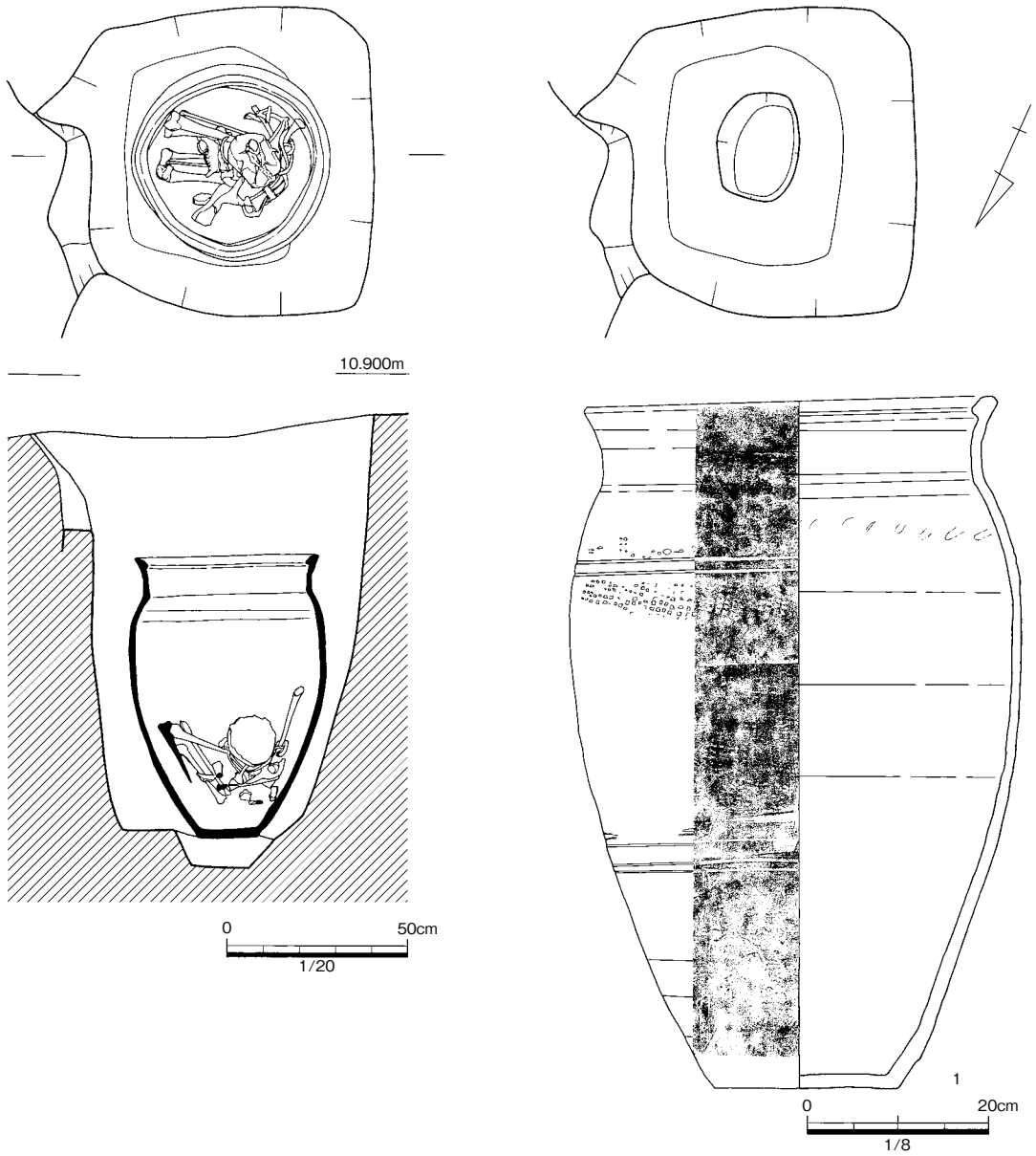
されており、いずれも近・現代の新しい遺物が出土していることから、圃場整備前に機能していたものと考えられる。

近世の甕棺墓

近世の甕棺墓は合計で３基検出された。このうち、２基は甕が完形で残り、中から人骨が出土した。残る１基は甕の口縁部付近が削平により失われており、人骨は出土しなかった。また、いずれの甕の中からも副葬品などの遺物の出土はなかった。出土した人骨の科学分析等の結果についてはp.121以降に谷畑美帆氏と米田譲氏・大森貴之氏の文章を掲載しているので、参照いただきたい。

１号甕棺墓（第101図、図版16、巻頭図版４）

１号甕棺墓は４号土坑墓と接しており、切り合い関係から、１号甕棺墓の方が古いといえる。墓坑の平面形態は方形で、上面の規模は約0.85m×0.9m、深さは約1.2ｍであった。この墓坑の



第101図　Ｋ－２地区　１号甕棺墓平断面実測図（1/20）および１号甕棺実測図（1/8）

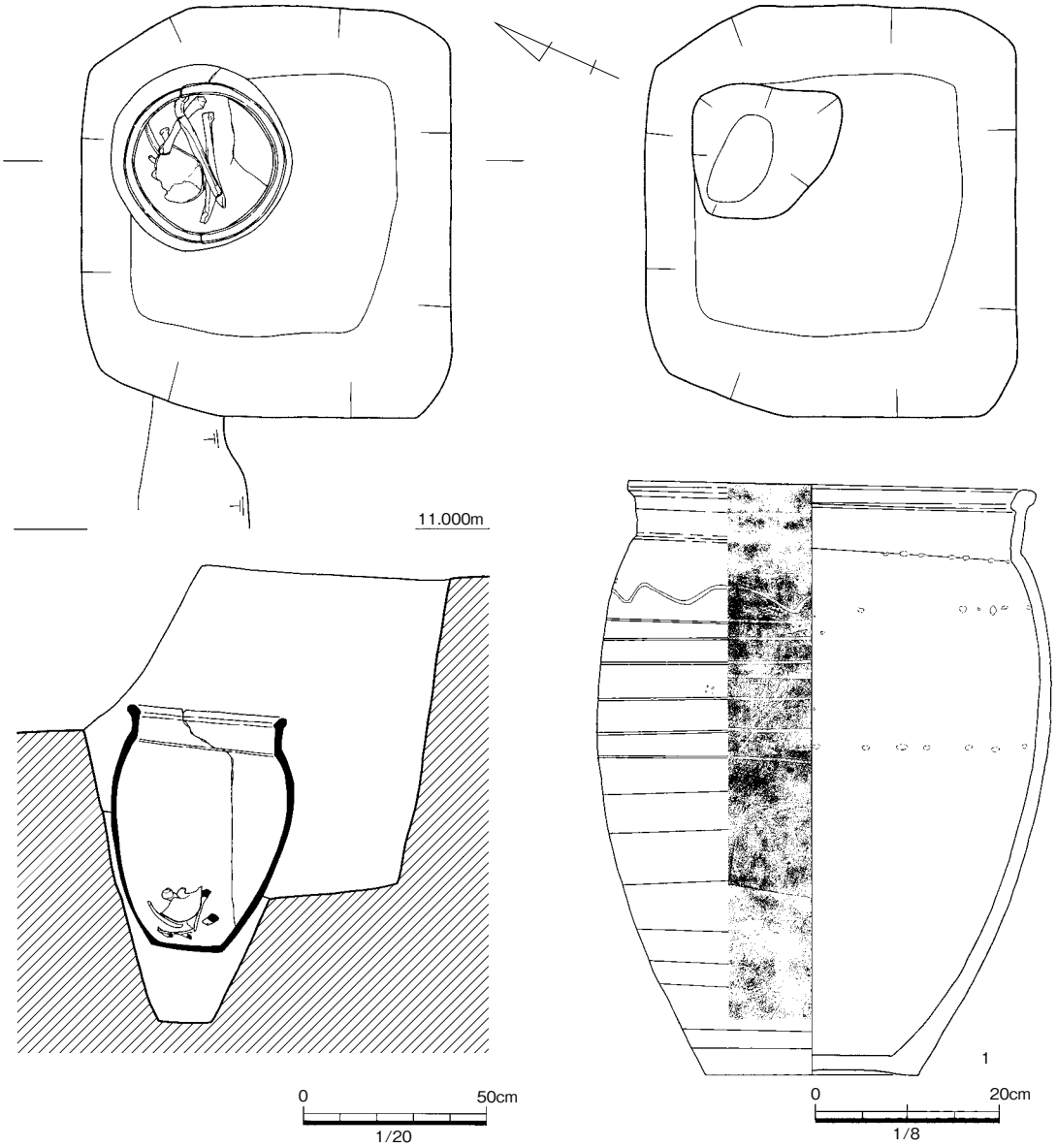
ほぼ中央に、口縁部径45.6cm、胴部径49.6cm、底部径20.2cm、高さ76.0cmの陶器の甕を据えている。人骨は良好な状態で残っており、座った形で遺体を安置した様子が観察できた。ただ、頭蓋骨については、上下がさかさまになり、大腿骨の上に落ち込んでいた。

２号甕棺墓（第102図、図版16、巻頭図版４）

２号甕棺は墓坑の北側の一部が後世の削平によって斜めにカットされた状態で出土した。墓坑の平面形態は方形で、上面の規模は約１×1.1ｍ、深さは最も残りの良い部分で約1.2ｍであった。この墓坑の北側の隅に、口縁部径44.8cm、胴部径49.6cm、底部径23.2cm、高さ64.0cmの陶器の甕を据えている。この中に遺体を安置したものと考えられるが、削平の影響を受けたためか人骨の残りはあまりよくなく、埋葬時の状態もわからなかった。

３号甕棺墓（第103図、図版16）

３号甕棺は墓坑の上部と北側の一部が後世の削平によって失われた状態で出土した。墓坑の平



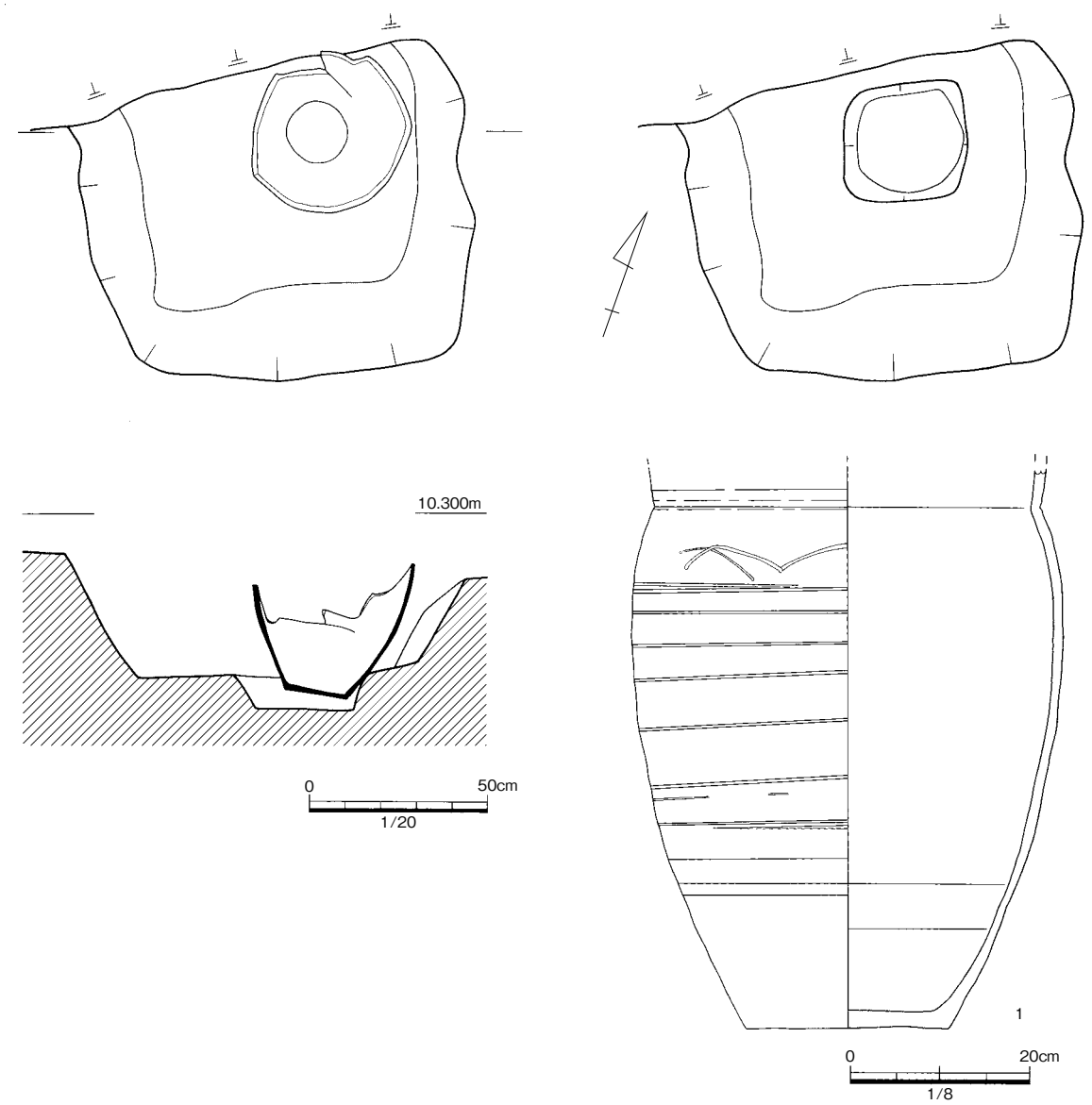
第102図　Ｋ－２地区　２号甕棺墓平断面実測図（1/20）および２号甕棺実測図（1/8）

面形態は方形で、現況で、上面の規模は約1.1m×0.9m、深さは最も残りの良い部分で約0.45mであった。この墓坑の北東側に、胴部径48.4cm、底部径22.4cm、高さは残存で62.4cmの甕を据えている。割れる前は２号甕棺とほぼ同じ大きさあったと考えられる。

以上取り上げた、１～３号甕棺は「ハンドウガメ」または「ハンズーガメ」と呼ばれる肥前系の大甕であり、時期は副葬品がなかったため絞り込めないが、18世紀半ば以降のものと考えられる。

近世の土坑墓（第104・105図）

近世の甕棺墓の周囲から２基の土坑が検出された。平面形態が方形または長方形で、深さは60cm程度が残っていた。出土遺物がないため、正確な時期は不明である。また、人骨等の出土もなかったため、本来は墓としての認定はできないが、近世の甕棺墓に接していることと埋土が甕棺墓の墓坑と類似していたことから近世の土坑墓として報告した。



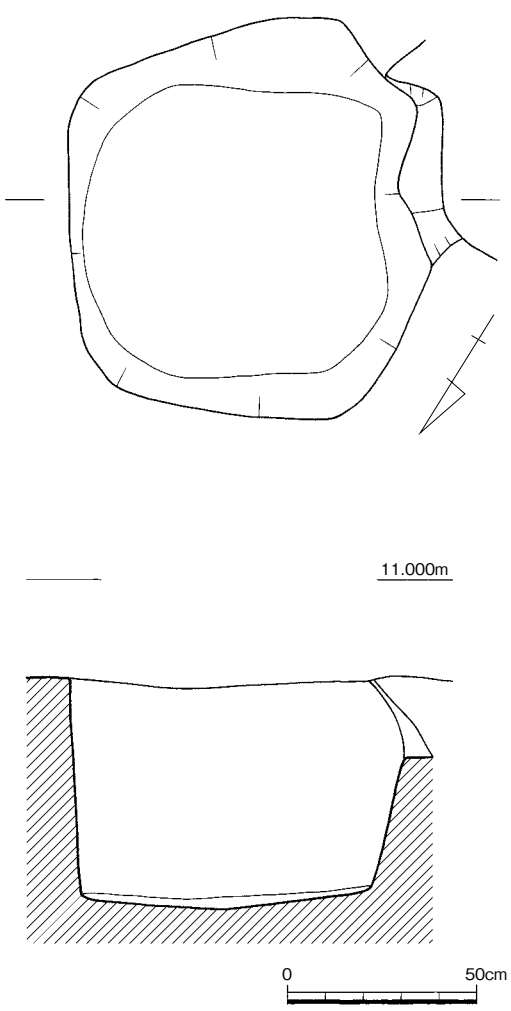
第103図　K－２地区　３号甕棺墓平断面実測図（1/20）および３号甕棺実測図（1/8）

出土遺物（第106図、図版16）

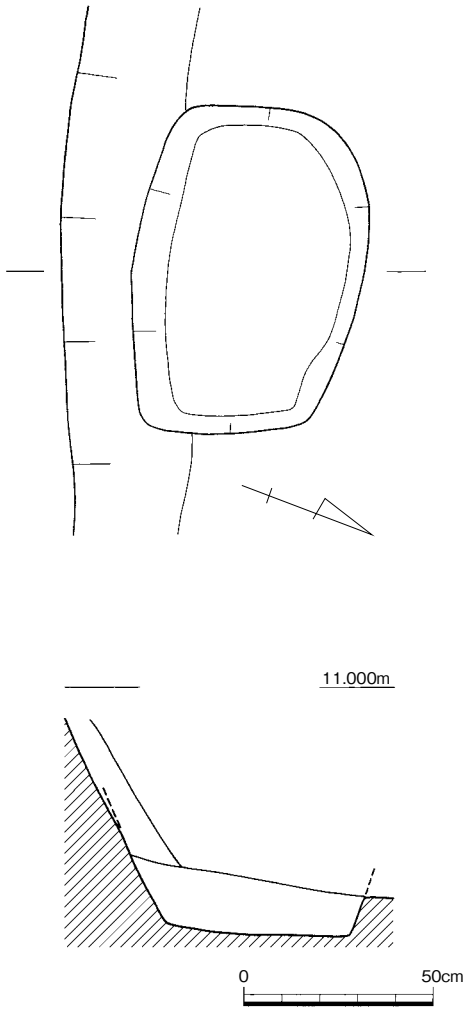
このほかの土坑やピット内から出土した遺物のうち主なものを紹介する。１～４は土師器の甕、５～７は土師器の埦、８～11は黒色土器の埦の高台付近で、９が内黒、他は両黒である。平安期のものと考えられる。12は近世の白磁の紅皿で、13は弥生土器の甕の底部、14は黒曜石の剥片で一部に原礫面が残る。15は石包丁、16は中世の滑石製石鍋の転用品で、砥石または文鎮として使用されたものと考えられる。出土遺構は１～６がＰ－144、７がＰ－61、８がＰ－98、９が４号土坑、10がＰ－43、11と16が７号土坑、12が１号土坑、13がＰ－145、14がＰ－89、15が４号土坑周辺である。

③Ｋ－３地区（図版15）

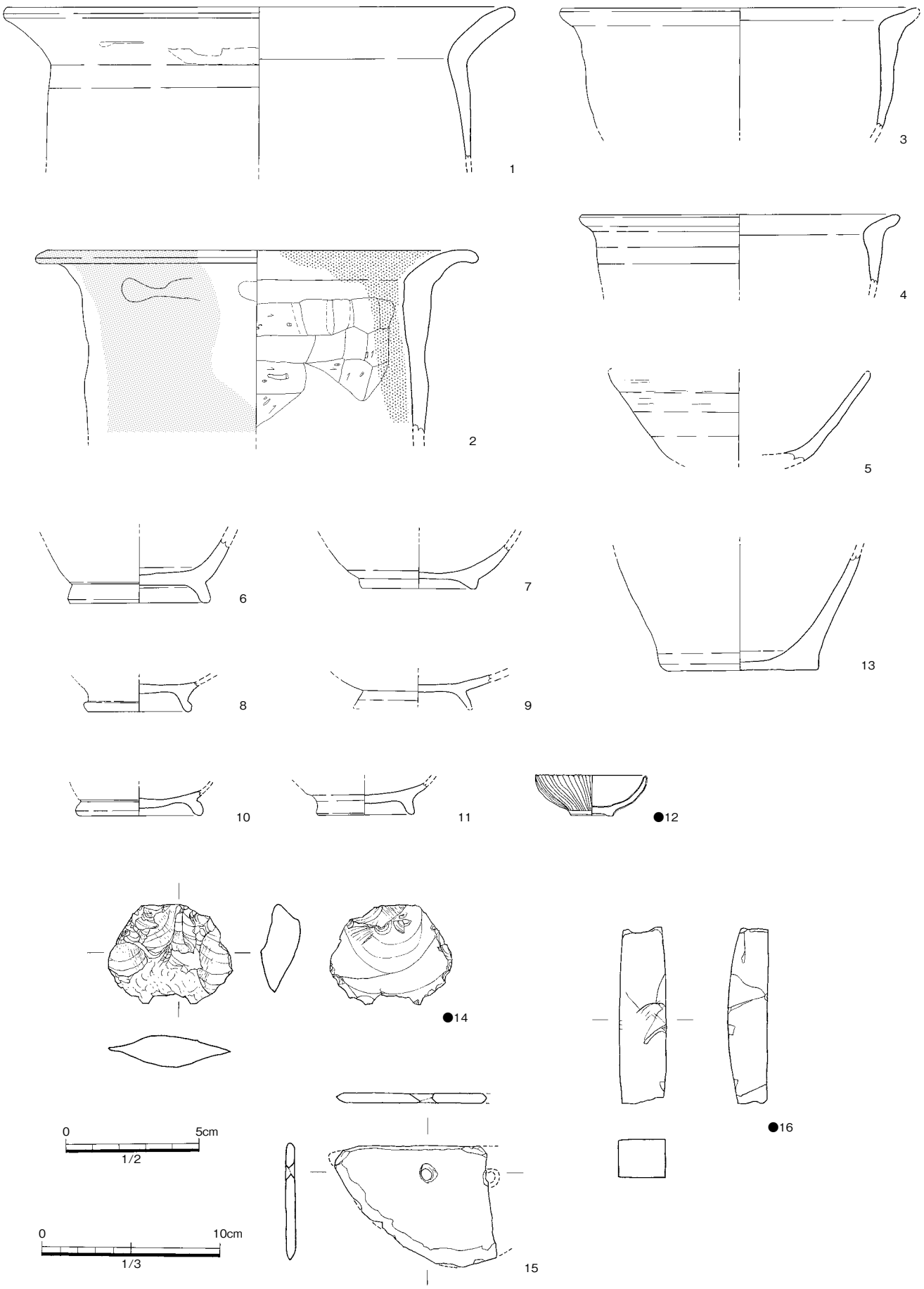
本地区は段丘の南東斜面落ち込み部にあたり、谷部と接する。圃場整備によって大きく掘削を受けており、遺構は検出されなかったため、旧地形の確認のみ行った。また、Ｋ－１地区と同様、近代以降の陶製の土管が埋設されており、これも圃場整備前の水田に関係する施設の可能性がある。



第104図　Ｋ－２地区
４号土坑墓平断面実測図（1/20）



第105図　Ｋ－２地区
５号土坑墓平断面実測図（1/20）



第106図　K－２地区　出土遺物実測図（●は1/2、1/3）

７．Ｌ地区の調査

（１）調査概要（第108図、図版17）

本調査区は前原東土地区画整理事業地の南西側に位置し、旧地形では段丘の中央鞍部にあたる。表土剥ぎ後の地山の標高は約８ｍで圃場整備により大きく削平を受けた可能性が高く、傾斜がなくほぼ平坦な地形となっていた。また、削平により遺構の残りも悪く、土坑１基、井戸１基、溝１条、ピット数基のみが検出された。調査は平成27年４月～同年９月までの約半年間にわたって実施した。

（２）遺構と遺物

１号土坑（第109図、図版17）

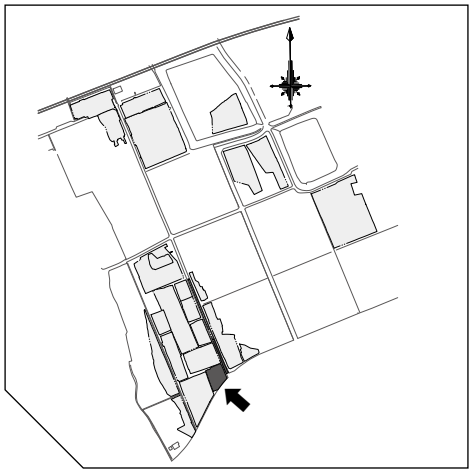
１号土坑は調査区の北西部から検出された。すぐ隣には１号井戸が位置する。平面形態は不整隅円長方形で、上面の規模は約1.40ｍ×0.98ｍ、深さは約0.15ｍで、削平により浅くなっていた。出土遺物は陶製の土瓶と大型の石錘があった。

出土遺物（第110図、図版19）

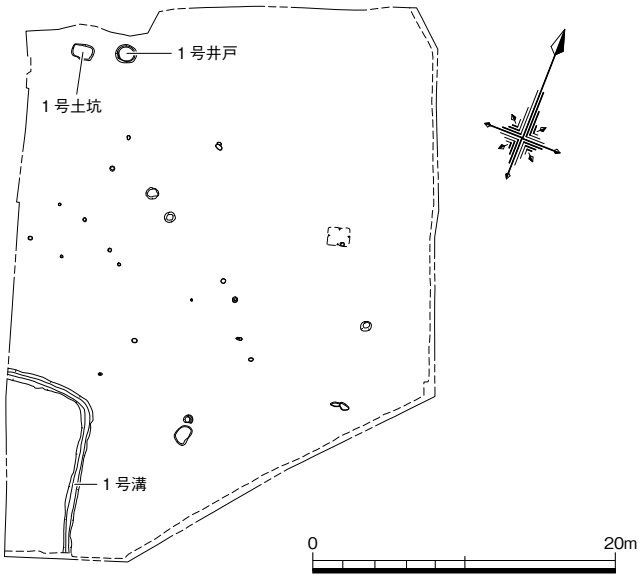
１の土瓶は口縁部から胴下半部にかけて残っていた。外面には銅緑釉と灰釉を施し、内面には灰釉が垂れ込んでいる。また、口縁端部と外面下部には釉を施しておらず、下部にはススが付着している。２の大型石錘は平面形態が円形で、断面は上面と下面で幅が違い台形に近い形状となる。中央部からやや偏った位置に両面穿孔による穴があけられている。蛇紋岩系製。

１号井戸（第111図、図版17）

１号井戸は平面形態が不整円形で、直径は約1.2ｍ、深さは約2.9ｍある。井戸枠は検出されておらず、素掘りであったと考えられ、約60㎝より深い部分に礫と陶磁器が数多く投げ込まれた状況が見られた。このことから、この井戸は埋め戻しにあたり、土砂や礫と一緒に不要となった生活雑器を投げ込んだ可能性がある。なお、遺物の出土位置については、この60㎝より深い礫混じりの層を中～下層、これより上を上層として分類し、取り上げた。



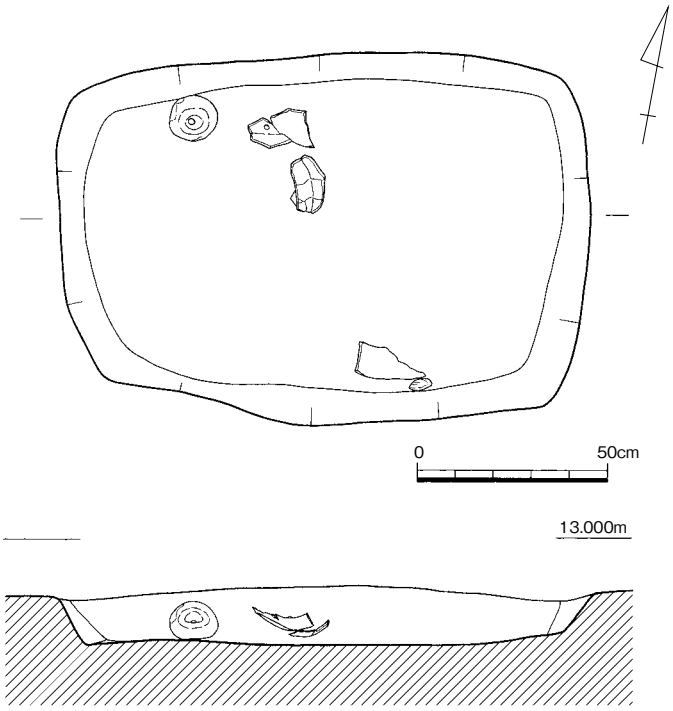
第107図　Ｌ地区の位置



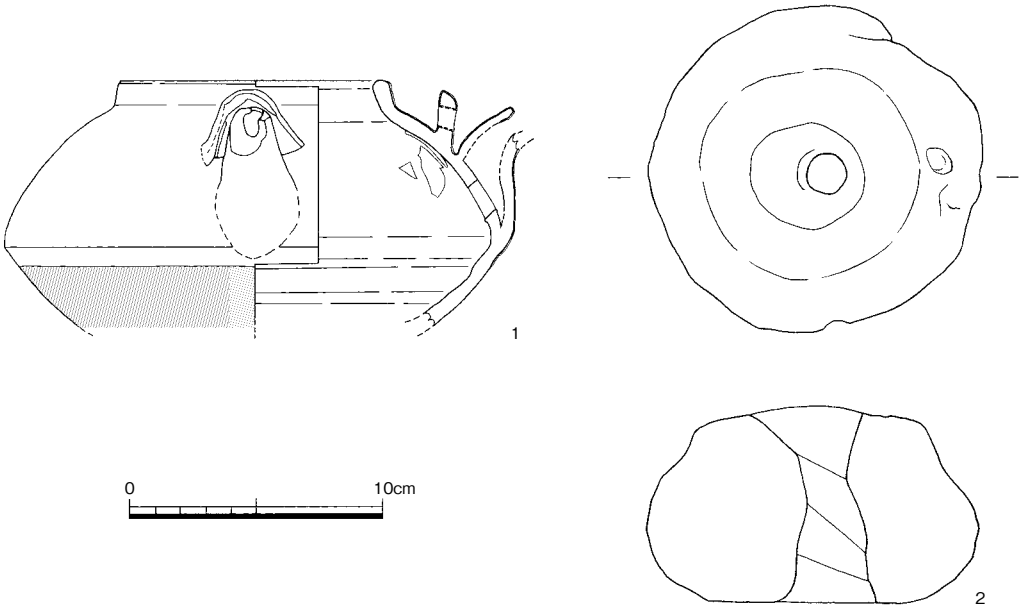
第108図　Ｌ地区の主な遺構実測図（1/500）

出土遺物（第112～116図、図版18・19）

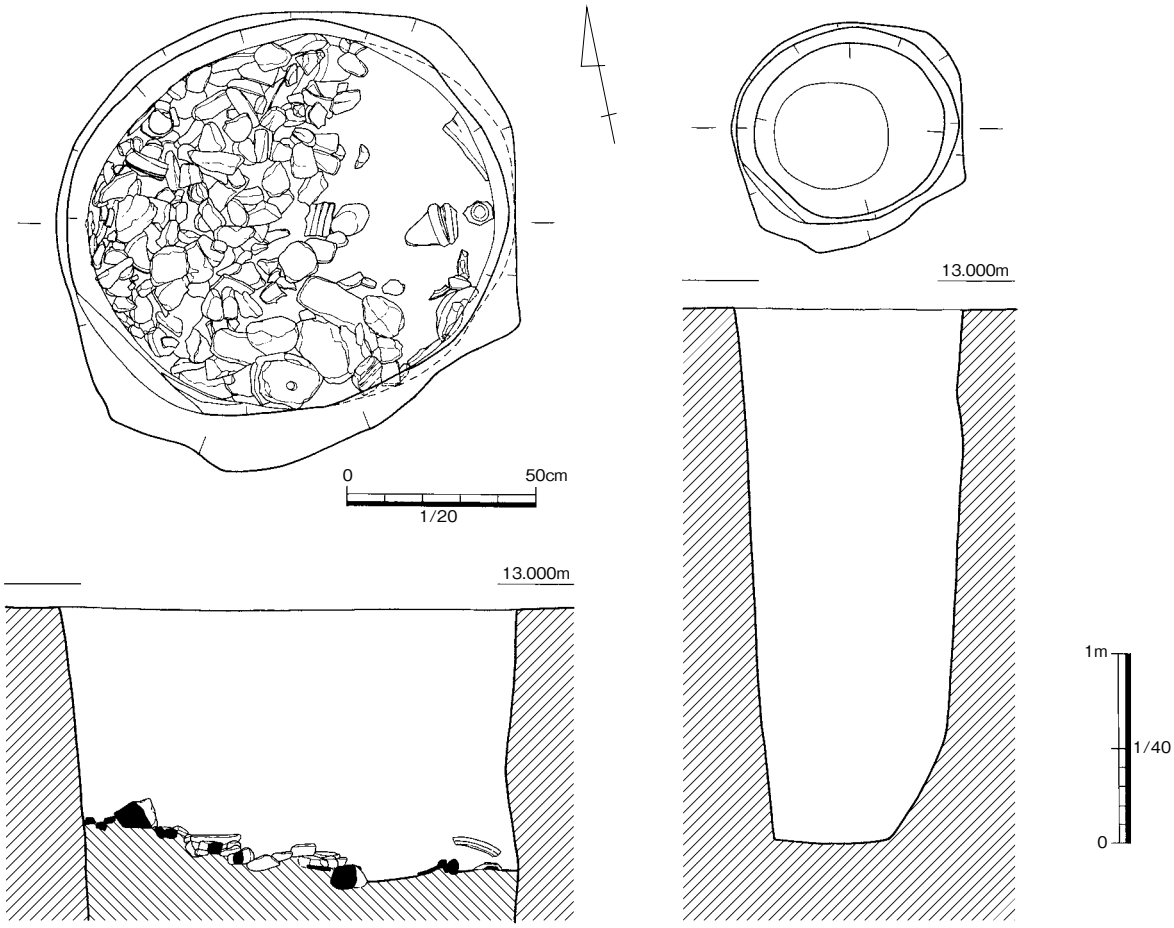
出土遺物は陶磁器、石製品、瓦などがある。まず、上層の主な出土遺物としては陶磁器類と瓦がある。１は染付の皿で、外面には蝶唐草文と宝の文字が交互に施され、内面の見込みに蝶唐草文を描き、高台内面には寿の銘が入る。２は染付の碗で、外面に草花文、内面の見込みに寿の文字を書く。３は染付の小坏で、外面に草花文、内面の見込み中央に手書きの五弁花を入れる。４は陶器の蓋で、天井部外面と摘みには銅緑釉を施すが、かえりから内面にかけては露胎となっている。また、かえりの鍔先と天井部内側にはススが付着しているため、この蓋は火にかけて使う器の一部であったといえ、例えば土瓶の蓋として使用された可能性がある。５は油徳利の頸部から注ぎ口にかけての破片である。外面と内面上位にかけて鉄釉を施し、受けの内側に穴を開けている。６は陶器の土瓶で、注ぎ口付近が残っており、外面には銅緑釉が施され、内面は露胎である。耳の部分には弦のすべり止めとして凹凸がつけられており、注ぎ口と体部の接点には３つの穴が開けられている。31は軒丸瓦である。小型の巴文瓦で、瓦当がほぼ完形で残る。中央の巴文の周囲には８つの珠文を配し、この外側に幅が狭く低い外縁を配置する。燻しが全面にいきわたっており、仕上げは良好である。



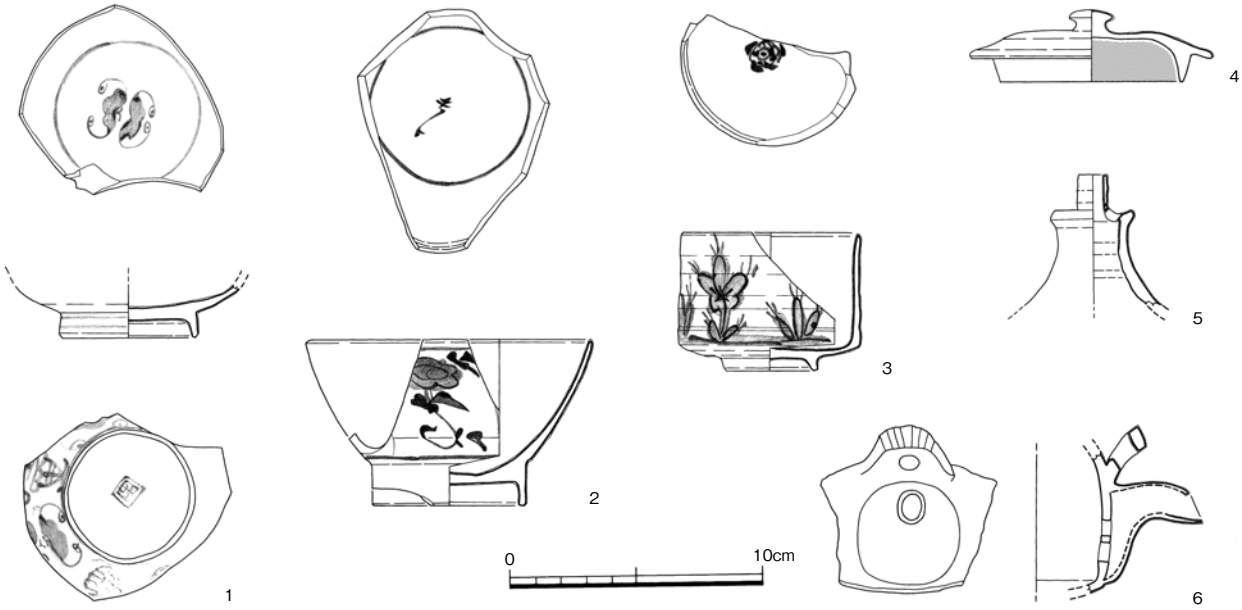
第109図　L地区　１号土坑平断面実測図（1/20）



第110図　L地区　１号土坑出土遺物実測図（1/3）

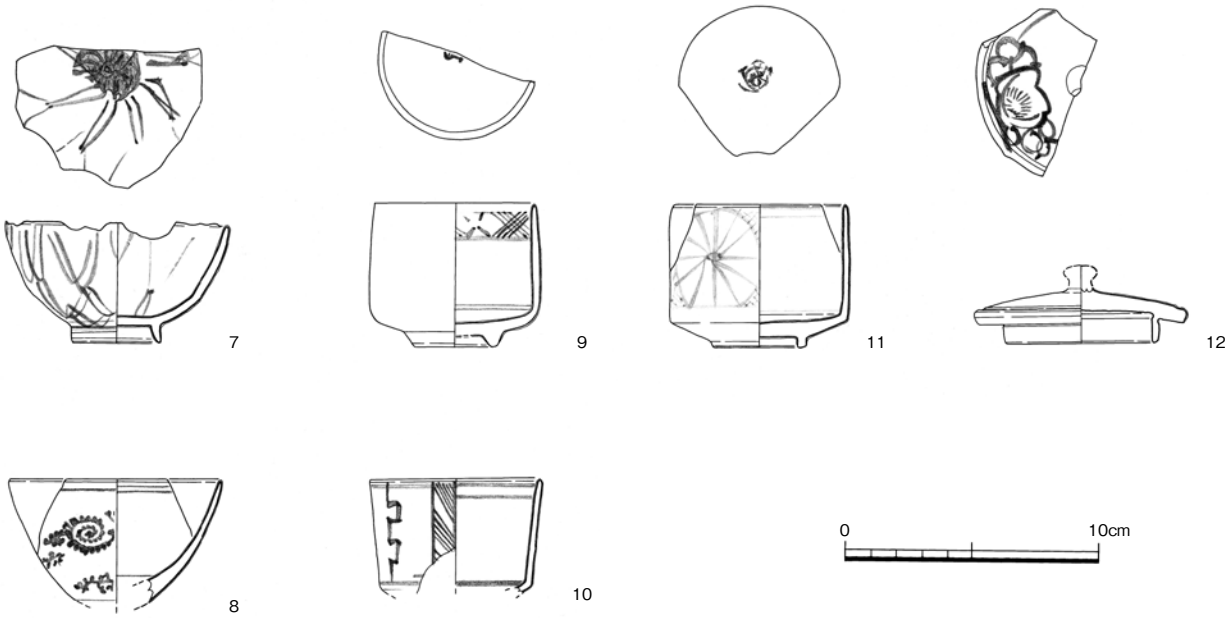


第111図　L地区　1号井戸中層遺物および礫出土状況実測図（左：1/20)、完掘状況実測図（右：1/40）

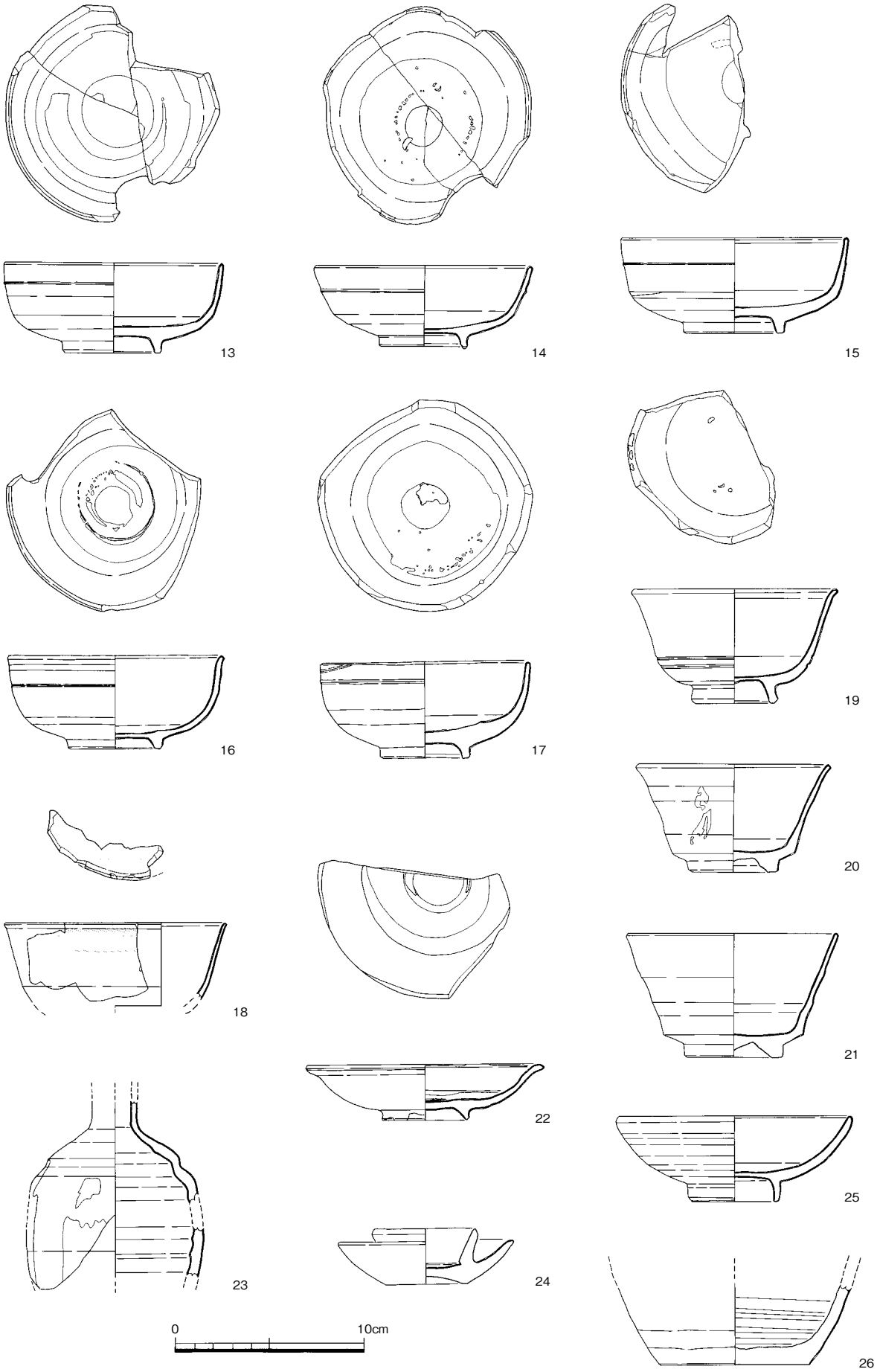


第112図　L地区　1号井戸上層出土遺物実測図（1/3）

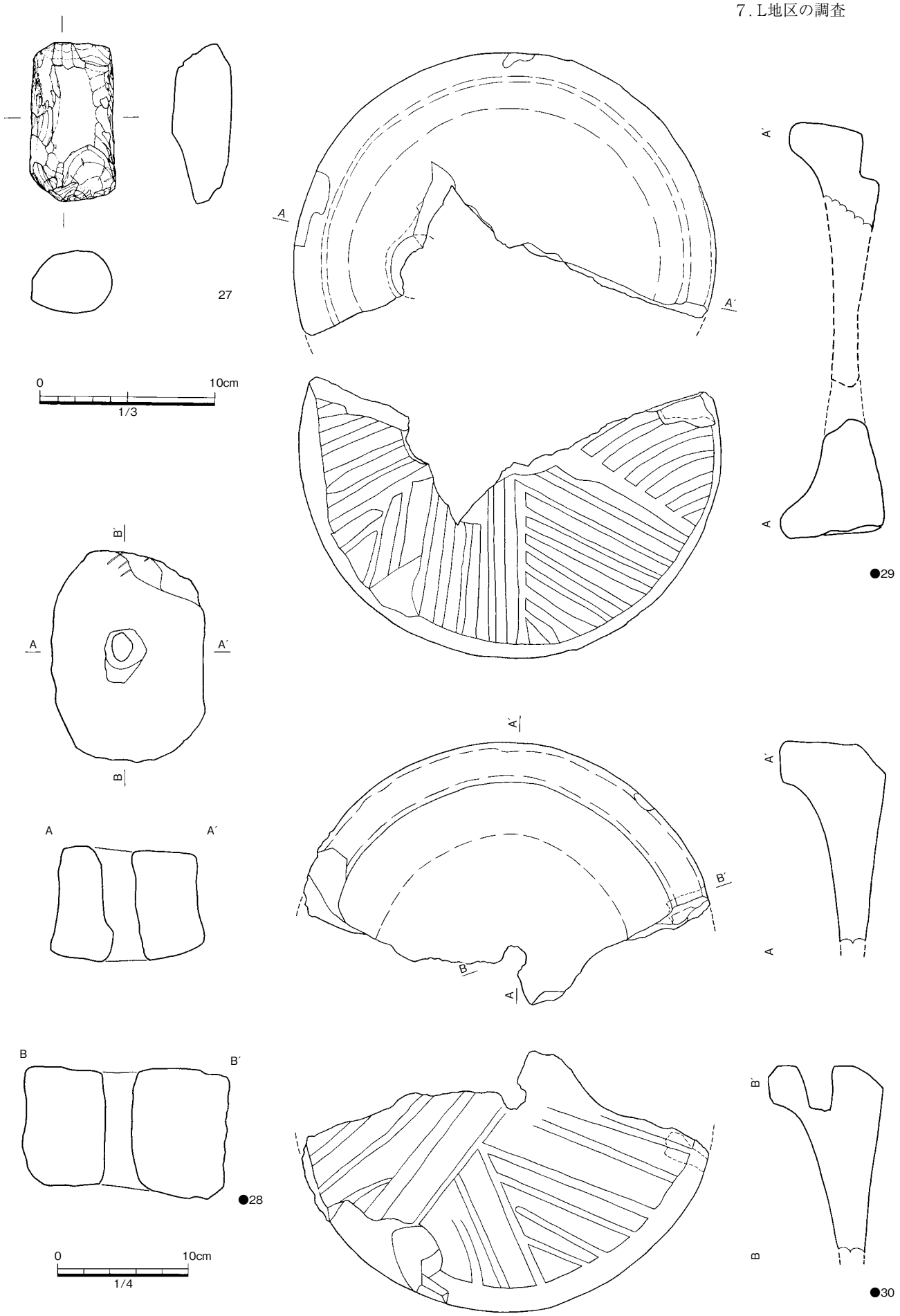
つづいて、中～下層の主な遺物を取り上げる。７は染付の碗で、外面には二重網目文、内面の口縁部から体部にかけては網目文、見込みには花文を施す。８は染付の碗で、外面に蛸唐草文が施される。９～11は染付の小坏である。９は外面に銅緑釉を施し､高台周辺に砂目の痕跡が残る。内面の口縁部付近には四方襷文、見込みには二重の圏線を引き、中央にコンニャク印判の五弁花の一部が残る。10は外面に矢羽文と櫛歯文を施し、内面口縁部近くに二重圏線、見込み周囲に一重の圏線を引く。11は外面に菊花文と襷文を施し、高台の周辺には一重圏線を引く。内面の口縁部付近には二重圏線、見込み周囲に一重圏線を引き、この内側中央に手書きの五弁花を描く。12は陶器の蓋の破片で、摘みは折れて失われている。天井部外面には灰釉をかけ、梅を描いている。かえりから内面にかけては、露胎となっている。４と違い、内面にススや焦げ等の痕跡がないため、用途は特定できない。13～17は陶器の碗で、内外面に銅緑釉を施し、見込み部分は釉を蛇の目に剥ぎ、高台端部も釉を剥ぐ。外面の口縁部近くには突線を一条、削り出しており、これは個体によって高低差はあるが、装飾の意味をもつものと考えられる。18は陶器の碗の小破片で、内外面に灰釉をかけたあと、装飾として、口縁部周辺の内外面に銅緑釉と鉄釉で半円形を描いている。19は陶器の小坏で、内外面に銅緑釉を施すが、かけ方がやや粗雑で、口縁端部に釉が載っていない部分がある。また、高台の端部は釉を剥ぎ、見込み内面には砂目が残る。外面の下部には基本的に二重の沈線が巡るが、途中で線が食い違っている様子が見て取れる。20は陶器の小坏で、内外面に灰釉を施すが、かけ方がやや粗雑で、釉が載っていない部分が数箇所観察できる。高台の端部から内側にかけては釉を施さず、見込み部分には砂目の痕跡が残る。21は陶器の小坏で、内外面に灰釉を施す。外面の底部から高台部にかけては釉を施さず、見込み部分には砂目が残る。22は陶器の皿で、口縁部が外側に反る。基本的に透明釉を施したのち、銅緑釉を重ねているが、高台端部から内側にかけては、釉を施しておらず、見込み周辺では釉を蛇の目状に掻取っている。23は陶器の壺の頸部から体部中央にかけての破片である。内外面に鉄釉を施し、口縁部から肩部にかけてと体部上位の一部に関しては上から灰釉をかけ流している。24は陶器の灯明皿と考えられる。受皿の内面には灰釉を施すが､他の部分は基本的に露胎である。



第113図　L地区　１号井戸中～下層出土遺物実測図①（1/3）



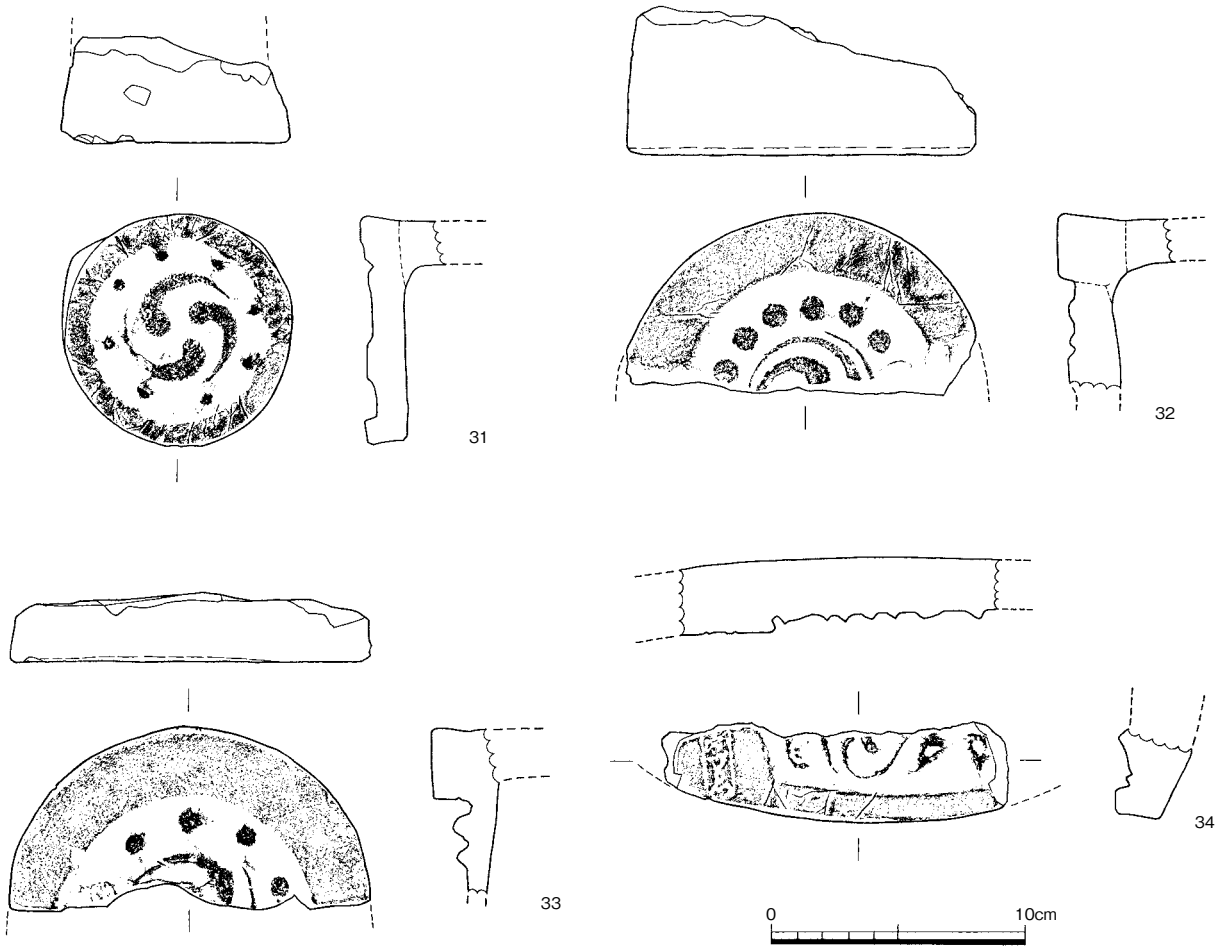
第114図　L地区　1号井戸中～下層出土遺物実測図②（1/3）



第115図　L地区　1号井戸中～下層出土遺物実測図③（1/3、●は1/4）

25は陶器の浅い碗である。内外面に灰釉を施し、高台端部は剥ぎ取っている。26は陶器の甕の底部である。体部外面に灰釉を施し、一部、銅緑釉を上掛けした跡が見られるが、底部は釉を掻取っており、内面は露胎である。27は石斧で、側面に敲打痕が残る。玄武岩製で、井戸を埋め戻す際に弥生時代の遺物が混入したものと考えられる。28は石臼が砥石として転用されたものと考えられ、中央に軸受の穴が開き、上下と両側面で研磨された状態が見られる。硬質砂岩製か。29と30は挽き臼の上石である。29は約半分が残り、上・下両面にもの入れの穴の一部と側面に挽き手を固定する方形の穴が残る。安山岩製か。30は３分の１程度が残る。上・下両面の中央部に軸受の穴が残り、側面に挽き手を固定する穴がある。32～33は軒丸瓦である。32は３分の１程度が残る巴文瓦で、間隔を詰めた珠文が６つ残り、外側に幅が広く、低めの外縁帯を配置する。燻しが全体にまわっておらず､仕上げは不良である。33は３分の１程度が残る巴文瓦で、間隔をあけた珠文が５つ残り、外側には幅が広く、高い外縁帯を配置する。燻しが全体にまわっておらず､仕上げは不良である。34は軒平瓦の破片で､唐草文の一部と銘の一部が残る。銘は「宿市衛門」と読め、これは類例から「今宿市（右）衛門」の可能性がある。

以上、１号井戸の出土遺物についてみてきたが、一部の混入品を除き、時期は江戸時代後期の19世紀前半に収まると考えられる。報告では上層と中～下層に分けたが、この両者に明確な時期差は認められず、したがって、ほぼ同時期に埋められたと考えることが自然といえる。

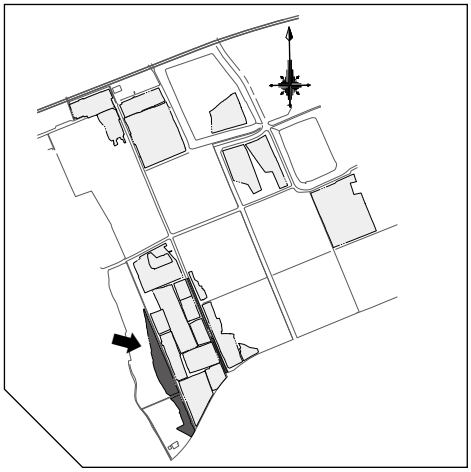


第116図　L地区　１号井戸出土遺物実測図（1/3）

８．M地区の調査

（１）調査概要（第120図、図版20）

本調査区は前原東土地区画整理事業地の南西端に位置し、旧地形では段丘の西側斜面部にあたる。南北方向に細長く、約210ｍあり、表土剥ぎ後の地山の標高は約10～12mであった。他の地区と同様、圃場整備により大きく削平を受けた可能性が高く、段丘上位と下位の間には造成工事により段差が作りだされていた。この段の下端には圃場整備前まで使われていたと考えられる近世～現代の水路が蛇行しながら南から北へ向かって流れている。圃場整備後にはこの水路は埋め立てられ、M地区の東側にコンクリート護岸の水路が新設されている。本地区は圃場整備の削平により遺構の残りが悪かったため、井戸２基、土坑数基、ピット数基のみが検出された。調査は平成27年５月～同年10月までの約半年間にわたって実施した。



第117図　M地区の位置

（２）遺構と遺物

①１号土坑（第119図、図版20）

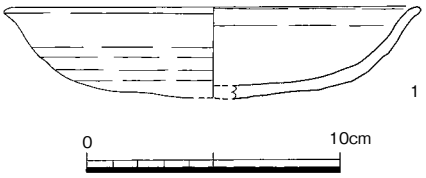
１号土坑は調査区の北部から検出された。すぐ西隣には井戸が位置する。平面形態は不整円形で、上面の直径は約0.8ｍ、深さは約0.4ｍで、削平により浅くなっていた。出土遺物としては埋土からの土師皿があった。

出土遺物（第118図、図版20）

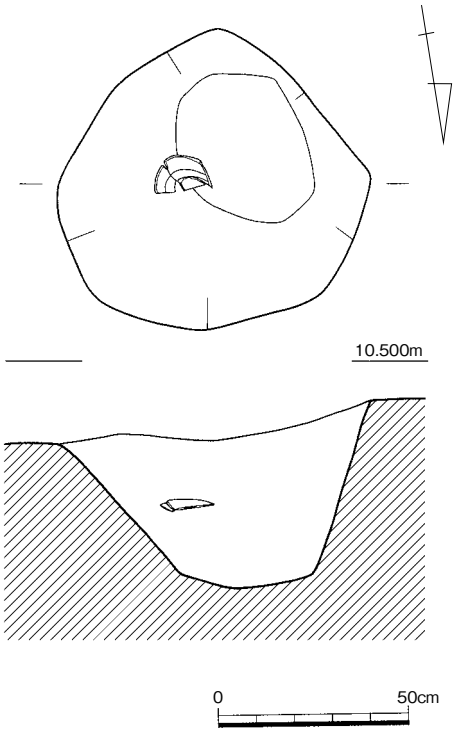
土師皿は割れて３つの破片に分かれた状態で出土した。残存率は約１/３である。底部には板状圧痕がついており、胎土は砂粒をほとんど含まず、密である。焼成も良好で、淡赤褐色に焼きあがっている。平安期のものと考えられる。

②西側谷部

M地区の西側には谷部があるが、この埋土である暗灰色粘質土から弥生時代以降の遺物



第118図　M地区　１号土坑出土遺物実測図（1/3）



第119図　M地区　１号土坑平断面実測図（1/20）

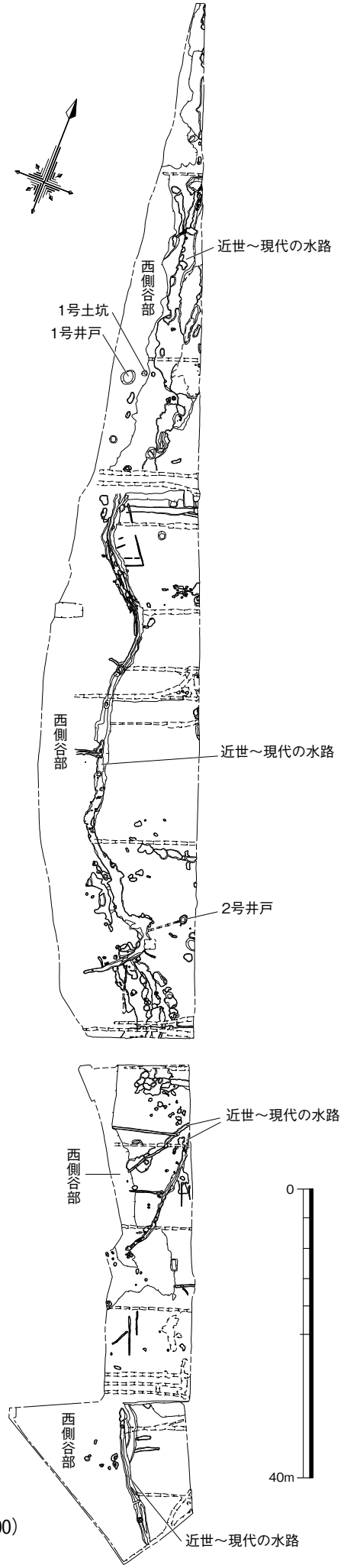
が出土している。

出土遺物（第121図、図版20）

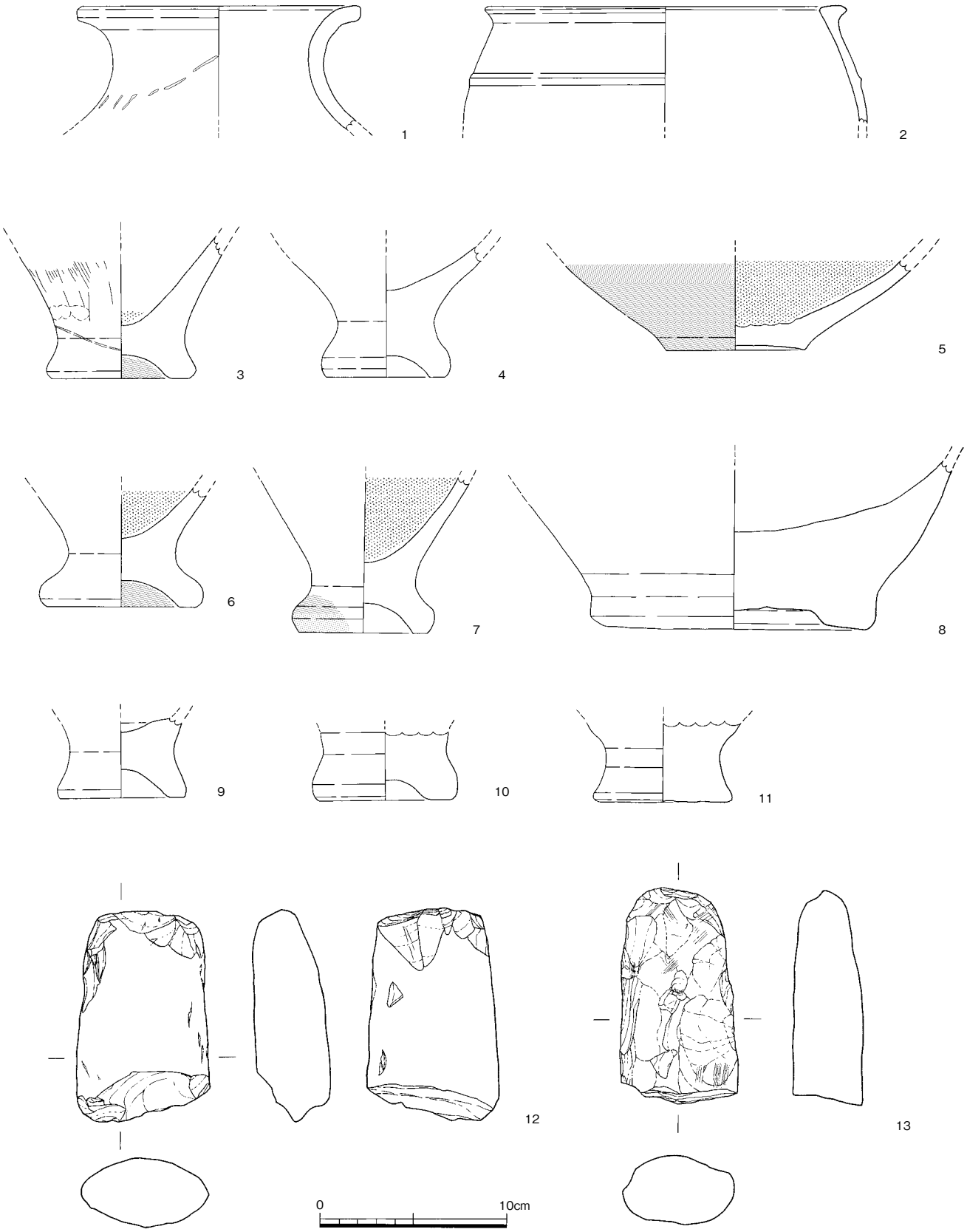
ここでは西側谷部からの出土遺物のうち、主なものとして、１～７、９～12を取り上げる。１～７・９～11は弥生土器である。１は壺の口縁部から肩部にかけての破片である。２は甕の口縁部付近の破片で、口縁部の外面に粘土を貼り付け、断面を三角形にし、口縁部下方には１条の突帯を巡らせる。３・４・６・７・９・10は甕の底部で、上げ底となっている。３は外面にタテハケが施され、底部のくびれ部から端部にかけては斜め方向に板状工具でナデを行った痕跡が見られる。内面にはススが付着しており、上げ底の内側も焦げているため､火にかけられたことがわかる。４・６・７も風化により表面の調整は観察できないが、焦げている部分があり、火にかけられたことがわかる。９・10は風化により表面の調整と焦げは観察できなかった。５は壺の底部であり､焦げや表面の剥離が見られ、火を受けたことがわかる。11は甕の底部と考えられ、平底である。12は石斧である。全体に風化が進んでおり、調整痕ははっきりしないが、側面や小口端部に敲打や調整剥離の痕跡が見られる。玄武岩製。これらの遺物は弥生時代前期末～中期初頭の範囲に入ると思われる。

③その他の出土遺物（第121図、図版20）

上記のほかに表採品を紹介する。８は甕棺の底部と考えられ、やや上げ底となっている。表面の風化と剥離が進んでいるため、調整等は観察不能である。時期決定は難しいが、ここでは弥生時代中期前半頃としておく。13は石斧で表面の風化が激しいが、一部で成形にかかる調整痕が確認できた。玄武岩製。



第120図　M地区の主な遺構実測図（1/800）



第121図　M地区　出土遺物実測図（1/3）

９．小結

（１）Ａ・Ｂ地区

Ａ・Ｂ地区では浦志本川の旧河道が検出された。両調査地区の発掘調査前には、川はＢ地区と相之町溜池の間を通り、柱田溜池の南東角からは堤に沿って西流したのち北流していた。これが、調査の結果、近世期～圃場整備前までは、Ｂ－１地区の中を縦断し、Ａ地区の南東端へ抜け、同地区の北東側で西へ折れ曲がることがわかった。この先は、調査区外とはなっているが、Ｄ・Ｉ両地区で河道が検出されていないことから、柱田溜池の西側で、現在の河道に合流していると考えられる。

（２）Ｅ地区

弥生時代～古墳時代

Ｅ地区において、もっとも古い土器は阿高式土器であるが、小谷部から出土し、周囲にそれらしい遺構は全くない。中心となるのは、弥生時代前期末～中期初頭で、１間×１間の６号掘立柱建物が該当し、Ｅ地区の北側に位置するＦ地区において、同時期の貯蔵穴が見つかっていることから、Ｅ地区周辺に集落が広がっていたことが推測できる。

小谷部では、土器のほかに今山産磨製石斧の出土が目立つが、完形になるものはなく、すべて刃部もしくは基部を欠損するものである。土器も完形になるものはなく、基本的には集落からの廃棄物で構成されていると考えてよい。完形の土器が含まれるのは、小谷部の南側で出土した土器群で、弥生時代中期後半に比定される。谷部における祭祀が行われたものであろう。

一方、古墳時代では、西側丘陵上に竪穴式住居１軒と小谷部に井戸１基、土坑３基が検出された。時期的には古墳時代前期中葉～後葉で、竪穴式住居の遺構の浅さを考えると、住居群が広がっていたが、かなりの削平を受けて、消失していると考えられる。また、東側丘陵斜面にある１、７、８号土坑は住居と同時期であるが、床面が平坦ではなく、黄褐色粘土層～明青色粘土層を切り込んでおり、粘土採掘坑の可能性がある。小谷部は弥生時代前期後半から埋まり始め、古墳時代中期までの遺物が含まれる。この黒褐色粘質土層を切り込んで、続く古代～中世の遺構が切り込んでいる。

古代～中世

奈良時代に属するのは、怡土城の瓦が出土した10号井戸のみである。中世に属するのは東側丘陵上に位置する５軒の掘立柱建物群で、庇付き総柱建物である２号掘立柱建物を中心として、南北に掘立柱建物群が並ぶ。時期的には、１号井戸や馬が出土した７号井戸と同時期の12世紀後半～13世紀代と考えられる。福岡市千里遺跡でも５～６軒の掘立柱建物群からなる集落が発見されており、この段階の散村的な状況を示していると考えられる。

７号井戸の馬の出土は、屋山洋氏（福岡市教育委員会）に実見していただいたところ、腱が繋がっていた状態で解体されたものと判断されている。実際、食していたかどうかを含めて、『日本書紀』や『続日本紀』に散見される殺牛・殺馬祭祀（雨乞い祭祀）との関係は不明といわざるを得ないが、横須賀市鉈切遺跡では、７世紀初頭頃の土坑から甕や杯と共に牛頭骨が出土し、殺牛祭祀と考えられている。今後このような事例に注意する必要があるだろう。

江戸時代以降

江戸時代に入ると、小谷部は完全に埋没してしまい、水田化していると見られる。該当するのは、４、７号溝、４号土坑で、４号溝はＬ地区で直角に曲がっており、４号土坑に接続する。４号土坑は、水田に水を入れる際に温める施設と考えられる。

（３）Ｌ地区

調査年度が異なるため分けたが、Ｌ地区とＥ地区の上層は同じ遺構面になる。圃場整備で大きく削平を受けているため、遺構の残りは悪いが、江戸時代の井戸と土坑、溝（上記Ｅ地区４号溝）などが検出できた。井戸からは大量の陶磁器をはじめとする日常雑器が出土しており、これは、井戸を埋戻す際に遺棄したものと考えられる。この状況を鑑みると、近世期には人家が井戸のすぐ近くに存在したと考えるのが自然である。Ｌ地区の東側にはほとんど遺構が存在しないスペースが広がっており、人家はこの場所に建っていたと推定される。

（４）Ｅ・Ｋ・Ｍ地区

３つの地区は段丘の周辺部にあたる。Ｇ地区ではＥ地区から続く小谷部が検出されが、遺物の出土状況から、全域にわたってほぼ同時期に埋まっていることがわかった。

Ｋ－２地区の北側では近世の甕棺墓や土坑墓が検出された。調査時には圃場整備の削平により失われていたものの、近世期にはこの場所は墓域として利用されていたと考えられる。上記Ｌ地区には人家の存在した可能性を述べたが、これをあわせて考えると、近世期には段丘上に人が暮らしていた可能性がある。

Ｍ地区では段丘の上面と下端に近世～圃場整備前の水路が検出された。この水路は段丘上と西側の谷部に対して配水を行っていたと考えられるため、Ｍ地区内と調査区外の西側には近世期には耕作地が広がっていた可能性がある。

以上のことから、近世期においては、段丘上の東寄りには集落と墓域、西寄りには耕作地が広がっていた可能性があり、生活域と生業域がひとまとまりとなった集落があったと考えられる。

（参考文献）

九州近世陶磁学会（2000）『九州陶磁の編年　九州近世陶磁学会10周年記念』
前田時一郎（2009）『街道筋のサンネモン　増補改訂版・旧糸島郡の瓦業者』（自費出版）
前田時一郎（2002）『街道筋のサンネモン　続編・糸島の瓦業者』（自費出版）
みやま市（2011）「松田掛畑遺跡Ⅱ・ガラス瓶」『広報みやま』2011.6.15
福岡県教育委員会（1982）『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』６

Ⅲ．科学分析

１．篠原東遺跡群Ｅ地区７号井戸出土ウマについて

福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課　　屋山洋

（１）位置と環境

篠原東遺跡は浦志本川によって形成された沖積地上に位置する遺跡で、13世紀の掘立柱建物群や井戸、溝などが出土しており、散村的な性格を持った集落と考えられる。

（２）出土遺構

７号井戸は掘立柱建物群の西側の旧河川上に位置する。掘り方径は1.82ｍ、深さ0.47ｍを測る。時期は12世紀後半から13世紀前半である。ウマが廃棄されたのは井筒が掘り直された状態で、他にヒトの頭蓋骨も出土していることから廃棄した井戸を塵穴として利用したものと考えられる。

（３）動物遺存体（ウマ）の観察

①ウマの胴体部分は頭部が若干高くなっているもののほぼ水平で、四肢部分が低くなっている。四肢部分は井戸枠部分を掘り直した窪みに入り込んだものである。

②体の右側を下にして横たわった状態で、頭骨と寛骨の位置が若干高くなっている。骨は高い位置にあるものほど乾燥のため遺存状態が悪かった。また、下側にあった右半身の肋骨は比較的原位置を保っていたが左半身の肋骨はかなり位置がずれていた。これは胴体内部が腐敗により空洞化することにより崩落した可能性が考えられる。

③両下顎ともＰ２～Ｍ３まで出土しており、切歯も細片化しているが出土している。上顎は左頬の歯列がＰ２～Ｍ３が並んで出土した。左側　顎Ｐ３、Ｐ４、Ｍ１と右側　顎Ｐ２、Ｍ３の歯冠高から年齢は12～15歳前途と想定される。

④頸椎のうち遺存していたのは第１頸椎のみであるが、現地で観察した時には遺存状態は良いものの原位置は保っていなかった。第２～７頸椎が腐敗等で消滅し第１頸椎のみが残るのは不自然と考えられる。脊椎は担当者によると遺存状態が悪く、掘り下げ時には痕跡のみが残っていたとのことである。

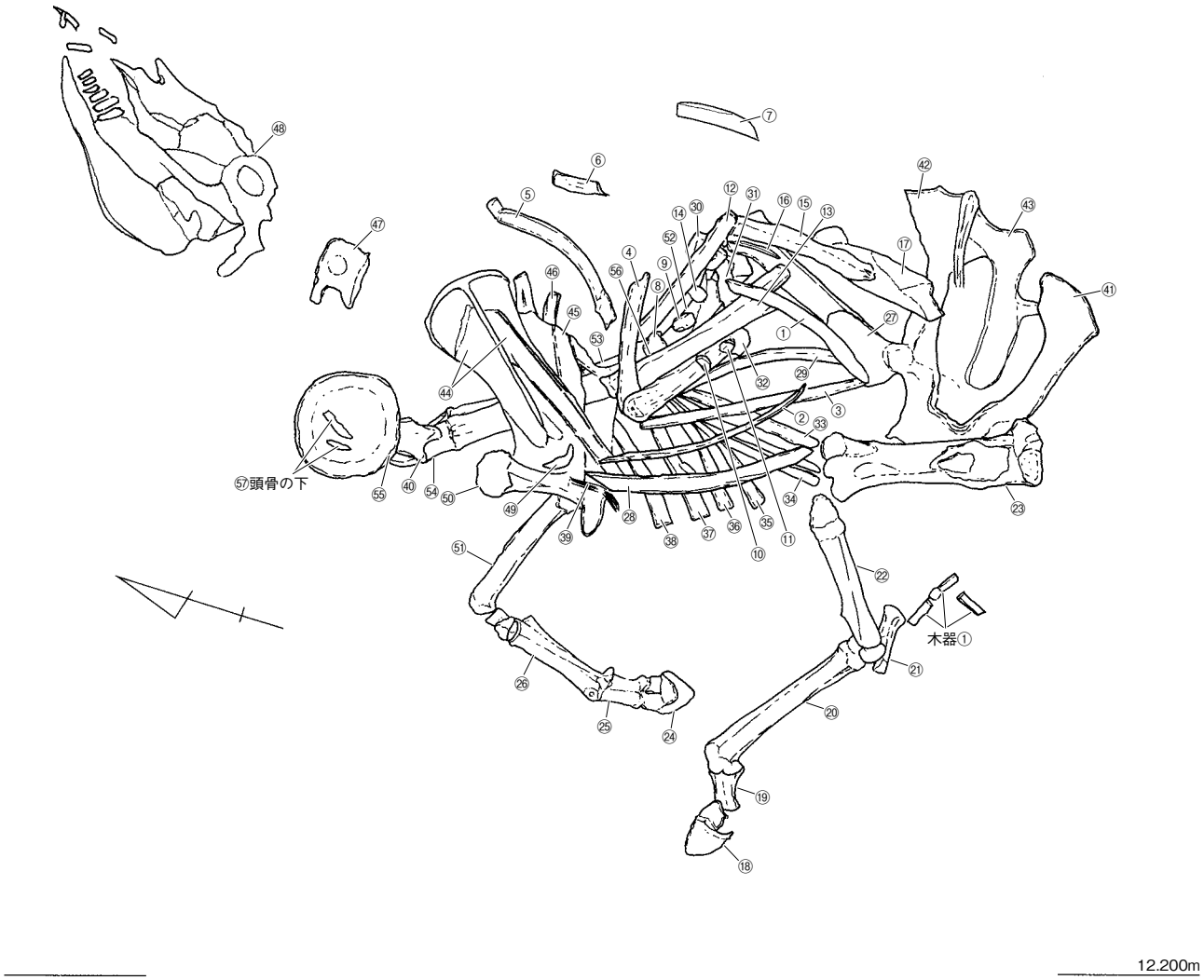
⑤四肢骨は遺存状態がよく、それぞれ連結した状態で種子骨なども見られたため取り上げ後の観察が期待されたが、内部の劣化が思ったより進んでいたため乾燥時に表面が細片化してしまい解体痕の観察ができなかったのは残念である。ただ取り上げ前の観察では左中手中足骨や左足踵骨など解体痕がつきやすい部位で解体痕は確認できなかった。

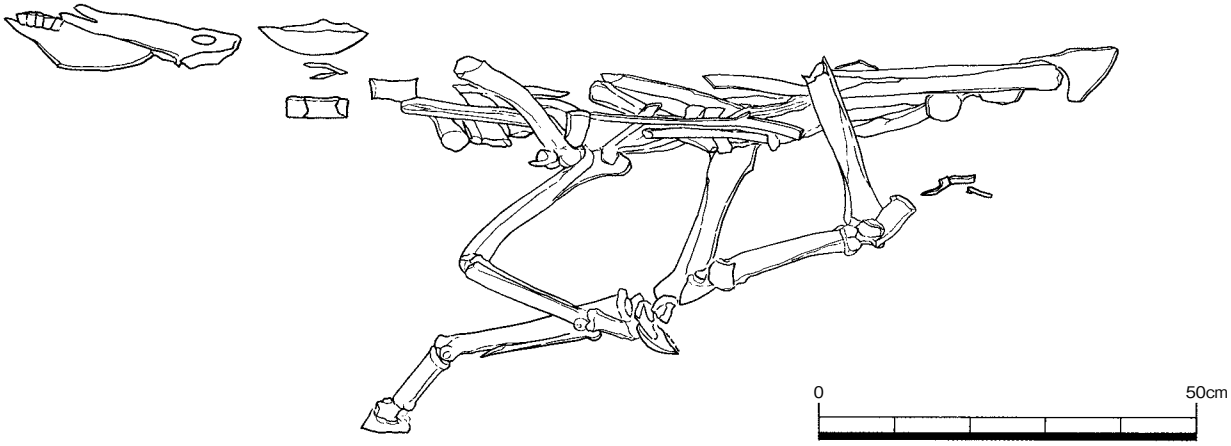
⑥四肢のうち左右前肢は原位置を保っておらず左前肢は左寛骨の上、右前肢は本来左前肢があるべき位置に移動している。左右後肢は原位置を留めていたが、右後足は右肋骨内に入り込むなど

不自然な点がみられた。

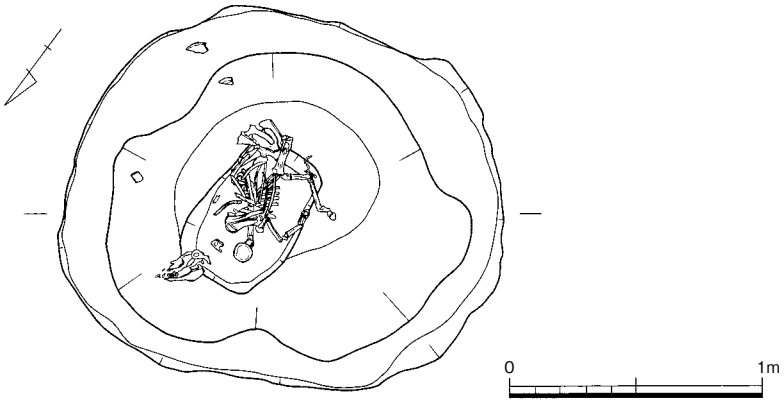
（４）小結

井戸内からヒトの頭蓋骨片が出土していることから雑多な骨が混じっている可能性もあったが、観察の結果からウマは１頭分の骨で同一個体のものと考えられる。出土状況では左右前肢のズレと右後肢が右肋骨内に入り込んでいることから７号井戸出土のウマは解体されており、左右前肢を取り外した他、内臓を取り出していた可能性が高い。ただ全体的に連結を保った部位が多いことや上記の２から肋骨内に空間があったと考えられること、またとりはずされた右右前肢にしても肩胛骨から末節骨まで連結していることなどから完全に肉をとってしまう程ではなく、少なくとも腱でつながった状態で廃棄したものと考えられる。





第122図　E地区　７号井戸馬骨出土状況実測図（1/10）



第123図　E地区　７号井戸平面実測図（1/30）

119－１　E地区　７号井戸馬骨出土状況（西から）

表２　Ｅ地区出土動物遺存体

遺物番号	枝番	地区	遺構番号	大分類	小分類	部位名	左右	部分１	部分２	成長度	切痕	火熱	備考
1		E	７号井戸	哺乳類	ウマ	肋骨	左側？	細片化		不明	不明		
13		E	７号井戸	哺乳類	ウマ	橈骨	左	出土時ほぼ完形 近位部細片化		化骨化済み 尺骨も結合済み	不明	なし	表面遺存不良 細片化進行中
17		E	７号井戸	哺乳類	ウマ	上腕骨	左	両端欠損		遠端化骨化済み	不明	不明	遠端背面にイヌの咬痕？あり
18	1	E	７号井戸	哺乳類	ウマ	中節骨	左後足	遠端関節面細片化		化骨化済み	前面と外側側面にはなし。背面と内側側面は観察不可	なし	細片化進行中
18	2	E	７号井戸	哺乳類	ウマ	末節骨	左後足	細片化		不明	不明		
19		E	７号井戸	哺乳類	ウマ	基節骨	左後足	遠端細片化		近端化骨化済み	遺存部（全体の３／４）にはなし	なし	細片化進行中
20		E	７号井戸	哺乳類	ウマ	中足骨	左	出土時完形 遠端細片化		両端化骨化済み	遺存部（現時点で９割ほど）にはなし	なし	細片化進行中
21		E	７号井戸	哺乳類	ウマ	踵骨	左	完形		化骨化済み	なし	なし	表面剥落進行中
22	1	E	７号井戸	哺乳類	ウマ	脛骨	左	出土時完形 近位端細片化		化骨化済み	遺存部分には無し	なし	表面剥落進行中
22	2	E	７号井戸	哺乳類	ウマ	距骨？	左	細片化		不明	不明	不明	
23		E	７号井戸	哺乳類	ウマ	大腿骨	左	近位部欠損	遠端細片化	遠端化骨化済み	不明	なし	寛骨、脛骨と分離して出土している
24	1	E	７号井戸	哺乳類	ウマ	中節骨		出土時完形 細片化進行 現状で前面側のみ遺存		近位端は化骨化済み、遠位端は不明			ビビアナイト析出
24	2	E	７号井戸	哺乳類	ウマ	末節骨		出土時完形 細片化進行中		化骨化は不明	遺存部分には無し	なし	ビビアナイト析出
25		E	７号井戸	哺乳類	ウマ	基節骨	左前足	出土時完形 細片化進行中		化骨化済み	なし	なし	近位端幅（Ｂｐ）5.04cm
26	1	E	７号井戸	哺乳類	ウマ	中手骨	右	完形で出土。細片化		化骨化済み	なし		なし
26	2	E	７号井戸	哺乳類	ウマ	種子骨	４点				表面遺存悪いが切痕はみられない	なし	ビビアナイト析出
27		E	７号井戸	哺乳類	ウマ	大腿骨	右	近位部欠損		遠端化骨化済み	不明	なし	遺存不良 土圧で若干変形している
30	1	E	７号井戸	哺乳類	ウマ	末節骨	左前足	出土時完形、細片化進行中		化骨化済み	不明	不明	遺存不良
30	2	E	７号井戸	哺乳類	ウマ	中節骨	左前足	出土時完形 細片化進行中		不明	不明	不明	遺存不良
31	1	E	７号井戸	哺乳類	ウマ	中手骨	左	完形		化骨化済み	不明	なし	表面ほぼ剥落 L20.4cm、Ｂｐ4.43cm、Ｂｄ4.62cm
31	2	E	７号井戸	哺乳類	ウマ	基節骨	左前足	出土時完形細片化進行中		化骨化済み	不明	なし	表面遺存不良
34		E	７号井戸	哺乳類	ウマ	肋骨	右側	出土時は完形に近かったと思われる		不明	不明	不明	
41		E	７号井戸	哺乳類	ウマ	寛骨	左	腸骨分離 細片化		化骨化済み	不明	なし	表面遺存不良 細片化進行中
42		E	７号井戸	哺乳類	ウマ	寛骨	右	腸骨のみ		化骨化済み	不明	なし	表面遺存不良 細片化進行中
43	1	E	７号井戸	哺乳類		寛骨？							細片化
43	2	E	７号井戸	哺乳類		尾椎？		一部のみ		関節面は化骨化済み	不明	不明	遺存不良
44	1	E	７号井戸	哺乳類	ウマ	肩胛骨	右	出土時は完形、その後細片かしている		遠位端部なし 不明	遺存部（全体の１～２割程度）では切痕はみられない	不明	表面遺存不良
44	2	E	７号井戸	哺乳類	ウマ	肋骨	不明	細片化		骨端部なし 不明	表面剥落激しく不明	不明	
47		E	７号井戸	哺乳類	ウマ？	環椎		近位端欠損		化骨化済み	不明	無し	細片化進行中
48	1	E	７号井戸	哺乳類	ウマ	下顎	左	Ｐ２～Ｍ３の歯と下顎体	Ｐ２破損	Ｐ３ 約2.3cm、Ｐ４ 約2.7cm、Ｍ１ 約2.5cm	表面遺存不良のため不明	不明	Ｍ２・Ｍ３の上に上顎歯のＭ２・Ｍ３？が付着しておりかみ合った状態で廃棄されたものと思われる
48	2	E	７号井戸	哺乳類	ウマ	下顎	右	Ｐ２～Ｍ３の歯と下顎体		Ｐ２が約２cm、Ｍ３が約2.8cm 上顎Ｐ３で約2.2cm	表面遺存不良のため不明	不明	外側にずれた状態で上顎歯（Ｐ２～Ｍ３）と口蓋骨の一部があり上下かみ合わせた状態で廃棄されたものと思われる
48		E	７号井戸	哺乳類	ウマ	歯		主に切歯片で一部臼歯片を含む		おおよその歯冠高が判るのが４点、歯冠高はいずれも3.5cm以下			
50		E	７号井戸	哺乳類	ウマ	上腕骨	右	出土後に細片化					
51		E	７号井戸	哺乳類	ウマ	尺骨･橈骨	右	出土時完形 尺骨近端欠損、橈骨遠端細片化		化骨化済み	遺存部分には無し	なし	ビビアナイト析出
52		E	７号井戸	哺乳類	ウマ	脛骨	右	近位部欠損		両端化骨化済み	遺存部分には無し	なし	ビビアナイト析出 細片化中
53		E	７号井戸	哺乳類	ウマ	中足骨	右	遠端一部細片化		両端化骨化済み	なし	なし	細片化進行中
54	1	E	７号井戸	哺乳類	ウマ	基節骨	右後足	出土時完形 尺骨近端欠損、橈骨遠端細片化		化骨化済み	遺存部分には無し	なし	細片化進行中
54	2	E	７号井戸	哺乳類	ウマ	種子骨	右後足	完形 細片化進行中					
55	1	E	７号井戸	哺乳類	ウマ	末節骨	右後足	完形		化骨化済み？	なし	なし	細片化進行中 GB7.86cm、GL5.8cm
55	2	E	７号井戸	哺乳類	ウマ	中節骨	右後足	出土時完形 細片化進行中		化骨化済み	遺存部分には無し	不明	
55	3	E	７号井戸	哺乳類	ウマ	種子骨	右後足	完形		化骨化済み	なし	なし	細片化進行中
56		E	７号井戸	哺乳類	ウマ	踵骨	右	遠端細片化		化骨化済み	遺存部分にはなし	なし	細片化進行中

※骨の計測法はDriesch（1976）に準ずる

２．篠原東遺跡群出土人骨について

谷畑美帆（明治大学・黒耀石研究センター）

福岡県糸島市篠原に位置する篠原東遺跡群からは弥生時代中期初頭～近現代にかけての遺構が検出されている。この中でも本稿では、19世紀前半ごろの墓地内のうち甕棺から出土した近世人骨２体について、以下、記すこととする。

（１）１号人骨

甕棺に埋葬された本個体の遺存状態は良好である。ほぼすべての骨格が遺存している保存状態の良好な資料である。以下、部位ごとに記述する。

① 頭蓋骨

顔面頭蓋は遺存していないが、脳頭蓋および上顎骨の一部（第２小臼歯から第２大臼歯に付随する部分）と上顎歯が確認できる。頭蓋の乳様突起は大きめで、外後頭隆起の突出度がやや著しいものとなっている。頭蓋長幅示数から、比較資料として提示した宗玄寺および天福寺近世人とは異なり、本個体は中頭となる。三主縫合の内外板において癒合は終了していない。眼窩上板および頭蓋骨全体には骨多孔性変化は見られない。

下顎歯は下顎骨にすべて釘植した状態で遺存している。咬耗はMartinの１度の歯が多くなっている。遺存している歯牙には、齲歯の所見は観察されず、歯石の沈着も確認できない。下顎の切歯は、混雑した状態で萌出しており、歯列がやや不規則であるが、上顎骨は一部のみの遺存（右第１小臼歯～第１大臼歯まで）であるため、咬み合わせ等については不明である。

	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	4	5	6	—	—	
左	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8	右

—歯槽なし

② 上肢骨

一部欠損しているが、鎖骨・肩甲骨・上腕骨・橈骨・尺骨の左右がそれぞれほぼ完全な状態で遺存している。上腕骨の骨体断面示数は比較資料として提示した宗玄寺跡や栫城跡近世人よりも小さくなっている。遺存している関節面には、骨関節症の所見は観察されていない。鎖骨の化骨は終了している。手根骨や中手骨、

中節骨などの総面積の小さい骨も左右それぞれ遺存しているが、末節骨などが一部欠損している。

③ 体幹

脊椎は、胸椎の一部（第１胸椎・第２胸椎・第３胸椎および第４胸椎～第７胸椎の椎体）が出土していないが、その他はすべて遺存している。また遺存している背骨の椎体部及び関節面に骨棘は観察されていない。肋骨には欠損している部分があるが、左右すべて遺存している。寛骨は一部欠損（左右いずれも恥骨の一部を欠損ほか）しているが、ほぼ完全な状態で遺存している。大坐骨切痕はやや広めであるが、男性とみなされる。仙骨は左下部の一部を欠いているが、遺存状態は良好である。

④ 下肢骨

一部欠損しているが、大腿骨・脛骨・膝蓋骨・腓骨の左右がそれぞれほぼ完全な状態で遺存している。遺存している関節面には骨関節症の所見は観察されていない。

大腿骨の最大長は394.2㎜（左）、394.6㎜（右）、骨体中央周は82.0mm（左）、81.8mm（右）と比較資料として提示した宗玄寺近世人より小さくなっている。骨体中央断面示数は、105.4㎜（左）、109.4㎜（右）となり、やや左右差がある。また藤井式により大腿骨を用いて算出した身長は152.4㎝となっている。

脛骨の最大長は326.2㎜（左）、329.8㎜（右）、中央断面示数は、比較資料としてここで提示した近世人より小さな数値を示している。

左脛骨骨幹の中央よりやや遠位における外側に骨膜炎の所見が観察される。このほか左右脛骨の遠位端における前面外側の一部に距骨と連動する蹲踞面が観察される。

足根骨や中足骨、中節骨などの総面積の小さい骨も左右それぞれ遺存しているが、末節骨などが一部欠損している。また左右踵骨・距骨には脛骨と連動する蹲踞面が観察される。

（２）２号人骨

甕棺に埋葬された個体であるが、遺存状態は不良である。以下、部位ごとに記すこととする。

① 頭蓋骨

頭蓋骨冠の一部が遺存している。三主縫合は内外板においてほとんど癒合している。下顎骨は、８割程度遺存しているが、左下顎体が欠損するなど完全な状態

ではない。下顎骨に右下顎歯が釘植している他、下記の歯牙が遺存している。歯牙の咬耗はMaritinの２度である。

	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	―	
左―	7	6	5	4	／	2	／	／	／	3	4	5	6	7	／	右	

／死後喪失歯（歯槽解放）　―歯槽なし

② 上肢骨

鎖骨は左右遺存しているが、左鎖骨では近位端の一部、右鎖骨では近位端及び遠位端の一部を欠いている。

右上腕骨はいずれも骨頭を欠いている。左の上腕骨は遠位端も遺存していないが、三角筋粗面の発達が著しいものでない。

尺骨は左のみの遺存であるが、遠位端は欠損している。橈骨は左右遺存しているが、右では遠位端を欠き、左では近位端を欠いている。

舟状骨など一部の手根骨が出土しているが、遺存部位が十分でなく、左右の判別等はできていない。

③ 体幹

背骨は、第１頸椎・第２頸椎及び第３頸椎から第６頸椎とされる部位が遺存している。この他、胸椎の椎弓の一部が遺存している。

肋骨は右肋骨が２本遺存する他、破片状態のものが数点出土している。

寛骨は右寛骨の腸骨のみの遺存である。接合はできないが、耳状面の部分と寛骨臼に相当する部位が一部、出土している。

④ 下肢骨

大腿骨は、左では骨幹のみが遺存しているが、一部、土圧等により、かなり変形している。右大腿骨では骨頭の一部および骨幹部が遺存している。

膝蓋骨は左右出土しているが、関節面が欠けており、全体としての遺存は不良である。

脛骨および腓骨とみなされる部位が出土しているが、詳細は不明である。

右第４中足骨が遠位端を欠いた状態で出土しており、その他足根骨の一部とされる部位が出土しているが、詳細は不明である。

（３）まとめ

ここで取り上げた２体の資料（１号人骨・２号人骨）はいずれも男性とみなされる個体である。

１号人骨の遺存状態は良好であり、ほぼすべての部位が観察できている。全体として華奢な四肢骨、中頭を呈する壮年個体である。身長は152.4cmと近世男性としては平均的な数値を呈している。骨病変として観察される所見は少なく、骨膜炎以外の所見は、確認できていない。この他、脛骨および足根骨に蹲踞面が観察されている。

２号人骨の遺存状態は甕棺出土のものとは思えないほど不良であった。遺存している長骨のほとんどの緻密質が失われ、海綿質が露出している部分も多くなっている。性別判定に適する部位は遺存していなかったが、筋付着面の発達度合等を１号人骨と比較して、男性と推定、歯牙の咬耗や頭蓋骨の縫合などから熟年としている。頭蓋骨や四肢骨からの計測値は得られておらず、形態的な特徴については不明な点が多くなっている。

（参考文献）

・竹中正巳・下野真理子（2010）「栫城跡出土人骨」『栫城跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（155）（鹿児島県立埋蔵文化財センター p.355-363）
・中橋孝博（1987）「福岡市天福寺出土の江戸時代人の頭骨」『人類学雑誌』95巻p.86-106
・松下孝幸（1995）「北九州市宗玄寺跡出土の近世人骨」『宗玄寺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第712集（（財）北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室p.502-542）

脳頭蓋計測値				
	篠原東１号	宗玄寺跡(松下)	天福寺(中橋)	栫城跡50号墓(竹中)
1　頭蓋最大長	184.6	180.9	182.6	167
8　頭蓋最大幅	125.5	140.5	138.6	135
17　バジオン・ブレグマ高	136.6	141	139.2	―
8／1　頭蓋長幅示数	70	78.2	76	80.8
17／1　頭蓋長高示数	74	78.2	76.2	―
17／8　頭蓋幅高示数	108.8	100.5	100.8	―

上腕骨計測値				
	篠原東１号		宗玄寺跡(松下)	栫城跡50号墓(竹中)
	左	右		
1　上腕骨最大長	287.5	―	290.6	―
5　中央最大径	22.2	21.8	22.1	21
6　中央最小径	15.8	16.2	17.2	16
7　骨体最小周	61.6	61.4	61.8	63
7ａ　中央周	64.8	65.6	65.7	66
6／5　骨体断面示数	71.2	74.3	78.1	76.2
7／1　長厚示数	21.4	―	21.4	―

大腿骨計測値				
	篠原東１号		宗玄寺跡(松下)	栫城跡150号墓(竹中)
	左	右		
1　最大長	394.2	394.6	407.8	―
2　自然位長	388.7	388.6	401.8	―
6　骨体中央矢状径	25.5	25.4	26.8	26
7　骨体中央横径	24.2	23.2	25.9	29
8　骨体中央周	82.0	81.8	83.4	85
8／2　長厚示数	21.1	21.1	20.9	32
6／7　骨体中央断面示数	105.4	109.4	103.3	89.7

脛骨計測値				
	篠原東１号		宗玄寺跡(松下)	栫城跡164号墓(竹中)
	左	右		
1　脛骨全長	321.5	323.1	326.2	―
2　脛骨最大長	326.2	329.8	332.6	―
8　中央最大径	26	26.8	28	―
8ａ　栄養孔位最大径	30.0	31.2	32	37
9　中央横径	20.0	20.0	20.5	―
9ａ　栄養孔位横径	18.8	19.9	22.7	26
10　骨体周	71.7	77.2	77	―
10a　栄養孔位周	82.8	85.6	87.1	95
10b　最小周	68.2	68.4	70	―
9／8　中央断面示数	76.9	74.6	73.3	―
9ａ/８ａ　栄養孔位断面示数	62.7	63.8	71.4	70.3
10b/１　長厚示数	21.2	21.1	21.7	―

３．篠原東遺跡群出土人骨における炭素・窒素安定同位体分析

米田　穣・大森貴之（東京大学総合研究博物館）

篠原東遺跡群Ｋ－２地区で発見された近世の甕棺墓に収められていた人骨について、残存するタンパク質（コラーゲン）を抽出して、炭素・窒素同位体比を測定した。骨コラーゲンの炭素・窒素同位体比は、食物中のタンパク質とよい相関をもつと考えられており、生前に摂取した食物の傾向を知ることができる。

（１）資料と方法

１号甕棺の人骨からは約0.2gの骨片を、２号甕棺人骨からは約0.4gの骨片を採取して、分析に供した。コラーゲンの抽出には、酸・アルカリ・酸処理と、加熱によってコラーゲンを可溶化するゼラチン抽出を実施した（Longin. 1971, Yoneda et al. 2002）。まず、酸化アルミニウムの粉末で表面をサンドブラストして、純水中で10分間超音波洗浄することで表面に付着する遺物を除去した。続いて、骨片を0.2Mの水酸化ナトリウムに16時間漬けて、付着する土壌有機物（フミン酸とフルボ酸）を除去し、純水中に８時間漬けて中性化した。これを凍結乾燥して乳鉢にて数ミリ角に粉砕した。半透膜であるセルロース膜に骨粉をいれた状態で、1.2Mの塩酸で骨の無機質であるハイドロキシアパタイトを溶かす脱灰処理を11時間行った。塩酸から純水にかえて、適宜水を交換しながら11時間にわったって中性化する。これによって、残存する土壌有機物（ヒューミン）をセルロース膜外に除去した。セルロース膜中に残った有機分画を遠沈管に移して、純水を10mL加えて90℃に13時間加熱して、コラーゲンをゼラチン化した。遠心分離した溶液をガラス繊維ろ紙（Whatman GF/F）でろ過して、ゼラチン溶液を凍結乾燥することでコラーゲンを主成分とするゼラチンを回収した。

炭素・窒素同位体比は、Thermo Fisher Scientifics社製のFlash2000元素分析を前処理装置として、ConFloIIIインターフェースを経由して、Delta Ｖ安定同位体比質量分析装置で測定する、EA-IRMS装置を用いて行った。約0.4mgの精製試料を錫箔に包み取り、測定に供した。測定誤差は同位体比が値付けされている二次標準物質（アラニン等）を試料と同時に測定することで標準偏差を計算した。通常の測定では、δ^{13}Cの測定誤差は0.1‰、δ^{15}Nの誤差は0.1‰である。同位体比は、国際標準物質（炭素はPDB、窒素はAIR）と比較した偏差の千分率であるδ（デルタ）値で標記する。

（２）結果と考察

表１に前処理によって回収されたゼラチンの回収率と、元素分析によって得られ

た炭素と窒素の濃度（重量％）を示す。ゼラチンにおける炭素濃度（重量）が13％未満、窒素濃度（重量）が4.8％未満、C/N比（元素数）が正常値（2.9～3.6）を外れる場合は､コラーゲンの変性あるいは外部有機物の混入の可能性があるが（DeNiro 1985, van Klinken 1999)、今回分析した２点は保存状態のよいコラーゲンが回収されたと判断できた。

表２に炭素・窒素安定同位体比の分析結果を示す。コラーゲンでは食物中の同位体比よりも炭素で約4.5‰の濃縮、窒素で約3.5‰の濃縮があるので（Ambrose 1993)、日本列島の動植物で得られた同位体比の濃縮分を補正して（Yoneda et al. 2004)、骨コラーゲンの分析結果と比較した（図１)。１号甕棺と２号甕棺の人骨は互いに類似した同位体比を示している。炭素同位体比はC_3植物を生産者とする生態系と近いが、窒素同位体比は陸上の生態系よりも非常に高い。このような傾向からは、水田を含む淡水生態系の利用が想定される。一方、アワ、ヒエ、キビなどのC_4植物や海産物は主要なタンパク質源ではなかったと推定される。沿岸の立地を考えると海産物の利用が少なかったという結果は予想外であり、同じ遺跡から出土した動物骨と比較して確認する必要がある。

（引用文献）

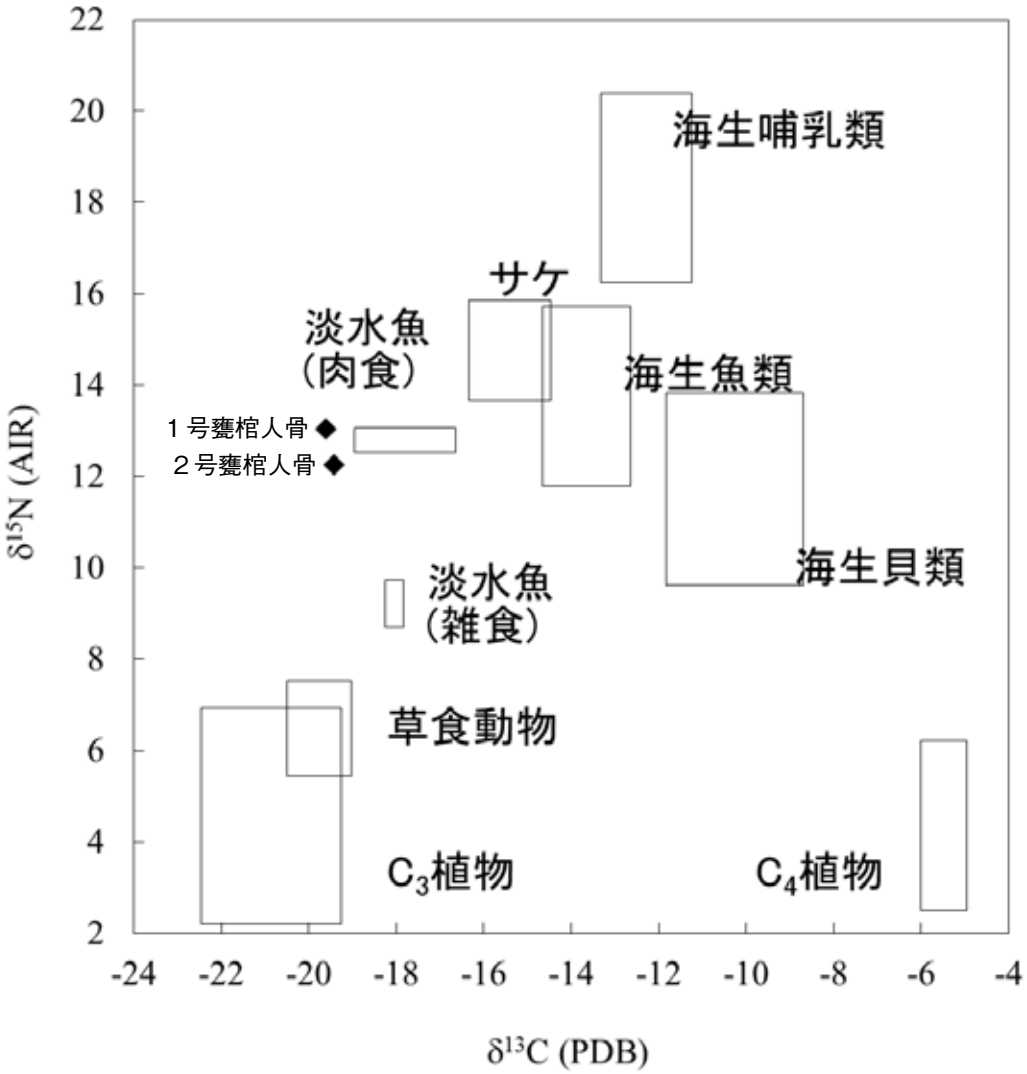
・Ambrose,SH.(1993).Isotopic analysis of paleodiet: Methodological and interpretive considerations.
・DeNiro, M.J. (1985). Postmortem preservation and alteration of invivo bone-collagen isotope ratios in relation to paleodietary reconstruction. Nature 317, 806-809.
・Longin, R. (1971). New method of collagen extraction for radiocarbon dating. Nature, 230, 241-242.
・van Klinken, G.J. (1999). Bone collagen quality indicators for palaeodietary and radiocarbon measurements. Journal of Archaeological Science 26, 687-695.
・Yoneda, M., M. Hirota, M. Uchida, A. Tanaka, Y. Shibata, M. Morita, and T. Akazawa (2002). Radiocarbon and stable isotope analyses on the Earliest Jomon skeletons from the Tochibara rockshelter, Nagano, Japan. Radiocarbon 44, 549-557.
・Yoneda, M., Y. Shibata, M. Morita, R. Suzuki, T. Sukegawa, N. Shigehara, and T. Akazawa (2004). Isotopic evidence of inland-water fishing by a Jomon population excavated from the Boji site, Nagano, Japan. Journal of Archaeological Science 31(１), 97-107.

表３　ゼラチン回収率と元素分析の結果

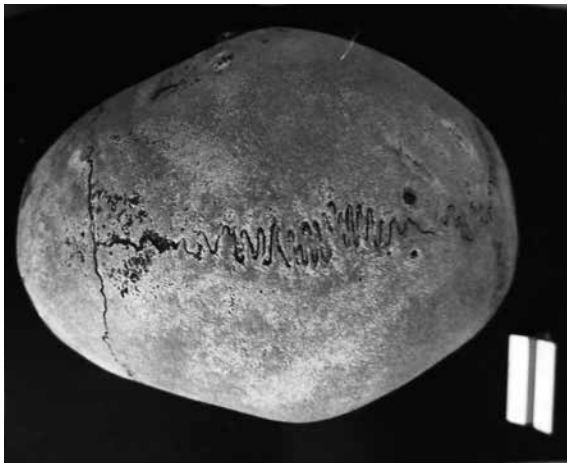
資料名	ゼラチン回収率(％)	炭素濃度(％)	窒素濃度(％)	C/N比(％)(原子数)
１号甕棺人骨	17.4	42.9	15.5	3.2
２号甕棺人骨	8.0	42.6	15.5	3.2

表４　安定同位体比の分析結果

資料名	測定ID	δ^{13}C	δ^{15}N
1号甕棺人骨	YL11820	-19.6	13.0
2号甕棺人骨	YL11821	-19.4	12.3



第124図　Ｋ－２地区近世甕棺から出土した人骨におけるコラーゲンの炭素・窒素同位体比と、食料資源の炭素･窒素同位体比から推定される範囲の比較。



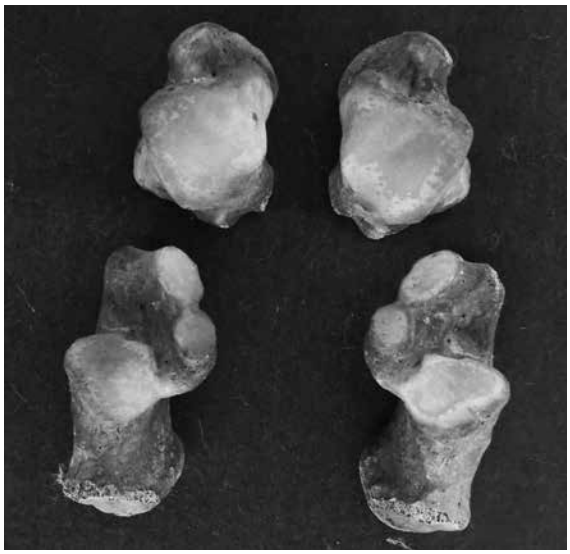
129－1　K－2地区出土　1号人骨　頭蓋骨
（左上：側面観、左下：上面観、右：前面観）

129－2　K－2地区出土　1号人骨　下顎骨
（左：真上から撮影、右：左側面から撮影）

130－1　K－2地区出土　1号人骨　上腕骨・橈骨・尺骨（左上）

130－2　K－2地区出土　1号人骨　大腿骨・脛骨・腓骨（右上）

130－3　K－2地区出土　1号人骨　左脛骨における骨膜炎（左）



130－4　K－2地区出土　1号人骨　蹲踞面（左：距骨・踵骨上面観、右：距骨上面観・踵骨下面観）

図　　版

１－１　Ａ地区　全景（北から）

１－２　Ａ地区　１号旧河川土層断面状況（東から）

１－３　Ａ地区　１号旧河川土層断面状況（南から）

１－４　Ａ地区　２号旧河川土層断面状況（南から）

１－５　Ａ地区　３号旧河川土層断面状況（東から）

図版 2

２－１　Ａ地区　１号旧河川流木・杭出土状況（南から）

２－２　Ａ地区　１号旧河川流木・杭出土状況（南から）

２－３　Ａ地区　出土遺物①

3－1　A地区　出土遺物②

図版 4

４－１　Ｂ－１地区　全景（北から）

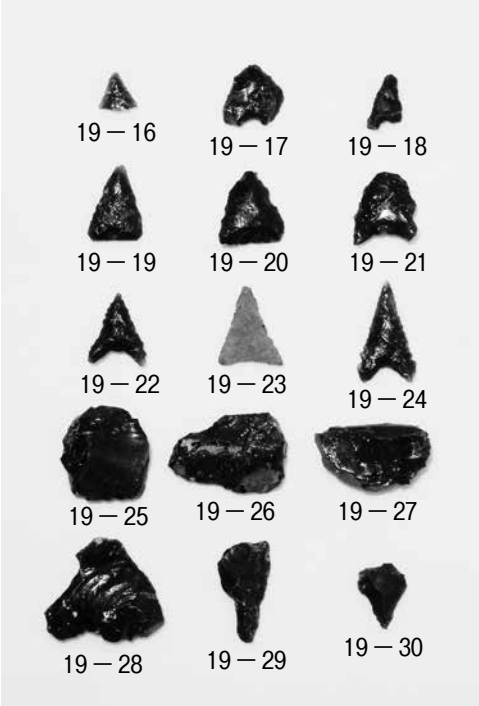
４－２　Ｂ－１地区　調査区北端土層（南から）

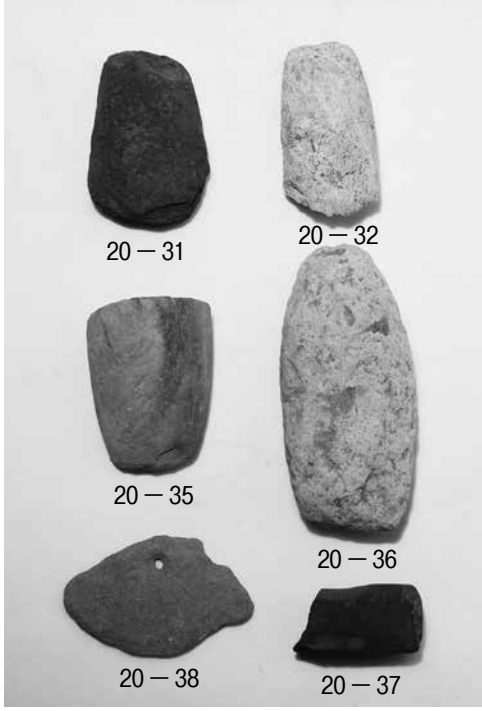
４－３　Ｂ－１地区　No.2トレンチ北壁東西土層(南から)

４－４　Ｂ－２地区　調査前全景（北から）

４－５　Ｂ－２地区　全景（北から）

４－６　Ｂ－２地区　１号周溝状遺構（北から）





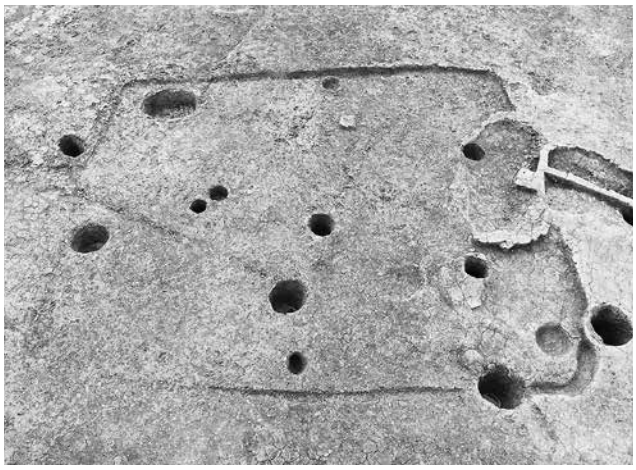
5－1　B－1・2地区　出土遺物

図版 6

６－１　Ｅ地区　全景（北から）

６－２　Ｅ地区　小谷部包含層土層断面状況（南から）

６－３　Ｅ地区　小谷部包含層土層断面状況（南から）

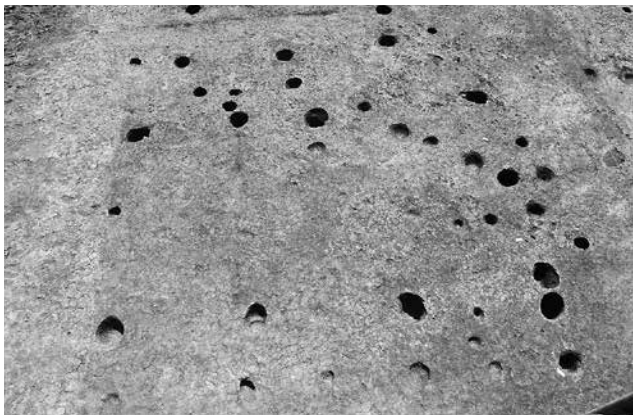


６－４　Ｅ地区　１号住居完掘状況（北から）

６－５　Ｅ地区　１号住居屋内土坑（北から）

７－１　Ｅ地区　１号土坑墓完掘状況（東から）

７－２　Ｅ地区　２号掘立柱建物完掘状況（北から）



７－３　Ｅ地区　３号掘立柱建物完掘状況（北から）

７－４　Ｅ地区　１号井戸完掘状況（南から）

７－５　Ｅ地区　３号井戸完掘状況（東から）

７－６　Ｅ地区　４号井戸土器出土状況（東から）

７－７　Ｅ地区　４号井戸完掘状況（西から）

７－８　Ｅ地区　５号井戸完掘状況（東から）

図版 8

８－１　Ｅ地区　７号井戸馬骨出土状況（西から）

８－２　Ｅ地区　７号井戸完掘状況（西から）

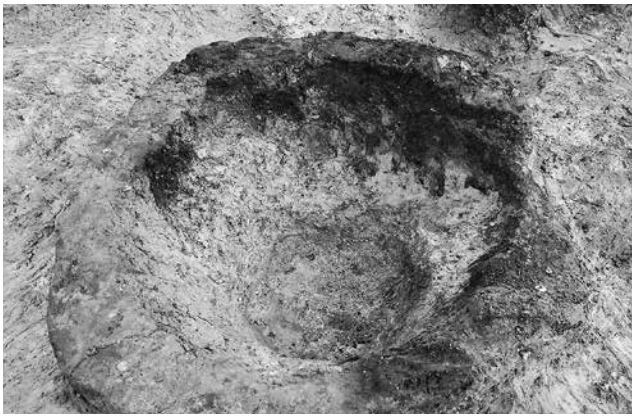
８－３　Ｅ地区　８号井戸木器出土状況（東から）

８－４　Ｅ地区　８号井戸完掘状況（東から）

８－５　Ｅ地区　８号井戸完掘状況（東から）

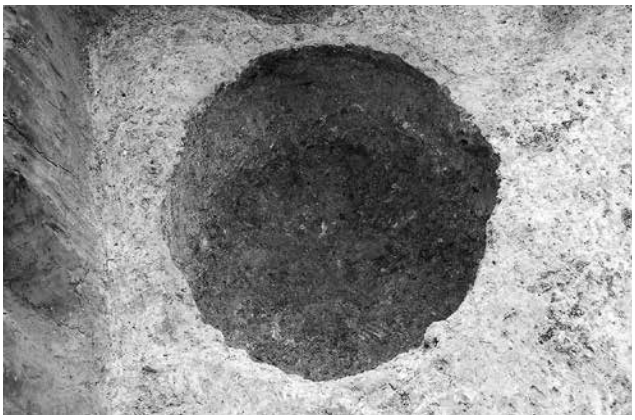
８－６　Ｅ地区　11号井戸完掘状況（東から）

８－７　Ｅ地区　12号井戸完掘状況（西から）



８－８　Ｅ地区　13号井戸完掘出土状況（東から）

９－１　Ｅ地区　14号井戸完掘状況（東から）



９－２　Ｅ地区　15号井戸完掘状況（西から）

９－３　Ｅ地区　小谷部土器群出土状況（東から）

９－４　Ｅ地区　１号土坑完掘状況（東から）

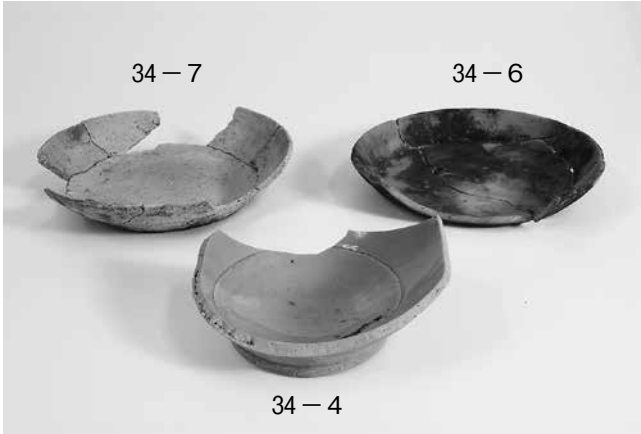
９－５　Ｅ地区　４号土坑完掘状況（東から）

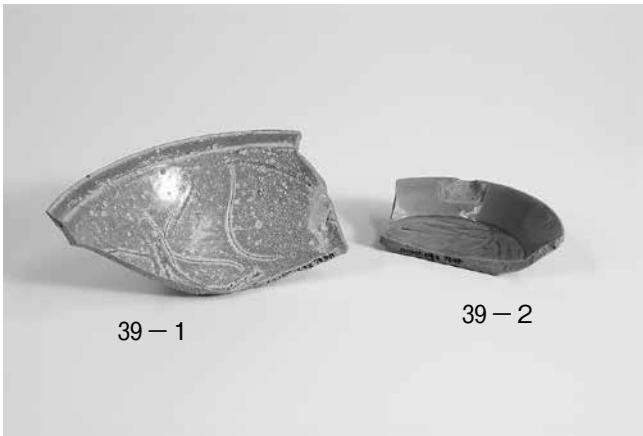
９－６　Ｅ地区　７号土坑完掘状況（東から）

９－７　Ｅ地区　８号土坑完掘状況（南から）

９－８　Ｅ地区　９・10号土坑完掘出土状況（東から）

図版 10



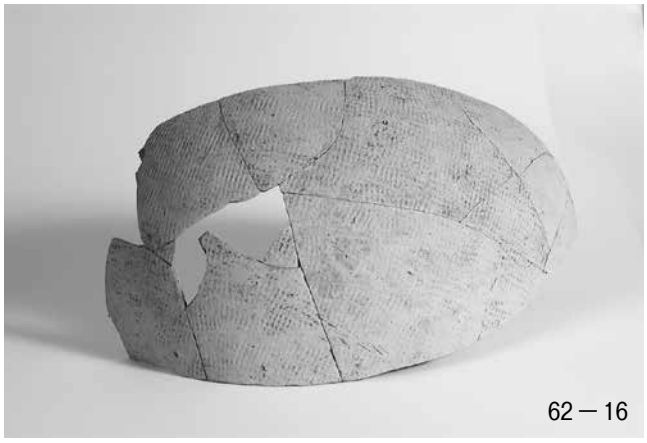


10－1　E地区　出土遺物①

61－11

62－15

62－13


62－16

65－1

65－2

65－3

70－5

11－1　E地区　出土遺物②

図版 12

69－2

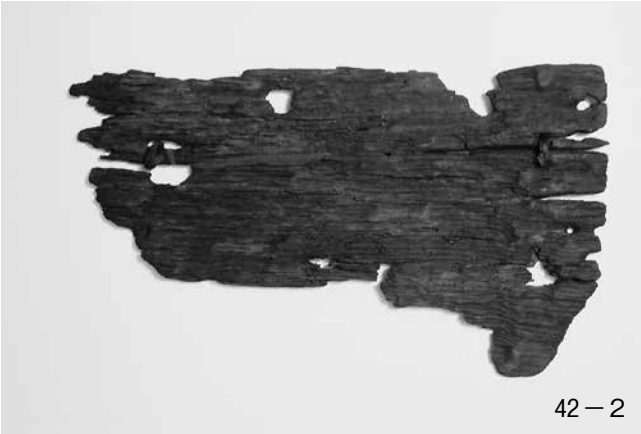
70－8

70－6

71－27

42－3

27－1


42－2

69－1

12－1　E地区　出土遺物③

13－1　G地区　全景（南西から）

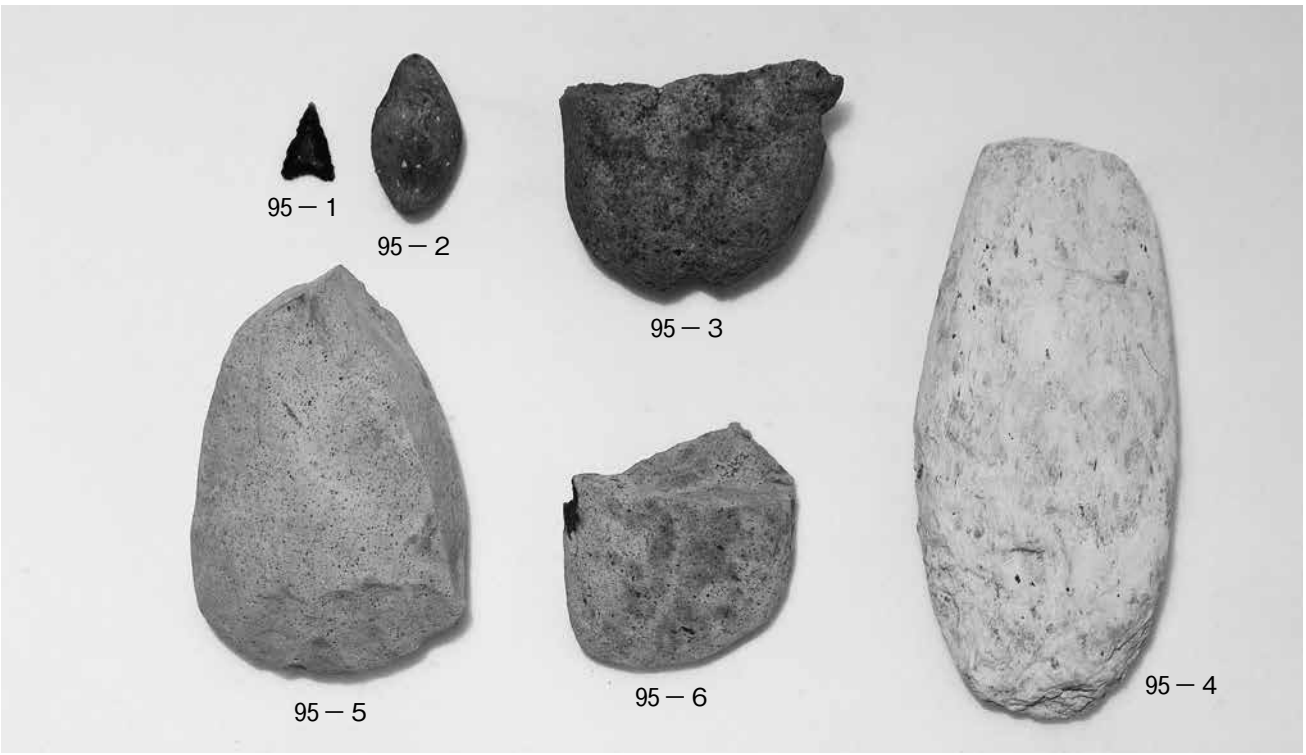
13－2　G地区　小谷部（南西から）

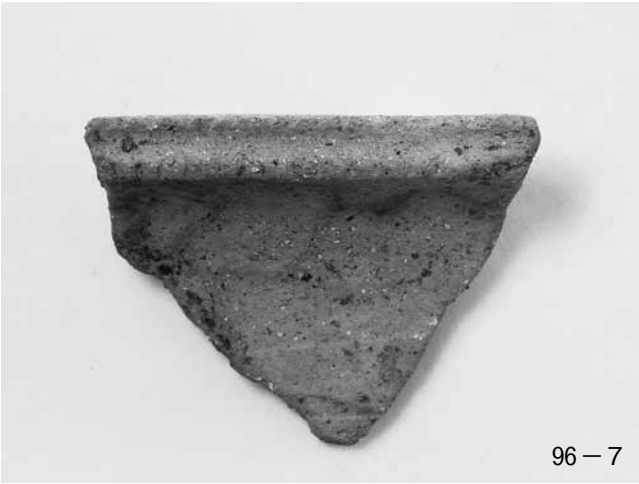
13－3　G地区　小谷部（北西から）

13－4　G地区　1号井戸完掘状況（南から）

13－5　G地区　瓦出土状況（南から）

図版 14



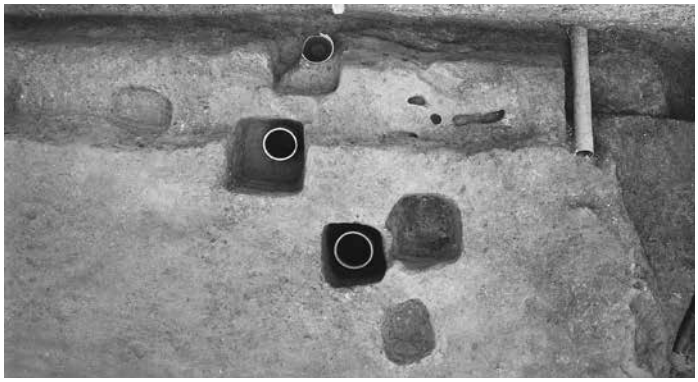


14－1　G地区　出土遺物

15－1　K－1・2地区　全景（南東から）

15－3　K－2地区　南側全景（西から）

15－2　K－1地区　全景（北西から）、遺物出土状況（北から）

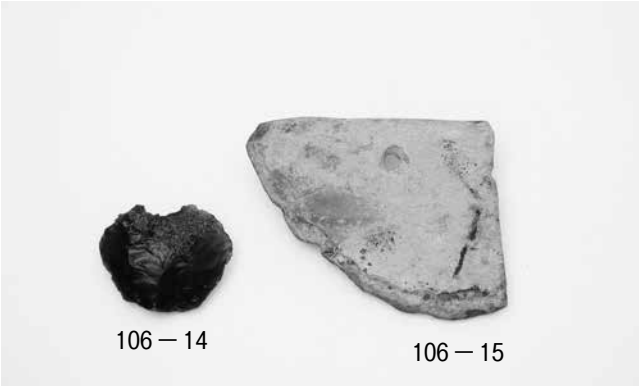


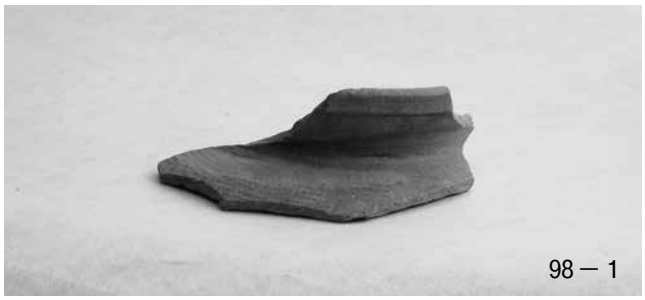
15－4　K－2地区　甕棺墓出土状況（南から）

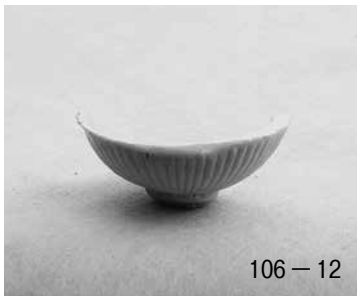
15－6　K－3地区　全景（東から）

15－5　K－2地区　調査区南端土層断面状況（北から）

図版 16







16－1　K－1・2地区　出土遺物

17－1　L地区　全景（東から）

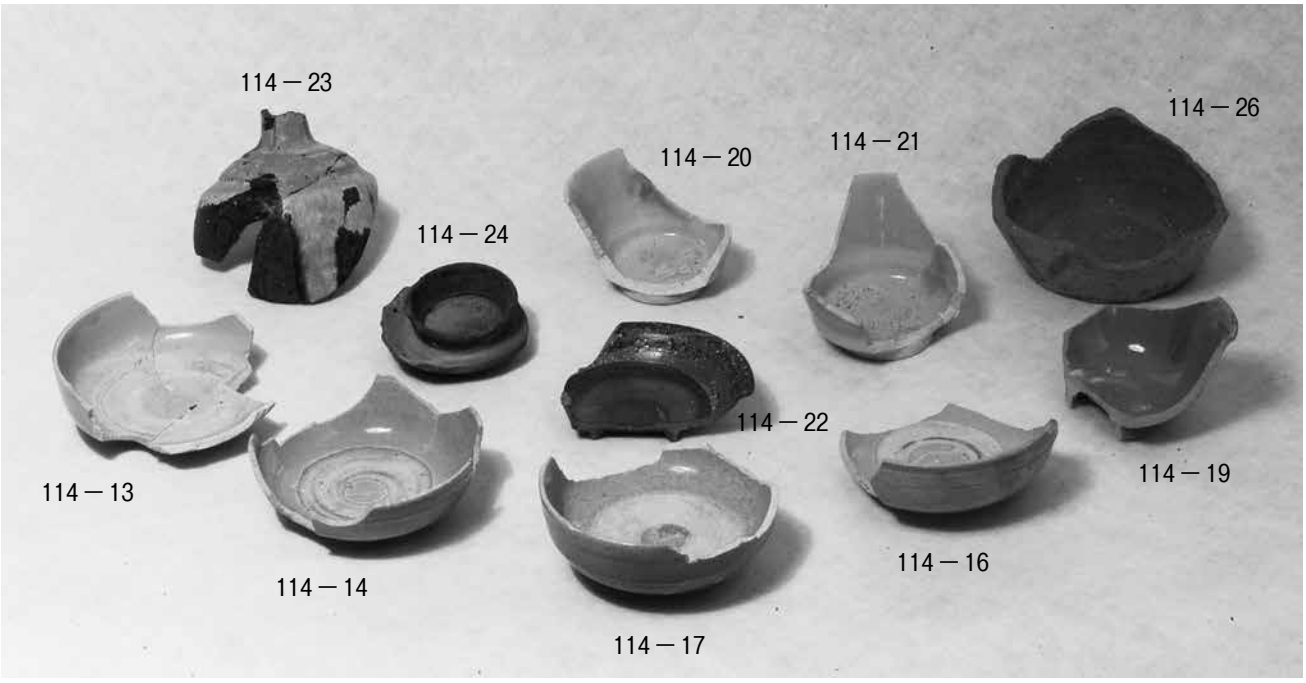
17－2　L地区　1号井戸遺物出土状況（東から）

17－3　L地区　1号井戸完掘状況（東から）

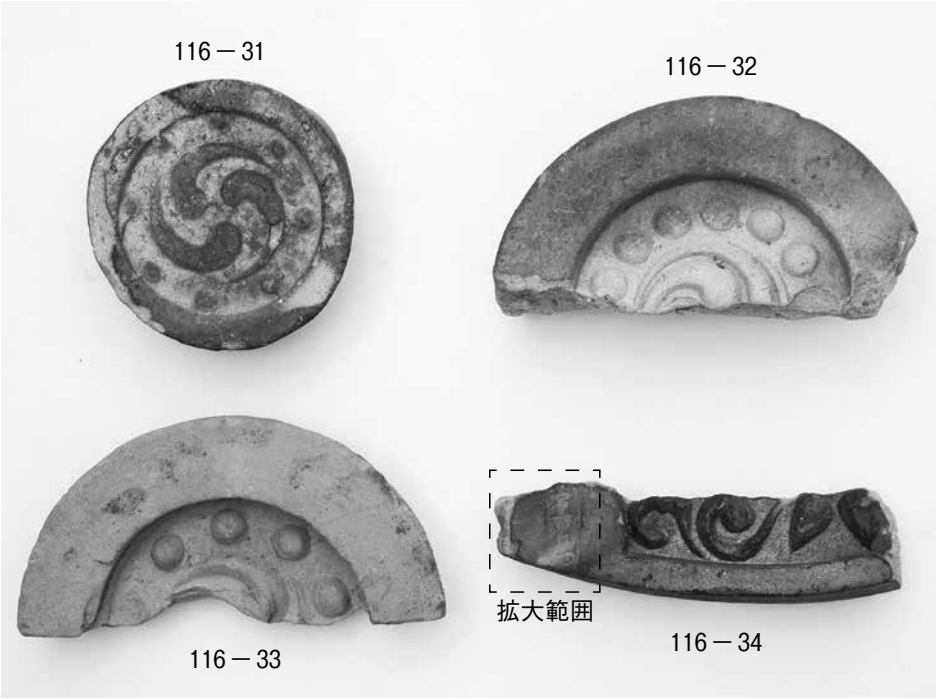
17－4　L地区　1号土坑遺物出土状況（南から）

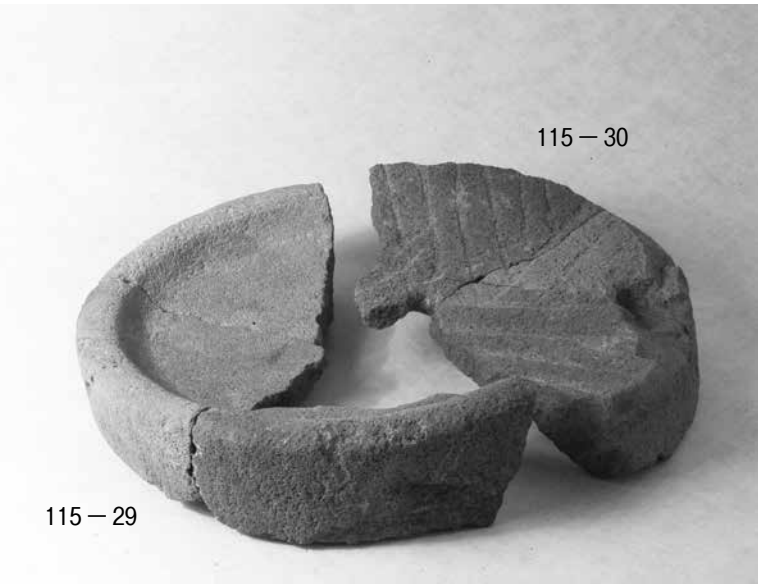
17－5　L地区　1号溝完掘状況（南東から）

図版 18



18－1　L地区　出土遺物①





19－1　L地区　出土遺物②

図版 20

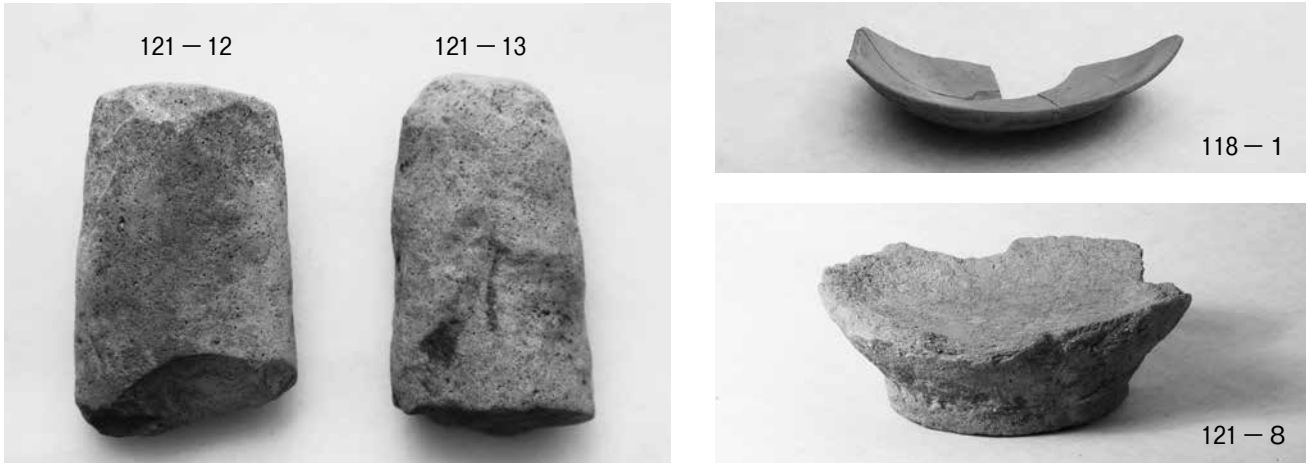
20－1　M地区　全景（北から）

20－2　M地区　丘陵落ち込み部（南から）

20－3　M地区　調査区南端（北から）

20－4　M地区　1号土坑遺物出土状況（東から）

20－5　M地区　1号井戸完掘状況（西から）



20－6　M地区　出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	しのはらひがしいせきぐん いち	
書名	篠原東遺跡群Ⅰ	
副書名	福岡県糸島市前原東土地区画整理事業に係る発掘調査報告書	
巻次		
シリーズ名	糸島市文化財調査報告書	
シリーズ番号	第15集	
著者名	江﨑靖隆、江野道和、谷畑美帆、米田穣、大森貴之、屋山洋	
編集機関	糸島市教育委員会	
所在地	〒819-1192　福岡県糸島市前原西一丁目１番１号	
発行年月日	西暦　2017年３月31日	
保管場所	〔写真〕〔図版〕〔遺物〕	糸島市教育委員会
保管場所所在地	〒819－1192　福岡県糸島市前原西一丁目１番１号	

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査総面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
篠原東遺跡群A・B・E・G・K・L・M地区	福岡県糸島市篠原・浦志	40230		33°33′19″～39″	130°12′41″～59″	2012.10～2017.3	46,900㎡	土地区画整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
篠原東遺跡群A・B・E・G・K・L・M地区	集落、墓地	縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良時代、平安時代、中世、近世、近・現代	旧河川、小谷部、溝、掘立柱建物、甕棺墓、土坑、井戸	縄文土器、弥生土器、石器、木器、石製品、土師器、瓦質土器、陶磁器、瓦	

篠原東遺跡群 Ⅰ

糸島市文化財調査報告書　第15集

2017年3月31日

発行　糸島市教育委員会
糸島市前原西一丁目１番１号

印刷　株式会社 西日本新聞印刷
〒812-0041 福岡県福岡市博多区吉塚８-２-15